

「おむにぼす！」

七音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

県立大洗女子学園。

学園艦と呼ばれるその中には、事情があつて艦を離れられない家庭の男子を受け入れる、極小の分校までありました。

戦車道が復活し、様々な変化が起きている艦の中で、そこに住まう少年・少女達も、大きな影響を受けていきます。

この作品は、ガールズ&パンツァーの登場人物が、オリジナルキャラクターの男性達と、ただひたすらにラブコメのお話です。

目次

武部沙織編

- 1 第一話「武部さんに誓います！」
- 11 第二話「模擬戦、開始です！」
- 26 第三話「それは誤解です！」
- 53 最終話「入水します！」
- 五十鈴華編
- 109 第一話「わたくし、何か掴んだ気がします！」
- 117 第二話「どうか、よろしくお願い致しますっ！」

秋山優花里編

- 132 第三話「もうすぐ、なんです」
- 153 最終話「あの、困りますっ！」
- 193 第一話「応援させて頂きますっ！」
- 211 第二話「由々しき事態であります……」
- 231 第三話「由々しき事態パート2でありますう……」
- 263 第四話「今から楽しみですよ！」

最終話「嫌な予感がします……」

297

冷泉麻子編

第一話「すぐ行きます」

328

第二話「こんなの良くないです」

365

第三話「ご馳走になりまあす！」

394

最終話「指示通りに動いて貰えますか？」

434

西住みほ編

第一話「絶対に変な顔しちゃいます！」

481

第二話「プランAでお願いします」

505

第三話「その言い方は酷いと思います」

548

最終話「独断と偏見で公平に決めさせて貰います」

て貰います」

584

武部沙織編

第一話 「武部さんに誓います！」

「好きですっ！ 結婚を前提に付き合ってくださいっ！」

「ご、ごめんなさあくいつ！」

「あつ、武部さあんっ!?!」

私は脱兎の如くその場から逃げ出し、さささつ、とIV号戦車の影に隠れる。

ちらり、あいつの居る場所を覗いて見れば、肩を落とす彼の側へ、我等があんこうチム
ムのメンバーが集まって来ていた。

「また駄目だったね……。でも大丈夫！ ライカ君、諦めなければ想いはきつと通じる
よっ！」

「……あ、ありがとうございます、西住さん。でも、俺の名前は——」

まず話しかけたのは、戦車長の西住みほ（通称・みぼりん）。戦車道の家元、西住流の血を引くサラブレッドなんだよ。

彼女は胸元で両手を握り、若干前のめりになるようにしてあいつを励ましている。

それはいいんだけど、でも、私の気持ちも無視しないで欲しいんですけど？ 嫌ではないんだけどさ……。

「まあ気にするなライカ。沙織も照れてるだけだろう。このまま行けば近いうちに陥落する。多分」

「最後の一言が無ければ嬉しかったんですけどねー。あと、俺の名——」

次は私の幼馴染、冷泉麻子。

身長差があるのに、無理して肩に手を置いて、顔には嫌味ったらしいニヤニヤを貼り付けてる。

……っていうか、陥落するって何よ!? 私はそんな安い女じゃないもん！ 乙女のハートは鉄壁よっ！ きつと！ ……多分！ ……めいびー？

「そうそう、ここまで来たら後は押せ押せですよライカ殿！ 電撃戦です！ ブリッツ・

クリイークツ！」

「はい。ここで引いてはいけませんわ。ライカさん、わたくし応援しています」

「……ありがとう、ございます。……もうライカでいいや……」

最後は、自他共に認める戦車マニア、秋山優花里（通称・ゆかりん）と、華道の名門、五十鈴家のお嬢様、五十鈴華。彼女達も、あいつ——ライカに励ましの言葉を送ってた。名乗るタイミングを逸した彼の胸元には、見た目だけは旧式のカメラ——ライカM3（中身は最新式の着せ替えデジカメ）がぶら下がってる。

本名はちゃんと別にあるんだけど、私がつけたあだ名「ライカ」がもう定着してしまっていて、未だに名前と呼ばれた事がないのが最近の悩み。

……つてこの間言ってた。

「でも、ライカ君。私いつも思うんだけど、平気なの？　ここが何処だか、分かってるよね？」

「はい？　そりゃあ勿論。俺が通ってる分校の大元、県立大洗女子学園で……ああ」

みほりんの呆れたような表情に、ぼすつ、とライカは手を打ち合わせ、彼女に向かっ

てサムズアップ。

「ご安心を！ 俺のカメラは不埒な目的には絶対に使いません！ 武部さんに誓います！ というか武部さん以外に興味はありません！」

「それはそれで失礼だな」

「乙女としては、ちよつと複雑ですね……」

「……あつ!? いやつ、皆さんに魅力が無いわけじゃありませんよ!? むしろ、とつても綺麗で可愛らしくて、武部さんと出会ってなければぜひ被写体になって欲しいくらいで……」

「おお、光栄ですな。でも、あんまりそういう事、大きな声で言っちゃいけませんよ?」
「ほら、武部殿が睨んでいます」

睨んでねーです。

毎日のように女子高へ忍び込んでくる不審者を監視してるだけです。

……笑顔で手を振るな、ばかつ。

「うーん、それは信じてるんだけど、私が言ってるのは、戦車道以外の人達……それと、

生徒会の河嶋さんにまた見つかったりしたらって事で……」

「あー、確かにそうですね。でも、大丈夫ですよ？ あの時は正面から正々堂々入ったっただけですし、こう見えて俺、スネーク道の瀬川流三段ですから」

「おおおっ！ 凄いですねえっ！」

蛇道——通称スネーク道といえ、伝説の傭兵にちなんだ、肉弾重視の男の花道っ。

女子の戦車道に並び称される人気の武芸で、その三段なら、戦場を駆け巡るプロじゃないですかっ！」

「ははは、どうも。といっても、俺はフラッグキルと情報収集がほとんどで、CCCとかはちよつと苦手なんですけどね。分校だから人数少な過ぎて大会にも出られませんし。

でも、そこいらの男には負けない自信がありますし、野外は勿論、ダンボールさえあれば、人工建造物の何処へでも侵入、何処からでも脱出できますよ！」

「ダンボール、ですか？」

「不条理だな」

「す、凄いなだね、ライカ君。でも、そういう意味じゃなくて、もうちよつと自重を……」

女の子に囲まれて、あいつは胸を張っている。

なによ、デレデレしちゃって。私以外に興味ないんじゃないの？ そんなんだか

ら、私は……。

………ああ、凄いのには分かったからワザとらしく「チラツチラツ」しないでつてば。

「………はあ」

思い通りに行かないなあ……。

そんな事を思って、私は溜息をつく。

脳裏に浮かぶのは、初めてあいつ——ライカに出会った時のこと。

聖グロリアーナとの練習試合が終わって数日。あいつは、突如この格納庫に現れ、大声で私を呼び出し——

『貴方に一目ぼれしましたっ!! ぜひ、俺とお付き合いしてくださいっ!!』

——なんて、告白しやがったのだ。この私に。皆の目の前で。

それからもう、てんやわんやの大騒ぎ。

周囲を戦車道の皆に囲まれ、逃げる事も出来なかつた私は、十六年の人生において初めての異性からの告白にテンパリ、「ごめんなさい」と、つい断つちやつた。

しばらくシヨックに項垂れたあいつは、しかし割りとすぐに復活。くわつと頭を上げて、「俺は諦めませんよっ！ あ、写真一枚いいですか？」とカメラを構えて。

乙女の習慣としてとりあえずポーズをとり、彼はそれを激写。「また来ますっ！」なんて言いながら名前も告げずに去っていったの。不法侵入だつたのが分かつたのは、たいぶ後のこと。

おまけに、まさか翌日から毎日のように来られるとは、誰も想像していなかつたと思う。警戒嚴重にしたはずなのにふらつと来てふらつと帰つちやうし。

そして、名前を知らないあいつをどう呼んで良いのか分からなかつた私は、彼の事を「ライカの人」と呼んでいて、それがあだ名として定着しちやつたのだ。

ちなみに、カメラの名前が「ライカ」つていうのを教えてくれたのはゆかりんです。大
体想像つくよね？

……とにかく、さつきも言つたけど、嫌なわけじゃない。

顔は中の中……中の上？ いや、上の下？ とりあえず、ぶちやいくさんではない。

眉毛はキリツと長くて、鼻筋はちよつと太め。髪型はいつもオールバック。私の好み

とは微妙にずれちゃってるけど、男らしいと言えなくもないと思う。……やつぱり中の上かな？

性格だって、一年の子達にも敬語を崩さないくらい礼儀正しいし、無断で写真を撮ったりしないし（不法侵入はするけど）、他の誰かに見せたいって時はキチンと連絡くれる。

メールだって結構するし、マメに返信くれるし、週に五回は告白してくれるし、おまけに、好きだって言われて悪い気がするはずがない。

総合的に言えば………まあ、嫌いじゃ、ない。恋人になるのも、やぶさかじゃあ………ない………かも知れない。

（でも、なあ………）

今更、どうやって受け入れればいいんだろう。

最初の頃は、舞い上がって、恥ずかしくて、特に考えもなく断つちやっただ。

メアドを交換した辺りからは友達感覚になって、断るのがお約束みたいになってた。

………だけど、知り合って一ヶ月も経たない彼のことを深く知るうち、なんだかまた恥ずかしくなって来て、最近はずっと顔を見れないし、メール以外で話したのも数える

ほど。

(本に書いてある事なんて、全部嘘っぱちだよ……)

なあにが近頃の男子はみんな草食系よ。

ライカは紳士だけど確実に肉食系だよっ。

ガッツンガッツン攻略されちゃってるよっ!

どうすりやいいのよお!?! 教えて結婚情報誌いつ!?

「それじゃあ、俺はそろそろ戻ります。武部さくんっ、また明日〜!」

「あ、うん、また……………はっ」

こちらへ手を振るあいつに釣られて、思わず手を振り返しちゃう。

そしたら、皆に微笑ましいものでも見るような目つきで見つめられているのに気付いた。特に麻子なんか、長い付き合いの私でも見たことない、「にへらっ」と擬音を付けたくなる笑い方してる。

恥ずかしくて、なのに、それはなんだか、嫌ではなくて。

またテンパってしまった私は、小さくなって行く背中に、叫ぶ。

「うううあああつ!! もうっ! 全部あんたのせいだああああつ
!!!!!!」

第二話 「模擬戦、開始です！」

『ところでえ、武部先輩。ライカさんとはどうなってるんですかあ？』

「……はい？」

唐突な通信機越しの問いかけに、私は思わず上擦った声を出しちやった。

その向こう側に居るのは、ウサギさんチームの一年生通信手、宇津木優季（脳内呼称：ゆつきー）。

……あの子は一体、何を言ってるんだろう？

『ふむ。気になるところではあるな』

『はーい、私も気になりまーす！』

ゆつきーに同調したのは、カバさんチームの二年生、エルヴィン（本名・松本里子、脳内呼称はまつつん。戦車長 兼 通信手です）と、ゆつきーと同じく一年生のアヒルさ

んチーム通信手、近藤妙子（脳内呼称：たえちゃん）。

話の流れに嫌な予感を覚え、私は各車に通信をオープン。皆を諫めようとしたんだけど――

「ちよ、ちよつと皆、いきなり何？　今は練習中だよ？　し、集中しなきゃ……」

『えー、いーじゃないですかー。どーせ移動中なんですし』

『そうですね、時間は有効活用しないと。命短し何とやらあ、でしたっけ？　相談された方としても気になりますしい』

『うん。ぶつちやけ暇だ。口寂しい。ついては、武部の恋バナで盛り上がりたい』

「私の恋愛事情はおやつじゃないわよっ!!」

——この子達は私のこと舐めてんだらうか。

特にゆつきー！　相談したのは秘密って言つといたじゃないっ!?　なんで早速バラスのっ!?　あとまつつん、本名で呼ぶよ？

全く、私だって絶賛お悩み中なの知ってるでしょうに……皆の前で話すような余裕なんて……。

『ほう、恋愛しているという事は否定しないのか。ついに認めたか?』

「へっ!! い、いや、今のはあいつ、言葉のあやつて言うか、その……」

『そー言えば、ここ二三日見かけませんが、どーしたんでしょー? もしかして病気とか?』

「あ、ううん、それはないよ」

心配気なたえちんの声に、私は否定してみせる。あの健康優良ステルス野生児が風邪なんかひくはずない。

それに……。

「蛇道の合宿で、昨日から山籠もりしてるんだって。しばらく来なかったのも、その準備に忙しかったからだよ」

なんでも、週末を使ってサバイバル訓練をするんだとか。食料も水も最低限の状態
で、三日三晩、ポインター装置で互いを探し出して、発見数を競うみたい。ライカの得
意分野だね。

「ただどあいっつたら、わざわざ電話で「直接想いを伝えられなくてすみませんっ」な

んて謝るんだもんなあ。ホント、変なところで生真面目なんだから……。

『ほうほう、把握していたか。私達は知らなかったというのに』

「へっ？ いやこれは……せ、世間話の延長というか、なんとというか……」

『マメですなあ、ライカさん。逃げちやつた彼はそういうのずぼらだったし、羨ましいですう』

『とゆーか、先輩はなんで断ってるんですか？ ライカさん、いー人じゃないですか。よく差し入れてくれますし』

「それは……そうだけど、それとこれとは別なのっ」

確かに、うちの学校に忍び込む度、ライカは菓子折りを持ってきてくれるんだよね。しかも、色々なお店の、かなり美味しいお菓子を。

皆、最初の頃はあいつの事を怪しんで手を出し辛そうにしていたんだけど、甘い匂いの誘惑には勝てず、今では次のお菓子はなんだろうと予想までし合ってる。

男の人って甘い物が苦手な人が多いって聞くけど、ライカはそんな事ないみたい。あいつとだったら、二人で甘味処巡りとかも出来るのかなあ……。

でも、そう言えばデートとかにはまだ一度も誘われたことないなあ……いや

いやいやしないよ？　甘い物に釣られて着いていくほど子供じゃないし？　私は大人の女だし？

『どこがいい人なものかつ！』

——なあんて考えていると、まともや通信機から、今度は怒鳴り声。

この声は、カメさんチームの三年生砲手、河嶋桃先輩（通称桃ちゃん。でもこう呼ぶと怒る）かな？　大洗女子の生徒会広報でもあるんだよ。

『あいつは不法侵入者だぞつ、今度見かけたら即通報して二度とシヤバを歩けんようにしてやるっ！』

『桃ちゃん、ちよつと落ち着いて〜？』

『桃ちゃんって呼ぶなっ！　……それにあいつは、私の事を……ッ、ツリ片駄眼鏡と呼びおったのだぞ?!　到底許せるものではぬあいつ！　あんの盗撮カメラ小僧があ!!』

……………むかつ。

『桃ちゃん、ライカくんは一応許可取ってるよ？ いつも事後承諾だけど……』

『ホントは男子が入っちゃいけないんだけどねえー。まあ、面白いからいいっしょ』

「……そうですよ。第一ライカが怒ったのは、河嶋先輩があいつのカメラを取り上げて壊そうとしたからじゃないですか。

あれ、お父さんからプレゼントされた大事な物なんですよ？ そんな事されそうになつたら誰でも怒りますっ。

それに、あいつが声を荒らげたのもその一回きりだし……。後、ライカは盗撮した事なんてありませんっ」

宥めようとする先輩達——生徒会副会長・小山柚子先輩（操縦手）と、生徒会長・角谷杏先輩（まっつんと同じく、戦車長 兼 通信手）に、私は続く。

前に一回触らせてもらった時、ライカが嬉しそうに言ってたんだ。

父一人・子一人、お仕事で忙しいのにちゃんとお世話したり遊んだりしてくれて、誕生日プレゼントだって忘れられた事がない。

そんなお父さんをあいつは尊敬していて、中学の時にプレゼントされたカメラをとつても大事にしてるの。それが写真を始めたきっかけ。

まあ、不法侵入自体は悪い事だと思うし、一回懲らしめた方がいいとは思うけど、な

にも壊そうとまでしなくても……。

『む、お父上の？　そ、そうだったのか……？　よく知っているな、武部』

『ほっほおー。庇うねえー。自分の旦那が馬鹿にされるのは嫌なんだ？』

「か、会長？　だから、違うんですつてばつ、あくまで一般論として……つていうか旦那つてなんですかつ？　私達はそんな関係じゃ……」

——けど、この言い分はあいつを擁護しているように聞こえたみたいで。

自分達だつてさつきは弁護してた癖に、なんで私の時ばかり？

慌てて、見えもしないのに両手を振つて否定するんだけど、それはやつぱり伝わらなかつたらしくて、通信手の皆は口々に変な事を言い出す。

『はいはい、ごちそーさまあー。干し芋がやけにあまーいなあー』

『いい加減、素直になれば良いだろうに……』

「うう、だあかあ……」

『でも、ライカさんも一途ですよねー。私も先輩みたいに熱烈アタックされてみたい
なー』

『そこが良いんだよねえ。ていうか、私今フリーなんでえ、武部先輩が興味ないならアップローチかけた——』

「それはダメツ!!」

『……ほう』

『……わー』

『……ですよねえ。あくああ、帰って来てくれないかなあ』

「……あ」

そんな中、何故か私の口が勝手に動き出し、ゆっきーの言葉を遮つちやつてた。

通信は途絶え、沈黙に物凄い気まずさを感じてしまつて、咄嗟に車内の皆へ助けを求めらる。

「や、やだやだ、ちちちちち違うの、違うんだつてばあ! ね、ねえ、皆つ!」

「ご、ごめんね沙織さん。私、周囲を観察してないと……」

「運転中だ。話しかけるな」

「そう言えば、以前ライカ殿が差し入れてくれたチーズ入りのバームクーヘンは、最っ高に美味しかったですね。ぜひまた食べたいです!」

「確かに、そうでしたね。でも、毎回頂いてばかりで、負担になってはいないでしょうか？」

「私に味方は居ないのっ!？」

なのに、皆はこつちの事なんかお構いなし。

冷たいっ！ 世間の風は冷たいよっ！

バームクーヘンなんて後で幾らでも食べられるじゃない!? 私どこで買ったか教えて貰ってるから、言ってくれば買って来てあげるよっ!?

……はっ、そうかっ。

みんな私に嫉妬してるのね? 美しいって罪なのねっ? ああんっ、自分のモテ体質が恨めしいっ! ……モテてるのは一人にだけって言うなっ!

「ん……? ……沙織さん。双眼鏡、取ってくれる?」

「あ、うんっ、もちのろんっ、精一杯取らせていただきますっ!」

「ただ取るだけだよ……?」

不意にみぼりんが双眼鏡を要求し、場の空気を変えるチャンスを見た私は、これ幸い

と狭い車内を引っ掻き回す。

そして、目的の物を見つけていそいそ手渡すと、彼女はそれを覗き込み――

「うーん……と……あ」

――何かを見つけたのか、とある方向を向いて動きを止める。

そのままちよつと身を乗り出し、しげしげと観察している様子が見て取れたんだけど……。

「……んん？ くち……？ ……だ、い、す………ふええええつ!？」

「えっ？ どうしたのみぼりんっ？」

「障害でありますかっ？」

「だいです……サイコロ、ですか？」

「こっちは何も見えないぞ」

……はて？ どうしたんだろう。みぼりんは頬を真っ赤にして焦り出す。

見上げる顔はあわあわしていても可憐らしく、ミニスカートから伸びる太もも

が眩しい。

やっぱり、足細いよねー。ムダ毛なんて一本も無いし、色も真っ白。同じ女の子の私から見てもスリスリしたいくらいだよ。

「いいいいいやああああ、えええええつつとおお………あ、そうか。私宛じゃないんだ」

そんな太もも美人のみぼりんは、ふと何かに思い至ったみたいで、誤魔化すように後ろ髪を撫でる。

彼女はそのまますると車内に戻り、私の方に向き直って――

「えつとね、沙織さんに伝言。ライカ君から、『大好きです』、だって」

「……えつ？　ラ、ライカが居るのっ？」

――あいつからの、愛の言葉を伝えてくれた。

ライカ？　えつ、嘘っ？　だってここ、戦車道の訓練区域だよ？　立ち入り禁止の場

所に指定されてるのに……。

曲がりなりにも砲弾とかを扱ってるんだから、絶対に間違いが起こらないよう、監視も徹底してるはず……。

前は、山菜取りのお婆ちゃんが紛れ込んだりした事もあったし。

「うん。ついさつきまで、ギリースーツを着て向こうの山の頂上に。

双眼鏡でこつちを見てみたいで、その反射光に気付いたんだけど、ライカ君も私が見てるのに気付いたみたい。

そしたら、口パクで『大好きです』って。最初、私に言ったのかと思つてビックリしちゃった」

「そう、なんだ……」

「蛇道の合宿って、あの山でやっていたんですね」

「立ち入り禁止区域のギリギリ外ですか。世の中狭いですね。まあ、距離的にはかなり離れてますけど」

私の疑問は、みぼりんの補足によって解消された。

そつか……。あいつも頑張ってるんだ……。まだ、見てるのかな……？

ううん、それにしたって、こんな状況でまでも告白する事ないじゃない。そんなに私

のこと好きなの？

……ばか、なんだから。

「着いたぞ」

「あ、うん。あんこうチーム、配置に着きました」

——と、車体がゆっくり制動し、同時に、麻子が模擬戦の開始地点に到着した事を教えてくれた。

私はきゅつと顔を引き締め、みぼりんと他車輛にそれを知らせる。

『カバさんチームも到着した』

『ウサギさんチームも到着しましたあ』

『アヒルさんチーム、到着です！』

『こつちもとうちやく。んじゃ、西住ちゃん、全隊指揮よろしくー』

「はい」

間もなく、他の通信手達からも同様の知らせが届き、会長の言葉を受けて、みぼりん

が静かに頷く。

そして、ゆっくりと車内を見渡し、隊の皆としっかり顔を合わせてから、高らかに宣言した。

「それでは……。模擬戦、開始です！ パンツァー・フォー！」

合図と共に、IV号戦車は走り出す。

なんだろう。

今日の模擬戦、負けたくない。負ける気がしない。こんな気持ち、初めてかも。

……本当に、なんだろう。

「よおっし！ みんな、勝つよお!!」

「うんっ！ 頑張ろう、みんなっ！」

「最初の時みたいに、この戦車だけで全車輛撃破してやりましょう！」

「非才の身ながら、全力を尽くさせて頂きます」

「うんうんっ、その意気その意気っ！ 私もやるよー！」

「まあ、模擬戦だから通信手なんにもやることないけどな」

「それを言わないでよお！」

せめて機銃とか撃つたりするからあ！」

第三話「それは誤解です！」

——ハメられた。

そう気付いた時には、既に手遅れだった。

すでに退路はなし。この場に立ち入ってすぐに塞がれてしまっている。

眼前には、まるで獲物を狙うようにこちらを見据える影。

悠然と佇むその姿は、この状況が計算され尽くした上で生み出されたのだという事を

証明していた。

騙された。

裏切られた。

罠に掛けられた。

どうしてこうなったの？

どうしてこんな事するのか？

私は、皆の事を信じてたのに。

……ああ、近づいてくる。

ゆっくり、ゆっくり、近づいて来る。

孤立無援で、救援も期待出来ない。

もう、抵抗のしようがない。

このまま、まな板の上の鯉のように、料理されるのを待つばかり。

……逃げられ、ない。

「武部さん、二人で一緒にお昼食べましょう！」

こいつの猛攻からは、逃げられない。



「たつた〜らりらら、ふっふっふ〜ん♪」

時は少し遡って、十分前。

上機嫌に鼻歌なんて歌いながら、私は屋上への階段を上っていた。

今日は日曜日。

学校はお休みな筈なのに、どうして私が校舎内に居るのかと問われれば、それはもちろん、戦車道が理由です。

ちよつと前の私なら、日曜にわざわざ学校に来て練習するだなんて面倒臭がつてただらうけど、先日のアンツイオ戦でも見事に快勝。最近ノリにノつてるさおりんとしては、この程度の事でもやかくは言わないのだ。

それに、この後は皆で一緒に、眺めのいい所でお昼ご飯。昨日みほりんから提案があつて、皆でお弁当を作つて、それを交換しあおうという事になつてるの。

正直、みんなのお弁当はどうなつていいのか想像つかないけど（特に華とか麻子とか）、まあとにかく、気合を入れて作ってきたんだ。

メニューは、コンニャクとヒジキの煮物に、春雨の中華風炒め、レンコンの挟みハンバーグ。タネには味付けしたお豆腐を使つてます。

女子には嬉しい、低カロリー&食物繊維たっぷりなの、栄養満点なお弁当。本当はもうちよつと脂分が欲しいんだけど、そこは少しだけ濃い目の味付けで我慢。

そうしなかつたら、あつという間におデブちゃんだもん。せつかく戦車道で得たモチかわスリム、維持したいんです。

「よし、私がいつちばーん♪」

そうこうしている内に、屋上へ続くドアの前に到着。

なんだか、みんな色々細かい用事があるみたいで、先に行つて欲しいとの事だった。

後で考えるとものすつごく怪しい素振りが見え隠れしてたんだけど、この時の私は疑問に思う事もなく、勢いよくドアを開ける。

予想通り、屋上にはまだ誰も来ていなかった。ある物といえば、干し芋の空きダンボールくらい。多分、いつも会長が齧つてるやつのかも。

かなり大量に纏め買っているらしいし、屋上にあつてもおかしくない。

「——おかしくない訳ないでしょお!!　なんで屋上にダンボールがポツンと鎮座してるのよ?!　違和感バツリバリじゃない!?!」

「ちいつ、バレたか……っ!」

指差しながら言い放てば、ダンボールからニョキツと足が生え、中からあいつが——ライカが姿を現した。

何をシリアスチックなイケメンボイス出しておるか、このお婆か。

間違い探しにしたって得点の低い問題でしょうこれは。○オーリーに丸つけてあるレベルよ。

つていうか質量保存の法則無視してなかった？ その小さなダンボールにどうやって入ってたの？ 子供が入るのがやつとの大きさだよ？

「この完璧な偽装を見破るとは……。流石は武部さん！ 惚れ直しましたっ！」

「どう見たってワザとでしょう、この蛇道三段。……で、なんであん——貴方がここに居るのよ。私、これからチームの皆とお昼ご飯なんだけど」

「はい、知ってますよ。だから待ってたんです」

「……あんですと？」

なんでこいつが知ってるの？ まさか、サンダースよろしく戦車に盗聴器でも仕掛け

てるんじゃない……？

そんな事を思つて後退りしていると、ライカは、何故か少し照れた様子で自分の頬を搔く。

「……実は、西住さん達に協力をお願いして、武部さんにここへ来てもらえるよう、仕組んだんです」

「みほりん……?」

ど、どういうこと? 私を呼び出すために? ……まさかっ!?

嫌な予感に大急ぎで反転し、私は校内へ続くドアを開け――

《カチャン》

――ようとした、正にその時、その瞬間、鍵の掛かるような音がした。

念のためにノブを回して確かめてみても、ガチャガチャいうだけで全然回らない。

「えっ、ちよつと、やだっ! まだ人が居るんですけどー!? つていうかそこに居るの誰ー!? 開けなさいよー!!」

「悪いな沙織。ケーキ食べ放題のためだ、犠牲になれ。一時間くらいしたら戻る。じゃ」
「あ、ちよつとー!? 麻子おー!?」

扉の向こう側からは、若干申し訳なきそうな……しかし、必死に笑いを堪えているようでもある、麻子の声が聞こえてきた。

それはあつという間に遠ざかり、気配も感じられなくなってしまう。

……う、裏切った、裏切ったわねえ!? 幼馴染をケーキのために売ってどういう事お!?

そんなに生クリームが好きなら、後で背中にたつぷり流し込んであげるわっ!! ベツ
タバタにしてやるんだからあ!!

「武部さん」

——と、ちやつちい復讐を企てている私に、背後から近寄る気配。
ど、どうしよう、逃げる事は——無理。

隠れられるような遮蔽物もない。誤魔化す事も、出来そうにない。

こんな状況で告白されたら、私、私……。

「武部さん、二人で一緒にお昼食べましょう！ ……そ、それで、出来れば、お弁当を交換して下さいっ！」

「……はえ？」

断れないかもー、なんてドキドキしていたのに、ライカは青い包みにくるまれたお弁当箱を差し出ししながら、腰を九十度に曲げた。

……お弁当？ え？ 今日は好きって言ってくれないの？

………いやいやいやいや違うでしょ私。そうじゃない。疑問に思うべきはそこじゃないってば。

「え、ええつと、とりあえず、事情を説明して欲しいんだけど……？」

「はい。……まあ、その……事情も何も、ただ単に武部さんと一緒にご飯を食べたいなあって、思いました。」

それで二〜三日前、皆さんにメールして協力を仰いだんです。騙すような形になって

しまつて、本当にすみません」

「あつ、う、ううん、そんな謝らないで。怒ってるわけじゃ、ないし……。」

でも、どうやって学校に入ったの？ 休みの日も警備の人はちゃんと居るって聞いているけど」

学園艦としては小さい方で、知名度もあんまり無かった大洗だけど、そこは女子高。警備はしっかりしてるはず。

……はず、だよな？ ライカは毎日のように忍び込んでるけど、こいつが特別、変態的なステルス技術を持つてるだけだよな？

なんか不安になってきたよ……。

「そこら辺は大丈夫です。今回はちゃんと、事前に会長さんを買収して許可を貰つてますから。干し芋五十キロで」

「干し芋なんかで買収されなくて下さいよかいちよー!! つていうか五十!! 桁一つ間違えてない!?!」

不安に頭を抱えていたら、ライカは腕に通した許可章を示しながら更に不安にしてく

れる事をのたもうた。

干し芋で買収される生徒会ってどうなの？

よく考えたら、会長は干し芋食べてばっかりだし、副会長はおっとり巨乳だし、広報はトリガーハッピーの口だけ侍だし。

何で学園崩壊したりしないのか不思議。

「それが間違っていないですよ……。あんの合法口げつふんごつふん業突く張り、ここぞとばかりに集って来やがりましてね……。

諭吉さんが大勢旅立ってしまったわ、俺の財布はツングースカ大爆発の跡地の如き有様ですよ……。バイト代がすっからかんですよ……。おかげでケーキ代が怖い……。」

こんな事を考えていると彼女達に知られたら、間違いなく単独あんこう踊りを強制されるだろう事を思っていると、ライカはそう言っただけで乾いた笑みを浮かべた。

ケーキ代は自業自得として、干し芋五十キロって一体いくらになるんだろう。あんまり想像したくない。

……あれ？ よく考えたら、あのあんこう踊り、こいつに見られてる？

……ううん、ううん、そんな事は、ない、よ、ねえ？

……見られてたら死のう。もう御嫁に行けない。

あ、いつそのことライカに貰ってもらえばいいのカー。きつと貰ってくれるよねー。
あははー。

「えと、武部さん、とにかく座りませんか？　今、シートとクッションを用意しますから」
「……うん、お願い……」

脳裏を過ぎる忘れたい過去に打ちひしがれ、私はライカの差し出してくれた小さなクッションへ腰を下ろす。

お尻が冷えるのは嫌だから、とつても助かる。それに、シートも生地がしっかりしていてふかふか。

相変わらず、よく気が付いてくれるなあ。

……ん？　いつの間にか一緒に食べることになってない？

それに私、普通に喋れちゃってる。昨日までは正面に立つことも避けてたのに。

どうして？　自分の事なのに、まるで理由が分からない。

こいつと出会ってから、どんどん分からない事が増えて行ってる気がする。

……でもまあ、いつか。お腹空いたし。本当に嫌って訳でもないんだし。うん、ごは

ん食べよう。

「そういえば、お弁当、交換するの？ 私はいいけど、男の子には物足りないかも知れないよ？」

「いえ、大丈夫ですつ。武部さんの手作りっただけで、他の何よりも嬉しいですつ！」

むしろ、俺なんかの作った弁当と交換だなんて、恐れ多いというか、申し訳無いというか……」

「……うう、そういう事、あんまり言わないの……。じゃあ、はい。これ」

照れ臭さを誤魔化すために、私は巾着袋からお弁当箱を取り出し、ずいつ、と押し付ける。

ライカはそれを恭しく受け取った後、「どうぞ」と、彼が作ったのだろうお弁当を手渡してくれる。

「一応、女の子向けという事で小さめの箱に詰めたんですけど、量は大丈夫ですか？」

「うん、ありがと、大丈夫。でも意外、貴方ってお料理できたんだ」

「片親ですからね。家事全般は人並みに出来ないと、自分達が困っちゃいますから」

「そっか……大変だよね……」

やっぱり、お母さんが居ないと大変なんだろうな……。

私は、お料理もお裁縫もお母さんに教えて貰ったし、妹まで居るし、ライカと同じくらい大好きって言ってくれるお父さんも居て、いつも賑やかな、自慢の家族。

その分、お父さんと二人っきりの生活なんて、想像しただけで寂しくなっちゃう。胸が切なくなっちゃったけど、でも、ライカはそんな私に笑いかけてくれる。

「いえ、楽しいですよ? 慣れば大した事はないですし、もう日課みたいな物ですから。それに、元々は自分のためでしたしね」

「そうなの?」

「はい。小さい頃は、親父も艦の仕事に慣れてなくて、いつも帰りが遅くて。しかも飯はコンビニ弁当でしたから、風邪ばっかり引いてて。」

それを改善したくて、家庭科の授業で味噌汁の作り方を習ってからは、自分でちよつとずつ作るようになったんです。

まあ、それでもまだひ弱だったんで、ついだから、体を鍛えてそれも治そうって蛇道を始めて、今に至るって感じですね」

「へえ〜」

人に歴史あり、つてことかあ。

ひ弱なライカ……うーん、いまいち想像付かない。でも、ちつちやい頃のライカなら……。

風邪引いてばっかり……線の細い少年……色白……半ズボン……「お姉ちゃん」とか……ふひひ。

「じゃあ、そろそろ頂いても……？」

「……はっ、そ、そうだね。でわ、御開帳〜！」

やだ、変な妄想しちゃってた……。気付かれなかった、よね？ 危ない危ない。

彼に促されて正気に戻り、私は早速、お弁当箱の蓋を開ける。

そうして目に飛び込んできたのは、意外とちゃんとした内容のお弁当だった。

「きんぴらごぼうと豆腐ハンバーグに、春菊とチーズのちくわ巻き、ほうれん草のオムレツです。」

今回は武部さんに食べて頂くので健康志向、肉は少なめにしてみました。……どうでしょう?」

「うわあ、美味しそう……!」

これを、ライカが作ったの? なによ、普通に上手じゃない。しかも私のよりもおかずが一品多い。

……くつ、なんか悔しいっ! でも、まだ負けたわけじゃないわよお? お味の方は……。

「それじゃ、まずはこのきんぴらから……頂きまゝす」

「はい、どうぞ」

「……あれ」

「……え? マ、マズイですか? ちゃんと味見したんですけど……」

「ううん、違って、その……ホントに美味しくて、びっくりしちゃった……」

彼の作ったきんぴらごぼうは、普通に美味しかった。

きちんと味が染みてるし、アク抜きも出来てるみたい。それに、このくど過ぎず、程

よい甘さ……。私でも出せるかどうか。

他のも口に運んでみるけど、どれもこれも美味しい。冷めても美味しいように、ちゃんと考えてもあるみたい。

「この味、私、好きかも……」

「マジですかっ？ おしっ！」

つい呟いてしまうと、ライカは握り拳を引き付けながらガッツポーズ。その笑顔はとても嬉しそうで、私も釣られて笑っちゃった。

お料理が出来る男子か……。もし付き合ったりしたら、彼の部屋で一緒にご飯作ったり、一緒に食べたり出来るんだあ……。

そしてその後は……。いやいやいやいやいや、いくらなんでも飛躍しすぎでしょ私。落ち着きなさい私。

私は淑女、私は乙女、私はアイアンメイデン。なんか変なの混じったけど、とりあえずよっし！

「……っほん。ねえ、私のお弁当も食べてみてよ。これでも結構、気合い入れて作ってき

たんだよ?

貴方が食べるんだって知ってたなら、もっとお肉多めのガッツリ系に出来ただけど……」

「そんな、気を使わないで下さい。俺は、武部さんが普段食べているものを頂ければ、それだけで十二分に幸せですっ!」

「はいはい、それはさつきも聞きました。いいから食べて?」

「はいっ! 頂きますっ!」

勧めてみると、ライカは実にいい笑顔で私のお弁当に箸をつける。

まずは、レンコンの挟みハンバーグを……あ、一口で食べちゃった。結構大きめに切ったのに。

「〜!」

無言のままに再び笑顔。

そして、瞬く間におかず達は彼の口に消えていき、そのたびに笑みが深くなる。

なんだか、とつても幸せそう。こんな風に、本当に美味しそうに食べて貰えると、作っ

たこつちまで嬉しくなっちゃうかも。

「……はあく、ご馳走様でした。至高でした、究極でした、最っ高でした！」
「二人で料理対決になっちゃうよ、それじゃ……。お粗末さまでした」

横顔を眺めている間に、ライカはお弁当を空にしてしまっていた。

はあく、すぐ。こんなに早く食べちゃった。そんなに美味しかったのかな……。
おっと、とりあえず私も食べなきゃ。

「あ、そう言えば」

「ん？ ……っん、どうかしたの？」

「遅ればせながら、アンツイオ戦快勝、おめでとうございます。あつという間でしたね」
「あ、うん。ありがとう。いや、アンツイオは強敵だったよ？ 確かにあつという間だったけど。」

みほりんの作戦が怖いくらいハマっちゃってさ？ 私もよく覚えてないんだあ。いつの間にか勝っちゃってた、って感じ？

私なんて、ただ皆と連絡取り合ってただけだったし。みほりん様々だよ」

「本当に、西住さんは凄いですよね。一つのチームを指揮するのだけでも大変でしょうに、隊長だなんて。」

「才能もあるけど、でも、それに驕ったりもしない。西住さんみたいな人を、大和撫子って言うんですかね」

腕組みをし、こくこく頷きながら、ライカはみぼりんを褒めちぎる。

……うーん。

「重要な役割だっていうのは分かるんだけど、通信手って華がないよね……。華はすぐに居るけど。やっぱり、目に見える活躍が出来ると違うのかな……。」

「でも、私にはみぼりんみたいな才能は無いし、ゆかりんみたいな知識も無いし、麻子みたいに頭良く無いし、華みたいな集中力も無い。特技なんて、お料理と携帯の早打ちくらい。」

私って、駄目な子だ……。」

「でも、武部さんだって凄いですよ、俺は」

「……へ?」

「通信手って、それぞれの戦車を繋ぐ架け橋のような物じゃないですか。」

どんなに強い戦車だって、たった一輛じゃ戦いには勝てない。逆に、多少性能が劣ったって、きちんと連携できていれば、どんな強豪にだって立ち向かえる。

今までの戦いがそれを証明してます。武部さんがそれを可能にしたんです。武部さんだから出来たんです、きつと。西住さんに負けなくらい、凄い事ですよ」

「……………」

真つ直ぐな目で。

真つ直ぐな言葉で。

真つ直ぐな気持ち、ライカは、私に向けてくれる。

どうしよう……。嬉しい。すつごく嬉しい。

でも、すつつすつすつごく恥ずかしい……。つ。

「それに俺、武部さんの声、メチャクチャ好きです。可愛くて、柔らかくて。それこそ、ずっと聞いていたくらいです。」

「だから、訓練中とか試合中でもそれが聞ける他のチームの通信手の皆さんが羨ま——」

「うううううつ、もう分かったから、ちよつと口閉じててえ！ ほらつ、これでも食べて

なさいっ！」

「——むあぐ」

「全くもう、すぐそうやって煽てるんだから……。貴方って、人の良い所を見つけてるのが得意だよ。その手口で、今まで何人の女の子を泣かせてきたんだか……」

褒め殺しに耐え切れなくなった私は、ライカの口を塞ぐために、お弁当箱から豆腐ハンバーグを摘んでその口に押し込む。

はああ、まだドキドキしてる……。男の人って、皆こんなに積極的な……。ううん、そんな事ないよね。

ああ、みぼりんと出会った頃の、挨拶だけで舞い上がってた自分が恥ずかしい。今じゃあんなの挨拶にもならないよお……。あれ、挨拶だよ？ なってるじゃん。……。私は何を考えてるの？

なんて静かにテンパっていると、ハンバーグを飲み込み終えた彼は、勢い込んで私に反論を呈してきた。

「それは誤解です！ 俺、誰彼構わずこんなこと言ったりしません！ それに、俺は武部さんが初恋ですっ！ 貴方以外、見てませんっ！」

「……なつ、なつ!? やだ、もう……なに、言ってるの、よ……」

「……なつ、なつ!? やだ、もう……なに、言ってるの、よ……」
 またも、臆面もなく恥ずかしい事を言い放つライカに、顔がカアツと熱くなるのが分かった。

それを悟られたくなくて、苦し紛れに私はそっぽを向き、なんとなくお箸を咥え――

「――ほわああつ!?!」

――思いつきり放り投げる。

く、くくつくくくつくく、くわ、くわわ、くわつ、くわー―――つ!?!

啜えちやつたあああああつ!!!!

私のファースト間接キツスゴウウウウつ
 !!!!!!! (対 年頃の男の子)

「ど、どうしたんですかつ、いきなりそんな奇行――じゃねえや、えつと、その……取り乱して?」

「な、ななな、ぬ、にや、にやんでも無いっ！ なんでも無いからっ！」

立ち上がり、お箸を追いかける背中に向かって、私は噛みまくる。

どどどどどどどうしよう、私今、ホントに無意識に啜えちゃった。

女の子同士ならまだしも、男の子相手に、こんな……。

それに、なんで嫌じゃないの？　なんで、お箸の触れた部分がこんなにムズムズするの？　全然、分かんないよう……。

「あーあ、汚れちゃって……。洗ってきますね？」

「すすすそそそうだね……。あれ？　でも、鍵……」

「……あ。それじゃあ、ちよつくらフェンスを伝って降りて……」

「ちよつとちよつと！　危ないからっ！　お箸を洗うのにいちいち命なんて賭けないでよっ！」

今、屋上のドアには鍵が掛かっている。っていう事は、水道を使いに行くことも出来ないわけで。

ライカはお箸片手にフェンスをよじ登ろうとしていたけど、私はそれを急いで止め

る。

そりゃあライカなら余裕でそういう事も出来るんでしようけど、見てるこっちがハラハラするんだってば。

おかげで一週回って落ち着いちゃったわよ。

「でも、代えの箸なんて……あ。……っ……じ、じゃあ、しょうがない、ですよね?」

すると、ライカは不意に笑顔を浮かべ、こちらの側に舞い戻る。

そして彼は、自分のお箸を手に取り、私の持っていたお弁当箱からおかずを摘み上げて――

「はい、アーンして下さい。今度は、俺が食べさせてあげます」

「……うえええっ!? い、いいよっ、なにも、今すぐに食べなくちゃいけないわけでも……」

「アーン」

「いや、だから……」

「アーン」

「あうう……」

「アーン」

——私の口元に、それを寄せた。

恥ずかしくない訳がなくて、私は遠慮がちに首をふるふる横に振ったんだけど、こいつはそんなの御構いなし。満面の笑みのまま、アーン、を繰り返している。

なに？ なに？ なにこの状況？ そりゃあ確かにいつかは恋人とこんな事してみたいなあって妄想してたけど、なんでこんなに急なの？

どうする？ どうしよう？ どうなっちゃうの？

……ううええいつ！ もうどーなってもいいやつ!!

「あ、あ〜……ん」

「……美味しい、ですか？」

「……………」

こくん。

無言で頷く。

「……へへへ。はい、アーン」

「……あ〜ん」

一度受け入れてしまえば、もう吹っ切れた。

私は、餌を待つひな鳥みたく口を開け、ライカの運ぶご飯を食べる。

……なんかもう、全部、どうでもいいや。考えると、変な事になりそうだし。

それに、今はただ、こうしてたい。

ずっと、ずっと。

こいつと、こうして、ドキドキしてたい。

そう、思っていたのに。

「、いい—すか? お—か—も—」

なんで、貴方はそんなに安心しきった表情をしているの?

「ああ。——長い付き合い——るんだ。私の——麻子——べ。特別——す」

なんで、麻子はそんなに優しく笑ってるの?

「——あり——うご——す、麻子さん。で——ま——武部——と——関係に——て

——」

なんで、貴方は麻子を、そんな風と呼ぶの?

なんで……。

最終話 「入水します！」

「はあー、今日も疲れたねー。アイスでも食べてく？」

夕暮れの通学路を歩きながら、ぐうつ、と背伸びをして、私は皆に呼びかける。
それに答えるのは勿論、あんこうチームのメンバー達——麻子、華、ゆかりん、みぼりんです。

「またか。ここのとこ毎日だな。私は構わんが……」

「わたくしも大丈夫です。疲れた時には、やはり甘いものが一番ですわ」

「ですね。そういえば、今日から新作が出るんですけどつけ？ 確か今度は、パッションフルーツ&マンゴーのさつま芋フレーバーだとか」

「どこまで行ってもさつま芋から離れられないんだね……」

「やっぱり名産だからかな。それに、今度の会場って北の方なんでしょ？ だったら、寒くなる前に思いっきり食べておかないや！」

戦車道の訓練終わり。そんな事を話しながら、私達は家路を歩く。

公式試合の開催会場はルーレットで決定されるんだけど、今回の会場はなんと、雪の降りしきる寒冷地。北緯五十度を越えるみたい。

そんな所へ行ったら、どんなに美味しいアイスでも食べたくなくなっちゃう。今の内に思う存分、味わっておかねば。

「しかし、コタツに入りながら食べるアイスもオツな物だと思うんだが」

「ああつ、分かります冷泉殿っ！ 半纏を着てコタツに潜りながら食べるアイスって最っ高ですよねっ！ コタツの上にあるミカン並みの誘惑ですっ！」

「おこたでアイスかあ。私やった事ないや」

「わたくしもです。ちよつと憧れてしまいますね」

「憧れるような事かなあ」

頬に手を当て、ゆったりそう言う華に、私は苦笑い。

やっぱり、お嬢様育ちだと感性が違うというか、何というか。まあ、お嬢様だからこそ、そんなだらしなしい事は出来なかつたのかも。

あ、そう言えば、みぼりんもお嬢様、なのかな？ 西住流の宗家なんだし。うーん、礼儀作法に厳しそう……。一般家庭に生まれてよかったあ……。

「それはともかく、次の相手はプラウダかー。なんか、ロシアっぽい学園艦なんだっけ」
「はい。使用してくる車輛もロシア——いいえ、ソヴィエト製がほとんどの筈です。正直、ここまで来ると、如何ともし難い性能差が出てきますね……」

「使用できる台数も多くなってるから、会場の環境も含めて、多分、今までで一番厳しい戦いになるかも……」

みぼりんとゆかりんは、難しい顔で唸っている。

この二人がここまで言うって事は、本当に難しい相手なんだ……。

ちよつと不安かも……。

「……ううん、でも大丈夫だよ！ なんせこつちには、戦車道を始めたばかりの私達を準決勝まで引つ張り上げてくれたみぼりんが居るんだもん！ 今回もきつと勝てるよっ！」

「そ、そんな……私一人じゃ、とてもここまでは来られなかったよ。皆が努力して、力を

貸してくれたおかげ、だから……」

恥ずかしそうに、みぼりんは体を小さくしてしまった。

くうー、相変わらず反応が乙女ですなー。思わず抱き締めたくなっちゃう。

「謙遜する事はありませんよ!　西住殿が居られなければ、私達は絶対に一回戦で敗退してました!」

「自信満々に言う事じゃないがな。……まあ、私もそう思う」

「はい。もつと誇って下さい、みほさん」

「あ、うう、ありがとう、みんな……」

百合百合しい事を内心で思っていた私に残る三人が続き、みぼりんは恥ずかしさに溶けてしまいそう。

はあく、やっぱ初々しくて可愛い。こんな子が妹だったら堪えないだろうな。

あ、そうだそうだ、お姉さん居るんだっけ。麻子のお婆ちゃんが倒れた時にはヘリも飛ばしてくれたし、格好良くて、良いお姉さんかも。無口でなに考えてるか分かんないし、隣に嫌味な人は居たけど。

んぐ……でも、今度また会えた時には、もう一度お礼を言わなきゃ。助かったのは事実なんだし。

まあ、今はそれも置いて。

「アンツイオの時みたいなのに、今回もパッと片付けちゃおうよ！ 一回戦の頃に比べたら、私達もかなり成長したんだし、きつと勝てるっ！ 信じようっ！」

「ですねっ。それにいざとなればサンダーズの時みたいに、私とライカ殿で潜入捜査を敢行いたしますからっ。」

「……え、ちょ!?」だ、駄目だよっ！ スパイ行為が認められてても、捕まったら色々と面倒なんですよ？ 女の子なんだから、危ない事はしちや駄目っ。

「ゆかりん可愛いから、捕まったら最後、向こうの学園艦に居る男子達に、とても口では言えないあんな事やそんな事を……」

「んえ？」

え、あれ、なに言ってるんだらう。

情報収集は試合のためにも重要な事なのに、私はゆかりんの言葉を遮ってた。

……ううん、危ないのは事実だもん。他意はない、よ? ……ほ、本当だよ? さお

りん嘘つかないっ! って私はインディアンかつ!

だなんて脳内セルフボケツツコミをしていたら、ゆかりんは冗談めかして言葉を繋げる。

「ああ、心配せずとも大丈夫ですよ。ライカ殿は私に興味ないでしょうから。それに、あのバレるかバレないかの瀬戸際を行ったり来たりするスリル……堪りません!

後、調べて分かった事なんですが、スパイ活動を通して交流を始める選手達も結構多いみたいですよ?」

事実、私はケイ殿達とメールさせて頂いてますし、ライカ殿もナオミ殿とかとメールしているみたいです。意外とファンシーなデコメが送られてきてビックリだって、

前に——」

「ナオミってだあれ?」

「ひい」

「……はあ。おい沙織、いい加減に《にやおくん、にやおくん、にやおくん》……ん？」
「あれ？ 麻子、メール？」

「はあああううううう」

可愛らしい猫の鳴き声が響き、私はフ○ースの暗黒面から呼び戻された。この着信音は、麻子の携帯だね。

その隙にゆかりんは拘束から逃れ、ふらふらと華のふくよかな胸に、ぽゆん、と倒れこむ。

「こ、怖かった、怖かったですよう、西住殿お、五十鈴殿おお……」

「まあまあ、大丈夫ですか？」

「よしよし、怖かったねえ、よく頑張ったねえ、優花里さん」

う、わ、悪い事しちゃったかな……？ ゆかりん、マジ泣きしてる。ゴメンね、アイヌ奢るから許してね？

………うん、それもこれもライカのせいだ。全部あいつのせいだ。

だから今度、ドーナツでも奢らせよう。そうしよう。

「…………ふむ。噂をすれば、か」

「ん? どうしたの麻子?」

「いや、ちよつと急用が出来た。アイスはまた今度だ」

「急用って…………まさか、またお婆ちゃんがつ!」

「違う、お婆とは別件。でも、大事な用。じゃ、これで」

「あ、うん…………」

くるり。振り返りつて、麻子は迷いなき足取りで道に戻る。どうやら、本当にお婆ちゃんには平気みたい。

でも、大事な用つてなんだろう? 麻子があんな言い方をするなんて珍しい…………。なんか気になるなあ…………?

そんな事を思いながら小さな背中を見送っていると、復活したゆかりんが「そう言えば」と口を開く。

「今日と昨日と、その前も。ライカ殿の顔を見てませんね。週末でもないのに三日も空くなんて、どうしたんでしょう」

「あ、そう言えばそうだね。ライカ君、また合宿かな。沙織さん、何か知ってる？」

「え？ 何で私に聞くの？」

「え、だって……ね？ 華さん？」

「はい。ここは、沙織さんに聞くのが一番だと思います」

「うっ」

三人の視線が集中し、思わず後ずさる。

な、なによ、皆して。別に、私はあいつの全てを把握しているってわけじゃ……。

それに、今回は本当に何も知らないし……。

「私も、ちよつと分かんない……。でも、メールとかはちゃんと返って来るし、単に都合が悪かったんじゃない？」

「そうですか。とりあえず、メールが出来るって事は、怪我や病気や陰謀じゃなさそうですね」

「陰謀って、それは流石にないんじゃないかな……」

「あ、だけど……」

「……？ 何か、気になる事がおありなんですか？」

「うーん……」

気になると言うか、普段と違うと言うか……。

ちよつとした変化なんだけど、でも、変化であることには変わりないし……。

「……最近、メールの中にある、私に向けた『好きです』って単語が少なくなってる気がするんだよね。いつもなら一通の中に二〜三個はあったのに、こここの所、一通に一つか二つだし」

「何だか胸焼けしてきました……」

「とても渋い緑茶が欲しいですわ……」

「私も、今ならピーマン食べられそう……」

「な、なによおつ、皆が聞いてきたんでしょっ?」

顔を突き合わせて、三人で丸くなる彼女達。

わ、私だって、好きで話したわけじゃないのに……。

なんか寂しいなって思っただけで、結構、言うの恥ずかしかったのに……。

「ひゃうっ」

——と、不意に冷気を孕んだ風が吹きぬけ、その寒さに、私は身を竦める。

「うゝ、なんか寒くなつて来たねゝ。やつぱり、私達もアイスはやめとこつか？」

「そうしましょうか？ おなか冷えちゃいますもんねゝ」

「もう学園艦も移動を始めていますから、これからはもつと気温も低くなるんですよね」
「うーん、寒いのはちよつと困っちゃうなあ。エンジンも掛かりにくくなっちゃうし……。小山さんをお願いして、防寒具とかも用意して貰わないと……」

華の言葉に、みぼりんは自分の顎に人差し指を当て、空を見上げる。

防寒具かあ。手袋、マフラー、イヤーマフ、セーター……色々あるけど、どうしよう。女子としては、寒さに負けてズボンに穿き替えるなんてナンセンスだし、でも、寒いのはやつぱり嫌だし……。

毛糸のパンツでも穿こうかな？ 結構あつたかいんだよねゝ、あれ。

ううゝ、想像してたらますます寒くなつて来ちゃった。

「こう風が強いと、肌荒れにも気を付けなくちゃ。乙女の肌は傷つき易いんだから……あれ?」

寒さに手を擦り合わせ、ある物を取り出そうとポシエットを探ったけれど、そこにある筈の小さな感触が見当たらず、私は焦り出す。

ない、ない、ないっ。

お、おかしいな、ちゃんと入れておいた筈なのにっ。

「どうしたの、沙織さん」

「わ、私のリップがないのっ」

「リップって、ライカ殿から頂いたという、アレですか?」

「う、うん……」

あの日——お弁当と一緒に食べた日に、アンツイオ戦の戦勝祝いとしてライカから貰ったプレゼント。薄いピンク色の、いい匂いがするリップ。

あいつは、「金欠でこんな物しか用意できなくて、すみません」なんて謝っていたけど、値段なんて関係ない。私は、嬉しかった。

なのに、それを忘れて来ちやうなんて……ああつ、私のほか！ うっかり！ ドジっ子！ おちやめさん！

……最後のは余計だね。うん、調子に乗りました。

「多分、戦車の中に置いて来てしまったのではないでしょうか？ 沙織さん、使いもしないのに訓練中にも取り出して、よく眺めていましたし」

「……え？ 私、そんな事してたの？」

「……無意識だったんですか？」

「……重症だね」

「手遅れですね」

またもこちらを見つめ、三人は苦笑いを浮かべていた。

……な、なんだろう、この、えもいわれぬ、むず痒さ。

それに耐え切れなくなった私は、学校への道に戻るため、弾かれるように彼女達へ背を向ける。

「わ、私、ちよつと学校戻って探して来るね！ 先に帰ってて良いから！」

「了解でありますっ」

「うん。またね、沙織さん」

「では、また明日」

「ごめんねー! またねー!」

後ろ手に手を振りながら別れの言葉を交わし、通学路を逆走。学校へと急ぐ。

はああ、一日に二回も学校に通うハメになるとは。ちよつと憂鬱。

でも、未使用だから置きっ放しにしたら誰かに盗られちゃうかも知れないし、今日の内に確保しなきゃ。

「……………あれ? 麻子……………」

——と、決意を新たに早足で歩いていたら、前方に見慣れた後姿が。見れば、彼女も学校の方へ向かっているみたいだった。

なんで麻子もこの道を…………? 何か用事があつたはずじゃあ…………? もしかして、学校に用事? まさか…………。

「んっふっふ……」

にやり、私はほくそ笑む。

まさかついに、麻子にも男の影がっ？ メールで校舎裏に呼び出されて、夕暮れの中で告白とかっ？

いや、やりますな？ な？ な？

「なあんて、んなわけないか」

わざわざ女子高に呼び出す男子が居るわけないよね。そんな事したら、入ろうとした時点で普通に止められるか捕まるもん。……うん、普通は。

はあー、つまんないなあー。もしそうなら、一部始終を動画撮影してジュースのつまみに出来たのにな。

だがしかしっ！ 何の用事かは気になるし、このまま尾行を続けようと思います。

ぬっふっふう、こんな事もあるうかと、実は密かに、ライカからハイディングスキルを習っていたのですよ。

暇つぶしに基礎を教えて貰っただけだし、あいつ並とはいかないけど、それなりに気

配は消せる。

麻子にだったら、最後まで気づかれない自信がありますっ!

(今の私は華麗なる女スパイ! 誰にも気づかれずに目的の情報を入手して、痕跡も残さず立ち去るプロよ!)

なあんて事を考えながら、麻子の後方数十メートルに張り付き、私はその動向を見守る。

やっぱり、目的地は大洗女子みたかった。

でも、下校時間はとつくに過ぎてるし、校門も閉まっちゃってる。麻子、どうするん

(あああつ!)

——だろう、と思っているうちに、彼女はその小さな体で校門をよじ登っていた。

あああ、ネコさんが、ネコさんがあ! 確かに周りには誰も居ないけど、もうちよつ

と気を遣いなさいってばあ!

っていうか、女子高生なんだからもうちよつと色気のある物を……！
あ、麻子が行つちやう、追わなきやつ！

「右よし、左よし、後方よしっ！　とうっ！」

安全確認をしてから、私も校門を乗り越え、遠ざかる背中を追いかける。
けれど、校舎の方へ向かうとの予想を、彼女は裏切った。

(……格納庫？　なんで……？)

麻子の向かった先は、私も大事な用がある場所。戦車道で使う格納庫だった。
出て来る時には完全に閉めたはずの扉が、人が一人通れるくらいに開いていて、彼女は
その隙間に身を滑らせる。

(なんだろう、胸が、ザワザワする。変な、感じ)

ううん、気のせい、だよ。尾行なんてしてるから、少し気が咎めてるだけ。

ちよつとだけ覗いたら、もう帰ろう。リップは明日の朝練の時に回収すればいいんだし。

そう考え直し、扉の影に身を隠し、中を覗きこむと――

(……え)

ちくん。

「待たせたか」

「――え、わ――ざお――立てして、――ん」

そこには、神妙な顔をして向かい合う、見知った二人が居た。

……なんで? なんで、あいつがここに? それに、待たせたかつて……。

麻子のメールの相手って、ライカだったの? 大事な用って、彼との、待ち合わせ……

?

「、
「、
「、
「、
「、
「、

混乱するこちらを余所に、二人は静かに会話を始める。

けれど、それはあまりに静か過ぎて、集中力を欠いている私の耳には、届かない。
何を、話してるの……何で、こんな、二人つきりで……。

ちくん。ちくん。

「、
「、
「、
「、
「、
「、

胸が、痛い。

麻子に話しかけるあいつの表情は、見たことのない不安の色に染められていた。

それを見つめる麻子は、いつも通りの無表情に見えて――

(あつ)

——けれど、不意にライカへ近づいた麻子は、彼の頬を張る。パンツと乾いた音が響き、唾然とするライカ。

「、——!」

何か、麻子が大きな声を上げている。

彼女にしては珍しい——ううん、滅多に見れないその行動は、私とライカの目を釘付けに。

そして、直後——

「、——」

——柔らかい笑みを浮かべ、麻子は、彼の頭を優しく撫でる。

ライカは、一瞬、泣きそうになり、それを覆い隠すように朗らかな笑みを、彼女に返す。

ちくん。ちくん。ちくん。

息が、苦しい。

さつきよりも近くなっている二人の距離。

幼馴染の私すら見た事のない、女の子の表情をしている麻子。チームの皆の前でだつて、滅多に笑つたり、しないのに。

そして同じく、私の前では見せてくれなかった、安心しきつた顔を、彼女に見せるライカ。

……苦しい。

二人が、こちらに向かつて歩いて来ているのに、全く身動きが出来ないくらい、苦しい。

「、いい—すか？ お—か—も—」

「ああ。——長い付き合い——るんだ。私の——麻子——べ。特別——す」

「——あり——うご——す、麻子さん。で——ま——武部——と——関係に——て——」

止めて、やめて、ヤメテ。

なんで貴方が、“麻子なんか”を――

「……え……今、私、なんで……っあ」

「……っ!?! さ、沙織っ!?!」

「え、た、武部さんっ!?!」

私の喉から、音が漏れていた。

こちらを射る二つの視線には、驚きと、後ろめたさと。

ちくん。ちくん。ちくん。ちくん。

「あ、お、おい、沙織、これは……っ!」

堪らず、逃げ出していた。

(なんで、なんで、なんで、なんで)

なんで私は、逃げてるの。

なんで私は、泣いてるの。

なんで私は、麻子にあんな酷いことを思ったの。

なんで、私は……。

(ああ、そっか……)

私は、麻子に嫉妬して。

私が見たことのないあいつを、一番に見れたあの子が、羨ましくて。

……いやだ、こんな私。

麻子は、大切な幼馴染なのに。それなのに、あんな事を思っちゃった。

私、嫌な子になっちゃった。

知らなければ良かった。

気付かなければ良かった。

こんな、汚い気持ち。

「さああんっ！」

「ちよ!? 人聞きの悪いこと言わんで下さいっ! 今日はず可貰えてないんですからあ!!」

「知らないわよそんなのお!」

元々、限界ギリギリの速度だったけど、追いかけられると何故か更に脚は加速してしまい、がむしやらにあいつから逃げ続ける。

そんな私を追いかけながら、ライカはまた言い訳を口走っていた。

「とにかく俺の話を聞いて下さいっ! 誤解なんですっ!」

「いやっ! 聞きたくないっ! そんなに話したいなら麻子と話せばいいじゃないっ!」

「はあ!? なんでそこで冷泉さんが出てくるんですかっ!」

「なによ白々しいっ! 麻子の事、『麻子さん』って呼んでたくせにつ!」

「……あ」

今気付いた、というような声。

なによそれ……。意識しないくらい自然に呼んでたつてこと?

他の誰の事も、名前で呼んだことはなかったのに……っ!

「もう追いかけてこないでっ! ライカのばかあ!!」

「いや、やっぱり誤解ですってばあ! 武部さんっ!」

拒絶の言葉に、だけどあいつは諦めない。

そして、誰も居なくなつた校舎を、私達は駆け巡る。

けれど、普段から野山を踏破している彼の脚はとても速く、段々と先回りされるようになって――

「武部さんっ!」

廊下の窓から――

「武部さあんっ!」

教室のドアから――

「武部さああんっ!!」

「ちよっ、そこ女子トイレだよっ!?!」

「あ、こりや失敬」

果ては女子トイレから（よく考えたら教員用以外全部そうだった）顔を出す野生児に、私はずい追い詰められ――

「はあ……はあ……っは……ひいいい」

とうとう学校の敷地内を抜け、とある池の前――カバさんチームの乗る、Ⅲ号突撃砲 F型が沈んでいた池の前で、私の脚は止まってしまった。

こ、こんなに走ったの、ひ、久し、ぶり、いい……。

は、肺が痛い、脇っ腹が痛い、の、喉がああ……。

「やっと捕まえましたよ、武部さん」

「……………、……………!」

崩れ落ちそうになった体を、遅い腕が捕まえる。

……な、なんで、あんたは息一つ乱してないのよお……ふこうへーい……ひきようもの……。

つて言つてやりたいのに、渴いた喉では声を発する事も叶わない。

うああー。

「ええと、大丈夫ですか？ スポーツドリンク、飲みます？ 俺の——あつ」

「っ！ んぐ、んつく、んくっ」

そんな様子を心配したのか、ライカはどこからともなく水色のペットボトルを取り出し、私はそれを引っ手繰るみたいにして口を付ける。

ああ！ これぞ天の恵みっ！ 体にミネラルが染み渡るっ！ これが無かったら池の水を飲んだかかもっ！ 助かったあ——

「……んぐ、と……それ、俺の飲みかけ、なんですけど」

「……ふあっ!」

「あ、虹」

——つて思つてたらあんたはあああつ！ 私のセカンド間接キツスううううつ！
ん？ よく考えたらセカンドじゃないや。何回目だろ？
いやいやいやそんなのどうでもいいってばあ！

「あ、まあ、とにかく、落ち着きました？」

「ケホツ、ケホツ……あ、貴方ねえ、もうちよつと気を遣つてよお!? あんなタイミン
グで差し出されたら飲んじやうじゃないっ！ せめて買つてくるとか……！」

「すみません……。でも、離れたらその間に池の水でも飲みそうな気がしたので……」
「うぐっ」

言いながら、ライカは私の背を撫でる。

その感触は嬉しくて、でも、伝わる優しさが辛くて——

「落ち着いたんでしたら、まずは俺の話を——」

「やだ。聞きたくない」

「何ですかっ!? 話さなきや何も分からな——」
「分からなくて良かった!」

——私は、彼の言葉を遮る。

知らず、大きな声を上げていた。
髪を振り乱し、睨みつけていた。

「こんな気持ちなら分からない方が良かった! 知らない方が良かった!

貴方が麻子と二人つきりで話してただけで、こんなに胸が痛くて……ほんのちよつと
だけど、私、麻子に酷いこと思っちゃった!

こんな嫌な気持ち、知りたくなかった……。こんな私、私は、嫌い……っ」
「……武部、さん」

「わた、し、これ以上、嫌な子に、っ、なりたくない……。」

こんな私を、知られたく、ない……っ。

だから、何も、話したくない……。何も、聞きたくないのお……」

涙が、止まらない。きっと、顔もグチャグチャ。

こんな時でも、それは見られたくなくて、両手で覆い隠す。それでもライカは話すのを止めてくれないみたいで、気配がまた近づいて来る。

「やっぱり、聞いて下さい」

「やだつて……すんつ……言ってるでしょお……もう、放っておいて——」

「いいから聞けっ！」

「あっ」

頑なな私の肩を掴み、彼は強引に向かい合わせる。

普段は温厚な言葉遣いが荒く、思考に空白が生まれた。

その隙間へ、静けさを取り戻した声が入り込む。

「俺が冷泉さん呼び出したのは……。武部さんの事を、相談したかったからです」

「私の、こと……？」

「……はい。武部さんが俺を受け入れてくれないのは、やっぱり、俺が悪いんじゃないか。……」

武部さんは優しいから、本当は嫌なのに、無理して俺の相手をしてくれてるんじゃない

いかって。

最近、ちよつと不安になつちやいました」

「そ、そんなことつ!」

麻子に見せたのと同じ、不安に満ちた暗い表情に、思わず縋り付く。

そんな事、ない。あるはずがない。私は、無理なんかしてなかった。

ビツクリする事ばかりで、いつもドキドキさせられて、だけど……楽しかった。

楽しかったから、私は……。

「はい。今なら分かりますけど、でも、やっぱり不安だったんです。

どんなに好きだって言つても、言葉では返してくれなかったし」

「……ごめん、なさい……」

「いえ、良いんです。俺が勝手に挫けそうになつてただけなんですから」

「でもっ」

「……。それで、冷泉さんにも発破を掛けられたんですよ。

お前が弱気になつてどうする。お前が自分の気持ちを信じなくてどうする。

お前になら、大切な親友を任せても良いと思つてたのに……つて、そんな風に」

「麻子、が、そんな事を……?」

普段の彼女に似つかわしくない、熱を感じる言葉。それが信じられなくて、私は目を丸くする。

麻子は、こいつの事を応援してくれてた……?　　つていうことは、私の事も……?

「で、でも、長い付き合いになるとか、そんなこと言ってたじゃない。それに、名前……。あれは?」

「ああ……。ガツンとやられて目が覚めて、諦めませんって宣言したらですね。

沙織の恋人になるなら、自分にとっても大事な友達になるわけだし、長い付き合いになるだろうから、これからは麻子サマと呼べって。

なんか、いちいち見せ付けられた腹いせだそうです。

でも、そう呼ぶのは武部さんとそういう関係になって、ちゃんと許可を貰ってからって、一応は断ろうとしてたんですが」

「……………」

麻子サマ? 「さん」じゃなくて「サマ」?

なにこれ、全然ニュアンスが違う。

確かに親しみは込められてるけど、ベクトルが微妙に違う。

私の思っていた情景と、全然、違う。

「それってつまり、場の流れで呼びはしたけど、
“そういう意味”じゃ、なかったって、
ハハハ。」

「はい、そうですけど」

「……私の、勘違い……?」

「って事に、なりますかね。多分」

「……そっか」

「……ですね」

勘違い。

……そっか。

勘違い、なんだ。

……よし。

「武部沙織、入水します！」

「つてちよつとお!? ダメですつてここ深いんですからあ！ 戦車も沈まっちゃうくらい深いですからあ!!」

「いいいやあああつ！ お願い死なせてええええつ!!」

はずかしいつ、恥ずかしいつ、H A ・ Z U ・ K A ・ S I ・ E E E E E

独り相撲もいとこじやないつ!? 勝手に勘違いして、勝手に暴走して、勝手に泣い

て……。

うわあああああんんつ やだもおおおおつ 私つてホントばかああああ

あつ
!!!!!!

!!!!!!

!!!!!!

「だからダメですつて……あく、じゃあ、武部さんが死んだら俺も後追い自殺しますよつ！ いいんですかっ!?」

びたつ。

「これで止まるか……。自惚れて、良いんだよな……。う?」

途端、大人しくなった私を、羽交い絞めから抱きすくめるようにしたライカは、自分で確かめるみたいに呟く。

……なによお、そんな言い方されたら、止まるしかないじゃない……。卑怯だよお……。

「嫉妬、してくれましたんですね。……冷泉さんに、武部さんが」

「……知らない、そんなの……」

「……。色々とすっ飛ばしちゃいますけど。ちよつと、お願いがあります。……いい、ですか?」

「……聞くだけ、聞いてあげる」

「武部さんに、キス、したいです」

「っ!」

不貞腐れていると、ライカはいきなりとんでもない事を言い放つ。

キ、キツキツキキキツキ、キスって!? キスってアレでしょ!?

天ぷらにすると美味しい白身魚の方じゃなくて、マウス・トウ・マウスの方でしょ!?
そっそっそっそっそっそっそ、そんな、いきなりい!?

「あ、もちろん口にはしませんよ? そっちの方は、きちんとそういう関係になつてから
で」

「え? ………………そ、そう。まあ、ほっぺたとかなら、いいけど? 減るもんじゃな
いし?」

え、いやいやいやいや、減るよ? 主に私のMP(まいっちんぐ・ポイント)が。
あれ、私はなに言ってるの? 心の準備が出来てないよ?
ほっぺにキスなんて、お父さんとお母さんくらいにしかされた事ないのに。
ちよつと待つて――

「じゃあ、行きます」

「ど、どどどど、どんと来おいっ!」

——なんて思っている間に、彼は私を抱く腕を解き、再び向かい合う。今度は、優しく肩に手を置くだけ。

軽く笑い、こちらを見下ろす顔は。その、顔は。

……つていうか来いじゃないってばあ!?

なんで私の口はさつきから言う事をきいてくれないのお!?

あうわあわわわ、来る、来るっ、来ちゃうう!!

「好きです、武部さん」

「……っ」

耳を言葉でくすぐられた後、《ちゅっ》と、音がした。

左の頬に、一瞬、触れる唇。軽く吸われるような感覚。

……あ、れ? もう、終わり?

な、なんだ、大した事ないじゃない。ほっぺたはやけに熱いけど、でも、それだけだし。

もつとすっごい物なのかと——

「可愛いです」

「………へ」

——気を抜いていたら、今度は右の頬に《ちゅっ》。
え、あれ、あれ、なんで二回目？

「綺麗です」

「あ、あの」

《ちゅっ》《ちゅっ》。

更に右に一回、そしてまた左へ。

なに、これ。

なにこれ、なにこれ。

なにこれなにこれなにこれええええええええええ

???????

「目、透き通ってます」

「え、あ、え」

《ちゅっ》《ちゅっ》《ちゅっ》。

ほっぺたから頬骨に、上りながらの三連続。

超至近距離で合わさる視線。

唇が触れるたび、ぴくん、ぴくん、と、体が勝手に反応してしまう。

「髪、いい匂いします」

「あ、う、っ、う」

《ちゅっ》《ちゅっ》《ちゅっ》《ちゅっ》。

さらり、前髪をかき上げて、目尻と眉毛に、おでこに、鼻に。

顔が、熱い。ううん、熱いって感じじゃない。

溶ける。溶けてる。顔が溶けてる。

それなのに、体は凍りついたみたいに動けない。

拳を握って、口をへの字に曲げて、目をぎゅつと瞑って、膝が崩れ落ちないように耐えるのが精一杯。

こんな、の……。

「肌、柔らかいです。癖に、なります」

「ひゃ、う、んっ、や、あっ」

《ちゅっ》《ちゅっ》《ちゅっ》《ちゅっ》《ちゅっ》。

キスの、絨毯爆撃。

もう私の顔に、あいつに触れられていない場所はもう無い。
たったの一箇所だけを、除いて。

こんなの……こんなの……。

「ちよ、ちよつと、お願い、ちよつと待って……」

「……はいっ？」

咄嗟に彼の体を押し、少しだけ距離を取る。

こちらを見るその瞳はぼうつとしていて、唇も半開き。

熱でもあるのかと心配したくなる、どこか間抜けで、赤い顔。

ああ、やだ、もう。

こんなの——

「す、すみません、調子に乗っちゃって……やっぱり、嫌だった——んむっ!」

——こんなの、我慢できない。

離れようとしていたのを、シャツを掴んで引つ張って、ぐっ、と爪先立ちをして、唇を重ねる。

……キスを、していた。

どうしよう、しっちゃった。私の方から、しっちゃった。

初めてのキスは、もっとロマンチックに、ムーディーな場所でしょうって、子供の頃から決めてたのに。

こんな成り行き任せで、しっちゃった。

……なのに、なんでこんなに幸せなの？

唇が触れ合ってるだけなのに、どうして、全身がゾクゾクするの？

キスだけでこんなになるなんて、もっと凄い事したら、私、どうなっちゃうの？

「……あ……」

「……………武部、さん。今、の」

それが怖くて、おずおずと唇が離れる。

目を泳がせるライカの声は、やっぱりくすぐったくて、胸に顔を埋める事でそれから隠れた。

彼は私の肩を、おっかなびっくり、といった感じで抱き、問い掛けてくる。

「OKって事で、良いんですよね」

「……ん」

「彼女に、恋人になって、くれるんですよね」

「……うん」

「……………武部さんっ!」

「わぶっ」

微かに震える声へ何度か頷きを返していると、急に抱き締められてしまった。

顔全体にライカの胸板が押し付けられ、その匂いを強く感じる。

汗の匂い。彼の匂い。……嫌いに、なれない匂い。

だけど、そう思ってしまった事が、恥ずかしくて――

「こ、こらっ、いきなり……っ、く、苦しい……っ」

「すみませんっ、でも、止まませんですっ。

なんか、なんかもう、嬉しさが止まらなくて……。

ああ、もうっ！ 武部さんが可愛くて、俺の人生はパラダイスで――」

「あ、それ嫌」

「――すわっ?!? なっ、ええっ?!?」

――やられっ放しなのも悔しくて、満面の笑みを浮かべるライカに、ちよつと意地悪をしてみる。

すると、私が予想したとおり、彼は大きい慌てふためき、目を大きく剥いていた。

ふふ、ちよつといい気分。さまーみろー、なあんで。

「え、えっ、何が嫌なんですかあ!? 俺じゃやっぱりダメですかっ!? き、嫌いなどが

あるなら直しますからあ!!」

「ううん、そうじゃなくって」

今にも泣き出してしまいそうな、情けない声。……違うや、声だけじゃなくて、表情も。

麻子に見せたのと同じようで、あの時以上にそうだと思える、素のライカ。

でも、今の私にはそれすら可愛く見えて、眉毛を八の字に曲げる彼へ、笑いかける。

「私はもう、貴方の彼女なんだから。ちゃんと、沙織、って呼んでよ。……ばか」

「……あ」

不意を突かれたような、ポカン、とした顔。

慌てて身を起こし、落ち着こうとしているのか、何度も自分の頭や顎を撫でる。

私はそれをじつと見つめ、望んだ言葉が耳に届くのを待つ。

なんだか、変なの。さつきまではこつちがあんなに慌ててたのに、あつという間に逆になつちやつた。

変、なの。

「えっと、あー、さ……沙織、さん……?」

「……うん」

鼓膜を打つ音の波は、どこか不安そうだったけれど。

静かに目を閉じて、その甘美な調べに心を泳がせる。

さん付けか。ちよつと残念だけど……でも、ライカらしい、よね?

「……っ……沙織さん。俺は、貴方の事が、好きです。……好きです! 大好きですっ

!!」

そして今度は、力強く、何かに宣言するように叫ぶ彼へ、私は。

めい一杯の、精一杯の笑顔で、宣誓し返すのだった。

「うんっ! 私も、貴方の事がだ〜い好きっ!!」



「ふん、ふん、ふふつふ〜ん♪ おっはよ〜……………う……………う？」

ざわ、ざわざわ……………。

清々しい朝。ルンルン気分で教室に足を踏み入れる私を出迎えたのは、クラスメイト達のざわめきだった。

彼女達は一様に、こちらを見てはこそこそ話を繰り返している。

な、なに？ この空気。なんでいきなり注目の的？ 彼氏が出来て女子力がレベルアップしたから、そのせい？ ……の割りに、視線が全体的に生ぬるいというか、生暖かいというか……………。

居心地が悪くて、私は、教室の中央辺りにたむろしていた、あんこうチームのメンバーに歩み寄る。

「おはよー、皆。ねえ、なんか他の子達の様子がおかし——」

「あ、沙織さんっ、おめでどう！ 幸せになってね！」

「武部殿、おめでとうございます! いや、お目出度いですね。祝砲を撃てないのが残念ですつ!」

「おめでとう、沙織さん。心から祝福しますわ。後で、お祝いに花を生けさせて頂きますね」

「……ん」《ポチ、ポチ》

「——い?」

——のだけど、そんな私にかけられたのは、挨拶ではなく唐突な祝福の言葉達。

麻子は携帯をいじりながら頷いただけだったけど。よく考えたら、この時間に教室に居るなんて凄く珍しい。というか、なんで二人共、朝からわざわざA組に来てるんだろ
う……?」

首を捻っていると、更に周囲からも、「おめでと〜」とか、「いいな〜」とか、クラスの皆の控えめな声が。

え? なんぞこれ? そんなにおめでたい事なんてあったっけ? 確かに、朝は【私
の彼】からのラブコールで起きられて嬉しかったけど、そんなの誰も知らないはずだし
……。

あとと思いつくのなんて、昨日のアレしか……あ、いけない。舞い上がってすっかり忘

れちやつてた。

「あ、あのね麻子。昨日は私、なんだか勘違いしちやつたみたいで……その……。ホントに、ごめん」

言いながら、私は頭を下げた。

本当は、言葉以上の意味も込められていたんだけど、この場でそれを説明しようとしたら、昨日のことも事細かく言わなくちゃいけないし、実際に言葉に出したわけでもないんだし、これで許して貰おう。

……許してくれる、よね？

「何の事か分からんが、気にするな。私は気にしてない」

「……本当？」

「ん」

「そっか」

ちよつとだけ不安に思っていたけれど、麻子はいつも通りの無表情で、でも、こちら

をまっすぐに見つめ返して、返事をくれる。

それ以上は、互いに何も言わない。けど、これで通じ合えている気もした。なんてったって、幼馴染だもん。

私の想いを裏付けるように、彼女はもう一度、大きく首を縦に振り――

「ああ、もちろん。決して、誤解させたのを悔やんで慣れない全力疾走したのに、当の二人はいつの間にか勝手にラブコメってたのを見せ付けられて遣る瀬無さを感じたりはしていないし、ライカからはすぐにフォローがあつたのに、今の今までなんの連絡もなく忘れ去られていた事にも、特に思う所はない。後でケーキ奢れば許してやる。バイキングのでいい」

「めっちゃくちや根に持つてるじゃないっ!? っていうか見てたのお!」

――昨日に引き続き、見事に裏切ってくれた。

よく考えたら、あの状況で気にならない方がおかしいよね……。でも、忘れちゃつたのは悪かつたけど、色々あつて忙しかつたのよう!

寮まで送ってくれるって言うライカと手を繋いで帰ったり、別れ際にもう一回、今度はライカの方から……。してくれたり、ベッドの上でごろんごろん悶えてたら隣の部屋の

子に「うるさあい！」って怒られたり、電話でお母さんに彼氏が出来たって報告したり、妹が信じてくれなかったり、それを聞いたらしいお父さんが荒ぶったりい!

変な叫び声と一緒に切れちゃうし、それつきり誰も出なくなっちゃうし、もう気が気じゃなかったんだからあ……。

あ、ちなみに割とすぐに繋がって、事情を聞いたらなんと! お父さんったらゴルフクラブ担いで「ちよつと害虫駆除に行つて来る」なんて言いながら、あの時の麻子みたいに泳いで学園艦へ乗り込もうとしてたんだよ!? もうビツクリ!

それに、お母さんに怒られて落ち込んでるのを慰めるのに時間が掛かって、本当に大変だったんだもん……。

って、直接言い訳したかったけど、皆に彼との進展を話すのはまだ照れ臭くて、出来ればちゃんとした場所を設けて報告したくて、私は咄嗟に話をすり替える事に。

「そ、それよりもまたケーキ? いい加減に太るよ? ただでさえ寝て起きてばっかりなんだから。たまには運動もしないとっ」

「……む。いいのか、そんなこと言つて。流すぞ」

「流すつて、何をよ? 変なこと言つてごまか——《ピツ》『うんつ! 私も、貴方の事がだ〜い好きっ!!』——きやああああ! やめてとめてなんでえええつ!!」

——したのだけでも、麻子の携帯から流れ出した自分自身の音声に、企みは阻まれた。
な、なっ、なああっ!?

ホントになんでええええええっ!?

「いやなに。ひいこらひいこらお前達を探していたら、丁度ラブコメリ始めた所を見つけて、思わず撮影してしまったただけだ」

「私達も見せて貰ったんだけど、素敵だったなあ……。観てるだけなのに、凄くドキドキしちゃった」

「はい、ライカさんは男気が溢れていましたし、沙織さんはとっても可愛らしくて、まるで小説の一場面のようにでしたわ」

「披露宴とかで流したら大盛り上がり間違いなしですなっ! 編集とかBGMは、不肖、この秋山優花里が務めさせて頂きますっ!」

「ちよつとやめてよおおおっ! あっ、まさかクラスの皆にもっ!?!」

ぐりんっ、勢い良く首を巡らせれば、こちらを見守っていたクラスメイト達は、「うんうん」と一斉に頷いた。

……うそおん。

よ、よりにも、よりにもよって、ファーストキスを、撮られた、観られた、晒された……っ！

これじゃあもう御嫁に……は行けるかも知れないけど、とにかくこっ恥ずかしい
いっ！！

「安心しろ。音声を又聞きされただけで、直接は見せてない。目に毒だ」

「バックアップも取らせて貰いましたっ。後できちんと、解像度とかを弄ってお譲りしますので」

「そのどこが安心なのよお！ あんこう踊り以上の黒歴史じゃない、こんなのお！！」

「ま、まあまあ、落ち着いて沙織さん。大丈夫だよ、あれよりはマシだよ、きつと……」

「結婚式にはぜひ呼んで下さいね？ スピーチも、今からしつかり考えておきますから。改めまして、おめでとうございませす、沙織さん」

「ゆかり人も華も先走り過ぎだつてばあ！ そういうのは私の役目でしょ?! ……あ、え？」

はちはちはちはちはち。

華が淑やかに拍手を始め、気が付けば、それは周囲のメンバーに感染し、あつという間にクラス中へ広がっていく。

こちらを見つめる何対もの瞳達は、優しく、暖かく（ごく一部だけ、上手い事やりやがってのに恨めしそうな気がするけど）。

慈しみ、祝福してくれるのはとても嬉しいのに、それはやっぱり、恥ずかしくて。

……決して、嫌では、なくて。

耐え切れなくなつた私は、窓辺に駆け寄り、今もどこかで、笑顔で居てくれるだろう彼へ——ライカへ届くように、叫ぶ。

「うううああああっ!! もうっ! 全部あんたのせいだああああっ!!!!!!」

「でも、好きなんだろう?」

「当つたり前でしょおっ!? ………………はっ」

五十鈴華編

第一話 「わたくし、何か掴んだ気がします！」

「はあ……。これから一体、どうしたものでしょう……。？」

わたくしこと五十鈴 華は、放課後の教室で黄昏ていました。

サンダース大学付属高校との試合を控え、戦車道の練習にも一層励まなければならぬのですが、どうしても気掛かりな事があります。

練習中は頭から排除できるのですけれど、それが終わってしまうと、今みたいに溜め息が溢れて。

本当に、悩みます……。

「どうしたの、華？ そんな物憂気に溜め息ついちゃって。

あつ！ その気も無い男子に告白されて、どう断ろうか悩んでるとかつ？

分かる、その辛さ、よおしく分かるよ〜」

「満更でもない癖に、本当に分かるんですか?」

そんなわたくしに、声を掛けてくる女の子が一人。

同じクラスの友人で、戦車道でもチームメイトの、武部 沙織さんです。

わたくしと同様に帰る所で、バッグを肩に腕を組んで頷いていました。

なぜ彼女が得意気なのかと言えば、現在進行形で沙織さんは、大洗の男子分校に通う生徒——通称ライカさんの、猛烈アタックを受けているから。

口ではあんな風に言っていますが、実は沙織さんもライカさんを憎からず思っているのは、顔を見れば明白だったり。

ちよつと面倒ですわ……なんて、思わない事もないんですが、戦車道の仲間達は、みんな生暖かく見守ろうと決めています。

それはさて置き、わたくしの悩み事ですけれど……。

「お母様の事を考えていたんです。戦車道を選んだ事に後悔はありませんが、何か手立てを考えておかないと……。」

「あー、そっかあ……。難しい問題だよね、お家の事だし……。」

話は先日にお返りします。

聖グロリアーナとの練習試合を、敗北という苦い形で終えたわたくし達は、罰ゲームのあんこう踊りを終えた後、アウトレットモールで買い物をするつもりでした。するとそこに、お母様が現れたのです。

生け花、五十鈴流の宗家である、五十鈴 百合。

奉公人の新三郎が引く人力車に乗っていたお母様は、わたくしが戦車道をやっているのを知ると、卒倒して仕舞われました。

その後、実家で戦車道を選んだ事情を説明しましたが、お母様は納得してくれず、「二度と敷居を跨がないで頂戴」とまで、言われてしまつて……。

お母様を納得させられるだけの、力強い花を活けられたら、いつか分かってくれるとは思いますが、まだそれも手探り状態。

このままで良いのでしょうか……と、考えてしまう訳なんです。

「華はさ、戦車道をやるつて決めたけど、別に華道をやめたい訳じゃないんだよね？」
「はい。さう言うのと聞こえが悪いかも知れませんが、わたくしにとつて、戦車道は新たな自分を模索する為の道なんです。」

今までのわたくしでは活けられないような……。もつと力強くて、型破りな花を活ける為が一番良い選択肢が、戦車道だと思えたんです」

華やかで繊細な華道とは真逆の、鉄と油の臭いにまみれる戦車道。

それがお母様を怒らせた原因でもあります。わたくしに足りない物がその中にあると感じたからこそ、戦車道を選んだのです。

何か、戦車道で培ったもの……。経験や知識などを、生け花に活かせるようになれば……。

とすると、やはり今のわたくしでは、経験も何も足りませんし、こんな事を考えるのは時期尚早なのでしょうか……?」

「……華、本当に生け花が好きなんだね。なんか羨ましいな」

「え? 羨ましい、ですか?」

「うん」

再び悩んでしまうわたくしへと、沙織さんは微笑み掛けてくれます。

羨ましい……。こんな風に悩んでしまうのに? どういう事でしょう。

「だつてさ、そんな風に夢中になれて、真剣に悩めるような趣味、私には無いもん。みんなで戦車道やるのは楽しいけど、のめり込んで、つて言うにはまだ早いし。それに、一つの事に夢中になるだけじゃなくて、真剣に悩んで戦車道まで選べた華は、やっぱり凄いよ！」

「沙織さん……」

ギユ、と拳を握って、沙織さんは前のめりに褒めて下さいました。

夢中になれて、真剣に悩める。

言われてみれば、確かにわたくしは幸せ者なのかも知れません。

もしも華道をしていなかったら、という想像も出来ないくらい、わたくしにとつての華道とは、切つても切り離せない物なんですから。

やっぱり、悩んでしまうのは辛い部分もありますけれど、沙織さんの笑顔は、そんな事でヘコたれて居られない、と思わせてくれました。

こんなに素敵な女の子なのに、どうしてモテないんでしょう？

あ、違いました。沙織さんの良さに気付いている男性も一人居ますね、ライカさんが。

「とにかく、華はお母さんのこと見返してやりたいんでしょ? だったら、何も考えずにパーっと大っきな花とかを活けてみたら? ほら、芸術は爆発だー!」 的に」

「生け花で爆発なんてしたら、トンでもない事になりそうですけど。剣山とかが飛び散って」

「物の例えよ! えと、か、形から入るみたいなの?」

大きく両手を広げる沙織さんに、わたくしは苦笑いしながら突っ込みます。

こんな風に、ワザと大袈裟におどけてくれたり、励ましてくれる友人が居る。

それだけでも、きつとわたくしは幸せ者なんでしょう。

……んん? あら。でも何か、沙織さんの発言に引っ掛かるものが……。

「形から入る……。形から……。形……」

「あれ……。? 華あ……。? おーい……。?」

何も考えずに大きな花を。芸術は爆発。形から入る……。

耳に残る言葉を反芻し、こちらを覗き込む沙織さんを無視して考え続けた結果。

わたくしの脳裏に、ある考えが閃きました。

そう、形。形です！

生け花とは文字通り、生きた花を飾り付けたリ、複数の種類を組み合わせたリ、形を整えたりして、観賞用の作品とする技術です。

しかし、主役となる物は花でも、それを引き立てる道具が無ければ、良い作品は産まれないでしょう。

その中でも特に重要なのが……花器です。

花を活ける器とは、すでにそれ自体が芸術品でもあり、生け花と組み合わせることによつて、より高度な次元へと作品を導いてくれます。

今のわたくしに足りない物は、実力。

けれど、それを花器で補うという事は、決して邪道ではありません。

わたくしの求める力強い花と、それを受け止めてくれる花器。

この二つが揃えば、きつとお母様を納得させられるはず！

「沙織さん！」

「ひゃい!?!」

沙織さんの手を取り、驚く彼女に、わたくしは感謝の気持ちを伝えます。

「ありがとうございます! わたくし、何か掴んだ気がします!」

「え? え? そうなの? ま、まあ、男子にモテモテで女子力高めの私なら、人生相談

なんてお手の物だよ! 困った事があれば、またいつでも頼って!」

「はい! 恋愛以外の事で頼りにさせて貰いますね!」

「うんう……ん!? 恋愛以外でってどういう事よお!」

何やら騒ぎ始める沙織さんを他所に、わたくしはまだ見ぬ花器へと想いを馳せます。
サンダースとの試合は間近。具体的な行動に移すのは、試合を終えてからになるでしょう。

それまでに具体的なデザインを考えて、描き留めておかないと……。

わたくし、やって見せますわ!

第二話 「どうか、よろしくお願い致しますっ」

サンダース大学付属高校との試合を勝利で飾り、二回戦のアンツイオ高校との試合を前にした休日。

わたくしは、乗客の少ないバスに揺られて、茨城県の笠間市方面へと足を延ばしていました。

「やっぱり、女子高生の話をまともに聞いてくれる窯元は、そう簡単には見つかりませんね……」

ボーダー柄のシャツに膝丈の短パン。白い上着とニット帽を被るわたくしは、きつと休日を楽しむ女学生に見えるはずですが、気持ちにはドンヨリ沈んでいました。

益子焼と並ぶ関東の焼き物、笠間焼が発展したこの地域は、戦後から自由な気風を持つ若い職人が集まったおかげか、とても幅広い陶器の作品が作られているそうです。

ウサギさんチームの副砲手、大野あやさんの出身地でもあるみたいですね。各チームの砲手が集まってお話しした時に聞きました。

そこで、戦車道の練習の休日を利用し、わたくしの追い求める花器を作って頂こうとしていたのですが……。

(まさか、門前払いで話も聞いて貰えないなんて……。五十鈴の家の名前を使わなければ、わたくしはただの高校生なんだわ……)

午前中に八軒。お昼に洋食屋さんのギガ盛りチャレンジメニューを頂き、臨時収入を得てから更に五軒の窯元を訪れて、話を聞いて下さった所は皆無。

華道を離れたわたくしは、ただの五十鈴 華。家元の娘であることを隠し、仕事を依頼したいとお話ししたのですが、「アポを取って下さい」やら、「個人からの仕事は受けかねます」やら。

暖簾に腕押し、糠に釘とはこの事だと、実感してしまいました。アポに関しては、飛び込みでお願いしようとした、わたくしが悪いのですが。

もうすぐ夕方。帰りの時間を考えると、そろそろ港に戻らなければなりません。

ネットで調べたところ、今乗っているバスが向かう先に、小さな窯元があるらしく、大

手で話を聞いて貰えないなら……と、一縷の望みを託しています。

程なくバスは停車し、わたくしは運賃を支払って降車しました。

他に降りる人は居なくて、ボロボロのトタンで出来た待合所が、奇妙な寂寥感を漂わせています。

平地より、少しだけ山に近い場所。

山間の澄んだ空気と、遠くに都会の喧騒を感じながら、目的の窯元へと歩き出しました。

携帯のマップアプリを頼りに、約十五分。口コミによる目印である、樹齢二百年を超える大きな木が見え始めます。

その足元に、小さく見えてしまう家々が数軒ほど。

自宅 兼 販売店舗と工房、整形したばかりの焼き物を乾燥させる為の建物……みだいです。

(今日は、()で最後。()が駄目なら……)

戦車道の練習もしなければいけないし、試合だつてあります。

こんな風に、休日を丸々潰して歩き回れる機会は、多くありません。

弱気になっては駄目。正直に全部お話しして、いつそ土下座する覚悟で臨まないといわたくしは気合を入れ直し、早速、道路沿いにある一番手前の建物……。販売所へ向かいます。

「失礼致します」

「あ。い、いらつしやいませー。ごゆつくりどうぞー!」

藍色の暖簾をくぐると、レジに座っていた妙齢の女性が、慌てて椅子から立ち上がりました。

なんと言いますか、「お客が来るとは想像もしてなかった」といった様子です。

小さな工房は身内経営が多いそうですから、職人さんの親族の方かも知れません。

店内には、小皿や小鉢の並べられた棚、観賞用の大皿や壺が置かれていました。

一見、どこにでもありそうな品々ですが、大量生産品には無い、味わい深さを感じます。職人さんの腕が良い証拠ですね。

とにかく、まずはこちらの要件を伝えないと……。

「飛び込みで失礼だとは存じますが、実は……。お仕事を、お願いさせて頂きたくて。ご

相談できませんでしょうか」

「……は？ お仕事……」

わたくしの言葉に、女性は疑わしげな眼を向けます。

……やっぱり、いきなり現れた女子高生が仕事の依頼なんて、怪しいに決まっていますよ。ね。

また門前払いかしら、と身構えていましたが、しかし女性は、店舗の奥に向かって大声を張り上げました。

「若ー！ なんか、仕事を頼みたいってお客さん来てますけどー！」

その後、「ちよつとだけお待ち下さいね？」と微笑む女性に笑い返し、待つこと一分ほど。

住居部分に繋がっているらしい店舗奥から、藍染の作務衣を着る、短い黒髪の男性が姿を見せませす。

わたくしよりも年上でしょうか。少なくとも二十歳は越えていそうな、実直そうな方でした。

呼ばれ方から察するに、この窯元を代表する職人さんの、息子さんなのだと思います。

「お待たせしました。生憎、父は出ておりまして。私で良ければ、お話を伺います」

「あ……！　ありがとうございます！」

いきなりな訪問にも関わらず、若と呼ばれた男性の腰は低く、話を聞いて頂けるとい
う喜びも相俟って、わたくしは深々と頭を下げます。

若さんが小さく笑い、「こちらへどうぞ」と、奥座敷に。

わたくしは、「お邪魔致します」と一声かけて、上がらせて頂きました。

純和風な茶の間は、そのこじんまりとした佇まいが、心を落ち着かせてくれます。

「それで、仕事の御依頼との事でしたが」

「はい。あ、ご挨拶が遅れました。わたくし、五十鈴　華と申します。実家は華道の家元
で……」

「ああ、聞いた事があります。という事はまさか、御宗家からのの？」

「……いいえ。今回は、わたくし個人からの依頼です」

二人分のお茶を淹れてくださる若さんに、わたくしは事情を説明します。一時的に華道を離れたこと。戦車道を始めたこと。

その結果として、五十鈴家から勘当されてしまったことを。

「華道を離れて、戦車道を……」

「はい。わたくし、どうしても今の自分に納得がいかないんです。

見た目は整っていても、型にハマって、ただ習った事を再現しているだけの、わたくしの生け花を変えたいんです！

そのための特別な花器を、こちらで作って頂けたら、と、思うのですが……」

少々熱が入ってしまったようで、わたくしは、つんのめるように語っていました。

それに気付くと恥ずかしさが勝り、言葉は尻すぼみに。

少しの間、茶の間には沈黙が広がります。

「なにか、こうして欲しいというアイデアとか、要望……。デッサン画などがありますか？」

「あ、はい。学校の美術の先生にお願いして、イメージを描いて貰いました」

今度は、若さんの方から質問が。

わたくしはシオルダーバックを探り、一冊のスケッチブックを広げます。

中には、美術部の顧問でもいらっしやる先生に頼み込んだ、複数の絵が描かれています。

わたくしが考案した形の器と、その寸法などが書き込まれています。中には、戦車を模した花器まで。

若さんは大事そうにそれを受け取り、けれど数秒後、沈痛な面持ちで首を横に振りました。

「申し訳ありませんが、父ではお力になれないと思います」

「そんなっ。……どうして、でしょうか」

思わず、また前のめりになりかけて、落胆と共に問い掛けます。

せっかく話を聞いて貰えたのに、これでは意味が……。

「私の父は、轆轤による成形を専門に行っています。こういった形状を作り出すには、手

びねりという別の技術が必要になってきますので、そもそも父には作れないんです」
「そう、なんですか」

「それに、ここまで複雑な物となると、特注という形になりますから。」

先程、個人の御依頼と仰っていましたが、見た所、高校生くらいでいらつしやいますよ、ね？

下世話な話になりますけれど、予算的にも……」

「予算……」

現実的な問題を突き付けられて、わたくしの肩は落ちて行きます。

言った本人である若さんも、心苦しいのか、表情が曇っていました。

物にもよりますが、陶磁器や花器というものは非常に高価で、安くて数百円から数万円。

名のある名工の手による物なら、それこそ数百万円がざらにあるという世界です。

実家であれば、そんな花器も数点は所有していますが、わたくし個人で持っている訳ではなく、勘当されてしまったては使うことも許されないうでしょう。

そして、単なる女子高生に用意できる金額も、高が知れています。

大洗近辺のギガ盛りメニューは制覇済みですし、賞金も、購入代金と比べたら微々た

るもの。賞金目当てに全国行脚なんて本末転倒ですから、手詰まりです。

やっぱり、分不相応な願ひだったんでしょか……。

目の前を高い壁に塞がれたようで、気持ちはどんどん落ち込んでしまいました。

しかし、そんな時。不意に若さんが声を掛けて下さいます。

「……まだ、お時間はありますか？」

「え？ は、はい。大丈夫です」

「少し、見て貰いたい物があります。着いて来て下さい」

腰を上げた若さんが、襖を開けて板張りの廊下へ。

戸惑いながら後に続くと、大きなガラス戸越しに内庭の緑が見えます。

廊下の先には階段があり、二階へと登ってすぐの部屋に、彼は入って行きました。覗き込むようにして中を伺うと……。

「まあ、素敵な小物……！」

そこは、可愛らしい小物がズラリと並ぶ、展示室のような部屋でした。

動物を象った置物や、小さな花をモチーフにした陶器。繊細な柄が描かれた小物入れ。他にも、女の子が喜びそうな品物が沢山あります。

みほさんや沙織さんに、御土産として買って行ったら喜んで貰えそう……。

あと、乾燥した土の匂いや、顔料か何かのような匂いもしますね。

子供の頃の、泥んこ遊びをした後を思い出します。お母様に怒られたものです。

「先ほど言った手びねりという技法で、私が手慰みに作った物です。商品にも出来ない物なんです」

「え!? っ、この出来で、ですか?」

目を輝かせていたわたくしに、若さんは苦笑いを浮かべて言います。

信じられないといった気持ちだが、知らず声を大きくさせました。

お店に並べたら、間違いなく人気商品になりそうな、素晴らしい出来映えなのに。

「父は職人気質の人間で、酷く堅物なんです。父にとっては、こんな物は遊びの内で、仕事として認められないんですよ。売り物にするなんて以ての外、だそうで」

「そんな……。勿体無い……」

わたくしの疑問には、若さんの苦々しい声が返ります。

これほど見事な作品を遊びと断じるなんて、相当厳しい方なのでしょう。

もし、そんな方に直接、わたくしが依頼なんてしていたら……。外出なされていたのは、僥倖だったかも知れません。

内心で安堵しつつ、残念に思いながら可愛い小物を眺めていると、そのうちの一つ——お座りする仔犬の根付を手に取った若さんが、こちらに向き直りました。

「先程のお話ですが……。父ではなく、私への御依頼という形でしたら、お受けできると
思います」

「……っ！ ほ、本当ですか!?!」

思いがけない承諾の返事に、また驚いてしまいました。

仔犬の根付を弄ぶ若さんは、そんなわたくしへと、真剣な眼差しで頷いてくれて。

「父に隠れて作る事になりますし、私は半人前の身ですから。

時間が掛かるかも知れません。必ずご期待に添えると、確約も出来ません。

代わりと言つてはなんですが、代金は勉強させて貰いますし、それで良ければ……」
「お願いします！ 是非とも！」

これで、わたくしだけの花器を作つて貰える。お母様に認めてもらう為の、第一歩を踏み出せる。

感激のあまり、わたくしは若さんの手を取つていました。

キョトン、と目を丸くする彼。

数秒後、とてもはしたない事をしていると悟り、慌てて謝ります。

「……あつ。し、失礼いたしました……」

「い、いえいえ……」

手を離すと、若さんは、どこか気恥ずかしそうに頬を搔いて、わたくしも俯いてしまいます。

ど、どうしましょう。殿方の手を自分から握るなんて、産まれて初めてかも知れませんが、

実家に奉公に來ている新三郎とは、子供の頃に何度か繫いだことがあります、新三

郎はあくまで新三郎というカテゴリーです。数に入れるのは違うような気がしましすし。

もどかしい雰囲気にもまれてしまった部屋でしたけれど、深呼吸をした若さんが、話を元に戻してくれませす。

「じゃ、じゃあ、契約成立、という事で。デザイン画、コピーさせて貰っても？」

「は、はい。どうか、よろしくお願い致しますっ」

「承りました。……あ、この根付、良かったらどうぞ。つまらない物ですが」

「え？ いいえ、そんな。ただでさえ御無理を言っているのに、こんな物まで頂いては……」

「良いんです。うちに置いていても、肥やしにすらなりませんから。遠慮しないで下さい」

部屋を出て、階段を下りながら、わたくしたちは話し続けます。

予想外の展開ではありませんでしたが、初めて会った人間に気骨を折ってくれる、優しい職人さんに出会えた事は、何よりの収穫です。

一先ず、花器を作って頂く算段は整いました。

後はわたくしが戦車道で自分を磨き、もっと力強い花を活けられるようにならなくては。

わたくし、頑張りますわ！

第三話 「もうすぐ、なんです」

「最近さあ、華が色っぽくなったと思わない？」

アンツイオ高校を快勝で下し、大洗女子学園が準決勝進出を決めた翌日。

あんこうチームのメンバー——西住みほ、武部 沙織、冷泉 麻子、秋山 優花
里は、日も高い内から、74アイスクリーム店内でアイスをつついていた。

が、唐突な沙織の問い掛けに、残る三名は揃って小首を傾げてしまう。

ちなみに、食べているのは紹介順にチョコチップ、オレンジピール、ストロベリー、
クッキークラランチである。

「あの……。沙織さん、一体なんの話？」

「ちよつといきなり過ぎると思うであります」

「沙織が振ってきた話題だぞ。男関係以外にある訳ないだろう」

「ちよつと麻子お!」 誤解を招く言い方しないでよ!」

スプーンを掲げる沙織に対して、みほが困惑し、優花里はアイスをすくい、麻子も一つ目を完食した。一方の沙織は憤慨中だ。

常日頃から色恋に傾倒した発言を繰り返している彼女であるが、流石に、脳内が男一色みたいな言い方をされては嫌なのだろう。

しかし、オレンジピールの爽やかさで怒りを溶かした沙織は、更なる持論を展開する。

「確証はないんだけど、近頃ずうっと携帯と睨めっこしてるし、メール見て一喜一憂してるし。」

「今日だって陸に行ってるんでしょ? これはやっぱり、遠距離恋愛の彼氏が出来たんだよ!」

「そうかなあ……? 確かに、携帯でメールしてるのは多くなったと思うけど……」

「それ以外はいつも通りでしたよね?」

「むしろ砲撃の腕が上がっているな。男にかまけていたら、あんな風に上達しないと思うが」

「むー。それはそうかも知れないけどお……。絶対に今までと違うもん! 間違いないく

男の影がチラついてるもんっ！」

妙な確信があるようで、鼻息荒く一步も引かない沙織。

気になり始めたのは、華の携帯ストラップ——可愛らしい陶器の仔犬を見かけてからだった。

沙織が「どこで買ったの？」と聞いても、華は「頂き物なんです」と微笑むだけ。

その表情に「何か」を感じ、コソコソ様子を伺ってみると、頻りにメールの着信を確認しては、満面の笑みで領いたり、逆に難しい顔で返信したり。

オマケに、戦車道の練習が休みの日は、わざわざ連絡船に乗って、足繁く陸へ通っている。

本人は華道に関する用事が……なんて言っていたけれど、これは何かある、と沙織は乙女の勘を働かせ、今に至るのだ。

余談だが、華のメール時の行動、ライカとやり取りを始めたばかりの、沙織自身と全く同じなのだが、当然の如く気付いていない。

人は得てして、自分自身を理解できていないものなのである。

そんな沙織に嫌気が差し始めた——もとい。面倒臭くなった麻子は、話題の中心を変え、そんな事で対処した。

「男の影といえば、沙織。いい加減、ライカにOKの返事はしないのか」

「うっ。……な、なんでそこでライカが出てくるのよ……」

「なんでつて、ねえ？ 優花里さん」

「ですよ。武部殿ー、そろそろキッチンとしたお付き合いを始めないと、逃げられちゃいますよー？」

「んんん……っ、そんな事、ないもん……。わ、私の事はいいのー！ たまには他の子の恋話で盛り上がったっていいじゃーん！」

果たして、麻子の計算通りに話は進み、沙織はムキになって己の恋話を否定し始める。

もう少し素直になれば、めでたくカップル成立となるはずなのに、困ったものだ。

いや、カップルにならなかったらなつたで、所構わず惚気そうでもある。どっちにしろ迷惑を被りそうな友人の恋路に、三人はやれやれと肩をすくめていた。

そして、業を煮やしたライカが、メールで彼女たちに協力を求めるのは、この日の夜であつたりする。

◇
◇
◇
◇
◇

乗り慣れたバスを降り、見慣れた景色を眺めながら。
わたくしは、若さんが待つ工房へと脚を進めていました。

(この前の試作品は、添付された写真と実物で感じが違いましたけど、今度はどうかしら……?)

若さんに花器を頼んで、その関係で連絡先を交換してからというもの、わたくしたちは頻繁にメールをやり取りしています。

作品の進み具合や、デザインを再現する上で失敗してしまった点、その事への対応策など、彼はこまめにメールを送って下さいました。

文面や、送られてくる写真から真剣さが伝わり、返信にも思わず力を込めちゃうほど。

やっぱり彼にお願いして良かったと、再確認しているこの頃でした。

今日は、通算で三度目の訪問。

試作品が焼き上がるのを見計らい、この目で確かめに来た訳です。

……それとは全く、関係ないのですが。

今日の格好は、白い生地に薄茶色の襟のシャツと、襟と同じ色のスカート。小さめのシヨルダーバックという出で立ちです。

スカートの丈が少し短いような気もしましたけれど……。いえ、何を気にしているんでしょう、わたくし。

な、何はともあれ。

少し歩けば、落ち始めた日に陰る建物が見えて来ました。販売所の前でウロウロする女性の姿も。

昔はヤンチャしていたらしい、若さんの再従姉妹、猪俣 葵さんです。

「こんにちは、葵さん。若さんはいらっしゃいますか？」

「あつ、華ちゃん！ 丁度良い所に、こっち来て！」

「はい？」

挨拶がてら声を掛けると、葵さんは大慌てでこちらへ駆け寄り、わたくしの手を取って走り出しました。

え、えっ？ 何事ですかっ？

「あ、あのっ、どうかなさったんですかっ」

「大変なのよっ、親方と若が大喧嘩しちゃって……っ！」

「え、若さんがっ!?!」

驚きつつも、脚を早めて大木を回り込み、若さんのお父様である、親方さんの作業場へ。

遠く、「いいから返せ!」という叫び声が耳に届きます。

ちようど辿り着いたタイミングで、若さんが作業場の戸口から転げ出てきました。

「若さんっ、大丈夫ですか!?!」

「ぐ……っ、五十鈴、さん……?」

側に寄って、尻餅をつく若さんを支えつつ、怪我が無いか確かめます。どうやら……突き飛ばされただけ? 大丈夫みたいです。

そして、戸口の奥からもう一人、若さんと同じ作務衣を着る人物が姿を見せました。

頭を三角巾で覆い、筋骨隆々で、豊かな口髭が特徴の、初老の男性。初めてお会いしますが、この人が親方さんなのでしょう。

親方さんの手には、細めの砲身が半ばで折れてしまっている、戦車型の花器が。

「最近、妙に小せえ方のガス釜が埋まってると思ったら、こんなもんに油売りやがって。どういうつもりだ」

「……仕事はしてる。他の時間に何しようが、親父には関係ないだろ」

「そんなんだから、お前はいつまで経っても半人前なんだ。言われた仕事しかしやがらねえ。こんなもんを遊び半分で……！」

肩を震わせる親方さんの表情は、憤怒に満ち満ちて。今にも花器を叩きつけそうな雰囲気です。

しかし、怒りを覚えていたのは親方さんだけではありません。

その物言いに、わたくしの中からも、激情が込み上げていました。

「待って下さい！ ……それは、わたくしがお願いした物です」

「……お前さんが？」

立ち上がり、親方さんへ真つ向から言葉をぶつけると、濃い眉毛が胡乱に歪みます。身長は高く、身体も大きくて、後退りたくなる威圧感がありました。

けれど、ここで引き下がってはいけなないと、わたくしは自分自身を奮い立たせます。

「そうです。見ず知らずのわたくしのお願いを、若さんは真剣に聞いて下さって、真剣に取り組んでくれています。決して、遊び半分などではありません！」

怒りを覚えたのは、若さんの試作品を、遊びと断じられた事でした。

何度も試作を繰り返して、何度も失敗して。

でも、それに決して挫けず、わたくしの為に花器を作って下さる方を、馬鹿にされたように感じたからです。

親方さんの鋭い眼を、わたくしは見つめ返します。ガンの付け合いなら負けませんっ

！

……と、思っていたのですが。

「これが仕事だつてんなら、尚更だ。娘さん、悪いがこの仕事、諦めてくれ」

「そんな、どうしてですかっ!？」

親方さんは若さんの首根っこを掴み、少し離れた場所で、いきなり土下座のような体勢に。

困惑するわたくしは置いてけぼりのまま、ついには頭を下げられてしまいます。

「さつきも言いましたが、こいつは半人前のヒョっ子だ。

一人で仕事を任せるにや早過ぎる。

もしどうしても必要だつてんなら、他の職人を紹介しやす。

半端な仕事のモンを、ウチの窯から出したくねえんです。申し訳ない!」

会ったばかりの、生意気な口をきく小娘に対し、親方さんは本気で頭を下げているように見えました。

ついでに若さんの頭を押さえつけて、彼まで無理やり。職人氣質な人物というのは、本当だったようです。

頭を下げる二人の男性を前に、わたくしは考えさせられました。

諦めるしか、ないんでしょうか。

他の職人さんを紹介して頂けるのなら、花器は問題なく手に入るかも知れません。

……本当に？ 本当にそれでいいの？

縁も所縁もない女子高生に、ここまで親身になってくれた人から、安易に乗り換える。そんなのは……。

「ふぎ、けんな……」

何か、形にならない気持ちだが、口をつこうとした瞬間。

若さんの、くぐもった声が聞こえて来ました。

「勝手な事ぬかすな、この頑固親父っ！」

「うおっ」

彼は、今までに聞いた事もない大声を張り上げて、親方さんを突き飛ばします。

その拍子に零れ落ちた花器を抱きとめ、わたくしを背に庇うようにして、叫びました。

「半人前が、なんだってんだ……。いつもそうやって、勝手に決めつけやがって！」

これは俺の仕事だ。俺が五十鈴さんから請け負った、俺だけの仕事だつ。途中で放り出したら、それこそ半人前だろつ！俺が最後までやらないで、どうすんだよつ！」

座り込む親方さんへと、正面から切られた啖呵。

鼓膜を通じて、胸の奥をジリジリとさせる、熱い響き。

初めて主砲を放った時と似た感覚に助けられ、わたくしもまた、言葉を尽くします。

「わたくしも、若さんと同じ気持ちです。

このお仕事を、若さん以外に頼もうとは思いません。

わたくしは、彼にお願いしたいんです。どうか、このまま続けさせて下さい」

若さんの隣で、腰を九十度に曲げる最敬礼で、親方さんに懇願しました。

今、ハッキリと自覚しています。

きつとわたくし、他の職人さんじゃ駄目。

彼が作ってくれる花器でないと、お母様を納得させられる花は、絶対に活けられないと。

心から、そう感じています。

「…………ふん。物好きな娘さんも居るもんだ……。勝手にしやがれ、馬鹿息子が」

ぶつきらぼうな声に頭を上げると、親方さんは既に立ち上がっていて、作務衣の尻を叩きながら、作業場へを姿を消しました。

ボウつと、その大きな後ろ姿を見送ってしまいます。

認めて下さった……………のでしょうか。

勝手にしやがれと言われたのですから、若さんにお仕事を続けて頂いても、問題ない

……………んですよ？ 良かった……………。

「五十鈴さん。もうすぐ、なんです」

「……………え？」

確かめるような呟き声。

ホツと胸を撫で下ろしていたら、いつの間にか、若さんがこちらを向いていました。

差し出される、不完全な花器。

反射的に受け取ると、わたくしの手を、彼の手が包み込みます。

「これは、焼き上がりで砲身が折れちゃいましたけど。

もうすぐ、ちゃんとした形に出来るんです。俺、やります。

必ず、貴方の全部を受け止めきれぬ花器を作ってみせます！ 待っていて下さい！」

「は、はい。お願いします……」

花器の上で手を重ねつつ、若さんは力強い瞳で、わたくしを見つめて。

その逞しさに、半端な返事しか出来ません。

……わたくし、先程から変です。

見事な啖呵を切った若さんの声が、いつまでも耳に木霊し、胸に感じた熱が、ジリジリ、ジリジリと。

戦車道で主砲を撃つ時の、痺れるような感じとは違う。どこか、心を焦がされるような。

こんなのは、初めてです。

「いやあ……。若いって、良いわねえ」

「はい?」

「え?」

横合いからの唐突な含み笑いに、わたくしと若さんは、一緒になつてそちらを見やります。

葵さんが、何やらニヤニヤと微笑んでいました。
その視線は、重なり合う手と手に向けられ……。

「うおおおっ!? ん、ん、ん、ごめんなさいい!」

「い、いえ、あの、いいえ、だ、大丈夫、ですから……」

若さんが大慌てで手を離し、わたくしは、少し重い花器を抱え、苦笑いを。
手を握ったのは無意識のうち、だったようです。多分ですけれど。

ペコペコと謝り続ける彼を宥めながら、なんとなく、繋がっていた手を口元へ。
ほんの微かに、優しい土の匂いがしました。



とつぷりと日も暮れ、数時間後。

若さんの工房からバスで港に戻ったわたたくしは、歩きながらもボウつと考え事をしていました。

どうしても、啖呵を切る若さんの姿を思い返してしまいます。

(あんな風に、殿方に熱い眼で見つめられたの、初めてかしら……?)

あの子のわたくし達ですが、葵さんにからかわれながらも、若さんの作業室——色んな小物が置かれていた部屋で、試作品を踏まえてのデザイン修正などを行いました。

けれど、どうにも会話はぎこちなく、お互いの一挙手一投足が気になってしまい、詳しい事は後日、メールや電話で……という事になり、学園艦へ戻ろうとしている所なのです。

今まで、こんな事はありませんでした。

作業室で二人きりになる事はあっても、若さんを意識して話し合いも出来なくなるだ

なんて……。

(嫌だわ。まるで沙織さんみたい)

殿方と手を繋いだだけで、こんなにも舞い上がってしまったなんて、らしくありません。前にも一度。しかも、わたくしから握った事だってあるのに。それこそ沙織さんみたいです。

いえ、沙織さんはとても素晴らしい女の子だと思いますけれど、なんと言いますか、わたくしに恋愛事は似合わないような気がしますし。

そもそも、わたくしと若さんは、沙織さんとライカさんのような関係ではない訳で。

もし想いを寄せて下さっているなら、それはとても光栄な事ですが、今のわたくしに答えられるだけの余裕は……。

……なんだか、ますます沙織さんっぽくなっていそうな。

(やめましょう。その場の勢いで触れ合っただけで、若さんとの間に、特別な気持ちなんか……)

不埒な考えを振り払い、連絡船に乗り込もうとしたわたくしの耳に、何かか聞こえませんでした。

「おおーい、と。遠くから呼び掛けられている……？」

振り返ってみれば、駐車場に停まった軽トラから、作務衣を着た大男がこちらに駆け寄って来ます。

「貴方は、親方さん……？」

「ぜいぜいと荒い息を整えるその人は、間違いなく、先ほど鬼のように怒っていらつしやつた親方さんでした。」

でも、今の表情はとても穏やかで、むしろ頼りなく見える位で、まるで別人みたい。

「先程は、見苦しい姿をお見せしまして。本当に申し訳ない」
「い、いえつ。わたくしの方こそ、分を弁えずに生意気な事を……」

わたくしの前まで来ると、親方さんは自身の膝に手を置いて、ガバツと頭を下げます。本当に別人かと思いたくなる腰の低さに、わたくしも思わず腰を曲げていました。

一体、どうなさったんでしよう。わざわざ車で後を追いかけてくるなんて……。
もはや、やっぱり別の職人を使って欲しい、と言いに来たとか？

ちよつとだけ警戒してしまうわたくしでしたが、しかし親方さんは遠い目をして、全く予想だにしない話を始めました。

「あいつは……。昔つから真面目で、引つ込み思案で、自己主張とかはせずに、周りに合わせていくような奴でした」

「は、はあ……？」

あいつ……。きつと若さんの事でしょう。

いきなりで面喰らってしまいましたけど、親方さんの言う事には納得です。

物腰が柔らかく、手先が器用で、自分から波風を立てるような事はしない。

まさしくそんな印象でした。だからこそ、あの俠気溢れる姿には驚かされたのです
が。

親方さんも同じ気持ちらしくて、厳つい顔には苦笑いが浮かんでいました。

「初めてなんですよ。仕事に関わることで、あいつが反抗したのは」

「そうなんですか？」

「ええ。いっつも、あつしの言う事を聞いて、顔色伺つて。

言われた事はキツチリやるんですが、それで終わっちゃうのが悪い所でもありました。」

その先にこそ、職人が目指すべき物があるつてのに」

「……少し、分かるような気が致します。わたくしも、華道を嗜んでおりますから」
「なるほど。道理で珍しく器を作っている訳だ」

親方さんは楽しげに笑うと、三角巾を外し、わたくしを優しい眼差しで見つめます。

「あつし等みたいなの職人には、私の強い部分がなきや駄目なんです。」

周囲に流されて自分の意見を押し込めるようじゃ、良い作品なんか出来るわきやあ無い。
い。

口下手なもんで、ロクに指導も出来やしない、駄目な親でしたが……。

これであいつも、ようやく職人としての一步が踏み出せます。

息子に仕事を持って来て下さって……。大事な仕事を預けて下さって、ありがとうございます。ざいやした。本当に、ありがとうございますやした！」

「そ、そんな。お礼を言いたいののはわたくしの方ですから」

再び頭を下げられ、わたくしは恐縮してしまいます。

ちよつと乱暴な一面もあるようですが、確かに親方さんは、若さんのお父様なんですね。誠実な所がそっくりです。

けれど、ずうつと頭を下げられつ放しというのも居心地が悪くて、わたくしも頭を下げてお礼合戦に。

それが終わったのは、連絡船の係員さんが「出航しますよー？」と、声を掛けて下さった頃でした。

今日一日で色んな事が起きましたが、おかげで確信が持てました。

わたくしは良い職人さんと出会い、そして、わたくしの為の、最高の花器を得られるのだと。

埠頭から大きな手を振り、連絡船を見送ってくれる親方さんへと、手を振り返しながら。

わたくしは決意を新たにします。

若さんの器に見合う花を活けられるよう、精進あるのみ、ですわ！

最終話 「あの、困りますっ！」

『いよいよ明日、展示会ですね』

「はい。少し緊張します」

プラウダ高校との試合を終え、来るべき決勝戦への準備に追われていた、ある日の夜。寮の自室に居るわたくしは、携帯で若さんとお話ししていました。

薄手の長襦袢を着て、畳の上のお布団に座って。完全にリラックスモードです。

『一時はどうなるかと思いましたが、間に合って良かった』

「わたくしは心配していませんでしたよ。若さんなら、必ず素晴らしい花器を仕上げてくださると、信じていましたから」

『そ、そうですね。……なんか、照れますね』

「うふふ」

電話口の声が、照れ臭そうにしている若さんを想像させてくれて、思わず微笑んでしまいます。

親方さんとの一悶着があつてからも、わたくしは幾度か工房へ足を運びました。

花器の事もありますが、若さんと親方さんの仲が険悪になつていないか、気に掛かりましたし。

でも、それは全くの杞憂でした。

親方さんは悪態をつきながらも、土の性質など、経験からくる的確な助言をして、若さんは鬱陶しそうな顔をしつつ、素直に受け入れて。

男親と息子の関係というのは、案外こういうものなのかも知れません。外から見ると、やっぱり危なっかしくも見えてしまいますけど。

そして、前回訪ねた時。ついにわたくしの花器は完成し、後は花を活けるだけ、という訳です。

展示会に参加する事は決まっていますが、お母様にはまだ、花器の事は何も話していません。こういうのはインパクトが大事でもありますから。

不安が無いとは、言い切れませんが、今のわたくしの、持てる全てをぶつけるつもりです。

『あの……。俺、見に行っても良い、ですかね』

「勿論です。若さんにも、ぜひ見て頂きたいです。わたくしの活けた花を。あ、みほさん達も来て下さるんですよ」

『というと、あんこうチームの？　そうですかあ。なら、ご挨拶できるかも知れませぬね』

展示会が行われるのは、アクアワールド大洗水族館の一画。確か入場は無料だったはずですので、気軽に来て頂けます。

……が、若さんの言葉に、なんだか引つ掛かりを覚えてしまいました。

こうしてお電話するようになったのは最近で、その中で戦車道のお話や、チームの皆さんのお話もしました。

なので、会ってみたいと思う若さんの気持ちも、分からなくはない、んですけれど……。わたくし、どうしてこんなに心が揺らいで……。

とにかく……。そう、釘を刺しておかないとっ。

「失礼とは思いますが、若さん？　沙織さんにはライカさんという恋人がいらっしやい

ますし……」

『は？ い、いやいやいやつ、違いますよ、そういう意味じゃないです！ 第一、俺が見に行くのは五十鈴さんで……』

「え？ わたくし、を？」

『あああ違う、五十鈴さんの活けた花を……。いやでも、五十鈴さんに会いたくないって訳じゃ……』

「……………」

少し険のある言葉を向けてしまったわたくしですが、慌てて言い訳をする若さんの言葉に、また心は揺れてしまいます。

若さんが、わたくしを見に来る。

本人が仰ったように、言い間違えただけ……なんででしょう。それなのに、先程とは違う感触が、胸の奥をくすぐって。

『と、とにかく必ず行きます。何があっても、絶対に』

「……………はい。お待ちしていますわ。お休みなさいませ」

もどかしい沈黙があつて、しばらく。

誤魔化すような若さんに別れの挨拶を告げ、わたくしは通話を終えました。
ぼうつと天井を見上げ、そのまま布団へ仰向けに。

(もう準備は整っているんだし、早めに寝た方が良いかしら)

学園艦はもう大洗に向かつていて、明日の朝には入港が済んでいるはずですが、展示会の事を考えれば、早めの睡眠を取っておくに越した事はありません。

ですが、わたくしはお布団の上で寝返りを打つばかりで、一向に眠気は訪れず……。
この気持ち、なんなのでしょうか。

ウキウキとドキドキの、中間のような。まるで、遠足前の小学生みたいです。

「……確認。もう一度、確認だけ……」

眠れそうにないと悟ったわたくしは、展示会へ参加するのに必要な準備を、今一度確認する事にしました。

華道の道具はもちろん、女の子の必需品が入ったポーチや、小腹が空いた時の携帯食

も準備してあります。

あと確認すべきは……。展示会で着る着物、くらいですね。

(着物は、これで……。良いわよね。前にも着た事のある物だし)

大洗女子に入学する際、ひよつとしたら必要になるかも? と、お母様に持たされた、衣紋掛けに出してある着物。

色は黄色を基本として、金の菊や、紫の牡丹、薄桃色の桜などが描かれた、季節を問わずに着られる品です。髪も纏め上げ、牡丹を模った髪飾りを合わせます。

きつとこれなら、若さんも気に入って……。

(……あら? どうしてわたくし、若さんの事を)

ふと、妙な事に気付きました。

今回の展示会は、戦車道を通じて得たものを、生け花としてお母様に見せる場。

考慮するならお母様であるはずなのに、わたくしは、まず若さんを思い浮かべていたのです。

途端、一気に不安が押し寄せて来ました。

何度も着て、わたくし自身お気に入りの着物ですが、彼に見せるのは初めてのこと。ひよっとしたら、嫌いな色かも知れない。好みの柄ではないかも知れない。一応、他にも二着ほど、着物を持たされているのですけれど……。

「やっぱり、こちらの方が……。でも、派手過ぎるような気も……」

押入れから桐の収納箱を引っ張り出し、納められていた青と赤の着物を比べながら、わたくしは悩み始めてしまいました。

青い方は落ち着いた印象ですが、地味に映るかも知れません。

赤い方は存在感がありますけれど、自己主張が強過ぎては……。

うう、どうしましょう……？ このままだと寝られませんか……！



翌日。

学園艦を下艦し、大洗水族館へと脚を運んだわたくしは、展示会の準備を終え、胸を撫で下ろしていました。

(なんとか、無事に活け終わりました……)

現在時刻は午後一時。展示会に参加する方々と花を活け、割り当てられた場所へと完成した作品を飾って頂く。これだけで午前中を費やしています。

人によつては前日に活けておく場合もあるそうですが、翌日まで姿を保つかは物によりますし、学園艦の都合もあったので、当日に場所を借りて活けさせて頂きました。

ちなみに、着ているのは黄色地の着物。

結局、無難なものが一番だと思い至るのに、夜中の一時まで掛かってしまいました。おかげでちよつと寝不足です。

そんな訳で、眠気覚ましがてら、まだ人の少ない展示場を歩いていたのですが……。

(あ、みほさん。他の皆さんも、もう来てくれていたのね)

見覚えのある横顔を見つけ、眠気は簡単に飛んでしまいました。

まだこちらに気付いていないようで、皆さんの視線の先には、わたくしが活けた花があります。

少し緊張しますが、招いた側として、キチンと挨拶をしなくては。

「皆さん。来てくれてありがとう」

「あ、華さん！　こちらこそ、招待してくれてありがとう！」

遠慮がちに声を掛けてみると、みほさんが顔を輝かせ、お礼を返してくれます。

沙織さんや優花里さん、麻子さんも、「やつほー」だとか、「どうもであります！」だとか、無言で会釈だとか。皆さんらしい挨拶が返ってきました。

微笑みながら近づいて行くと、また生け花に向き直り、さっそく感想を伝えてくれて。

「このお花、凄く素敵ですっ」

「そうそう！　力強くて、でも、どことなく優しい感じがして……」

「はい。まるで五十鈴殿そのものみたいですよ！」

「器もなかなか良いな。こんな形は見たことが無い」

四人並んで、わたくしの活けた花を、皆さんはじっくり眺めてくれています。普段は戦車など、鉄と油の匂いばかり包まれているわたくし達ですが、やはり婦女子。

花を愛でる心も忘れてはいません。

「この花は、皆さんが活けさせてくれたんです」
「え？」

呟くようにわたくしが言うと、みほさんは小首を傾げました。

白や黄色の、春に咲く小さな菊を中心とし、大きな広がりを意識して活けたこの花は。戦車道で広がった、わたくしの世界と。それを支えてくれた、仲間をイメージした作品なのです。

「みほさんが居てくれなかったら。沙織さんが居てくれなかったら。

優花里さんが居てくれなかったら。麻子さんが居てくれなかったら。

きつと、この花は活けられなかったと思うんです。皆さん。本当に……ありがとう」

だから、わたくしは心からの感謝を込めて、大切なあんこうチームの仲間へと微笑み掛けます。

すると皆さんは、驚いたように顔を見合わせ、次いで、照れくさそうな笑みを浮かべました。

「そ、そんな事ないよ。このお花が素敵なのは、華さん自身が努力したからで……」

「なんだか照れますねえ……。でも、私なんかがお役に立てたんだとしたら、嬉しいです

！ ね、冷泉殿？」

「ん。まあ……友人だしな」

「お？ めっずらしい。麻子も照れてるー」

「うふふ、本当の事ですよ？ この作品は、わたくし一人で作り上げた物ではありませんから」

大洗女子の廃校の危機や、戦車道と出会い。

そして、仲間と共に努力し、勝ち抜いて来たこれまでが無かったら、こんなに晴れやかな気持ちで、花を活ける事も出来なかったと思います。

この作品はわたくしが活けた物ですが、活けさせてくれたのは、わたくしの側に居てくれた皆さん。

だからこれは、みんなで作り上げた作品なんです。

そんな気持ちが出来たのか、みほさんは改めて花を眺め、感慨深く言いました。

「なら、戦車道と華道の合作……みたいな物なのかな?」

「そうなるんでしょうね、恐らくは」

「えっ? あ、華さんのお母さん……」

急にわたくしの背後から、みほさんとは別の声が届きます。

突き放すようなそれは、わたくしにとつて聞き馴染んだ声でした。

振り返ると、そこには一人の女性が居ます。

わたくしの母であり、師匠でもある、お母様。五十鈴流の宗家が。

「この子が活ける花は、纏まってはいるけれど、個性と新しさに欠ける花でした。

こんなに大胆で、力強い作品が出来たのは、戦車道のおかげかも知れないわね」

「……! お母様……」

厳しく、忌憚のない評価は、かつて、わたくしが思い悩んでいたこと。五十鈴流の花でありながら、その枠から決して出ることのない、つまらない花。でも、これまでをそう評価した上で、お母様は大胆と、力強いと。驚きを込めて見つめれば、厳しかった表情はやがて崩れ……。

「私とは……。五十鈴流とは違う。……貴方の新境地ね」
「はー！」

とても優しい微笑みを、わたくしに向けてくれました。
思わず、目の奥がジンとしてしまいます。

随分と長い時間が掛かったようにも、あつという間だったようにも感じる日々でしたが、やっぱり、戦車道を選んで良かった……！

「いつぞやは、貴方たちにも失礼な態度を取ってしまったて、申し訳ありませんでした。どうか末長く、華さんと仲良くしてあげて下さい」

「あ、いえそんな！ 頭を上げてください！ そんなの当たり前ですから！」

「そうです! 五十鈴殿は、我があんこうチームの重要な砲手ですからねっ」

「居なくなったらチームが立ち行かない、です」

「私はチーム外でも仲良いですけどね! 女子として!」

「主にわたくしが、沙織さんの妄言へと突っ込むだけなんですけどね」

「あつ、華ひどく! もう妄言じゃないもんっ、私にはライカが居るんだから!」

「あらあら、楽しそうに羨ましい。あの人との学生時代を思い出すわ」

どうやら、お母様の中で戦車道への意識も変わったようで、お喋りするわたくし達を、微笑ましく見守ってくれます。これで心置きなく、決勝戦に挑めますね。

と、ぶんすか湯気を立てる沙織さんをスルーしていたら、お母様はわたくしの作品を一瞥し、「それにしても」と続けました。

「あの戦車型の花器には驚いたわ。一体、どうやって用意したの?」

「はい。ある方に、特別に頼んで作って貰ったんです」

「まあ。それじゃあ、私からもお礼を言わないとね。後で紹介して貰えるかしら?」

「勿論です。とても真摯に作品作りに取り組む、素晴らしい職人さんなんですよ」

気になったのは、若さんが作ってくれた花器のようです。

それも当然でしょうか？ 何せ、世界で一つだけの、戦車型の花器ですから。

麻子さんも褒めて下さいましたけど、やっぱり知人の作品が認められるというのは、嬉しいものですね。

お母様、お目が高いです……なんて、一人で上機嫌になっていたら、ぶんすかしていた沙織さんが、「キュピン！」と目を光らせました。

「ねえねえ、華、華！ もしかしてその職人さん……。男の人？」

「……へっ!? い、いきなり何を言い出すんですか、沙織さん」

「沙織……」

「まあ、陶芸家には男性が多いでしょうけど、武部殿、流石にこじつけじゃ？」

「だって今、一瞬だけど表情変わったよ！」

私達を呼ぶ時と違って、ほんのりラブ臭を感じたもん！

ライカとラブラブな日々を過ごしている、私の目に狂いは無い！ きつと！

「ちよつと自信無いんだね……」

ズバリ、若さんの事を言い当てられて、わたくしはドギマギしてしまいます。

た、確かに若さんは男性ですが、ええと………あら? そもそも、なんでわたしはドギマギしているんでしょう?

別に、殿方の職人さんと知り合いだからって、何がある訳でもないのに。……いいえ。茶化されそうでしたし、そのせいです。多分。

(……あ)

そんな風に、自分を納得させていた時。

ふと、遠くから歩み寄る男性の姿が目につきました。

紺のスーツで身を固めたその人は、わたくしの知る普段の姿と違っていましたが、間違えるはずはありません。若さんです。

本当に、来てくれた。

疑ってなんかいませんでしたけれど、どうしましょう。鼓動が高鳴ります。

「華さん。もしかして、あの方なの?」

「そ、そうです、お母様。若さあん!」

「……若?」

わたくしと若さんを見比べる、訝しげなお母様に頷きつつ、若さんへと小さく手を振ります。

彼は直ぐに気付いてくれたようで、急ぎ足でこちらに歩み寄りました。

「こんにちは、五十鈴さん。来るのが遅くなつてしまつて、申し訳ない」

「いいえ。来て下さつただけで、とても嬉しいです」

「今日は和服姿なんですね？」

「はい。やはり、生け花の展示会ですから。花を活ける者として、場にそぐわない格好は出来ません」

「そうですか。……あく、その……。と、とても、よくお似合いです。綺麗、です……」

「あ……。ありがとうございます。……葵さんの入れ知恵ですか？」

「うっ。バレますか、やつぱり。でも、綺麗だと思つたのは本心で……」

「ふふふ、そういう事にしておきましようか。若さんも、スーツがお似合いですよ」

「はは、どうも。着るの、久しぶりなんですけどね？ 普段は作務衣ばかりですし、着られてる感じがします」

若さんはまず、わたくしの着物姿を褒めて下さいました。

嬉しく思うのは当たり前なのですが、妙に彼らしくないと感じ、ちよつと探りを入れてみれば、案の定。葵さんったら、全くもう……。

でも、若さんのスーツ姿は堂に入つて、普段とはまた違った凛々しさを放っています。作務衣を着ている所しか見ていませんでしたから、新鮮ですね。

……あ、いけません。つい話し込んで。お母様や皆さんを紹介しないと。

「若さん。こちらは、わたくしの母の……」

「五十鈴 百合、と申します。この度は、娘が大変お世話になつたようで」

「ああ、これは御丁寧に。こちらこそ、とても良い機会を頂きまして。感謝しています」

お母様が頭を下げると、若さんも頭を下げ、いつぞやの親方さんとわたくしのような、お礼合戦が――

「はいはい！ 私、華の友達の、武部 沙織です！ 彼氏持ちなんで、惚れちゃ駄目だぞっ☆」

「えと、西住みほです。華さんと一緒に、戦車道をやっています」

「同じく、秋山 優花里と申しますっ。以後、お見知り置き下さいっ」

「冷泉 麻子。沙織の惚れる云々は気にしない方が良いでしょう。彼氏持ちなのは本当だが」

「そ、そうさせて貰うよ……」

君達が、あんこうチームのメンバーなんだね？ よく話を聞いてました。

あいにく応援には行けなかつたんですが、決勝戦進出、おめでとうございます」

「ありがとうございます。みんなの頑張りのおかげです」

——始まるかと思いきや、やたら元氣の良い沙織さんの挨拶が割り込み、今度はあんこうチームの皆さんの自己紹介。

物腰から人柄を理解して貰えたみたいで、引つ込み思案なみほさんも、笑顔で挨拶しています。

……胸がジリジリするのは、氣の所為です。

だって、とても良い事のはずですから。

「さ、挨拶も済んだ事ですし、華の作品を見てやって下さい。この子の新境地なんです
よ」

「はい。拝見します」

そうこうしている内に、お母様が若さんを作品の前に誘いました。
あんこうチームの皆さんは、若さんと離れると真っ直ぐこちらへ。
なんだか、表情がニヤついているような……? ?

(はーなっ! 私達は他のお花を見に行くから。頑張つてね!)

(えっ。が、頑張るって、何をですか?)

(もう、そういうのいいから。女は愛嬌、だよっ)

(女子高生の着物姿って、結構ポイント高そうですね? 五十鈴殿、ファイトであります!)
すー)

(華さんと若さん、大人っぽくて凄くお似合いだと思う! 応援するねっ!)

(私にはよく分からんが、まあ頑張れ)

(あ、あの、皆さん? 何か勘違いをされているんじゃない……)

沙織さん、優花里さん、みほさん、麻子さん。

口々に励まし(?)の言葉を掛けて、皆さんはそそくさ歩き去って行きました。

ええと、が、頑張れって言われましても、あの……。

……とりあえず、置いておきましょう。今は、若さんに作品を見てもらうのが先決です。

誤魔化してなんかいませんよ、ええつ。

「これが、華さんの……」

「……はい。いかが、でしょうか……?」

生け花の前に立つ若さんは、しげしげと、前屈みになつて花を観察しています。

自信を持つて活けた花ですが、こうもじっくり見られると、なんだか落ち着きません……。

「生け花に関しては門外漢ですし、あくまで個人的な感想なんです……」

「は、はい……っ」

一通り見終えたのか、若さんがこちらへ向き直りました。

背筋が勝手に伸びて、心臓は異様な早鐘を打っています。

皆さんの感想を聞いた時は、こんな風にはならなかったのに。もう、何が何やら……。

「凄く、好きです」

「……え!？」

そんなわたくしの混乱は、若さんの言葉で加速して。

す、すすす、好き……!?

あのあのあのつ、そんなに穏やかで、優しい瞳を向けられたら、わたくし……っ。

「ああいやっ、変な言い方になってしまいました!

あの、とても綺麗で、ダイナミックで、その、なんと、言いますか。

……この生け花を見られて良かったとか、花器を作った甲斐があったとか、そういう複合的な意味で……」

「そ、そうですね。ありがとうございます……」

アワアワと手を振り回す若さんの姿に、はたと気付きます。

そうです。当たり前ですよ。この場合、お花の事しかあり得ませんよね……。

なんという事でしょう。

本当に沙織さん化が進んでいます、注意しなければつ。

(ねえ、華さん?)

(あ、はい。なんでしよう)

——と、密かに気を引き締めていたら、ツンツン肘をつつかれる感じが。妙に寂しそうな顔をしていらっしやる、お母様です。いけません、すっかり忘れていましたわ……。

(もしかして、私もお邪魔、かしら?)

(お、お母様まで? 皆さんといい、さっきから何を……)

(あら。まさか貴方、自覚していないの? ……やっぱり、二人きりにしてあげた方が良さそうね?)

(ま、待つて下さい! わたくし、あの、困りますっ!)

寂しそうでいて、けれど楽しそうにも聞こえる、お母様の囁き声。

何やら勝手に話は進んでいて、戸惑うわたくしを無視し、今度は若さんへと。

「ええと、若您ん? 申し訳ないのですが、このあと外せない用事が詰まっております。少しの間、失礼させて頂きますね」

「あ、はい。すみません、お引き留めしたみたいで」

「いえいえ、お会い出来て良かったですわ。おかげで安心しました。……華の事、よろしくお願いします」

「は? はい……」

「お母様っ!」

「では失礼」

わたくしが声を上げると、お母様は「おほほほ」と笑いながら、視界の隅へ消えて行きます。

若您んと、二人きり。

何故か、お客様の姿も近くに見受けられず。ただただ、静かでした。

「……お、お母様ったら、どうなさったんでしょうね?」

「です……」

居心地が悪く、適当な話で場を保たせようと思いますが、全く続きません。ソワソワして、ムズムズして、彼の顔も見れませんでした。しばらくそのままでしたが、やがて沈黙は、若さんの声で破られます。

「あの……。五十鈴さん。少し、話をさせて貰っても、良いですか」
「お話、ですか」

わたくしに向き直り、若さんは深呼吸を。

三回ほど繰り返した後、頭一つ分も背の高い彼が、やおら腰を曲げました。

「まずは、この仕事を俺に任せてくれて、ありがとうございます。」

ようやく、自分に自信が持てそうな気がします。貴方のおかげです」

「……はい。わたくしの方こそ、ありがとうございます。」

若さんの作ってくれた花器が無かったら、納得の行く作品に仕上げる事は出来ませんでした。
でした。

わたくしが自分の殻を破れたのも、お母様に認めて頂けたのも、全て若さんのおかげ

です」

合わせて、わたくしも頭を下げます。

あの花を活けさせてくれたのは、戦車道の仲間達ですが、それをより引き立てて下さったのは、間違いなく若さん。

お互いに感謝し合って、引き立て合える関係って、素敵ですよね……。

……はっ。他意はありませんよ、他意は。

純然たる一般市民的な感性から導き出される意見でしてっ。

「実は俺も、五十鈴さんと同じ悩みを抱えてたんです」

「え。お悩みを……?」

正気に戻り、オウム返しするわたくしへと、若さんが頷きます。

お悩み……。作品に関する事でしょうか。

「俺はずっと、親父に言われるがまま仕事をしてきました。

本当は自分の好きな物を作りたかったのに、仕事なんだからって言い訳してたんで

す。

あの窯元は俺が継がなきゃいけない。だから、親父の言う事を聞いて、親父の望む技を身に付けなくちゃいけない、って」

己の手を、ジツと見つめる若さん。

浮かぶ表情は、どこか自嘲めいていて、呼吸が一瞬、苦しくなりました。
ですが……。

「そんな時に、五十鈴さんが現れたんです。

新しい自分を見つけようと、必死になつてる五十鈴さんの姿を見て、思いました。

ああ。俺もこの人みたいになれたら。この人みたいに、頑張れたら……。

だから手伝おうと——いや、違うな。

俺は五十鈴さんを通して、自分自身を救おうとしてたんだ」

こちらを見つめる時には、もう、普段の柔らかさを取り戻していて。

ああ……。そうだったんですね。

今更ですが、思い至りました。どうしてあんなにも早く、若さんと打ち解けられたの

か。

それは、同じ苦しみを知っていたから。

同じ気持ちを抱えていたからこそ、わたくしは無意識にそれを感じ、足りない。何かを補おうとしていた。

わたくし、は。この方に……。

「今の俺があるのは、君のおかげ。君がこの道を示してくれた。」

君が居なければ、俺はずっと、自分の本当の望みを見つけられなかったと思う」

「そ、そんな……。大袈裟、ですよ……」

「大袈裟なんかじゃない。俺にとっては、それだけの意味があるんだ」

「あ……」

見つめる視線が熱を帯びて、気恥ずかしさに謙遜してしまうわたくしを、彼は強く否定します。

胸が、またジリジリし始めました。

……違う。もっと、ずっと前から。この胸は、熱を宿していました。

本当は気付いていたはずなのに。知識として知っていたはずなのに。

もどかしいこの気持ちをも、どう呼ぶのか。

「注文された花器を納めた今、仕事上の関係はお終いだ。あの花器以外に、俺と君の接点は、無い。」

でも、それじゃあ嫌なんだ。始まりは仕事だったけど、それだけで終わりがたくない。だから……」

一步。彼が近づきます。

黒い瞳に、熱はどんどん上がって行つて。

「五十鈴 華さん。俺は、貴方の事が好きです。俺の恋人に、なつて貰えませんか」

若さんの言葉で、ついに逃げられなくなりました。

胸が痛いくらいに締め付けられ、心臓も弾けそうなほどに高鳴り、身体は今にも燃え上がりそう。

苦しくて、苦しくて。……嬉しくて。

勝手に、喉が震えます。

「わたくしは……。幼い頃から華道ばかりをやって来ました。

幸い、沙織さんや麻子さん、みほさんや優花里さんといった友人に恵まれて、戦車道にも出会えて。

でもまだ……。男性を好きになった事は、ありません。だから、殿方を愛するという気持ちだが、よく分からないんです」

「……っ、そ、う、ですか……。すみません、忘れ——」

「待って下さいっ。……まだ途中、ですから」

断りの返事と誤解し、踵を返そうとする若さんの手を取り、わたくしは引き止めます。

幼い頃から、色んな事を学んで来ました。

色んな人に、出会って来ました。

でも、お友達や芸事では、決して知り得ない事もあつたんです。

あつたんだと、今、ようやく理解しました。

「あの日……。若さんがお父様に啖呵を切った後の、強い瞳で見つめられた瞬間。胸の奥に、何か、ジリジリとする熱が生まれて。

若さんとお話ししている時、それはとても暖かく、時折、身を焦がすほど熱くなりま
した。

こんな事は、初めてなんです。こんなに、もどかしくて楽しい気持ち、初めてで、
ですから……」

それは、沙織さんが夢中になっている事で。

他の誰もが、同じようになってしまう可能性があるもの。

始まりはきつと、些細な事なんです。

手が触れたとか、頼みを聞き届けて貰えたとか、笑い合えたとか。

そんな思い出を振り返って、些細な事を、嬉しく思える心。

わたくしが、気恥ずかしさから向き合おうとしなかった、幼い気持ち。

その名前を言葉とするため、わたくしは一步近づき、彼を見上げます。

「わたくしに……。恋の仕方を、教えて下さいますか？」

気持ちをキュツと絞り込み。

花を活ける時のように。主砲の狙いを定める時のように。

真つ直ぐ、若さんへ問い掛けます。

一瞬、彼の瞳は大きくなり、次に、潤いを湛えて細くなりました。溢れるような、微笑みに合わせて。

「もちろん。喜んで」

「若さん……!」

静かな返事に、今度はわたくしの目頭が熱くなつて。

気が付けば、逞しい腕の中へ飛び込んでいました。忙しいジリジリが、穏やかなドキキへと変わっていきます。

ああ、やっぱり。わたくしは、この方に惹かれている。

穏やかで、誠実で、ひたむきな彼に、堪らなく。

この方と、また新しい道を歩きたい。……恋を、してみたい。心からそう思えました。

腕の中で、もう一度彼を見上げます。

慈しむような笑顔が注がれ、土の匂いを宿す指は、嬉し涙を湛えた、わたくしの目尻を拭い。

そのまま、距離が近づき始めました。

彼は身を屈め、わたくしは背伸びをして。磁石のように、唇同士が――

「ちよおおおと待つたあああああつー！」

「きゃっ!？」

「な、なんだ!？」

――触れませんでした。

唐突な怒声に驚き、わたくし達は抱きしめ合つて周囲を伺います。

すると、声の主らしい半被姿の男性が、物凄く厳しい顔で、両手に草木を構えて。

あの声、この姿。間違いなく、奉公人の新三郎です。

草木は欺瞞工作のつもりなんですか？ むしろ目立っていますけれど。

オマケに遠目には、お客様や展示会参加者のギャラリーが構築されていました。

その方々が、「青春よ」「青春だわ」「三角関係?」「痴情のもつれ?」「燃えるわあ」など、好き勝手な事を。

ど、どうしましょう。若さんにばかり目が行つて、周囲の変化に全く気付きませんでした。下手に集中力があるのも困りものです……。

いいえ、それよりもまず、闘牛のように鼻息を荒くしている、新三郎をどうにかしま
せんと！

「し、新三郎？ 貴方いつから……」

「お嬢！ まずは奥様との和解、誠に目出度く存じます！ これもお嬢の頑張りあつて
こそです！」

「あ、ありがとう。でも、あの……」

「しかああしつ！ 五十鈴家に奉公させて頂き早十年以上、密かにお嬢を心の妹と見
守つて来た男として、どこの馬の骨かも分からぬ輩に、お嬢を預ける訳には参りませ
ん！」

片膝をつき、仰々しい口上で喜びを伝える新三郎。

けれど直ぐさま立ち上がり、滂沱と涙を流しつつ腰に差していた“何か”を抜き放ち
ました。

あれは……孫の手？ え？ 何故に孫の手？

一応、怪我させないよう気を遣っている、のかも……。いえ、やっぱり訳が分かりま
せん。

あああ、若さんの顔も困惑で引き攣っていらつしやる。

「……は、華さん？　この人は……？」

「実家の方に奉公に来ている、新三郎です。で、でもそれだけで。わたくし、別に新三郎とは何もつ」

「ええ、確かになんにもありません！　が、それとこれとは話が別です！　お嬢と結ばれたければ、この新三郎の屍を越えるがいい！」

「え〜……」

しどろもどろに、新三郎との関係を説明するわたくしですが、当の新三郎は両手で孫の手を構えて、今にも面打ちしそうな体勢を。

若さん、ドン引きしてます……。

わたくしとしても、心配してくれる気持ちは嬉しいですけど、正直迷惑です。一体どうしてくれましょうか……？

なんて、心の中で黒い物を沸き立たせていたら、「決闘よ」「果たし合いよ」「骨肉の争いよ」「最後は違いませんか？」と騒ぎ立てる野次馬の中から、誰かが飛び出し……つてお母様っ！

「ちよつと新三郎！ 貴方、なんで邪魔をするの！ セっかく華さんと若さんがいい雰囲気だったのに……！」

「そうよそうよー！ 誰かの恋路を邪魔する人は、馬に蹴られて死んじゃうんだからね！？」

「お母様に、沙織さん……だけじゃなく皆さんまで！」

「あはは……。ご、ごめんね華さん。止めようって言ったんだけど、なんだか逃げそびれちゃって……」

「いやはやなんとも、流石は五十鈴殿です！ ちよつと惜しかったですが、しつとりとした良い感じの告白シーンでしたよ！」

「また動画を撮ってしまった……。この携帯、容量少ないのに……」

お母様の後ろには、他の花を見ているはずの沙織さんや、みほさん、優花里さんに麻子さんの姿も。

皆さん、覗いてらっしゃったんですね……。というか、麻子さんには動画まで撮られて……。

ああ、沙織さん。教室でライカさんとのキスシーンを騒がれていた時、貴方はこんな

気持ちだつたんですか。

恥ずかしくて死んでしまいそうです。顔が、顔が熱いですう……っ。

「華さん、ちよつとゴメン」

「え？　——あつ」

若さんの囁き声。

両手で、真つ赤になっているはずの顔を隠すわたくしは、いきなり浮遊感を覚えまして。

彼の顔が近く、身体は横向きに。

これは、まさか……お姫様抱っこ？

「き、貴様っ、お嬢に何を……！」

「申し訳ないけど……。戦術的撤退させて貰います！」

困惑し通しのわたくしを抱きかかえ、若さんは新三郎に背を向けました。

そして、モーセの十戒が如く割れる野次馬を駆け抜けます。

「待てい貴様あ！ 常日頃から人力車を引いて鍛えた、この俊足から逃げられると思ふなよお！」

「新三郎、お待ちなさい！ くら、新三郎！」

「お姫様抱つこで逃避行……。いいなあ、憧れちゃう」

「そんな事言ってる場合か。どうする？ 隊長」

「え？ 私に聞かれても……。と、とにかく華さんを援護しなきゃ！ とりあえず突撃です！」

「おおお、西住殿らしくない雑な命令。だがそれが良い。パンツァー・フォー！ であります！」

孫の手を片手に追ってくる新三郎と、着物の裾をたくし上げて走るお母様。

ウツトリした顔の沙織さんへ突っ込む麻子さんに、みほさんの命令に追従する優花里さん。

若さんの肩越しにその姿を確認しながら、わたくしは彼の顔をまた見上げます。

アクアワールドの館内から出て、一面の青空を背景に、遠くを見据える凜々しい瞳。

ほんのりと、胸を暖かくしてくれる、想い人の横顔。

「若さん」

「なんだい、華さんっ」

呼び掛ければ、息を弾ませつつも、優しい眼差しが降り注いで。

自然とそれに微笑み返し、わたくしは……。

「不束者ですが、未長く、宜しくお願い申し上げます」

若さんの首へ腕を回し、頬にそつと口付けます。

後ろの方で新三郎の咆哮が轟いていますけれど、気にしません。

わたくしは、また別の道を歩み始めたのですから。

生まれてからずっと側にあつた、華道。

この春に出会い、これまでと違う自分を見つけさせてくれた、戦車道。

それから、若さんと出会って見出した、新しい道を。

古来からの乙女の花形、花嫁道。

わたくし、邁進致しますわ！

……ちよつと沙織さんぽいですが、それもたまには、良いですよね？

秋山優花里編

第一話「応援させて頂きますっ！」

「はあく……。ふふふ……。ぬえっへへ……」

県立大洗女子学園で戦車道が復活し、早二月以上。

自動車部のツナギを着た私、秋山 優花里は、休日の昼間からニヤニヤしていました。何故なら！ 私の目の前に！ スクラップ状態を脱しつつある戦車があるからです

！

もはや人々の記憶からも忘れ去られ、学園艦の奥深くで静かな眠りについていた戦車が、息を吹き返していく……。

もう堪りません！ 生きてて良かったー！

「秋山さんって、本当に戦車好きなんだねー」

「はい？ ナカジマ殿、何を今更！ そんなの女子なら当たり前じゃないですかっ」

「いやいや。当たり前前って言うのと、女子を誤解されるんじゃないかなあ？」

「えー。そうですかー？ ホシノ殿なら分かって頂けるかと思つたのに……」

作業の合間にニヤついていた私へと話しかけるのは、その戦車の砲塔部分から頭を出すナカジマ殿と、砲塔の物陰から身を乗り出すホシノ殿です。

ショートカットと朗らかな笑顔が特徴のナカジマ殿は、自動車部の部長を務められており、大洗女子戦車道チームの整備を総括して下さっています。

ホシノ殿はボブカットで、ツナギの上半身をはだけたタンクトップ姿が目印。運転技術が高く、大洗女子の中で一番速い女、とも呼ばれているそう。

御二方共、顔やツナギのそこかしこが汚れていて、整備の大変さを物語っていました。まあ、私も似たような状態なんです。

「にしても、この子はちよーっと手強いなー。○カリ持つて来たぞーい」

「あ、ツチャ殿。それにスズキ殿も。お疲れ様であります！」

「お疲れー。生徒会にせつつかれてるけど、これは次の試合には無理だね。というか、またすぐに壊れそうな予感がする」

一息つく我々に、背後からスポーツドリンクを持って歩み寄る御二方。

ホシノ殿よりも短めの、外跳ねボブカットがツチャ殿で、スズキ殿は短い癖っ毛と、日に焼けた肌が特徴です。私も癖っ毛なのですが、ひとまず置いておきましょう。

スポーツドリンクを頂いた私は、「助かります」とお礼を申してから、一気に半分ほど飲み干しました。はー、働いた後の一服は最高でありますー。

とか思いつつ、ナカジマ殿達を取り囲む戦車を正面に。

「これ、レア物ですもんねえ。

足廻りが気難しいみたいですから、試合中に問題が発生でもしたら、それで白旗判定になる可能性も……。」

あああ、88mm砲と正面1000mmその他80mmの重装甲を無駄にするなんて、勿体無さ過ぎですうううっ!？」

四角いフォルムに、後部が丸っこい砲塔から伸びる長砲身。

かの天才、フェルディナント・ポルシエ博士が設計した、ポルシエ・ティーガー。

先に叫んだ通り、実用化すれば大洗一の重戦車となるはずなのですが、重量はなんと

57トン！ 一回り以上大きいロシアのKV-2より、5トンも重いんです！

それを支えるエンジンは、時代を先取りし過ぎたハイブリッドエンジン。

ポルシェ・ティーガーを元にしたドイツの重駆逐戦車、エレファントでの調子は良かったらしいんですけど、実際運用する側に回ると、正式採用を躊躇したドイツ軍の気持ちは分かります……。

思わず頭をモシヤモシヤしてしまう私。

しかし、ナカジマ殿はレンチで肩を叩きながら、実に頼り甲斐のある微笑みを浮かべていました。

「ん〜……。ま、いざとなったら、やりようはあるけど……。とりあえず直すのが先決だね」

「ですなー。よーっし、気合い入れるぞー！」

『おー！』

ツチャ殿の声を合図に、自動車部の皆さんが拳を振り上げます。

もちろん、お手伝いの私も！

例え扱いが難しくたって、今の大洗には重要な戦力に違いありません。

今後の為に、早々に仕上げてしましましょう！

……と、意気込んでいる所に、《プップー！》というクラクションの音が。

そちらを振り向いてみれば、白い2トントラックが戦車格納庫に入って来ていました。

車体に大洗の校章ステッカーが貼つてあるので、学校所有の車ですね。

「ちわーつすつ！ 御注文の品々、届けに来ましたよー！」

「お。やっと来たかあー！」

軽トラの運転手……。ちよつと髪の毛の長い男子生徒が声を上げると、砕けた口調のナカジマ殿が手を振ります。

工学科の生徒に支給される、黒いツナギを着た彼が降車するのに合わせて、ホシノ殿が小走りで近寄って行きました。

「どうやら、お知り合い？ みたいです。」

「パーツクリーナーニダース、国別のネジやら何やら細かい部品、加工を頼まれてた部品、ウエスと予備の軍手は適当に。確認して貰えます？」

「はいはいっと。……うん、完璧! さっすがダンチョー、頼りになるね! こっちも手が回らなくて。ついでに値段も下がない?」

「下がるわけないでしょ、ホシノさん。こっちは部じゃないし、資金繰り苦労してんですから。ただでさえギリギリなのに」

「そんなこと言わないでさー。頼むよダンチョー」

「ちよ?! やめ、あ、当たってる!」

何やら荷台を覗き込み、持って来たらしい品を確かめたホシノ殿は、男子生徒の頭を脇に抱えて、値段交渉を始めました。

あゝ……。あの位置は、うん、当たってますね。胸が。顔が真っ赤になってます。

やけに楽しそうなホシノ殿でしたが、彼は腕の中から逃れようとし続け、ふと、視線が重なりました。私とです。

「……あれ。スズキさん、新しい部員入ったんですか?」

「ん? ああ、秋山さんは違うんだ。ほら、戦車道の」

団長? 殿は、荷台から段ボールを降ろすスズキ殿に問いかけ、スズキ殿は首を振り

ます。

同じ服装だから、勘違いされてしまったようです。

初めての方ですし、ここはキッチンと挨拶せねば！

「普通科、二年C組所属の、秋山 優花里と申します！ 誕生日は六月六日、血液型はO

型RH+であります！」

「へ？ あ、詳細にどうも……。二年、って事は同学年か。よろしく」

気合を入れて、踵を鳴らし、陸軍式の敬礼で自己紹介すると、ホシノ殿の柔らかかフェイスロックから脱出した団長殿（仮）が、軽く頭を下げます。

期待していた訳ではありませんが、答礼が無いのは少し寂しいでありますね……。

それはさて置き。丁度良いですから、先程から感じている疑問をぶつけてみましょう。

「つかぬ事をお聞きしますが……。本名がダンチョー殿、と仰るんでありますか？」

「ああ、違う違う。それはこの人等がつけたあだ名で、本当は——」

「男子自動車部の部長だから、略してダンチョーなんだよねー。一人しか居ないから、そ

もそも部として認められてないけど」

「おい。確かにそうだけど邪魔すんなツチャ。おっほん、オレは工学科の——」

「ついでにパソ研と科学部の部長でもあるんだけど、やっぱり他に部員居ないんだよねー」

「ツチャ、お前ケンカ売ってんの?」

「きゃーん怖ーい」

私の質問に、パーツクリーナーの缶を持ったツチャ殿が何故か乱入。青筋を浮かべた彼に追い払われました。

団長ではなく、男長なんでありますねー。同じ部だけあって、皆さんとは仲良しみたいです。

余談ではありますが、彼の持っている免許は、おそらく学園艦および競技中限定の自動車免許だと思われます。

車種ではなく環境で限定を行った免許で、戦車道を履修する私達も当然、戦車の限定免許を取得しています！

管理された競技中以外で陸を走ると即逮捕されちゃいますけど、取っておけば通常免許の取得が楽になりますよ？

ちなみに双方共、取得可能年齢は十五歳からであります！ 割と簡単です！
話が逸れましたが、とりあえず、私もダンチョー殿と呼ばせて頂きましょう。

「なるほどー、男子自動車部の方でしたか。もしかして私達、今までもお世話になつていたりしたんでしょうか？」

「まあ、本格的に参加したのは割と最近だけど、そこそこかな。

コネを使つて、加工難度の高い部品を安く仕入れたりしてるし。

あと、選択科目に整備道を選んてるから、レギュレーションに合わせた戦車の防水加工とか。

オレがやったのはルノーで、車検前にやっつけば費用安くなるんだけど、けっこう骨が折れるんだ、これが」

「おおおつ、そうでありましたか！ ありがとうございます、ダンチョー殿！」

「……いや良いんだけどさ、その呼び名でも。どういたしまして」

改めてお礼申し上げますと、今度は照れ臭そうな敬礼を返して貰えました。

手と肘の角度が違うので、海軍式になっちゃってますが、公の場じゃありませんし、こういうのは気持ちが一番なんです。とやかく言っちゃいけません！

ルノーの整備と聞くと、通常は乗り合わせず、必要に応じて手伝いに来る五人目の乗員、グリース係を思い出しますねー。

大洗女子では分校の男子生徒だけが履修できる、超就職向き科目、整備道を学んでいくというのも、雰囲気はピッタリです！

また余談ではありますが、競技に使用する戦車も、キチンと車検を通らねば試合には出られません。

ダンチョー殿が仰った防水加工を例に挙げると、当時のままでと車内に水がガンガン入ってくる戦車も少なからず存在しまして、競技フィールドには川などがある場合も。

なんらかの不測の事態により、そういった戦車が水没してしまつた場合、乗員を守るために防水加工は必須なのであります！ 戦車道は安心安全な競技なのです！

とはいえ、去年の全国大会の時のような、かなり危うい場面がある事も否めないのではありませんが……。

防水加工してるなら放っておいても良かったんじゃない！

三号戦車が完全に吞まれてしまうほど水かさを増した川では、競技を中断して救援車を派遣しようにも、そもそも近付けなかつたと思われます。

あの場合、三号を見失わない内に川へ飛び込み、乗員を救出に向かつた西住殿の判断は、やはり正しいんですよ！

水圧でハッチ開かないだろ？　きっと内側からも開けようとしていたんですよ、まだ沈みかけで圧も低い状態でしたし！

つて言うか、戦車も飲み込む激流に負けず、三号に辿り着いた西住殿は凄いです！
凄過ぎです超人です軍神ですよ！

……はつ。一人で脳内ヒートアップしてしまいました。自重せねば……。

閑話休題！　ひとまずポルシェ・ティーガーの整備は中断し、ダンチョー殿が持つて来た品々を降ろす手伝いです。

六人掛かりなら直ぐ終わってしまうんですが、そうする内に、また疑問が生まれまして。

ダンチョー殿が所属……していると聞いていいのか分かりませんが、部についてです。

「にしても、自動車部とパソ研と科学部って、なんだか妙な取り合わせですね。何か理由がお有りなんですか？」

「ん……。まあ、ちよつと」

世間話として聞いてみたんですが、ダンチョー殿は愛想笑いを浮かべるだけ。

……もしかして私、やらかしました？ 初対面の人の地雷踏み抜いちゃいましたかっ？

すみませんっ、空気読めなくてごめんなさいい!?

「話してやんなよ、ダンチョー」

「スズキさん……。いや、でも面白い話でもないし……」

「恥ずかしがる必要、無いんじゃないかな。立派だと思うよ、アタシは」

内心焦りまくりな私でしたけど、スズキ殿、ホシノ殿の言葉に、ダンチョー殿は頭を掻きます。

「恥ずかしがる……。どういう事なんでしょう？」

「ややあつて、彼は首を傾げる私へと向き直りました。」

「夢が、あるんだ。オレ、将来は車の設計がしたくてさ」

「へー、設計でありますか！ 何が切っ掛けで志したんですか？ やっぱり、構造の美し

さとかに惹かれて？」

「いや、そうじゃなくて……。事故を起こしても、乗員を必ず守れるような、安全な車を

作りたいんだ」

意外や意外。とても堅実的な夢に、私は感心してしまったのですが、ダンチョー殿は軽トラのドアへ寄り掛かり、静かに続けます。

「小学生の頃、親戚……つつてもかなり遠縁の人達がさ。事故で亡くなったんだ。それが切っ掛けかなあ」

「あ……。そ、そうだったんですか。すみません、無神経な事を……」
「良いんだ、気にしないで」

やっぱり地雷を踏んでいた事が分かり、申し訳無く顔を伏せる私に、ダンチョー殿が手を振って笑い掛けてくれました。

心の広い方で、命拾いましたね……。いえ、別に生命の危機ではありませんでしたけど、精神的に。

「その人達には娘さんが居たんだ。同い年だったもんで、葬式に出た時、親に色々と話し掛けさせられたんだけど、なんも反応しなくて。」

子供だったから、事の重要さもよく分かんなくてさ。つまんなくて放つぽりだしちやっただ、その子のこと。……ホント、最低だよな」

——が、その笑みはすぐ、自嘲へと取って代わります。

お葬式をつまらなく感じる。

子供なんですから、ある意味仕方ないと思う部分もありますが、口には出せませんでした。

……。こういう時、西住殿や武部殿とかだったら、気の利いた事を言えるんでしょうけど……。

ああ、自分のオタク気質が恨めしいです……。

「でも、やっぱり葬式だからどこ行っても辛気臭くって、結局その子の所に戻ろうとしたら……泣いてたんだ、一人で。声を殺して、畳に蹲って。

声も掛けられなかった。今考えると、側に居るだけでも良かったんだろうに、ただただ、居た堪れなくて、見てるしか出来なかった。

その一度きりしか会わなかったけど、それから考えるようになったんだ。

どうしてあんな事故が起きたのか、なんであの子の両親は助からなかったのか。……

どうすれば、あんな事故を防げるのか」

ダンチョー殿が天井を見上げます。

釣られて上を向くと、天窗に切り抜かれた青空が見えました。

とても重大な話を、けれど、必要以上に重々しく感じないのは、彼の声が、あの空と同じように澄んでいるからでしょうか？

「まあ、そんなこんながあつて、事故を防止するシステムとか、安価で効果的な衝撃吸収材の開発とか、車体の設計をしたいと思うようになって、今に至るんだ。

工学科を選んだのも、プログラムとか機械の設計とかを勉強するためなんだよ。悪かったね、つまらない話を聞かせて……」

「そんな事ありませんっ！」

「うおっ」

照れ臭そうに、苦笑いを浮かべるダンチョー殿でしたが、私は思わず、全力で否定していました。

当然、夢をじゃなくって、つまらないと本人が言ってしまった部分を、です！

「どこがつまらない話ですか！ 不肖・秋山 優花里、感動致しましたっ。素晴らしい夢ですよ、ダンチョー殿！ 及ばずながら、応援させて頂きますっ！」

「え、あ、そ、そう？ あり、がとう……」

幼い頃に出会った少女の涙のため、自分の夢を定める……。

紛うこと無き、男——否！ 漢でありましょう！

私で力になれる事は少なそうですけど、その分、心の底から応援したいです！

なんだかつい最近、似たような話を聞いた気もするんですが、この際、気にしませんっ。

頑張ってください、ダンチョー殿！

……と、一人でまたヒートアップする私を見て、ナカジマ殿がにこやかに笑っていました。

「戦車道が本格的に始まる前、放置されてた戦車を運び出したでしょう？」

そのヘルプとして、生徒会から派遣されて来た人員の中にダンチョーが居ただけど、その時、構造とかを調べてる姿が凄く真剣で。

話を聞いてみたら、まあ、ワタシ達も応援したくなつちやつて。それから色々仕事を頼むようになり、今では一緒に戦車を弄ってる、つて訳です」

「実際、戦車の整備つて自動車のよりも力仕事だし、台数増えて時間も掛かるようになつちやつたし、助かるんだー。頼りにしてるよーダンチョー」

「はいはい、頼りにされますよ」

私の勢いに戸惑っていたダンチョー殿は、ツチャ殿に肩を叩かれ、表情を崩します。

仲が良いだけでなく、気安いやり取りが信頼関係を伺わせますね。

きつと私の知らない、これまでに培った日々があるんでしょう。ちよつと羨ましい関係です。

さてさて。

そんなこんながあつた所で、配達を終えたダンチョー殿が、軽トラ乗り込みつつ、自動車部の皆さんへ声を掛けました。

お帰りになるようです。

「じゃあ、オレはこれで。なんか、他に必要な物とかは？」

「あ、あるある。ちよつと待ってくれるかな、メモつといたのが……はいコレ」

「ふむ……。了解です、ホシノさん。そいじゃ、秋山さん、また」

「はいっ。武運長久をお祈りします！」

「いや秋山さん、出撃するわけじゃないんだから……」

「あつははは。んじゃ、失礼します！」

ホシノ殿からメモを受け取り、ダンチヨー殿は軽トラに乗り込みます。

私の敬礼とスズキ殿のツツコミに吹き出して、今度こそエンジンを始動。

バックで切り返してから、格納庫を走り去って行きました。

新しい出会いのおかげで気合いも入りましたし、ポルシェ・ティーガーの整備、頑張りますよう！

第二話 「由々しき事態であります……」

「うむう……つ。由々しき事態であります……」

今月もまた末を迎え、数日後に新しい月を迎える頃。

学校から帰った私は、制服のまま自室で腕を組み、ひっじょーに差し迫った問題に、頭を悩ませていました。

「んあああああああつ！　なんであの時、マウスのプラモデルを買っちゃったんですか私はあ!？」

原因はズバリ、金欠です。

四角い座卓へと突っ伏し、横目で眺めるのは、壁際のラックに飾られた、真新しいプラモデル。

ドイツが世界に誇る超重戦車、 Maus です。 1 / 144 スケールなんですけど、それも 128mm 砲の存在感は堪りません！

あ、ちゃんと迷彩塗装も施してるんですよ？ 我ながら渾身の力作！ ……けどまあ、アレです。

戦車もプラモデルも、往往にして、大きさと価格が比例するものであります故、またしてもお財布がピンチに陥ってしまいました……。明日からどうやって過ごせば……。

「ちよつと優花里、なに騒いでるの！」

「あ、お母さん」

うんうん唸っていると、廊下が続くドアから、ピンクいエプロン姿のお母さんが顔を見せました。

店舗になつて一階。秋山理髪店の方まで、叫び声が届いていたようです。

いつもなら謝ってしまう所ですが、背に腹は変えられません。

恥を忍んで配給の前倒し——もとい、お小遣いの前借りをお願いしてみましよう！

「あの……誠に恐縮なんですけど……」

「お小遣いの前借りは駄目よ。増額も駄目」

「まだ何も言つてないのにい!？」

しかし現実には厳しかった!

仁王立ちして私を見下ろすお母さんは、腕を組んで呆れた顔をしています。

まあそうですよね……。もう今年四回目ですもんね……。

「全く……。まあた戦車グッズに注ぎ込んだのね?」

「はい……。なんと言うか、こう……。ムラっと来ちゃつて……」

「女の子がそんな言葉みだりに使わない! ……どうしてもお金が必要なら、前みたいにお店手伝いなさい。ちよつとなら出してあげるから」

「やります! やらせて下さい! じゃないと月間 戦車道の今月号があ……。!」

「駄目だわこの子……。早くまともな金銭感覚を身に付けさせないと……」

藁をも掴む思いで、私はお母さんに縋り付きました。

書籍というものは初版である事に価値があり、学園艦への搬入数自体も少ない雑誌は、争奪戦必死なんです!

何やら嘆いてるお母さんには申し訳ないですが、これも素敵な戦車ライフの為。
家業の手伝い、頑張るであります！



——と、意気込んでいた時期が私にもありました。

「お父さあん……。物凄く暇なんですけどお……」

「仕方ないだろう。そんな日もあるんだ」

月末間近の日曜日。

我が実家である秋山理髪店は、朝から鶏ではなく閑古鳥が長鳴きし、鯛が靴を履いてコサックダンスを踊る有様でした……。

お父さんがお客さん用の席に座り、新聞を読みつつ、入り口近くのソファに座る私を窘めますが、こんな状態でうちは大丈夫なんでしょうか？

ちなみに、お父さんのエプロンは鼠色で、私のエプロンは迷彩柄の私物です！ あ、お母さんは奥でお昼御飯の後片付け中だったりします。

「んあー、どうせやる事がないなら、使用済みの砲弾でも磨いていたいいいいい……」
「はあ……。そんなに動きたいんだったら、表に出て呼び込みでもしてきなさい」
「理髪店が呼び込みって……」

退屈に耐えられず、仕事を放り出したくなる私でしたが、そんな事したらお小遣い貰えません。

仕方がないので、休憩がてら表に出てみましょう。呼び込みは……ちよつと恥ずかしいので遠慮しますけど。

カランカランと、耳に心地良いドアベルを鳴らし、私は通りへ出て背伸びをします。
ん、凝り固まった筋肉が解れて、ついでに欠伸が……。

「あれ、秋山さん」

「ふあ？ ダンチョー殿？」

唐突に、横合いから声を掛けられました。

大口を開けたまま振り向いた先には、白いシャツにジーンズ、黒いパーカーを着るダンチョー殿の姿。

予想外の対面に、私達は硬直。しばらくして、私と理髪店の看板を見比べた彼が、ポン、と手を打ちます。

「……、もしかして？」

「はい。うちは理髪店やってるんですよ。家族みんなで、学園艦で暮らしてます」

「そっか、全然知らなかった。……んー。丁度良いし、切つて貰うかな」

「え!? 本当ですかっ?」

「うん。放つたらかしにしてたら伸びちやって。整備するのもにも邪魔になってきてさ」

「なら、是非とも御利用下さい! さあさあ、どうぞ! ご案内しますので」

なんと! 素晴らしいタイミングの出会いであります!

自分の前髪を摘むダンチョー殿を促し、私は店内へと舞い戻りました。

ひゃっほう! これでお小遣いGETだぜい!

「お父さーん、お客様ですよーっ」

「なんだってえ!?! ほ、本当に呼び込みしてきたのか!?!」

「いえ、違います。たまたま知り合いが前を通つて、タイミング良く髪を切りたいとの事だったので」

「あら、そうなの? 珍しい事もあるものねえ」

私の呼び掛けに、お父さんは立ち上がり、新聞をクシヤクシヤにしてしまいます。

まあ、タイミング良過ぎてビックリしちゃいますよね。

お母さんも奥から戻つて来てましたが、まずはお客様のご案内が先決でしょう。

「ダンチョー殿。さ、こちらに座つて下さい!」

「ん? ……男つ!?!」

「ど、どうも……」

お父さんが何故だか険しい顔してますけど、とりあえず放つておいて、ダンチョー殿を先導します。

靴を履き替えて頂いて、誰も座つてなかつた方の座席へ。他人の体温が残る椅子とか

嫌ですもんね。

ついでにパーカーを預かり、散髪用のケープも着けさせて貰うんですが……。なんだか、お父さんの視線が痛いような？

「あなた。お客様なんですからかね？」

「うっ。わ、分かっているとも。……さあ、お客さん。今日はどうします？」

「え、ええと……。バツサリ、行っちゃってください。2〜3cm位まで」

「はい、かしこまりました。バツサリ行きましょうね、バツサリと」

「おお、お願いします……」

お母さんに突っ込まれたお父さんが、私に代わってダンチョー殿の散髪を始めます。

うくん……。やつぱり、お父さんの様子が変ですな。

理容ハサミをシャキンシャキン言わせる姿に、妙な迫力が感じられます。ダンチョー殿の顔も引き攣って……。いやマズくないですかそれ？

一言お父さんに言っておいた方が良いのかも……。と思う私でしたが、そんな私へと、お母さんがコソコソ耳打ちして来ました。

(ちよつと、ねえ優花里！ 格好良い子じやないっ、どこで知り合つたのよ?)

(はい？ えつと、整備道をやつてる方で、戦車道を色々影からサポートしてくれてるんです。男子自動車部の部長さんで……)

(ああ、だからダンチョー君なのね。へえ……)

簡単にダンチョー殿の来歴を説明すると、お母さんは目を輝かせて何度も頷きます。

……もしや、若い燕と浮気を考えてるとか？

いやいや、あり得ませんね。うちの両親、なんだかんだでラブラブですし。

だとすると、この反応は一体なんなんでしょう……。うくん、分かりません。

「おや。頭に傷があるね。これはどうしたんだい？」

「あ、整備中にうっかり、角にぶつけて。まあ、慣れつつすよ、この位は。蛇道も時々やつてるんで、傷が絶えないですし」

「えっ？ 整備道だけでなく、蛇道までやつてるんですか？」

「人数稼ぎだけどね」

いつの間にか散髪は始まっていたみたいで、お父さんがハサミを動かしつつ、ダン

チヨ一殿に話し掛けています。

どうせなら、と私も加わってみると、彼は鏡越しに笑っていました。

「何回か、ライカや先輩と一緒に、どっかの学校の公式戦に混せて貰った事があるんだ。市街戦設定だと、普通の車両とかもオブジェクトとして配置されるから、けっこう勉強になるんだよ。」

「ここをこうすると壊れる、つてのが実際に分かるし、どこを改良すれば良いか、課題を見つけてられて」

「なるほどー。全ては夢の為、でありますね。流星ですー!」

「いや、蛇道の時はクラフト……。工作兵やってるから、むしろ爆破とか、壊すのばっか上手くなって、不本意な部分もあるんだけどね……!」

「あああつ、分かります分かります!」

私も戦車が大好きなんですけど、試合では敵戦車を撃破しなくてはならなくて、心苦しい部分があるんですよ!

どうせなら敵味方に分かれず、ただ戦車を愛でていたいのに……!」

「や、それはどうなんだろう」

「あれ。ダメですか?」

お客様と雑談なんて、本当はいけないんですけど、意外な事実が判明したりして、けっこう盛り上がりすぎてしまいました。

整備道と蛇道を両立させるだけでなく、蛇道の中にまで夢の一端を見出すとは、流石ダンチョー殿。敬服するばかりです！

余談ですが、蛇道でも車輻は普通に使いますし、アグレッサーとしてAI制御の最新自動戦車も出るみたいです。

テクノロジー制限は、設定された時にしかありません。と言いつつも、最新式のは値段が高いので、防具以外は一代前前の武器などを多く使うそうです。

男性が戦車に乗るのは歴史的な背景から忌避されていますが、オーブントップの車輻や、非武装の車輻には問題なく乗っています。後は航空機ですか。

一時は航空機道という武道も持て囃されたようですけど、こちらは戦車道と違い、あつという間に廃れてしまいました。

空は地上のように区切ることが出来ませんし、実弾ではなくペイント弾を使うにしても、万が一、視界を塞がれた後のリカバリーが難しく、墜落などの危険性が高かったためです。

海の上だと機体とパイロットの回収が困難で、地上ではうっかり競技範囲を飛び越え

て住宅地上空に行っちゃったり……。

いかに競技と言えども……いいえ。競技だからこそ、何の関係もない一般の方に迷惑を掛けるなんて、絶対にあっちゃいけませんもんね。

その代わり、アクロバット飛行などを行う競技が、現代では盛んになっています。まあ、パイロットは男女問わず、ですけど。

「お客さん……。随分、家の娘と仲がよろしいみたいだねえ……？」

「ひつ。い、いえ、その、ですね……」

「ちよ、お父さん!? ダンチョー殿に何してるんですかっ!？」

あ、いけません。思考が横道へ逸れてました。

というかトリップしてる間に、お父さんがダンチョー殿を凄い顔で睨んでいます!? 慌てて止めに入りましたが、何してるんですかもう!

「全く……。あなた。後は私がやるから、奥へ行ってちょうだい」

「いや、これはだな、優花里の事を思っ……」

「早く行って」

「はい……」

お母さんにも叱られて、しょんぼり、肩を落としながら家の奥へ消えていくお父さん。何がしたかったんでしよう？ 別に私とダンチヨ―殿が仲良くしてても、問題ないと思っくんですが……。

とにかく、髪を切るのはお母さんに交代です。あ、ちゃんと免許持ってますから、安心ですよ？

「本当にごめんなさいねー？ あの人ったら親バカで」

「ちよつとだけ、怖かったっす……」

営業スマイルのお母さんに、疲れた顔のダンチヨ―殿。

このままでは今回限りのご利用になってしまいそうな気も……。

近所でも評判の、お母さんのトーク力に期待するしかないようです。

頑張ってください！

「それで、ダン君？ 学園艦に居るって事は、ご家族はやっぱり艦内のお仕事を？」

「はい。父さんが浄水施設とか、発電設備の保守管理を。その関係でずっと学園艦に……」

「あらまあ、凄いい仕事じゃない。学生が運営の主体とは言え、その道のプロが居ないと危ないものねえ。整備道やつてるんだし、将来的には引き継ぐのかしら」

「いえ、オレは、その……」

——つてえ、さつそく地雷踏んでますう!?

ダンチョー殿の将来の夢は設計者で、それを話すと間違いなく、お母さんは深い事情を突っ込んで聞いてしまうでしょう。それが主婦です。

そんな事になれば、ご親戚の不幸を説明しなければならず……。

あの空気はいけません！　ここは私が！

「違うんです！　ダンチョー殿は将来、安心安全な車の設計をしようと志している、立派な方なんですよ？」

「車の設計？　あらあら、そうなのお。しっかりした将来設計を持つてるのねえ。……でも、なんで優花里が答えるの？」

「細かいことは良いじゃないですか。私、ダンチョー殿を影ながら応援する、と決めた

んです！」

「ふうーん。なるほどねえ……。あ、ちよつと倒しますねー」

いよし、なんとか乗り切った！

髪を良い具合に切り終え、お母さんはシャンプーの体勢に。

なんとか誤魔化せましたね。良い仕事しました……。た？

あれ。お母さんが目で呼んでる……。

（優花里、でかしたわ！ 将来有望じゃない、逃しちや駄目よ！）

（は？ なんの事ですか……。？）

（整備道やつてるなら食いつばぐれもないし、蛇道やれるなら、優花里を守ってくれそうだし。

いやー、もしかしたら孫の顔は拝めないんじゃないかと心配してたけど、これで安心だわあ）

（な!?! ななな、なんですとおおおっ!?!）

ダンチョー殿に聞こえないよう、小声で話す私達ですが、その内容に驚いてしまいま

す。もちろん小声で。

ま、孫の顔つて……。え？ 私、ダンチヨー殿と結婚するんですか!? いつの間に婚約してたんですか!?

流石に学生結婚はマズいと言いますか、戦車道する時間なくなりそうで迷惑なんですが……。

「あのー、すみません。耳の上辺りが痒いんですけど……」

「あらあら。こつち?」

「あ、いえ逆の……あ、そこですそこ。ああ……。頭を洗って貰うのって、気持ち良いっすね……」

「うふふ。気に入って貰えてなによりだわあ」

頭を洗われているダンチヨー殿の声に、お母さんは上機嫌過ぎる声で対応していました。

いくら戦車一筋な私でも分かります。これ、私とダンチヨー殿をくつつけようとしてますよ、ねえ?

お小遣いの為の手伝いが、こんな事になるとは……。

ううう、一体どうすれば良いんですかあ!?



十数分後。

散髪を終えたダンチョー殿を見送るため、お母さんと私は玄関前に立っていました。すっかり髪も短くなり、サツパリした様子の彼が、立ち去る前にこちらを振り返ります。

「それじゃあ、お世話になりました」

「いえいえー！ これからも、優花里と仲良くしてやって下さいね？」

「はい？ ……まあ、戦車道で繋がりがありますから、それは勿論っすけど」

「ええ、ええつ。まずはお友達からよねえ」

「へ。あー、はい……」

「お母さん！ ダンチョー殿に迷惑だから！」

妙にツヤテカした笑顔のお母さんを店内へ押し込み、私はダンチョー殿と家を離れま
す。商店街の入り口までお見送りです。

しかし、やつぱりと言いますか、会話はありません。

私ですら分かるほどですから、ダンチョー殿に分からない筈がないでしょう。

……とりあえず、謝っておかないと。

「色々、すみませんでした。母が訳の分からない事を」

「……もしかしなくても、勘違いされてる、よね。やつぱ」

後頭部を撫でながら、彼は視線を泳がせています。

歯切れも悪いですし、困っていて当然ですか……。

「あ、あはは。嫌ですよねえー。こんな戦車オタクのモジヤモジヤ頭と勘違いされたつ
て。ホントすみません、母には私から言っておきますので……」

「……別に、嫌じゃないけど」

「はえ？」

重たい空気が嫌で、私は自虐的に茶化してみるのですが、返ってきたのは予想外の反応でした。

空気を讀んだ苦笑いとかじゃなく、とても静かな肯定。
立ち止まったダンチョー殿は、私を見つめて拳を握ります。

「好きな物があるって事は、恥じる事じゃないよ。

それで迷惑掛けられてるってんならまだしも、そうじゃないし。
良いじゃん、戦車オタク上等。オレだって自動車オタクだ！」

胸を張って語るダンチョー殿が、こちらへ拳を突き出し、ニカッと笑います。

……なんでしよう。胸がこう、ジーンと来てしまいました。

そっか。きつとこれが……友情というやつなんですね！

武部殿達とは少し違うような感じもしますけど、この嬉しい気持ちは確かです！

西住殿？ 西住殿は尊敬する方なので、敬愛と言った方が正しいのですつ。あ、戦車へはもちろん愛情で。

まあともかく、私達は自然と笑い合い、ついでに拳も軽くぶつけ合います。

それこそ、友達同士がそうするように。

「ありがとうございます、ダンチョー殿！ 私、嬉しいです！」

「うん。じゃあ、また」

「はい！ また来て下さいねー！」

颯爽と歩き去るダンチョー殿を、私は大きく手を振って見送ります。

最初はどうかと思うかと思いますが、最終的には素晴らしい一日になりました。いえ、記念日ですね。

なんの記念日か、ですって？

それは勿論、私に戦車道以外のお友達が、初めて出来た記念日です！

まあ、戦車の整備を頼んでるんですから、完全に無関係じゃないですけど。

いやー、嬉しいものですねー。まるで普通の女子高生みたいですー！

……あつ。記念日といえば、今日は月刊 戦車道の発売日でした。

お小遣い貰ったら、忘れないうちに買いに行かなきゃ……。

秋山 優花里、自宅に帰投するであります！

第三話 「由々しき事態。パート2でありますう……」

「ううううう……。由々しき事態。パート2でありますう……」

厳しかった月末を乗り越え、友達も増えて充実した日々を送り始めた、今日この頃。
お風呂から上がった私は、寝巻き姿のまま携帯を構え、ひつじよーに差し迫った問題に、またしても頭を悩ませていました。

耳には呼び出し音が聞こえており、悩んでいられる時間の限界を教えてください。

(この待ち時間が、緊張感を煽るであります……)

プルルルル……という音が続いているだけで、サツパリしたばかりの手に汗が滲みま
す。

以前、ライカ殿に偵察の救援を依頼した時は、こんな事はなかったのですが……。

やはり、これからお願いしようとしている事の内容が、そうさせるんでしよう。ううう……。早く出て欲しいような、出て欲しくないような……。

『はい、もしもし』

「あっ!!? あああ、あのつ、ダンチョー殿でありますかつ!!?」

『は? その声は……秋山さん?』

「そ、そうでありますつ。夜分にすみません……」

唐突に呼び出し音は途切れ、電話を掛けていた相手である、ダンチョー殿の声が聞こえて来ました。

緊張で上擦ってしまう私の返事でしたけど、ダンチョー殿も驚いているようでありま
す。

当然ですよね、まだ教えてない相手から掛かって来たんですし。

『いや、それは良いんだけど……。どこでこの番号を?』

「失礼かとは思ったんですが、ツチャ殿にお聞きしました。どうしても連絡を取りたく
て……」

『ツチャめえ……。まあ良いか、秋山さんなら。で、どうかした？』

「あ、はい……。じ、実は、お願いがあるんです……。」

『お願い……。？』

ツチャ殿を恨めしく呼ぶダンチョー殿でしたが、カラリと声色を変え、要件を尋ねてきます。

前置き無しに本題へ入ってしまい、私は少々慌ててしまいましたけれど、ここは思い切った方が良くと、大きく深呼吸して……。

「ダ……ダンチョー殿っ！ 今度の日曜……。わ、わわ私と、デートして貰えませんかでしょうかつ！」

『……。はい？ デートお？』

ダンチョー殿を、デートに誘いました。

何故こんな事になったのか。

事は二日ほど前に遡ります……。



「優花里。はいこれ、今月分のお小遣い」

「ははあー！ ありがたく頂戴致しますー！」

「無駄遣いしちゃダメよ？ ……と言つても無駄なんでしょうけど」

「何を仰いますやら！ 私はお小遣いを無駄に使った事なんてありません！ 使い過ぎ
て後悔したことは無数にあります！」

「胸張つて言わないの、全く……」

夕食を食べ終え、後片付けも済んだ家の食卓にて。

お母さんの差し出す封筒を、私は恭しく受け取ります。

毎月の儀式ですが、やはりこういう時、親のありがたみというものを実感しますねえ。
現金で申し訳ない……。

それはさて置き、封筒の中身を確かめ、さっそく使い道を考えながら部屋に戻ろうと
する私を、その日のお母さんは何故か呼び止めました。

「あ、ちよつと待つて。……はい、これも」

「なんですか……？ カード？」

「そう、電子ウォレット。3万円分チャージしてあるわ」

「ざっ!!? 3万円っ!!?」

お財布から取り出した小さなカードを受け取り、その正体に思わず愕然です。

3万円。3万円チャージ済みの、電子ウォレット。

食堂の値段が高めな食券が一枚500円ですから、60枚分。ティーガアの履帯は……流石に買えません、機銃の弾とか、練習用砲弾とかなら……。

と、とにかく、臨時収入にしては大金ですっ！

「あの私、何かしましたか!!? こんな大金貰う理由に、心当たりが無いのであります
がっ!!?」

「戦国武将みたいになつてるわよ。だつて、お洒落にはお金が掛かるものでしょう?
それに、デート代だつて必要でしょうし」

「はい? デート?」

テンパって口調を変えてしまう私に、お母さんは更に畳み掛けます。

お洒落？ デート？

なんで私とは著しく縁遠い言葉が出てくるんですか？

「やだもう！ ダン君とのデートに決まってるじゃない。今度の日曜日にも、二人で遊びに行つてきなさいな」

「えええええっ!?!」

お母さんは実にオバさん臭く手を振り、またしても驚愕する私。

しまったあ！ ダンチョー殿との関係を訂正するの、すっかり忘れてましたあ!?

どど、どうしましょう……? なんとか誤魔化さないと……!?

「ででで、でも、ダンチョー殿にも都合があるでしょうし……」

「そこは優花里が頑張んなさい！ なんの為に戦車道やつてるの!」

「戦車を愛するためであります!」

「一般的にはそうじゃないのっ。いい？ 戦車道は乙女の嗜み。つまり、男をゲットす

るためにあると言つても過言ではないわ！」

「過言じゃなくても語弊があると思います……」

「とやかく言わない！ 優花里。そのお金は、優花里の将来のために渡したお金よ。」

戦車道グッズに使つたら、今後のお小遣いは全額カットします。明細も確認しますからね」

「ええっ!? そ、そんなあ！ 3万円もあれば結構色々買えるのに……!」

無情過ぎるお母さんの宣告に、私は知らず、床へ崩れ落ちていました。

金物系は買えそうにないですけど、戦車関連書籍とかだったら、今まで手を出せなかった専門書とか、一杯あるんです。

これを使えば、そのうち何冊かは手に入れられるのに……。

手元にあつても使えないお金なんて、なんの意味があるんですかあ!?

「とにかく、お母さんは応援してるから！ ちゃーんとダン君を誘うのよ？ デートの

一環としてなら、ちよつとぐらいグッズ買つても良いし。ね？」

「はあ……。一応、挑戦してみますけど……」

咽び泣く私の肩を叩き、お母さんは巧みな話術で妥協案を提示します。

うう……。そんな風に言われたら、ダンチョー殿を誘うしか……。

やっぱりお母さんには、敵いそうもありません。

仕方なく、覚悟を決めて私は立ち上がり、お風呂へ向かおうと居間を横切りますが、ふとその視界に、プルプル震えるお父さんの姿を捉えました。

はて。どうしたんでしょう？　と思っていたら、お父さんは卓を強く叩き、怒り肩で声を張り上げます。

「うぐぐぐぐ……っ！　ま、まだ優花里に男女交際は早過ぎるっ！　おっ、お父さんは認めないぞー！」

「何か言ったかしら？　あ　な　た　」

「なんでもありません……」

……張り上げはしたんですが、ゴゴゴゴゴ、という効果音が聞こえて来そうな、お母さんの迫力ある笑顔を前にした途端、意気消沈してしまいました。

うん。お父さんには期待しない方が良さそうですねー。分かってましたけど。

はあ……。とりあえず、ダンチョー殿の連絡先の入手法から考えなければっ。

目指せ、素敵な戦車ライフ！ であります！



……という感じで、私はダンチョー殿を偽装デートへと誘うハメになった訳です。完つ全に、お母さんの掌の上ですよねえ……。逆らったりしたらどうなる事やら……。

今日は、ダンチョー殿との約束の日。

待ち合わせの場所である近所の公園に向けて進軍中です。時間的には一四〇〇——あ、午後二時前であります。

「うーむ……。デートって、こんな格好で良かったんでしょうか……？」

私、学校の制服以外はスカートとか持つてないもので、考えた結果、冷泉殿のお婆さんをお見舞いに行った時と、全く同じ格好をしていました。

ポケットが沢山あるハーフパンツに、「7TP」のロゴが入ったシャツ。

あとはいつものリュック——を持って来たかったのですが、流石に駄目じゃないかと気付いたので、大きめのポーチで我慢してます。

ちなみに7TPとは、My Favorite Tankであるポーランド軍の7TP双砲塔型戦車を表しているんですよ？ 文字通り、砲塔が二つ並んでいる独特なフォルムで……あれ？

「あの後ろ姿は……」

ちょうど、公園の入り口が見えてきた時です。

車止めの低い柵に腰掛ける、見慣れた人影を発見しました。

短く切り揃えられた髪。見覚えのあるパーカーとジーンズの組み合わせ。

もしやと思って小走りに近づいてみれば、やっぱり。

「ダンチョー殿？ もう来ていたのでありますかっ？」

「お、秋山さん。ちわっす」

「こんにちはであります！」

軽く手を挙げての挨拶に、私は反射的に敬礼で返します。

にしても、驚きです。まだ待ち合わせの時間より三十分も早いのに。

「まあ、形だけとはいえデートだしね。女の子を待たせちゃ悪いかと……。つていうか、秋山さんだつて随分と早くない？」

「それは……。無理をして付き合つて頂いてる訳ですから、待たせちゃいけないかと、思
いまして……」

「じゃあ、同じだ」

「……ですね？」

全く同じ理由で、早めに待ち合わせ場所へ来てしまった。

それがなんだか、おかしくて。私とダンチヨ―殿は小さく笑い合います。

こういうの、なんか良いですよ？ いかにも友達つて感じですよ！ けど、油断し
ちやいけませんっ。

いちもの調子で戦車のうんちくとか語ったりしたら、ドン引きされてサヨウナラ
……。

ダンチョー殿は良い人ですが、そんな可能性も、イタリア軍が一週間のパスタ断ちに成功するレベルで存在するかも知れませんし。

せつかく得た新しい友達。なくさないよう注意しなければつ。

「んじやま早速、せんしや倶楽部に繰り出しますか」

「あ、いえ。お待ち下さいダンチョー殿」

「ん？」

柵から腰を上げ、偽装デートの最終目的地へ向かおうとするダンチョー殿を、私は引き止めます。

本当はすぐにも直行して、例の専門書を入手したい所なんです、事はそう簡単でもないんですよ。

「ただ単に、せんしや倶楽部に行つて買い物するだけじゃ、間違いなくお母さんから怒られてしまいますので、適当にブラブラしないと不味いです」

「……そう？ でも、流石に着いて来てはいないだろうし、バレなければ……」

「いいえ！ 学園艦と言えども、ご近所ネットワークを甘く見てはいけません！ お向

かいの山田さんや、斜向かいの鈴木さん、裏手の加藤さんが見ていないとも限らないんです！」

「何それ。〆〆近所ネットワーク怖過ぎる……」

偽装デートに潜む危険性を力説すると、ダンチョー殿は若干顔を青くしました。

でも、本当の事なんです！

学園艦とはいえ、近所のオバ様方の井戸端会議に登る話題は変わりません。

誰々さんが浮気したとか、あの子とあの子が付き合いだしたとか、今日はどこそこのスーパで卵が安いだとか……。

そういった方々の目はどこにあるか分からないので、注意して行動しなければならぬのです！

まあ、私とダンチョー殿の関係も誤解されてしまいますけど、専門書の為。背に腹は変えられませんか。

こういう訳でして、どこか適当な場所で「デートしてますよ」アピールをしなければならぬのですが……。

「と言いましても、私、せんしや倶楽部以外にはコンビニとか74アイスクリーム位しか

寄った事ないんですよ……。ダンチョー殿、どこか時間潰せる所、知ってます?」
「うくん、時間潰しねえ……」

立ちっ放しもアレなので、とりあえず、歩きつつ話し合いをする私達。

私よりも交友範囲が広そうなダンチョー殿ですから、きつと名案を思いついてくれるはず!

……と思っていたんですけど、腕組みをして三十秒、じっくり考えた彼は、首を横に振りました。

「ごめん、正直に言う。女の子と二人っきりで出掛けるの、これが初めてだから分かんない」

「あれ? そうなんですか。意外です」

「意外って……。オレ、そんな遊び人に見える?」

「いえ、そうじゃないんです。ほら、自動車部の皆さんと仲が良いじゃありませんか。だから、遊びに行ったりとかしているものだとばかり……」

「ああ……。自動車部ね……」

出掛けた事はあるけど、体良く荷物の上げ下げに使われてただけだよ。

ブレーキパッドとか、マフラーとか、ホイールとかドライブシャフトとか。

地味に重たいもんばっか人に持たせやがってえ……っ!」

「お、落ち着いて下さい、ダンチョー殿っ。ええと、アレですよ! きつと皆さん、ダンチョー殿を頼りにしてるから……」

なにやら溜め込んでいたものがあつたらしく、ダンチョー殿が握り拳に怒りを宿します。

け、けっこう大変だったんですね……。

しかし、基本なんでも自分達でこなす自動車部の皆さんが頼るといふ事は、信頼の何よりの証ですよ!

彼自身、本気で怒っていた訳じゃないようで、フツと身体から力を抜きました。

「まあ、嫌な気はしないけどね。なんだかんだ、ナカジマさんとかにはよく飯を奢って貰うし」

「なあんだ……。やっぱり仲良しなんですね?」

「……多分。でも、あの人達と出掛けたのは、絶対にデートじゃないって言い切れる。うん、それだけは間違いない」

今度は自信満々、繰り返し何度も頷くダンチョー殿。

なんと言いますか、気の置けない関係って、こういうのをそう呼ぶんでしようねえ

……。

私は生来のボツチ気質故か、あんこうチームの皆さんにも、まだ気を遣ってしまいう部分が多いですし、コミュ力の高い方が羨ましいです。

「にしても、本当にどうしましょう？　ただ歩いてるだけでも時間は潰せますけど……」

「デートっていう建前なのに、それもなあ……。んー、時間的には少し早いけど、なんかオヤツでも食べる？」

「おお、良いでありますねっ。幸い、軍資金はタツプリあります！　普段は食べられないような物も食べられますよー！」

「いや、流石に自分で払うから……。取り敢えず、繁華街の方に出ますかね？」

「はいっ。パンツアー・フォーであります！」

「お。戦車前進、だっけ？」

「そうですっ！　これはドイツ語ですねえ……」

結局、学生にとっての定番道草、買い食いをする事に決まり、私達は並んで歩き続けます。

いやー、やっぱりお友達とのお出掛けは楽しいですねっ！

……………あ。

戦車の話題は自重するって決めてたのに、私ってば…………。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所を変えまして、上甲板の艦首寄り。

学園艦においての繁華街へと辿り着いた私とダンチョー殿は、携帯で調べた話題のお店、パットン・ポップコーンの前に居るのですが…………。

「見事にカップルだらけでありますね…………」

「どっから湧いたんだコイツ等…………」

どこを見渡しても、カップル、カップル、カップル、カップル。

凄まじい長さの行列が、ほぼ男女のペアで埋め尽くされている有様です。

確かに色んな割引きをやっているとHPに書いてありましたが、ホント、どこに隠れてたんでしょうか？ この人達。

「他の店、行く？」

「ですね……。ちよつと人間酔いしそうです……」

並ぶにしても、順番が来るまで何時間も待たされそうですし、正直ポップコーンにあまり興味ありません。

無駄に疲れそうでもありますから、無難な74アイスクリームにでも行った方が良さそうです。

そう思い、人混みへと背を向けた時でした。

「あれ？ そこに居るの、もしかして秋山さん？ そっちはダンチョー、かな。珍しい取り合わせだね」

突然、見知らぬ女性が人混みを掻き分け、こちらに近付いてきたのです。短めの髪を後ろで括って、シユツとしたスカートとキャミソールを合わせた……うん、美人ですね。

美人さんなんですけど、記憶には無いような……？

ダンチョー殿も同じみたいで、首をかしげながら女性に問い掛けます。

「失礼ですが、どちら様で？　なんでその呼び方を……」

「へっ。……あ、そっか。この格好じゃ分かんないか。ちよつと待つて」

一瞬だけ、物凄くショックを受けたような顔を見せる女性でしたが、何かに気付いたらしく、自らの身体を改めます。

そして、髪を括っていたゴムを取ると……。

「これでどう？　分かるかな」

「ほ、ホシノさん!？」

「でありますかあ!？」

「そんなに驚かれると傷付くなあ……」

そこにはなんと、自動車部のホシノ殿が立っていました！

ぜ、全然分かりませんでした。

普通の洋服を着て髪型変えるだけで、見違えますねえ……。

でも、当のホシノ殿は、私達の反応に思う所があったのか、肩を落としてしまわれま
した。

あああ、こういう所で気が回らないから、私はダメなんですよう……！ とにかく謝
らないと！

「すみませんっ。ホシノ殿のスカート姿、初めて見たものですから、ええとお、よ、良
くお似合いですあります！」

「あはは、どうも。ま、普段がああ格好だから、しょうがないかな」

「髪型違つてましたしね……。とうかホシノさん、何してたんすか？」

「何ってそりゃあ、みんなとポップコーン食べに。アタシ等だつて、四六時中車を弄つて
るばつかじやないよ？ たまには休憩入れないと、根詰めちゃうしさ」

外したヘアゴムをクルクル回しつつ、ホシノ殿が爽やかに微笑みます。

ほあく……。こうして見ると、やっぱり美人でありますね……。

普通に着飾ったら彼氏の一人や二人、あつという間に作っちゃいそうです。

まあ、ホシノ殿は車の方が好きなんでしょうけど。

「おーい、ホシノー！ 買って来たよー！」

「お。待つてました。悪いね、ナカジマ。急に任せちゃつて」

「……あれ。ダンチョーと秋山さん？」

「おやおやー？ ひよつとしてデートですかなー？ ダンチョーも隅に置けないねー、このこのー」

「こら、やめんかツチャ。買い物付き合いだよ、買い物」

ホシノ殿の意外な一面に驚いていると、今度はポップコーンを持ったナカジマ殿、スズキ殿、ツチャ殿が、店内から姿を現しました。

ナカジマ殿は半袖シャツに短パンのボーイッシュ風。スズキ殿はパンツルックにチヨツキと帽子の宝塚風。ツチャ殿はふんわりしたスカートにボレロのお嬢様風、でしょうか。

皆さん、普段からはまるで想像のできない、可愛らしい立ち姿です！ いえ、私なん

かに褒められたって嬉しくないかも知れませんが。

ちなみに、ダンチョー殿はツチャ殿に肘でツンツンされ、鬱陶しそうに手で追い払ってました。　　なんだか兄妹みたいです。

　　というか、ツチャ殿の持つてるポップコーン、毒々しい赤色をしてるんですけど、何味なんでしょう……？

「ま、深くは聞かないけどさ。でも、今から買いに行くんなら、止めておいた方が良いでしょう？」

「え？　　どうしてでありますか、ナカジマ殿？」

　　ホシノ殿の分らしいポップコーンを手渡ししながら、ナカジマ殿は言いました。

　　並ぶつもりはなかったんですが、反射的に聞き返してしまうと、スズキ殿が帽子で顔を扇ぎつつ答えてくれます。

「見ての通り、凄いい行列だからだよ。カップル割りき目当ての。いやー、独り身の女があの中に入る居た堪れなかつたら……」

「そ、そうっすか……。どうする？　　割りきあるんなら……」

「いえ、あれに並ぶと帰りが遅くなりそうですし、そうまでして食べたいわけでもありませんから、今日は止めておきましょう」

「あ、うん。そうだね……」

割引きという言葉に惹かれたようで、ダンチョー殿は行列に興味を示すのですが、私は止めておいた方が良いと進言します。

この進み具合いから判断するに、商品を受け取るまでに、一時間は掛かるんじゃないでしょうか？

サンダースのケイ殿辺りなら、並んでも買いそうな気はしますけど、そこまでポップコーンに愛情を持つてはいませんし。何より、本当はカップルじゃないのに割引きして貰うって、ちよつと罪悪感も湧きますし。

でも、ダンチョー殿はポップコーンに興味が湧いていたらしく、少し落ち込み気味？うむう、悪い事しちゃいました……。

あ、なにやらスズキ殿達が、ダンチョー殿に近付いて？

「気を落とすなよ、ダンチョー。ほら、ポップコーン分けてあげるから。醤油バターだぞ

……」

「アタシのも食べな……。アーモンド・キャラメル味」

「じゃあ、ついでにワタシのも。はい、イチゴミルク味」

「こっちのハバネロ味も美味しいぞー?」

「んごつ、ちよ、や、味が混ざ、むぐう!」

スズキ殿、ホシノ殿、ナカジマ殿、ツチャ殿が、次々とポップコーンをダンチョー殿の口へ放り込んでいきます。

抵抗する間もない、見事な連携攻撃でありました。流星は自動車部の皆さんですね! ……つて感心してる場合じゃないですう!?! は、ハバネロお!?! そりや毒々しい訳ですよ!?!

「あわわ……。大丈夫でありますかつ、ダンチョー殿お!?!」

「だ、大丈夫、じゃない……。口の中が、しょっぱ香ばしく甘痛い……。つ」

「なんとお劳しい……。これ、飲んで下さい。カルピ〇です。こんな事もあるうかと持って来てました!」

「ありがとう……。秋山さん、ありがとう……。つ!」

悶絶するダンチョー殿を支え、私は腰のポーチを探ります。

外でジューズを買うとお金掛かりますので、水筒に用意して来たんです。こんな風に使うとは思ってませんでしたけど。

カップに注いだカルピ〇を一気飲みすると、人心地ついたのか、至福の表情を浮かべるダンチョー殿でしたが、次いですつくと立ち上がり、涙目で自動車部の皆さんを睨みました。

「人をオモチャにするのも大概にしろよアンタ等!? 行こう! 一緒に居ると弄ばれる!」

「うわ、だ、ダンチョー殿っ? え、えっと、皆さん、また今度!」

よつぼど味の多重攻撃が堪えたのでしよう。私の腕をガシツと掴み、ダンチョー殿は歩き出しました。

流石に男子の力には逆らえませんが、用事も無かったので特に抵抗せず、そのままナカジマ殿達に別れを告げます。

ポップコーン片手に手を振る皆さんの姿は、意外なほど早く、小さくなって行くのでした。

ダンチヨー殿、凄く怒ってるように見えますけど……。きつと、喧嘩するほど仲が良
い、という奴なんでしょうねー。

友達と喧嘩……。したことはないので、ちよつとだけ懂れます！

「あーあ。ダンチヨーは秋山さんに取りられちゃったかー。ホシノ、落ち込んじやダメだ
よ？」

「んえ!? な、なに言ってるのかなー? ナカジマつてば……」

「バレバレだって、普段からあんな密着してればさあ。な、ツチャ。……ツチャ?」

「デートかあ……。死ぬまでに一度はしてみたいなあ……。ハバネロうまー」

『普通に食べてる!?!』



自動車部の皆さんと偶然の出会いを果たしてから、約二時間半後。

一応、偽装デートっぽいイベントはこなしたと判断した私達は、せんしや倶楽部へと突貫し、ホクホク顔で店を後にしました。

まあ、ホクホクしてるのは主に私だけなんですけど。

「ずいぶん上機嫌だね、秋山さん……」

「当たり前ですよー！　今まで手が出せなかった専門書が、やっと手に入りました！　これが嬉しくないはずありません！」

ちよつとお疲れ気味にも見えるダンチョー殿に、私はスキップしながら答えます。

腕の中にあるのは、分厚くお高い戦車の専門書。一冊で7,500円以上する、戦車パーフェクトガイドの第一巻（全三巻）です！

いつかは買おうと思ってましたけど、こんなに早く手に入るなんてつ。それもこれも、お母さんの勘違いとダンチョー殿のおかげですね！

まあ、せんしや倶楽部に居た二時間半のほとんどが、私のうんちく語りだったので、ダンチョー殿にはつまらなかつた……ですよねえ。

自重できない自分の戦車愛が恨めしい……。

「ダンチョー殿。今日は本当にありがとうございます。」

結局、私の買い物に付き合わせるだけになってしまつて……。退屈でしたよね？」

「え。なんで？ 楽しかったけど」

「あえ？ そ、そうでありますか？」

「むしろ、秋山さんの方が退屈だったんじゃない？」

オレ、戦車の整備は出来るけど、全然歴史とか詳しくないから。

実際、せんしゃ倶楽部では話を聞くだけで、着いて行けなかった……」

「そんな事ありません！ 話を聞いて貰えるだけでも嬉しいものですし、普通の学生気分を味わえて、楽しかったであります！」

「いや、普通の学生だし、オレ等」

「あ。そうでした……。あはは」

一本取られてしまいました。が、なんだかそれも楽しくて、私は笑います。

懐の深い方ですね……。それに甘えてちやいけませんけど、本当、良いお友達が出来ました。

そんなダンチョー殿も、同じように笑顔を浮かべ……。

けれど、不意に真顔へと戻った彼は、おもむろに私の癖つ毛を梳きます。

……？ どうしたんでしよう？

「あの……。ダンチョー殿？」

「っ！ いや、いや、なんでもない。髪にゴミ付いてたから」

「おおお、そうでしたか。全然気付きませんでした。ありがとうございますっ」

「……うん、気にしないで。さ、そろそろ帰ろう。送るよ」

「はいっ」

なるほど、ゴミでしたか。

私って癖っ毛ですから、ゴミを巻き込みやすいんですかね？

お礼を言うと、ダンチョー殿は小さく苦笑いし、私を追い越して歩き始めました。

護衛までして頂けるとは、さすがダンチョー殿。紳士でありますっ。

と言つても、大洗女子は小さな学園艦。

三十分としない内に自宅が見えて来ます。

「送って頂いて、ありがとうございます。ダンチョー殿、気を付けて帰って下さいね？」

「ん。まあ、学園艦で変な事する奴も居ないだろうけど、一応気をつける」

「悪い事しても逃げ場ありませんもんね？ それではっ」

「じゃ、また」

別れの挨拶に敬礼をすると、ダンチョー殿も答礼を。

今度はキチンとした陸軍式です。せんしや倶楽部でお教えした甲斐がありました！

ダンチョー殿が背を向けるのを待ち、私も家へ。

さーてさて、早く部屋に行つてパーフェクトガイドを読み込まねば……。

「……あ、あのさっ」

「はい？」

ルンルン気分で自宅のドアを開けようとした時、背後からダンチョー殿の声が聞こえました。

振り返れば、先程より少し離れた位置で、彼は何やら、視線を泳がせています。

「こ、今度は、こつちから誘つても……良い、かな」

「誘うって……遊びにですか？ はいっ。戦車道の練習とかが無い日でしたら、OKですよっ。」

「いや、遊びじゃ——なんでもない。うん、じゃあ、近いうちに。また今度！」

気の早いお誘い……と言いますか、お誘いの確認？ でしたが、もちろん断る理由もないので、満面の笑みで返しました。

戦車道の練習だけはサボれないので、そこはちよつと心苦しいですけど。

私の返事を受け取ると、ダンチョー殿は何かを言いかけたのですが、誤魔化すように手を振り、そのまま走り去ります。

（なんだったんでしよう？ ダンチョー殿、なんだか雰囲気を変だったような……？）

歯に物が挟まったような言い方。

それが気に掛かる部分もあったのですが、無理に問い質すのも失礼かと思ひ直し、首を振ります。

大事なことなら、きつとダンチョー殿の方から話してくれます、よね？ お友達なんですから！ ……話してくれなかつたら少し落ち込みます。はい。

とりあえず、家に入りましょう。

そして夕飯を食べて、お風呂に入って、パーフェクトガイドですつ。
ひゃっほう！ 待ってろ540ページ！

第四話 「今から楽しみです！」

第六十三回 戦車道全国高校生大会がつつがなく終了し、大洗女子学園が廃校を免れ
てから、しばらく経ったある日。

私達あんこうチームは、もはや恒例となった、戦車格納庫での昼食会をしているので
すが……。

「はい、ライカ。あ〜ん♪」

「あ〜……。ん〜！ やっぱ、沙織さんの卵焼きは最高です！」

「もう〜。そんなの当たり前だよ。だってえ……。愛情っていうスパイスがタツプリ
入ってるんだから♪」

「なるほど！ 道理で美味しくて幸せな訳です！」

「……まだやってますね、あの二人……」

「え、ええつと……。ら、ラブラブだよね？ 沙織さんとライカ君……」

「イライラしてきた」

「まあまあ、麻子さん。落ち着いて下さい」

その一画で、妙にピンクいラブラブ・フィールドが展開されているため、私、西住殿、冷泉殿はゲンナリしていました……。

五十鈴殿は割と平気そうです。きつと彼氏持ち故の余裕なんでしょう。

ちなみに、私達は四号の後部——機関部の上に座っていて、武部殿達は砲塔の天板部分に腰掛けています。

しかし、あまり近くでラブラブされるというのも、やはり精神的に来る物があり、我慢しきれなくなった冷泉殿が、すつくと立ち上がります。

「敢えてキツイ言葉で言わせて貰う。沙織、ライカ。ウザいぞ」

「じゃあ今度は俺が……。沙織さん、あくん」

「あく……んっ。んふふ、ライカの作った卵焼きも美味しい♪」

「人の話を聞けお前達っ！」

冷泉殿の低音ボイスも、武部殿とライカ殿には全く届いていないらしく、何事もな

かったかのように卵焼きをアーン。

流石の冷泉殿も堪忍袋の尾が切れたみたいで、更に声を荒らげるのですが、そこに苦笑いの西住殿が割って入ります。

「ま、麻子さん、気持ちは分かるけど、ここは冷静に……」

「何を言った所で、あのラブいフィールドは貫けないと思います。128mm砲の直撃受けても平然としてそうです」

「諦めましょう、皆さん。愛する殿方が隣に居ると、どうしてもそちらに集中してしまうものですから」

一応、私も西住殿に追隨するんですが、ぶつちやけ諦めてます。

何をした、何を話した、明日は何をしよう。その他もろもろの惚気話を毎日聞かされ、なおかつ見せつけられている側からすれば、諦める以外に選択肢がないんですよ……。

五十鈴殿に限っては、武部殿の側に立ちつつ、の意見みたいですけど。

それに思う所があったのか、西住殿はイチヤつき続ける二人から視線を逸らし、五十鈴殿へと向き直りました。

「華さん。ちょっと聞いても良い？」

「はい。わたくしに答えられる事でしたら」

「その……。華さんは、なかなか若さんと会えない環境でしょ？ 寂しかったりするの

かなあ、って……」

「もちろん寂しいです。沙織さんのように、会おうと思えば直ぐに会えるというのは、羨ましいですね。でも……」

「でも……」

武部殿の恋人であるライカ殿は、大洗女子の男子分校に通う生徒。その気になれば毎日会って話せます。というか向こうからやって来ます。

しかし、ほんの一ヶ月ほど前、五十鈴殿と結ばれるに至った男性——若さん殿は、陸の方にお仕事を持つ若い職人さんでした。年齢は二十歳とのこと。

なんでも、双方の御両親公認の上、結婚を前提としたお付き合いだとか。おめでたいですね！

けど、学園艦に通う五十鈴殿とは、物理的に会うのが難しい環境です。

箸を止め、いつもより少なめ（私にとっては大盛り）な御弁当を見つめる姿は、本人が仰ったように、とても寂しげな雰囲気を漂わせていました。

ところが。

不意に微笑んだ五十鈴殿は、ピンと背筋を伸ばして、こう言い放ちます。

「会えない時間が育てる愛……。というのも、素敵だと思いませんか？」

「おおお……。っ！ 大人の女の発言であります！ 流星は五十鈴殿ですっ！」

思わず感動し、拍手してしまう私でした。

西住殿や冷泉殿も、「華さん、凄い……。！」やら、「これが真のリア充という奴か」やら。

私自身はあまり興味ありませんが、戦車道で繋がった仲間の幸せそうな姿は、素直に喜ばしいです！

「けど、五十鈴殿まで武部殿化しなくて良かったですよ。二人同時だと、精神的なダメージが増えそうですし」

「全くだ。こっちは色々あって疲れているというのに、沙織は全く自重しないからな……」

「え？ 麻子さん、何かあったの？」

「お悩み事でしたら、相談にのりますよ」

「…………いや、まだいい。…………ありがとう」

珍しく、睡眠時間以外の事で弱音を吐いた冷泉殿を、西住殿と五十鈴殿は心配そうに見つめます。

私としても気掛かりでしたけれど、本人が大丈夫と言うなら信じましょう。

もし傍目にも大丈夫じゃなくなったら、強引に首を突っ込む覚悟はありますけどね？
仲間の危機はチーム全体の危機、であります！

と、心の中で宣言していた時。

格納庫入り口に、見覚えのある人影を見つけました。

短い髪に、工学科の目印でもある黒いツナギ。

キヨロキヨロと中を見回すその人は…………ダンチョー殿ですね。

「ダンチョー殿？　こんな時間にこっちへ来るなんて、珍しいですね」

「おう、秋山さん。ごめん、ちょっと用があつてさ。先に済ませちゃうから。おい、ライカー…………ライカーツ！」

「無理ですよ、聞こえてないです。私達も、さつきから何度か話し掛けているんでありま

すが、無視されてまして……」

「……耳、塞いどいて」

声を掛けてみると、ダンチョー殿は軽く手を上げた後、こちらに向かつて来るのですが、目的は私達ではないようです。

あいも変わらずイチチャついでいて、そろそろキスでも始めるんじゃない？ という距離のライカ殿を、彼は大声で呼びました。

……が、反応は当然なく、頬を引き攣らせるダンチョー殿。イラつとしてますね、あれ。

その表情を維持したまま、彼は腰に巻いていた工具ベルトから何かを取り出し――

《イチチャつくのも大概にしろバカップルがーっ!!》

「きゃ!! えっ!!」

「何だっ! ……って、ダン?」

――格納庫全体に轟く声で、ありつたけの怒りを叫びました。

へ、蛇道で使う小型の拡声機ですか……。耳を塞いでもキンキンします……。

しかしその甲斐あって、武部殿とライカ殿は現実空間に戻って来たみたいです。

「いきなりなんだよ、ビックリするだろっ?」

「何度呼んでも気付かない上に、近寄り難いフィールド張り巡らせてるオマエが悪い」

「そりゃあ、悪かったけど……。何の用だよ?」

「ほれ。蛇道関連の書類。提出期限、今日の放課後までなのに、お前どこにも居ないから、先生が怒ってたぞ」

「あつ。あっちゃあ……。すっかり忘れてた。ありがとな、ダン」

「別に良いけど。というか、前から疑問だったんだけど、なんでオマエまでその呼び方?」

「お前だって俺のことライカって呼んでるだろ。相子だ相子」

四号のフエンダーにヒョイッと飛び乗ったダンチョー殿が、ライカ殿に何やらプリントを渡しています。

蛇道関連、ですかあ。きつとアレですね。超短期の編入手続きして、他所の学校の試合に混ぜて貰うんでしょう。

グレーゾーンの出場法ですが、人間が主体の蛇道では結構あるみたいです。戦車道だ

と……ギリギリ？ 意義を唱えられたら面倒な事態になると思われます。

ここでちよつとした余談を。男子分校は学園艦の最下層……。喫水線下のブロックに存在します。

喫水線とは、いわゆる船の底近く。水に浸かる部分の事で、日は当たらず空気も淀みがちの、アンダーグラウンド的な場所ですね。

なので男子生徒は、少しでも日に当たれるバイトや学科を選ぶ傾向があるそう。

また、普通なら学科の違う生徒同士が交流を持つ機会は少ないはずですけど、男子はそもそも人数自体が少ないので、ほとんどが知り合いらしいです。

ライカ殿とダンチョー殿は蛇道という繋がりがりますし、普通にお友達だったよう
で。

話を戻し、御三方の現状。

武部殿はダンチョー殿を御存知なかったらしく、不思議そうな顔で彼等のやり取りを見守っていました。

けれど、我慢できなくなったのか、ライカ殿のシャツの袖をクイクイ引つ張ります。

「……ねえ、ライカ。知り合い？」

「はい、クラスメイトです。蛇道の助っ人を時々頼んで、試合では頼りになる奴なんで

すよ」

「ども。さつきはすんません、驚かせて」

「あ、いえいえ。私、ライカの 恋 人 の ！ 武部 沙織です。ダン君、よろしくつ」
「ええ、知ってますよ。知りたくもないのにコイツが色々と話してますから。あ、オレの名前は……」

「えー、そうなんですかー？ やだもー、ライカつたらー♪」

「だって、自慢せずにはいられないんですよ。沙織さんは俺にとって、世界最高の女性ですから！」

「ライカ……」

「沙織さん……」

「あの……。オレの名前……。言わせてよ……」

知り合いであると確かめて安心したのか、武部殿の顔に笑顔が戻ります。

そして、簡単な自己紹介が始まる……。かと思われたんですが、二人はまたしてもラブ
いフィールドを展開し、ダンチヨール殿を意識の外へ。

何を言っても無駄だと悟った彼は、うな垂れつつ砲塔を回り込み、私達の方へとやって来ました。

「お疲れ様です、ダンチョー殿」

「ありがとう……。ちよつと近付いただけで無性に疲れた……。あ、西住隊長も。お久しぶり」

「うん。ダンチョー君、久しぶり」

まずは、任務を遂行したダンチョー殿を労います。疲労しているのは想像に難くないですから。

予想した通り、力無くキューポラへと手をつく彼でしたが、驚く事に、西住殿とも顔見知りだったようです。

初対面であるはずの五十鈴殿も、驚きを隠せないみたいでした。

「みほさん、お知り合いなんですか？」

「色々と、戦車道に必要な品物を揃えてくれる人で、男子自動車部の部長さんなの。時々、発注品のリストを渡したりとかしてたから」

「……隊長は大変だな、仕事多くて。昼寝する暇も無さそうだ」

「あはは……。戦車道には必需品が沢山あるから……」

ペコリと、ダンチヨー殿へ頭を下げる冷泉殿の言葉に、西住殿は照れくさそうな苦笑いを浮かべます。

生徒会の小山殿と協力して、様々な品の発注を行っているのは知っていましたが、まさかダンチヨー殿ともお知り合いとは。さすが西住殿、人脈も広いですね！

「そうだ。西住隊長、今後の戦車の稼働予定について確認したいんだけど、いいかな」

「あ、ちよつと待つてね。ええと……。今月末に、聖グロリアーナ・プラウダとのエキシビジョンマッチが予定されてて、それに合わせて私達も練習をする予定だけど、今週末まではお休みです」

「ふむ、なーる……。と、了解。細々とした物は、それに合わせて仕入れとくよ。燃料配給の申請もやつとこうか？」

「はい。お願いします。小山さんには私から言っておくね」

「よろしくお願い致します、ダンチヨーさん」

「頼んだぞ、ダンチヨー」

「頼りにしてますっ、ダンチヨー殿！」

「ん、任された。……もうダンチヨーでいつかあ……」

挨拶もそこそこに、手帳を確認し合うダンチョー殿と西住殿は、事務的なやり取りを開始しました。

大会が終わったばかりですけど、それで私達の戦車道が終わった訳じゃありません。むしろ、ここからが本番です。

まぐれで優勝しただけの弱小校……なんて言われぬ為にも、練習試合や親善試合など、予定は目白押しなのであります！

そして、そういった行動を影ながら支えてくれているのが、ダンチョー殿を始めとする方々の、実に細かい書類仕事。戦車を動かす燃料だつて、タダじゃありませんしね？ 重要なお仕事を頼んでいる事が伝わったようで、五十鈴殿と冷泉殿が、改めて頭を下げます。もちろん私も。

胸を叩いて請け負う彼は、何故だか背中に影を背負っているようにも見えますが……。なんででしょう？

「あ、あ……。それで、なんだけどき。秋山さん……」

「はい、なんですか？」

……？ 本気で落ち込んではいなかったみたいですけど、今度は落ち着かない様子のダンチヨー殿。

皆さんの視線も集中し、一瞬たじろぐ彼でしたが、意を決するように表情を引き締めます。

「こ、今度の日曜、学園艦が帰港するだろ？」

その時、陸の業者さんに行くつもりなんだけど……。つ、付き合わない？

ほら、一般の人が入れない、戦車のパーツとか扱ってるところ。ビジターパス用意できるから……」

「え!? 良いんですか?!」 是非、是非お供させて下さいー」

「……そっか。良かった、迷惑かと」

「迷惑な訳ないじゃありませんか。今から楽しみです！」

なんと、ダンチヨー殿にお誘い頂いたのは、会員パスがないと入れないと聞く、戦車道専門店！

レアパーツなどのオークションも開催される場所なので、入場が厳しく管理されているらしいんですつ。

これを断るなんて、戦車乙女にあるまじき選択ですつ。当然、お供させて頂きますよー！

「まあ、素晴らしいですわ。ついに優花里さんも、戦車以外に興味を持たれるようになったんですね？」

「いや、これはどうなんだ。けつきよく戦車で釣ってるんじゃないのか……？」

「でも、凄い変化だよな？ いいなあ優花里さん、男の子とデートなんて。私、先越されちゃった」

喜んでOKの返事をする私に、五十鈴殿と西住殿は笑顔を、冷泉殿は難しい顔を浮かべます。

戦車以外に興味……？ デート……？

ううむ。どうやら、また勘違いされているようでありますね。

ダンチョー殿にも迷惑でしょうし、お母さんみたいになられると面倒ですから、ここはしっかり否定しておかないと！

「イヤであります、西住殿。デートじゃなくて、戦車道の一環じゃないですか」

「えっ？ ……で、でも、あの……」

「それに、私みたいな戦車バカ、ダンチヨー殿が好きになる訳ありませんし。良いお友達ではありませんけど、ねえ？」

「……ウン、ソウダネ」

「あれ。ダンチヨー殿？」

ちよつとだけ自虐風味に茶化して、話を誤魔化してみたのですが、相槌を打ってくれるダンチヨー殿の顔は、まるで能面みたいでした。

お、おかしいですね。お友達であるというアピールは、キチンと出来たと思うんですけど……？

西住殿も、なんだかアワアワしてらっしゃいますし……。

「オレ、もう分校に戻るよ。昼飯まだだし。それじゃ」

「あ、はい。お疲れ様です……」

四号の上から飛び降りた彼は、振り返る事なく格納庫を後にします。

凄い速さです。そんなにお腹空いてたんでしょうか。

だとしたら、引き止めて悪い事しちやいましたね……。あ、きつとそのせいで――

「ゆかりん。今のはちよつとヒドいと思うな、私」

「うわあ!! た、武部殿? いつ正気に戻ったんですかつ」

にゆ、つと視界に入り込む明るい茶髪。

いつの間にか、ライカ殿と乳繰り……もとい、ラブラブしていた武部殿が、隣に来ていました。

しかし、その顔は険しく、お怒りであるのが伝わって来ます。

オマケに五十鈴殿や西住殿、冷泉殿まで、物悲しい表情を浮かべていて。

「ダンチョーさん、落ち込んでいましたね」

「うん……。少し、可哀想かも……」

「……哀れ」

「え、え、え? どうしたんですか皆さん? わ、私、何かやらかしましたかつ? ライ

カ殿?!」

「……ごめん、秋山さん。憶測になっちゃうから、あんまり言えない。ただ、俺がダンの

立場だったら泣きたくなるかも」

「ええっ!!」　　そ、そんなにですかあ!!」

周囲の変化に着いて行けず、砲塔の上で腕を組むライカ殿にも問い掛けてみますが、返事は曖昧な言葉だけ。

……どうやら、また空気を読めずにやらかしたみたい、です。

よく分かりませんが、武部殿とライカ殿が言うには、ヒドい事をしちゃった、んですよね？

コミュニケーション能力では、この御二方に勝てるはずありませんから、間違いないと思われませぬ。

どうして私、こうなっちゃうんでしょう……。

「ねえ、優花里さん。ダンチョー君との約束、忘れないであげてくれる？　きっと、凄く楽しみにしてるはずだから」

「それは……勿論ですけど……」

優しく、それでいて窘めるような西住殿に、私は一も二もなく頷きます。

でも……。ダンチョー殿がなぜ落ち込んでしまったのか。それを理解できなければ、真に解決する事もないのは明白。日曜日のお出掛け、一体どうなるんでしょう？ 私に不安に答えてくれる人は、誰も居ませんでした……。



大きな期待と不安を抱えたまま、迎えてしまった日曜日。

武部殿の忠告もあり、珍しくスカートなんかを履いて出かけた私を待っていたのは……。

「はあく♪ 堪能しましたあ……♪ 流石は陸の専門店。学園艦ではお目に掛かれない逸品ばかりでしたねえ……♪」

なんとも素晴らしい、夢のようなひと時でありました！

もう日暮れが近いので、大洗の港に向かって街を歩いていますが、朝から電車で遠出しただけの事はあります！

シュトウルム・ティーガー用のマイバッハ・エンジンの現物とか、CV33の脱履帯防止を強化した転輪とか（以外と安かったです）、クルセイダーの交換用ガバナーとか、7TPの37mm砲搭載砲塔とか！

他にも色々ありましたけど、まだ興奮が冷めやりません！

あ、マイバッハというのは人の名前ですかね？

誰もが知っている有名な飛行船、ツェツペリン号のV型12気筒エンジンを作ったのが、ヴェルヘルム・マイバッハという方なんです。

ドイツ軍の戦車用ガソリン・エンジンは、このマイバッハ・エンジンがほぼ独占状態だったんですよ？

……とまあ、こんな風に雑学を繰り広げまくったり、ウインドウショッピングしてただけなんです。

夕日の中、隣を歩くダンチョー殿は、私と同じように満面の笑顔でした。

ちなみに彼の格好ですが、いつものパーカーにジーンズを合わせています。お気に入りみたいです。

「店の人も驚いてたよ。戦車道やってる子でも、こんなに詳しい子が来たのは初めてだ、って」

「えへへ。そんな事ありませんよ」

褒められた事が照れ臭くて、私は自分の癖つ毛をモシヤモシヤしてしまいます。

意外な事と思われるかも知れませんが、戦車道の選手も、あらゆる戦車の知識を持っている訳ではありません。

聖グロリアーナやプラウダ、アンツイオや知波単など、ある国の特色を強く打ち出している学園の戦車道では、使用する戦車自体を限定している場合が多いため、それらについてののみ、専門的な知識を習熟する事が多いんです。

中には、自分が乗っている戦車以外は全然、全く知らないという選手も居るんだとか。私は単に戦車が好きなので、博学的な情報収集をしているのですが、珍しいタイプに分類されるみたいですね。

実際、お店のおジ様方とのお話は大層盛り上がって、楽しかったであります！ 今度はいっつ行けるでしょうか……？

「ん……？ 秋山さん、ちよつと待った」

「はい。どうかしました？」

「知り合いが居たから、少し挨拶してきたんだけど、いいかな」

「あ、勿論ですよ。見失わないうちに行きましょう！」

「うん、ありがとう」

楽しかった時間を反芻しながら、港に向けて歩いていた所、ダンチョー殿が不意に足を止めました。

視線の先には、とある温泉施設が。どうやら、そこから出てきたらしい人物がお知り合いのようで。遠目にはマリントワーも見えます。

拒否する理由なんて皆無ですので、私達はちよつとだけ向かう方向を変え、目的の人物であるお婆さんに近付き……あれ。あの人、どこかで見たような。

「久子さん、お久しぶりっす」

「うん？ なんだい、あんた——いや、どこかで見たような……？」

「まだボケるような歳じゃないでしょ？ オレっすよ、オレ」

「……ああ！ なんだい、あんたかい！ 久しぶりだと思ったら、相変わらず口が悪いねえ！」

「久子さん程じゃないつすよ」

深々と頭を下げるダンチョー殿は、片手にビニール袋を提げ、杖をつく着物姿のお婆さんと、親しげに笑い合っています。

久子さん、つて呼びましたよね、今。

ま、間違いいりません。

このお婆さん、冷泉殿の祖母である、冷泉 久子さんですよ!?

「あ、あの、ダンチョー殿? どうして冷泉殿のお婆さんと……」

「……え? 秋山さんも知り合い?」

「はい。以前お見舞いに……」

「うん? なんだい、麻子と戦車道やってる子じゃないか」

「どうもであります」

ダンチョー殿に続いて、私も頭を下げます。

以前、西住殿や五十鈴殿とお見舞いに行きましたから、覚えていて下さったみたいですね。ちよつと嬉しいですつ。

……いやいやいや、違いますってば！ どうしてこの御二方が知り合いなのか、そっ
ちの方が重要です！

上目遣いに「教えて下さい」アピールを続けると、ダンチョー殿は私へと向き直りま
した。

「前に言ったと思うけど、オレが車の設計士を目指すようになった、切っ掛けの女の子。
あれ、あんこうチームの冷泉 麻子なんだよ」

「……ええええええええええつ!? ととと、という事は、冷泉殿の親戚だったんであります
かあ!？」

「そうなるねえ。ま、ほとんど他人と変わらない遠縁だけどねえ」

冷泉殿とダンチョー殿が、遠縁の親戚。

今日一番の驚きに、開いた口が塞がりません。お婆さんの様子からも、嘘ではないこ
とが伝わって来ます。

まさか、こんな繋がりがあるなんて、予想すらしてませんでした……。

……ん？ あれ？ けどこの前、ダンチョー殿と冷泉殿は？

「で、でもでも、戦車格納庫で会った時は、まるで初対面みたいな感じで……」

「そりゃね。一回会っただけのオレの事なんか、覚えてなくて当然だよ。実際、苗字だって違う訳だし」

「全く、どうしようもない子だよ。毎年、線香をあげに来てくれる人の事を忘れちゃってるんだから。」

「あんたもあんただよ！ どうして麻子に話してやらないんだい？ あの子が切っ掛けで設計士を目指してるって」

「いや……。言っただけで何がどうなる訳でもないし、嫌な事を思い出させるだけだし……」

「煮え切らないねえ、ったく」

「相変わらずキツめなお婆さんの口振りに、ダンチョー殿は眉をハの字にしてしまいました。毎年お線香をあげに来ているなら、冷泉殿とニアミスしている可能性もありますけど……。」

「設計士を目指す切っ掛けが、冷泉殿の御両親の事故では、確かに会いづらいかも知れません。辛い記憶でしょうからね……。」

ただ、冷泉殿は学園一の天才頭脳を持つ方ですし、ダンチョー殿の配慮を悟って、それに合わせているという可能性も？

どちらにせよ、デリケートな問題です。他人がおいそれと立ち入ってはいけないでしょう。

注意深く見守って、いざという時はフォローさせて頂く所存であります！ 自信はあまり無いですが！

「ほら、あんた達さつきとお行き。若いんだからこんな年寄りに構ってないで、もつと別な事したらどうなんだい。逢引、してたんדר？」

「終わったからもう帰る所だったんすよ。というか、その荷物持って帰るんすか？ 送りましようか？」

「年寄り扱いするんじゃないよ！ 一人でそぞろ歩きも出来なくなっちゃったら、それこそ死んじまった方がマシさね！」

「いや、さつき御自分で年寄りって言ってませんでしたか……？」

「なんだい？ 言いたい事があるならハッキリとお願い！」

「なんでもありません！」

やたらと大きな声張り上げ、冷泉殿のお婆さんはバス停のある方向へと歩いて行きま
す。

ううむ、また勘違いされてしまったようです。男女が二人きりで出掛けても、それが
逢引とは限らないと思うんですけどねえ？

まあ、それはそれとして。

私達は、ピンシャンした背中を並んで見送ります。

お婆さんは一度こちらを振り返って、私達が手を振ると、軽く杖を挙げて合図を返し、
そのまま行ってしまうれました。

「元気なお婆さんですよね」

「うん……。また無茶とかしないと良いんだけど」

「……はい。冷泉殿が心配しますもんね」

見た目は元気で、病気の方が逃げていきそうなお婆さんですが、胸の辺りに疾患があ
るらしくて、意識を失って病院に運ばれる事も……。

前に倒れたという連絡が来た時なんか、冷泉殿、泳いで大洗まで行くといい放つくら
い、動揺していました。

心配を掛けまいと維持を張るお婆さん。それでも心配で仕方ない冷泉殿。見送るダンチョー殿の視線も、やはり心配そうで。

う〜……。何か、気を紛らわせられるような、気の利いた一言が……出てきません。コミュカつて、どうすれば上がるんでしょう……？

「帰ろうか」

「あ、はい」

一人で悩んでいる間に、ダンチョー殿は気を取り直したらしく、普段通りの笑顔が帰宅を促します。

助けになれない自分が不甲斐ないですけど、とりあえずは連絡船に向かいましょう。遅れたら学園艦に戻れなくなってしまいますし。

その後は大した出来事も無く、ジュースを飲みながら色んな話を……。戦車道の事や、戦車の構造の話などをしてる内に、時間は過ぎ去って。

すっかり日も暮れた頃、連絡船が学園艦に接舷し、私達は上甲板へと出ました。見慣れた街並みが、帰って来たー！ という気分になさせてくれます。

「ダンチョー殿。今日はお誘い頂いて、ありがとうございます！ とても楽しかったです！」

「オレも楽しかったよ。一人で行くと、どうしても仕事みたいになっちゃうからさ」

「なら良かったです！ ……けど、お邪魔じゃありませんでしたか？ 私、場所も考えずにはしゃいじやつてましたし……」

また家の近くまで送って頂き、もうそろそろ我が家が見える、という所で、私はお礼を言います。

ダンチョー殿に誘って貰わなければ、これほど楽しい休日を通り越す事は出来ませんでした。

そのおかげで、はしやぎ過ぎた部分もあったと思うんですが、ダンチョー殿は微笑みながら首を振り……。

「んな事ないって。……オレは、秋山さんだから、楽しかったんだ」
「へ？」

けれど、次の瞬間。

とても真剣な表情を浮かべ、真つ直ぐにこちらを見つめました。

唐突にも感じられる変化に、私は戸惑うばかり。

しかし彼は、目を逸らそうともせず。

「オレ……。秋山さんのこと、好きだよ」

「……っ！ あ、ありがとうございます……。私も、ダンチョー殿の事を敬愛して——」
「そうじゃないっ。……。オレは。友達としてじゃなく、一人の女の子として、君が好きなんだ」

好き、という言葉に対し、少しばかり照れながら返した私でしたが、それは遮られてしまいました。

とても強い口調。とても熱い眼差し。

これまでに感じた事のない緊張感が、体を硬直させます。

「君は、あんまり自分の事を評価してないけど、オレは好きだ。

戦車に夢中になってる姿も、戦車道やってる姿も、家の手伝いしてる姿も。

本気で可愛いと思うし、彼女になって欲しいと思ってる」

混乱を極めた頭に反響する、ダンチョー殿の声。

好きだ。可愛い。彼女になつて欲しい。

こつもハツキリと言われて理解できないほど、私もバカじやありません。

私は今、ダンチョー殿に告白されている、みたいです。

でも……。

「あ、あの……。私、今までそういう事、一度も考えた事なくて……。

ダンチョー殿も、初めて出来た、いい男友達だとばかり、思つてて……」

私が返せたのは、こんな、言い訳がましい眩きだけでした。

初めてのお友達は、西住殿を始めとする皆さんで。

ライカ殿は武部殿一筋ですから、友人というには少し憚られます。

だから、ダンチョー殿こそが、私にとって初めての、異性の友達だと思えました。

……でも、それ以上の関係が想像できません。

友達として隣を歩く姿は想像できても、恋人という形になると、ボヤけてしまつて。

武部殿や五十鈴殿みたいに、自分以外の人であれば、色々と考えたり、祝福だつてし

ますし、ちょっと他所でやって欲しいなあ、とか思ったりもします。

しかし、その中心に自分を……。恋愛という事象に私を組み込むと、まるで現実感が
ないんです。

そんな気持ち伝わってしまったのか、彼は――

「そうなんじゃないかとは……思ってた」

「あ……」

――困ったように眉を歪め、苦笑いを浮かべました。

痛い。

胸がギュツと、握り締められたみたいに。

分かります。私は今、ダンチョー殿を傷付けた。

キチンとお断りするんじゃないかと、曖昧な言葉で言い訳して、傷付けてしまった。

「あ、あのつ、わた――」

《P i P i P i P i P i P i、 P i P i P i P i P i P i……》

反射的に、彼へと手を伸ばした私でしたが、今度は無機質な電子音がそれを留めます。ダンチョー殿の携帯に、着信があったようです。

「ごめん、出るね」

「はい。どうぞ……」

一言入れてから、ダンチョー殿は通話を受けました。

もどかしくて、酷く居心地の悪い時間が、一分足らず。

電話の相手に「すぐ行く」と領き、尻ポケットに携帯をしまった彼は、また私に向き直ります。

「ちよつと急用が出来た。オレ、もう行くよ。……変なこと言って、ごめん」

「えっ。あ、あのつ、ダンチョー殿っ!？」

路地に消えようとする背中を、私は慌てて追い掛けましたが、その姿はどこにも見当たりません。

五秒と経っていないはずなのに、私だけが、その場に取り残されています。

どうすれば良いのか、分かりませんでした。

諦めずに追い掛けてみる。電話を掛けてみる。大声で呼んでみる。

もう追いつけない。きつと出てくれない。応えてくれるはずがない。

何か行動しなければ駄目だと、心はそう感じていましたが、思考がそれを否定し続け。

私はただ……。立ち尽くす事しか、出来ませんでした。

最終話 「嫌な予感がします……」

「はぁ……。うーん……」

今日、何度目かも分からない溜め息をつき、私は自室の天井を見上げ続けています。学校から帰ってきて、着替えもせずにそのまま。

制服がシワになってしましますが、どうにも、着替える気力すら湧きませんでした。戦車道の練習中、西住殿に「何かあったの？」と心配されてしまう有様です。

その場はなんとか誤魔化しましたけど……。

(どうして、繋がらないんですか。もう一週間も経つのに)

なんとなく携帯を取り出し、アドレス帳にあるダンチョー殿の項目を選択して……何

もしません。

ダンチョー殿の告白から、早くも一週間が経とうとしています。

最初の二三日は、罪悪感で電話を掛けようとも思えませんでした。このままでは駄目だと勇気を振り絞ってみたくて。

でも、「お掛けになった電話番号は……」という自動音声が出るばかりで、通じなくなっていました。

(やっぱり、私が傷付けたから……?)

ジワジワと、心を蝕まれているようでした。

どう考えたって、私がダンチョー殿の気持ちを受け入れないから、決まっています。

私みたいな戦車オタクを好きだと言ってくれたのに、自己弁護ばかりで、答えようもしなかったから。

ハッキリと断った所で傷付けるのは同じでしょうけど、こんな、後ろめたい気持ちにはならなかった……と、思います。

……ああ、駄目ですね。結局、ダンチョー殿の気持ちじゃなく、自分の事ばかり考えてます。

本当にどうしようもないです、私……。

「優花里、入るわよー?」

ぼうつと考え込んでいたら、お母さんの声とノックが聞こえてきました。

返事をする前に入って来ちゃいますけど、特に隠すような物もないので、問題はあり
ません。

とりあえず、寝そべってないで起きましよう。

「どうかしましたか?」

「どうかしちやってるのは貴方の方でしょう。……ダン君と、何かあったの?」
「……え」

凶星を指されて、私は言葉を失ってしまいました。

その間に、お母さんは「やっぱりね」と呟き、隣へ静かに腰を下ろします。
返事ができたのは、優しく癢つ毛をワシヤワシヤされてからでした。

「なんで、分かったんですか」

「そりゃあ分かるわよ。お母さんだもの。」

……というか、ダン君とのデートから帰って来てずつとよ？ 何かあったとしか思えないでしょ。

日に一度は聞こえてきてた、戦車関連の咆哮も聞こえてこないし」

「私、そんな事してたんですか……」

なに当たり前な事を、とでも言いたげなお母さんの微笑みに、私はちよつとげんなりしちやいました。

いえ、戦車を好きな事は恥じたりしませんが、知らないうちに雄叫びを上げてたとか、我ながら駄目だと思います。御近所迷惑です。

あとでお隣さんとかへ謝りに行きましょう……。

まあ、それはさて置き、です。

「ダンチョー殿を、傷付けてしまったみたい、なんです」

「……ダン君を？」

バレているのに一人で抱え込んでも仕方ないので、私はお母さんに、事の次第を話してみます。

ダンチョー殿に告白されたこと。

ちゃんとした返事を出来なかったこと。

そして、今日まで一切の連絡が取れないことも……。

「そっかあ。ダン君の方からアタックしてくれたんだあ。なんか嬉しいわ」
「嬉しいって……。なんでですか!?! そのせいで私はダンチョー殿をつ」

場違いな明るい声に、私は思わず食って掛かります。

ダンチョー殿が傷付いたのも、私が思い悩んでいるのも知らないで、と。

ですが、お母さんは……。

「だって、大事に育ててきた娘を『好きだ』って言うってくれる子が現れたんだもの。

母親としては嬉しいに決まってるわよ。お父さんは……荒ぶっちゃうかもしれないけど」

また笑みを深くして、私の肩を抱いてくれました。

……やっぱり私、まだ子供なんですわね。

お母さんには、敵いそうもないです。

「でも、ノー眼中発言しちやったのは失敗だったわねえ。告白してフラれたんだから、傷付いていて当たり前よ」

「やっぱり、そうですね……。私、ダンチョー殿にどう謝れば……」

「は？ なに言ってるの？ そんな事したら、傷口に塩とワサビと辛子とデスソースを塗り込まれるようなものじゃない！ 絶対に止めなさい。謝るのだけは絶対に駄目」

「そ、そうなんですか……？」

お母さんに寄り掛かりながら、ちよつと弱気な発言を試みるんですが、今度はピシヤリと叱られてしまいました。

意図せずフってしまった相手に謝るのは、拷問に等しい、という事でしょうか。覚えがおかねば……。

いえ、活用する場はもう無いと思いますけど。ダンチョー殿が好きになつてくれたのだから、奇跡に近いと思いますし。

「それにしても、連絡が取れないのは心配ね……。他のお友達は何も知らないの？」

「それが……。なんと行って聞き出したものか、全く思いつかなくて……」

「聞いてすらいない、と。変なところで臆病ねえ」

「返す言葉もありません」

ダンチョー殿の現在ですが、知ろうと思えば調べられるはずです。

ライカ殿や自動車部の皆さん。最悪、生徒会を通じて連絡を取る、という手段だって。

しかしながら、それとなく事情を聞き出そうにも、どんな風につ掛かりを掴めば良いかすら思いつけず……。

他校に潜入した時とか、エルヴィン殿と敵中突破した時なんか、自画自賛したくなる程の機転を発揮できたんですけどね……。

「ま、とりあえずそつちは置いときましょう。それよりも問題なのは、優花里。貴方の方」

「へ？」

地味に落ち込む私のおデコを、お母さんの指がつつつきます。

私の方が問題って、どういう事でしょう。

そりゃあ私は、駄目だめダメな戦車オタクですけど……？

「ダン君に謝りたいと思ったのは、どうして？」

「どうしてって、そんなの当たり前です！ 私のせいで傷付いたなら、謝るのは当然で……！」

「んー、そうじゃなくてね……。なんて言ったらいいのかしら……」

まだ質問したい事を整理できていないのか、お母さんも難しい顔で悩み始めました。ですが、それも短い間。すぐにまた私へと視線を戻します。

「ねえ優花里。ダン君の事は好き？」

「……好き、だと思えます。でもそれは……」

「まだお友達として、なのよね。じゃあ、みほちゃんの事はどう？」

「敬愛してます！ 尊敬しております！ 西住殿が居られなければ、今の私はありませんー！」

「この食い付き様……。我が娘ながら呆れるわ……」

「あれ？ 何か間違えました？」

「間違いじゃないんだけど……。まあとにかく。」

ダン君の事も、みほちゃんのものも好きなのは分かったわ。

じゃあ今度は、その二つの気持ちを比べてご覧なさい」

「比べ……で、ありますか？ ううむ……」

途中、西住殿への気持ちを叫んだ所で、若干お母さんにも引かれような気はしますが、ひとまず置いて。

ダンチョー殿に感じている気持ちと、西住殿に感じている気持ちを比べる。

むむむむむ……。

「どう？ どんな感じ？」

「どんな感じと言われても、よく分からないです。」

戦車道で導いて頂いた恩がありますし、西住殿には凄く感謝してるんですが……。

ダンチョー殿の事を考えると、それに匹敵するくらいの罪悪感を覚えると言いますか

……」

「なるほどお……。意外と健闘してるわね、ダン君」

「はい？」

何故だか、お母さんはしきりに頷いています。

我ながらハッキリしない、中途半端な意見だと思っただけですけど……。

お母さんには別のものが見えてるんでしょうか？ 訳が分かりません。

と、首を捻っている間にも、話はどんどん進みます。

「じゃあ、次の質問ね。優花里はどうして、ダン君の告白を断ったの？」

「それは………なんででしょう」

「聞いているのお母さんんだけど」

「ですよねえ。……あれ？」

告白を断った理由。

恋人同士という関係に、リアリティが無かったから。

確かにそれも理由の一つだったはずですが、こうして考えてみると、少し物足りない気もしました。

現実味が無かったと言うなら、私が戦車道を始めて、大切な仲間と戦車に囲まれる日々を送れるなんて、それこそ夢物語でした。

でもその夢物語が、今の私の現実。

例え想い描く環境にリアリティが無くても、身を置けば慣れてしまうと、私は知っています。

なら、とりあえずOKしておいて、恋人という存在に慣れておいても……。

いやいや、なに考えてるんですか私は!? そんな不誠実な真似、ダンチョー殿に失礼ですよ!!

やっぱり私じゃ駄目です。

私には、ちゃんと恋人やれる自信ありません。

私なんかじゃ、ダンチョー殿を幻滅させて……。

「もしかしてなんだけど……。自分はダン君に相応しくない、とか考えてない?」
「っ!」

心臓が、破裂するかと思いました。

顔を覗き込むお母さんの言葉は、四号の75mm砲が如く、私の胸を穿ちます。

「そっかあ。優花里はそんな風に考えちゃってたのね……」

「だ、だって！ 私、戦車の事にしか興味ないし、戦車か歴史の話しか出来ませんし！……全然、女の子らしくない、ですし」

反射的に言い返そうとしましたが、言葉はどんどん尻すぼんでいきます。

私には戦車しかありません。戦車を取り上げられたら、何も残らない。

西住殿のような人徳も、武部殿のような愛嬌も、五十鈴殿のような感性も、冷泉殿のような知性も。

そんな私が、誰かに想いを寄せられるはずがないと、予防線を張って、自分を守っていた。

ああ……。そうだったんですね。

私は、ダンチョー殿に失望されるのが怖かったから、曖昧な態度で逃げたんです。なんて、なんて馬鹿な事を。

「困ったわね。これはダン君に賭けるしかない、かあ」

「どういう事、ですか？」

「なんでもないわ。うちの娘が戦車以外ではポンコツだって、再確認しただけよー」
「うっ。事実ですけど、そんなハッキリ言わなくなつてえ……」

ますます気分を落ち込ませる私に、溜め息混じりのお母さんが、意地悪く微笑みました。

ジト目で唇を尖らせれば、また優しく髪をワシヤワシヤしてくれて。

子供の頃からそうでしたけど、こんな風に頭を撫でられるの、やっぱり落ち着きます……。

「ん〜。でもアレよ、お母さんの見立てが正しければ、多分なんとかなるわ。大丈夫」

「……本当に？」

「ええ。お母さんを信じなさい。ダン君は強い子よ」

しばらくそうした後、やおら立ち上がったお母さんは、自信満々な声で断言します。
根拠なんか一つもないのに、思わず信じたくなってしまう、明るい笑顔。

お父さんはきつと、お母さんのこういう所を好きになつたんでしょうね。もちろん、私も大好きですけど。

今はまだ、解決策も見つかっていませんが。
お母さんの言葉だけは信じたいと、そう感じる私でした。



(とはいえ、具体的に何をどうすれば大丈夫なんですかねえ……?)

月が沈んで日が登り、また新たな一週間が始まる月曜日。

いつものリュックサックを背負った私は、一人トボトボと、通学路を歩いていました。
結局、なーんにも解決しないまま翌日ですよ。

お母さんの気持ちは嬉しかったですけど、せめて行動指針になるような……ヒントの
ようなものが欲しかったです……。

「ゆっかりーん！ おはよー！ー！」

「その声は、武部殿ですね。おはようございっわッ!？」

悩み続ける私の背中に、一際明るく元気な挨拶が届きました。

このルートで会うのは珍しいですが、間違えようがありません、武部殿の声です。

ひとまず返事をしなければと、笑顔を作つて振り返つたんですけれども、ビツクリ仰天！

なんと武部殿は、前日にスツポンと豚足と手羽先を食べたみたく、お肌がツヤツヤのテツカテカだったからです！

「ど、どうしたの、ゆかりん。そんなビツクリして」

「そりやビツクリもしますよ!? なんでそんなにツヤテカしてるんですか!？」

「あ。やっぱり分かるー? 実はね実はねえ」

「うっ、嫌な予感がします……」

明らかに普段と様子が違うチームメイトへと、私はつい問い掛けてしまったのですが、それが失敗でした。

キュピーン！ と瞳を輝かせた彼女は、これ以上ないほど幸せそうな顔で、いつもの様に“惚気話を始めます……”。

「昨日、日曜日だったでしょ？ 華と一緒に、ライカが出る蛇道の無差別級試合、応援に行って来たんだー！」

「でねでね！ ライカがすつつつつつごくカツコ良くてさあー、もう惚れ直しちゃったよー♪」

「さ、左様でございますか……」

「もちろん試合には勝ったんだけど、戦車道と試合運びが全然違うんだよ？」

「連携は重要なんだけどね、それ以上に個人の力量が物を言う、みたいな感じ。みんな凄かったあ」

「はあ……。まあ、蛇道は時々、一人で一個大隊を丸ごと無力化するような、超人も排出する武道ですから……」

「うんうん。ライカが必殺〇事人みたいで凄いのは当然だけど、ライカの先輩さんが一人で何十人も足止めしちやったり、助っ人の若さんが日本刀で暴れまわったり。」

「あ、ダンチョー君が爆弾で橋を吹っ飛ばしちやった時とか、映画かつ！ つてくらいの大迫力だったよー」

「へえー。若さん殿も蛇道やってたんですね——えっ!? だ、ダンチョー殿お!?!」
「きやつ」

これまたいつもの様に、話を右から左へ聞き流していた所、唐突に登場したダンチョー殿の名前で、意識が引き戻されました。

私の食いつき様を見て、武部殿も驚いています。

「あ、あれ？ ゆかりん、ダンチョー君が蛇道やってるの、知らなかったっけ……？」

「いやいやいやいやいや、知ってはいましたけど、え？ 試合に出てたんですか？」

「うん、出たよ。普通に。触発式信管の……ボムアロー？ とかいうのを使って、隠れながら狙撃してた。ライカと同じで、隠れて行動するのが得意なんだって」

「そ、そうだったんですかあ……」

説明を聞けば、ドツと疲れが込み上げてきました。

試合。試合に出てた？ 連絡が取れなかったのは、それで？

路地裏で見失ったのも、隠密活動を得意とするなら納得です。

なあんだ……。用事があっただけなんですわね……。

それだけで全部の説明がつく訳じゃありませんけど、ちよつとだけ安心できました。ですが、ホツと胸を撫で下ろす私を、武部殿は曇った表情で覗き込みます。

「でも、試合に出てたのを知らないなら、入院の事もまだ……う？」
「え。入院……!?! ど、どういう事ですか!?!」

安心できたのも束の間、今度は全身から血の気が引きます。

に、入院……!?!

蛇道では戦車道と違い、全身を隙間無く覆う、最新式の気密性ボディアーマーを着て競技を行いますし、脱ぐと即失格ですから、滅多な事では怪我なんてしません。

10トントラックに撥ねられたって、ビルの十階から突き落とされたって、地雷を踏んだって、至近距離で手榴弾を食らったって、倒壊させたビルの残骸の下敷きになっただって。

せいぜい、むち打ちや打撲で済むはずなんです。機械によるダメージ判定を行う点は戦車道と同じで、銃火器は実弾ですが、RPGとかは派手な花火程度の威力になっただけです。

それが入院とか、一体どんな激戦が繰り広げられて……!?!

「……ゆかりん。気になる?」

「当たり前です！ 教えて下さい、どの程度の怪我なんですかつ、重症なんですかつ!?」

やけに落ち着いた様子の武部殿へと、私は詰め寄っていました。

もしかしたら、このまま。冷泉殿とその御両親のように、二度と会えなくなってしまうのでは……?」

あり得ません。あり得ないと分かっているはずの想像が、どうしても頭から離れないんです。体に震えが走るほど、怖い。

「今は、学園艦の病院に移ってるはずだよ。ゆかりん、行ってあげて。行かないと絶対に後悔すると思うから」

「え? で、でも……」

「先生は私が誤魔化しておくし、ね?」

「武部殿……」

多分、青くなっているでしょう私の肩を叩き、武部殿が励ましてくれます。いつもの柔和な笑顔ではなく、包み込まれるような、とても暖かい微笑み。それに背を押されて、覚悟が決まりました。

「恩に着ます！ 秋山 優花里、行つて参ります！」

かかをと鳴らし、全身全霊の敬礼で挨拶をして。

私は、あらん限りの力で地面を蹴りだします。

向かうは学校と反対方向——県立大洗女子、学園艦病院。

学校なんて行つてる場合じゃありません。ダンチョー殿、今行きますからね！



十数分後。

どうにかこうにか学園艦病院に辿り着いた私は、息も絶え絶えのまま、受け付けでダンチョー殿の所在を聞き出し、三階にあるという病室へ飛び込みました。

「ダンチョー殿お！」

六人らしい大部屋で、こちらを振り向く入院患者の皆さん。
非常に驚いている顔の中に、見知った人——ダンチョー殿も。

「……あ、秋山、さん？」

「はあ……。はあ……。はあ……。あれ……？」

緑色の入院着を着て、お見舞い品っぽいバナナを囓っている彼は、非常に血色が良く、左手にギブスをつけている以外は、まるつきり健康そのものでした。

あゝ……え……？ ど、どういう事ですか？ てつきり、重傷だとばかり……。

「ど、どうしたのさ。そんなに息切らせて。とにかく、ここ座って。ほら」

「あ、どうも……。あの……。武部殿、から……。怪我をした、と、伺いまし、て……。でも、あれえ？」

「……それ、武部さんに担がれたんじゃないの？ 大した怪我じゃないよ、オレ。骨にヒビが入っただけだし」

「なあんだ……。武部殿も人が悪いです……って十分に重傷じゃありませんかあ!？」

「ちよつと、その貴方！ 病院内ではお静かに！」

「あ、ごめんなさい……」

窓際の椅子を勧められ、取り敢えずリユックを降ろし、腰も落ち着けた私ですが、割と酷い怪我にまた立ち上がってしまい、通りすがりの看護師さんに怒られて。

同室の御老輩方にも、「彼女かい？」とか「羨ましいのお」とか冷やかされちゃいましたし、大人しくしましょう……。

「学校は？ もう始まつてるんじゃない？」

「サボっちゃいました……。あはは、生まれて初めてです。それより、怪我の具合は……？」

「さつきも言ったけど、大したことは無いよ。

試合が終わった後、帰りの連絡船へのタラップで派手にすっ転んじやってさ。

変な突き方しちやっつたみたいで、全治三週間の、入院三日。いや、ダサイよねえ」

「はああ……。試合中の怪我じゃ、なかったんですね……。私はてっきり、瀕死の状態なのかと……」

「まさか。蛇道が始まって半世紀、死人は一人も出てないよ？ 四割殺しの重傷者はご

まんと居るけど」

「不安度が増す情報を有り難う御座います……」

ダンチョー殿は爽やかに笑っていますけど、半死半生より一割軽いからって、なんの慰めにもなりません。

……よく考えたら、設備や人員に限りのある学園艦の病院に移ってるって時点で、重傷じゃないに決まってるじゃないですか。私、どれだけ慌ててたんですか？

あああ。窓の向こうで流れる雲が、「嘘は言ってないもんねー♪」とピースする武部殿に見えてきました……。こんなに疲れたのは久しぶりです……。

とはいえ、このまま何も話さず帰るなんて絶対ダメですし、どうかしないと……。

「あの……。ダンチョー殿？ その……」

「そうだ。秋山さん、ごめん。何度も連絡くれたみたいなのに、返事も出来なくて。実はあの後すぐ、携帯の上に思いつき座り込んでさ」

「へ？ ……じ、じゃあ、あのつ、連絡が取れなかったのは、単に携帯が壊れてただけ、なんですか!？」

「うん。いやー、尻ポケットに入れるもんじゃないね、携帯って。」

新しいの買うのに時間掛かったし、ライカの助っ人要請もあったから、身動き取れなかったんだ」

「さんざん人をヤキモキさせておいて、そのオチはなんなんですかあああああ」

完全に脱力してしまった私は、ぐでー、とベッドの端に突っ伏しました。

もう駄目です。さつきから肩透かしばかりで、氣力が根こそぎ持つて行かれましたよ……。

よっぽど酷い顔なのか、ダンチョー殿は申し訳なさそうにしています。

「……心配して、くれてたんだ？」

「急に連絡取れなくなつて、しかも入院したつて聞いたたら、心配になつて当たり前じゃないですか。ダンチョー殿は大切なお友だ——っ!？」

身を起こし、反射的に不満をぶつけてしまう私でしたが、慌てて口を塞ぎます。

考え無しだったせいで、推定NGワードを口走つてしまいました……。

案の定、あの一件を忘れてしまったような、気安い雰囲気は霧散して。

「一つだけ、聞いていいかな」

「はい。なんなりと」

「……オレはさ、秋山さんの中で、どういう位置づけなのかな。ただの知り合い？ 男友達？ それとも……」

とても真剣な表情で、ダンチョー殿は問い掛けてきました。

それは、一週間前の続き。

私なんかを好きだと言ってくれた人を、明確に、ランク付けしなくてはいけない。

「もちろん、大切なお友達……なので、ありますが。

ライカ殿は武部殿一筋でしたから、事実上、初めての男友達でもあって……。

色々と良くしてもらいました……。は、初めて、好きと言って下さった、方で……」

「……でも、恋人とかは、まだ考えられない？」

もう、とにかく心苦しくて、申し訳なくて。

私は無言で頷く事しか出来ませんでした。

ダンチョー殿は、大切なお友達です。そのお気持ちに、応えたいと思う部分もありま

す。

……でも、それはまだ小さく、恐れの方が勝っています。
今は私を好きだと言ってくれても、いつか、嫌われてしまうんじゃないか。
そんな、産まれて初めて感じる、恐怖が。

「秋山さん」

「は、はい……」

また、名前を呼ばれます。

しかし、顔は上げられません。

きつと今まで通りには戻れない。終わってしまおう。

あんなに楽しかった日々が、優柔不断だったせいで。
だけど、それは確かに、私のせいだから。

鼻の奥がツンとするのを我慢して、言葉を待ちます。

この関係に決着をつける、ダンチョー殿の裁断を。

「悪いけどオレ、諦めないよ」

「……え」

自分の耳が信じられずに、私はダンチョー殿へ顔を向けます。

そこにあつたのは、驚くほど柔らかい表情でした。

柔らかで、でも、どこか逞しさを感じる……笑顔。

「考えてみたらさ。あのライカだって、武部さんを落とすのにあんなに時間掛かったんだ。

告白さえすれば恋人関係になれると思ってた、オレが悪いんだよ。ヤキモキさせて、ごめん」

「な、なんでダンチョー殿が謝るんですか。悪いのは、ダンチョー殿の気持ちに気付こうとしなかった、私なのに……」

頭を下げられてしまい、思わずワタワタと振り回した手は、やがて膝の上へとそれを落ち着かせます。

謝りはしますが、どうしても二の句を継げない私に、ダンチョー殿はまた微笑んで。

「最初、断られた時はさ。ショックだった。けど、それでもやつぱり、オレは君が好きだよ。」

戦車を見つめて、目をキラキラさせてる君が好きだ。

戦車に関する蘊蓄を語って、得意気になってる顔が好きだ。

戦車の整備を手伝って、油まみれになっているのにも気付かない、真剣な表情が好きだ。

それから……。単なる男友達を心配して、学校までサボつちやう優しい君が……。大好きだ」

最初、真つ直ぐにこちらを見つめていた彼は、次第に目を泳がせ始めます。

頭を掻いたり、頬を掻いたり、照れ臭そうに。

そして……。

「今すぐじゃなくていい。戦車の次にでもいい。」

時間を掛けて、いつか君に、オレを好きになって貰う。

人間の中では一番好きになって貰うから、覚悟しといてくれよ？」

いつかと同じようにニカッと笑い、握り拳を突き出しました。
こんなの、反則です。

もう駄目です。

我慢できなくなった涙が、勝手に目から溢れていきます。

「え、ちょ!? な、なんで泣いて!? 泣くほど迷惑っ!」

「ちが……違うん、です……。」

こんなに、好きだって言っつて、貰えたのが、嬉しくて……。

でも、それにちゃんと、答えられな、い、私自身が、不甲斐なくてえ……。」

慌ててティッシュの箱を取ってくれるダンチョー殿に、私はしゃくり上げるばかりでした。

戦車以外に関しては優柔不断で、どうしようもなく情けない私を、それでも好きだと
言ってくれる、優しい人。

今の私を好きだと言ってくれて、その上で好きになって貰うと宣言した、強い人。
嬉しくないはずがありません。

まだ、恋愛感情とは程遠いのかも知れませんが、私だって確かに、ダンチョー殿の事

が好きなんですから。

「ゆっくりで良いよ。

ずっと戦車一筋だったんだし、急がないで。

……まあ、古臭いセリフだけどき。

友達から始めない？ もう一度、最初から」

「ダンチョー殿お……っ」

涙と鼻水で顔を汚す私へと、ダンチョー殿が右手を差し出します。

また涙が出てしまいますけど、私は急いでリュックから除菌シートを取り出し、顔と
か手とかを全部拭いてから、それを両手で握り返しました。

「はいっ。これからダンチョー殿は、私の大切な、初めての男友達であります！ よろし

くお願い申し上げますっ！」

「……はは。うん、よろしく！」

ちよっと困っているようで、けれど、嬉しそうにも見える、ダンチョー殿の苦笑い。

自然と私も、笑い返しています。

多分ですが、完璧に前と同じ関係には、戻れません。

私はダンチョー殿の気持ちを知っていて、彼自身、諦めないと言いました。同じで居られるはずが無いです。

しかし、それで良いんじゃないかとも、今は思えるんです。

変わっていくという事は、悪い事ばかりじゃないはずですから。

私が戦車道と出会って、掛け替えのない仲間を得たように。

また新しく、掛け替えのないものを得られる……かも知れない。

頼りない可能性ですけど、信じたいと思います。

握り合う手に喜びを感じる、私の心を。

蛇足ですが、結局、サボった事はお母さんと学校にバレてしまい、この後メチャクチャ怒られました。

……誤魔化してくれるんじゃないかなかったですか、武部殿おおっ!?

冷泉麻子編

第一話「すぐ行きます」

「……………う。ん……………」

微睡みから意識が覚醒を始めると、そこが学園の提供した寮ではない事が分かった。

縁側。ひらけた庭。古びた畳。

どれもこれも、古びた日本家屋の寮と同じだが、嗅ぎ慣れた匂いと、見慣れた安心感を覚える。

ここは、私の——冷泉 麻子の実家だ。

(寝てた、のか…………。時間…………)

シワになった半袖のワイシャツを直し、脱げかけた短パンの位置も直しつつ、私は古い壁掛け時計を確かめる。

午後四時。お昼を食べて、お婆に「牛になっちまうよ！」と言われながら昼寝をして……約三時間か。オヤツ食べ損ねた。

戦車道大会、決勝戦を無事に終え、数日前に母港へと凱旋した学園艦。それに合わせ、私は大洗の実家へ帰って来ている。

外泊許可を得るのは面倒だけど、こっちに戻れば、唯一の肉親であるお婆の様子も見えるし、一石二鳥という訳だ。

「お婆……？」

寝惚け眼で居間を見回してみるが、背筋を伸ばして正座するお婆は、いつもの定位置に居なかった。

代わりに、恐ろしく達筆な文字の踊る書き置きが、ちやぶ台に一枚。

『夕飯の買い物に行ってくるから、風呂を沸かしといとくれ　久子　』

また一人で出かけたのか……。

書き置きを確かめた私は、携帯片手に自分の部屋へと戻り、上から薄手の短いポン

チヨを羽織る。

流石にブラもしないで、シャツと短パンだけでは出かけられないしな。

……AAサイズでも浮くとか、我ながら発育の悪さに嫌気が差す。

いつその事、カバさんチームの左衛門佐みたく、サラシでも巻いた方がいいのかも知れない。

それはさて置き。

周囲からもカクシヤクしていると言われるお婆だが、その実、胸に疾患を抱えていた。軽い運動なら問題ないけれど、大きな負担が掛かると、呼吸が儘ならなくなつて意識を失う可能性も……。

最近は特に安定しているとは言え、私が側にいた方が安心だ。

多分、いつもの業務スーパーにでも行つてるんだらうから、自転車でもいいはず……。

《にゃくん、にゃくん、にゃくん》

「ん？ 携帯か……。お婆から？」

いざ出発という時に、持っていた携帯が鳴り響いた。

発信者を確認してみると、冷泉久子の名前。おそらく、何を買ってくるかの相談だろ

う。

電話する位なら、起こして一緒に行けば良かったのに……。

ここはハッキリ言っておかねば。

私は心を鬼にする覚悟で電話を取る。

「お婆。一人で買い物に行っちゃ駄目だって、何度も」

『……すみません。冷泉 久子さんの、ご家族の方ですか』

「え。はい」

——が、耳に届いたのは、聞き覚えのない男性の重低音だった。

反射的に返事を返すと、とても落ち着いた声で、その人は恐ろしい事を言い放つ。

『久子さんは今、病院に居らっしゃいます。熱中症で動けなくなつて』

「……っ!? どこ、どこの病院ですかっ!」

怖気を震う、とはこの事だろう。

予想だにしない……いや、予想していたからこそ聞きたくなかつた悪い知らせに、一

瞬で季節が真冬になる。

しかし、ただ震えている訳にもいかない。お婆の運ばれたらしい病院の場所を聞き出した私は、「すぐ行きます」と言つて通話を終了。玄関を出て自転車に飛び乗つた。

(まただ……。また、私の知らない所で、家族が)

掛かりつけの病院ではなかつたため、脳内に地図を思い描き、ペダルを漕ぎだす。

ドリフトで角を曲がり、横断歩道を赤信号に変わる間際で駆け抜け、可能な限りの速度で病院へ。

流れゆく景色が色褪せて見えるのは、どうしてなのか。

私は両親を、小学生の頃に交通事故で亡くした。

直前に母と喧嘩して、一人で家を飛び出し、公園で不貞腐れている間に、二人は居なくなつてしまった。

わざわざ私の好物を夕飯にしようと、揃つて出掛けたらしい。残された買い物袋がそれを教えてくれた。

喧嘩の原因なんて、もう覚えてすらいない。母はお婆によく似た性格だったから、きつと些細な事で言い合いを始めたのだと思う。

本当に些細な事で、だから、いつもの様に仲直りできると思っていたのに、それはもう叶わないのだ。

もしまた、同じ事が起きてしまったら。

知らない間に、大切な人を喪っていたら。

そんな想像が、ペダルを漕ぐ速度を上げさせる。

程なく目的とする病院に辿り着き、私は自転車を乗り捨てる様に降りて、息つく暇もなく受付へと。

「あ……。あの、冷泉 久子の、孫、ですが……。病室、は……？」

「ああ、はい。すぐに御案内します。……大丈夫ですか？ 少し休まれてからの方が」

「問題ない、です……。私の、こと、は、いいので……」

よほど酷い姿のようで、中に居た看護師の女性が私を気遣ってくれる。

確かめてみると、全身汗だくで髪はボサボサ。おそらく顔色も悪いだろうから、無理ないだろう。

でも、最優先事項はお婆の容態。沙織 a t ライカ直伝の呼吸法で息を整え、訝しみつつも先導してくれる看護師さんの後に続く。

エレベーターで四階へ上がって、両サイドに個室が並ぶ廊下を少し歩くと、看護師さんはとある部屋へと私を促した。

恐る恐る引き戸を開けてみれば、お婆がベッドで寝息を立てていた。聞こえてくる穏やかな息遣いに、私は心底ホッとする。

「お婆……?」

「安心して下さい、軽い熱中症です。手当が早かったですから、命に別状はありません」
「そう、ですか。ありがとうございます」

「いいえ。お礼でしたら、運んで来てくれた方に……。あ、来ましたよ」

礼を言う私に、微笑む看護師さんが入り口を示す。

いつの間にか、ドアの所で見知らぬ男性が立っていた。

手にビニール袋を提げ、短く刈り上げた黒髪の……。こう言っただけは失礼だろうが、ぬぼーつとした顔つきをしている。

が、それよりも何よりも、デカイ。凄く背が高い。2 mはあるだろうか？ がたいも良いし、プロレスラーみたいだ。

「失礼ですが、冷泉さんの……?」

「その声は、電話の」

「すみません。勝手かとは思ったんですが、携帯を確認させて貰いました。ロックが掛かってなかったので、連絡は早い方がいいかと……」

「あ、いや。助かりました。本当に、助かりました」

体付きに相応しい低音の声は、お婆の携帯から連絡をくれたのと同じだった。

つまり、この人がお婆を助けてくれた訳だ。

背は高いのに妙に腰が低い彼へと、私は深く頭をさげる。

経緯はまだ知らないが、とにかく命の恩人。礼は尽くさないとな。

……ん? 彼の着てる服、ごく普通の半袖シャツと黒いズボンだが、よくよく観察してみれば、襟に校章が着けてある。

あれは大洗女子の——正確に言うなら、大洗女子学園付属男子校の校章。

同じ学校の生徒だったのか……。てつきり成人男性かと。

「大事を取って、一日だけ入院という形にさせて頂きますので、後ほど受付けの方に声を掛けて下さいね?」

「あ、はい。分かりました」

しげしげと観察してしまっていた私に、看護師さんが一声掛けて退室する。マズい。お婆の恩人に失礼なことを。機嫌を損ねてなければ良いが……。

看護師さんを見送りつつ、改めて顔色を伺ってみると、彼は変わらずぬぼーとした表情。

……感情が読み辛いな。ライカみたく色々剥き出しなら、会話の取っ掛かりも見つけ易いの。

と、無言で困る私へ、今度はビニール袋が差し出された。

「これ、お婆さんの荷物です。勝手に預かってました。すみません」

「謝らないで、下さい。ありがとうございます。……お婆、こんなに買って」

やはり、買い物に行っていたらしい。

手渡された袋は、彼が持つと普通サイズに見えたが、私にとっては大きかった。

味噌。鰹節。味噌。砂糖。しめじ。玉ねぎ。トマト。アスパラガス。ミョウガ。

ピーマン。ニンニク。そしてイチジクに夏みかん。

いまいちメニューの全体像が見えないが、お婆の手にかければ、豪勢な食卓になったのは間違いない。

……私が帰つてくると、いつもこうだ。

家にあるものでいいのに、「若いんだからしっかり食べな！」と、食べ切れなくらいつくつて、結局は近所にお裾分け。

やっぱり、今度から私が買い物に行こう。そして料理も作ろう。

沙織ほどではないが、私だって自活するだけの料理スキルは持っているんだ。もう二度と、こんなことが起きないようにしなければ。

「傷みややすい物は病院の冷蔵庫に入れてもらってますから、帰り際に。良かったら、これも。水分補給は大事、です」

「……すみません、何から何まで」
「いえ」

加えて差し出されたペットボトルの麦茶を受け取り、私はまた頭をさげる。ヒンヤリと冷たい。買ってすぐか。気の利く人だな……。

表面は取り繕っていたが、地味に体力を消耗していたので有り難い。

「というか、お婆はどれだけ買ったんだ？　電動自転車とかじゃないし、家に帰るだけでくたびれそうだ……。」

「じゃあ、自分はこれで」

「えっ。あ、あの、まだちゃんとお礼してない……。せめて名前……！」

麦茶をあおってゲンナリしていると、その間に彼は、短い挨拶と共に姿を消してしまふ。

慌てて廊下へ顔を出すのだが、まだ近くにあるはずの後ろ姿が見えなかった。念のため反対方向も見ろが、やはり無し。

いや、おかしくないか？　足が速いってレベルじゃないぞ。まるつきり影も形も。

……腑に落ちないが、お婆を放って追いかける訳にもいかない。

私は仕方なく病室へと戻り、備え付けの椅子を引っ張り出して腰を下ろす。すると、今までピクリともしなかったお婆が、モソモソ起き出してきた。

「ふん。今時珍しい、硬派な男だねえ」

「お婆、いつから起きて？」

「もともと寝てなんかいないよ！　ったく、大したことないって言ったのに、赤の他人を無理やり病院まで運んじまうんだから。お節介な子さね」

「助けてもらつたんだから、そんな言い方は」

「言われなくても分かつてるよ、そんなこと！　……やんなつちまうねえ、買い物すらまともに出来ない体になつちまつた」

言葉を聞くだけなら、倒れたなんて嘘としか思えないほど態度の大きいお婆だが、その実、表情は暗い。

こんなに弱気な発言をするとは、今回のことがよつぽど堪えたみたいだ。

うん、いい機会だ。さつき考えていたことを実行しよう。

私は姿勢を直し、お婆に向き直る。

「お婆。お願いだから、無茶はやめて欲しい。散歩くらいの運動ならまだしも、あんなに沢山の買い物なんて……。起こしてくれれば私が行つたんだし」

「昼間つから寝ぼけてばかりなあんたがかい？　心配で任せられたもんじやないよ。釣り銭騙されたり、置き引きに遭つたりしそうだしね」

「それはお婆も同じ。もう若くないんだから、少しは信用して」

「信用つたつてね。あんたのどこを信用すりゃ良いんだい？」

せつかく戦車道の大会で優勝したつてのに、また遅刻ばかりしてるらしいじゃないか！

沙織ちゃんから聞いてるんだよ、あたしは！」

「ぐつ。……沙織め、余計な事を」

説得するつもりが、痛い所を突かれてしまった。

むう……。確かに、そど子が遅刻カウントをゼロにしてくれてからというもの、逆に気が緩んだ部分もあるが……。

沙織の裏切り者め。学園艦へ戻ったらライカに入れ知恵して弄んでやる。嬉し恥ずかしなラブイイベントで悶え苦しむがいい。

「それにあんた、その年で浮ついた話の一つも無いじゃないか。

沙織ちゃんとか、華、だったかい。あの子も彼氏作ってるんだろう？」

だつてのにあんたばっかり独り身で……」

「わ、私だけじゃない。秋山さんとか、西住隊長とかも、まだ……のはず……」

またしても痛い所を突かれ、反論は尻すぼみに。

別に彼氏なんて欲しくないが、沙織を引き合いに出されると、妙に反抗したくなる。というか、私を恋人として選ぶ男は世間的に見てどうなんだ。

制服着てないと小学生に間違われるし、ときどき着ても間違われるし。流石にそういう趣味の男は遠慮したい。

秋山さんは……戦車にしか興味なさそうだから、一生独身を貫くかも知れないな。

西住隊長はどうだろう。破門に近い扱いとはいえ、西住流家元の娘。将来的に、お見合い結婚辺りが妥当な線か。

と、勝手に仲間の今後を分析していたら、お婆は盛大に溜め息をついて。

「はあああ……。せめてさっきの男の子みたいな、ガツチリしてて礼儀正しくて、頼り甲斐のありそうな相手が、あんたの側に居てくれりゃあ、安心して任せられるんだけどねえ。色々」と

「そんな無茶な、名前だつて聞けなかったのに……。いや、探そうと思えば探せるだろうけど」

「だつたらあんた、キツチリ探しておいで！ このまんまじゃ腹の虫が収まんないからね！ あと、その食材はちゃんど冷蔵庫に入れとくんだよ！ それから……」

「分かった、分かってるから、大声出さないで。あと、その言い方じゃ不良が御礼参りするみたいだから」

相変わらず口が悪いけれど、お婆も助けて貰った自覚はあるらしい。本当はお礼を言いたいのだ。

私としても、きちんとしたお礼をしたい。探すのはやぶさかではないけれど、どうしたものでしょう。

確実な手掛かりとしては、2 m近い身長と、分校の男子生徒であること。
ん？ 学園艦に居る男子生徒の数は少ないし、これだけでも十分か。

(一先ず、ライカにでも話を聞いてみよう)

私は今後の動きを考えて、とりあえずの行動計画を立てる。

さつきも言ったが、分校の男子は数が少ない。加えて、ライカは蛇道でスカウト——偵察兵をやっているから、情報収集は得意なはず。

しばらくすれば、エキシビジョンマッチに向けた練習も再開されるだろう。それまでに会えると良いが……。



数日後。

学園艦へと戻った私は、放課後、一人となったタイミングで、ライカに電話を掛けていた。

目的は勿論、例の男子生徒の情報だ。

数回のコール音が続き、程なく聞き慣れた声が私の名前を呼ぶ。

『もしもし。どうかしましたか、麻子さん。あ、学校の用事で沙織さん遅くなるのか？
だったら送迎しに行きますけど』

「はあ……。なんでもかんでも沙織に結びつけるな。ちょっと聞きたい事があってな」

思わず廊下の窓に寄り掛かり、帰路に着く生徒を眺めつつ溜め息を。

口を開けば二言目には沙織沙織沙織。

相変わらずのライカに少しばかり辟易するが、言っても無駄か。遠慮しても仕方ないので、さっそく本題に入ろう。

「分校の男子の中に、身長が高い奴は居るか？ 2 m近い……」

『2 m？ はい、居ますよ。先輩に一人だけ』

「無口で、言葉遣いは固いか？」

『ええ。よく知ってますね、会った事でも？』

「ん……。お婆を助けてもらった」

やはり、分校の生徒であるという予測は正しかったようだ。

流石に説明無しで個人情報聞き出すのはアレだし、私は数日前の出来事を掻い摘んで話す。

するとライカは、得心がいったように呟いた。

『そうでしたか。また辻助けしたんですね、あの人』

「辻助け……？」

『はい。なんだか、物凄い確率で困ってる人と出くわして、その度に人助けしてるような

人なんですよ。んで、ついたあだ名が「辻助け」先輩。三年生の普通科です」
「……そうか。変わった人なんだな」

『でも、良い人ですよ。見た目と違って気配りとか凄いですし。』

蛇道の助つ人も頼んでるんですが、始めて二年足らずなのにめっちゃ強くて。

俺、先輩とタイマン張ったら九割負けます。悔しいけど、才能の塊つすよ』

「お前にそこまで言わせるか」

ライカの語る人物像は、私の知る男子生徒と重なるようできて、予想外な一面も含まれていた。

また蛇道か。それなら、病院であつという間に姿を消したのも頷ける。何かと縁があるな。

あだ名になるほど人助けをしているという事は、お婆の一件、彼にとつては日常茶飯事だったという訳だ。

が、だからと言って礼を失するなんて良くない。お婆に怒られる。

「なあ、ライカ。もう一つ頼みたい事が……」

『分かってます。セッティングは任せて下さい！ いつ頃が良いですか？』

「話が早くて助かる」

私がおかを言う前に、ライカは気安く請け負ってくれる。

辻助け先輩とやらは人が良いみたいだが、こいつも相当なお人好しだな。

友人としては心配になる部分もあるけれど、今回は素直に甘えよう。

特に日には指定せず、あちらの都合で構わないと伝えれば、「了解です！」と、張り切って通話を終えるライカ。

あ、しまった。戦車道の練習があるのを言い忘れ……てたけど、ライカなら沙織の練習予定を把握してるだろうから、大丈夫か？

いや。一応、言っておいた方が……。

《にやーん、にやーん、にやーん》

「ん？ 着信……って、ライカか。ちょうど良かった、言い忘れてた事が……」

『あ、麻子さん。先輩、OKだそうです。なんだったらこれからでも、って話なんですけど、どうでしょう？』

「早過ぎるだろう!?! ……まあ、問題ないけど」

『はい。じゃあ伝えときますね。失礼しまーす』

「こら待て。待ち合わせ場所を決めてない。とりあえず……」

十歩も歩かないうちに折り返しの着信があつたと思つたら、即行で約束を取り付けるとは。やる事が本当に極端だな……。

取り敢えず、待ち合わせの場所だけは指定して、今度こそ通話を終える。

ええつと、艦首方面の公園だから、私の住む寮は通り道。カバンを置き、お婆に持たされたタッパーだけ持っていけば良いだろう。

もともと今日は一人で帰る予定だったし、さっさと行くか。

想定より早く例の男子生徒——先輩と会う事になり、私は家路を急ぐ。

家に着いたら着いたで、冷蔵庫から取り出したお婆謹製の煮物を風呂敷に包み、服を着替え……なくても問題無いか。

それより、待たせたらそれこそ失礼だ。急がないと。

こうして、電話の三十分後には、指定した公園へ到着したのだが……。

(遅い)

肝心の先輩が、なかなか現れてくれなかつた。

よく考えると、場所は指定したけれど時間を指定していない。間抜けだ。

(……人の事を言えた義理じゃない、か。大人しく待とう)

普段は、自分自身が寝坊だのなんだので迷惑をかけているのだから、素直に反省して待つ事にする。

夕暮れの公園でベンチに座り、私はボウつと景色を眺めた。

そういえば前に、この公園であんこうチームのみんなと、コンビニ飯を食べた事があつたな。

沙織が三毛猫ハーレムを構築していて、なんとも沙織らしいと思ったものだが、それが今ではバカツプル。オマケに華も幼妻化。人生、分からないものだ。

と、年寄り臭く思い出を振り返っていたら、遠目にもよく目立つ長身の男が、こちらへ向かって来ていた。

逆光になっていて顔は分かりづらくなっていても、私の視力は2.0。ぬぼーつとした表情が確かに見える。

立ち上がってみれば、彼も私の存在に気付いたようだ。小走りになった。

「お待たせ、しました。申し訳ない、遅れてしまつて」
「あ、いや。そんなには待つてませんし」

何故だか、やたらとズタボロになった制服を着る先輩は、いの一番に頭を下げる。
ライカから年下なのを聞いているだろうに、畏まった対応が変わらない。これが素のようだ。

とにかく、まずは礼を言うのが先決か。

「先日は、祖母がお世話になりました。先輩が病院へ運んでくれなかったら、大変な事になつていたかも知れません。本当に、ありがとうございます」
「……どういたしまして」

斜め四十五度の最敬礼で、お婆を助けてもらった事への感謝を告げると、変化の乏しかったボヤけ顔に、わずかながら赤みが差した……ように見えた。照れているらしい。
なんというか、純朴そうな人だな。お婆が気に入りそうだ。昔よく聞かされた、お爺の話にもダブる。

……あ。お婆と言えば、渡すように頼まれているものがあつたんだ。忘れないうち

に。

「これ、お婆の作った、トコブシの煮物なんですけど。良かったら」
「……頂きます」

先輩をベンチへ促し、少し距離を置いて腰掛けた彼に、風呂敷で包まれたタツパーを渡す。

視線が「開けても……？」と問い掛けてくるので、私は領いた。

丁寧に風呂敷を解き、相対的に小さく見えてしまうタツパーの蓋を開けた彼は、指で摘んで早速一口。

「うまい」

「良かった……。お婆の煮物は絶品ですから」

「はい。ご飯が欲しいです」

ぬぼーつとした顔が、むふーつと満足そうに緩む。

よく噛み締めて食べている所を見ると、お世辞とかではなさそうだ。

良くも悪くも、噂で人を判断しないよう心掛けていたが、お婆の煮物の味が分かるんだから、この人は良い人に違いない。うん。

「所で、先輩。妙にズタボロなのは……？」

「……ちよつと、色々ありまして」

「色々？」

「……色々」

トコブシを堪能している先輩だが、やはり制服がズタボロになっているのが気になった。

はぐらかすような答え方は、暗に立ち入ってくれるな、と言われているようで。

喧嘩でもしたのか？ いや、この図体に喧嘩を売るなんてバカしか居ない。となると、事故にでも巻き込まれたか……？

まあ、昨日今日会ったばかりなんだ。本人が話したがらないんだから、あまり込み入った事情に口を突っ込むのも問題だろう。

そう思い、もう煮物を完食しそうな先輩を観察していたのだが、彼はふと遠い目をした。

視線を追ってみれば、数m先で、小太りな猫がお座りしていた。ぶにやー、と鳴いている。

トコブシを欲しがっていると見たのか、先輩は最後の一つを小さく噛みちぎって、
どうやら分けてあげるつもりのようなだが、それはマズい。私は急いで止める。

「待った。猫にトコブシはあげない方が良いです。毒になるから」

「そう、なんですか。知らなかった。……ごめんな」

申し訳なさそうな口振りで、先輩が猫に謝罪を。流星に敬語ではないが、いちいち野良猫にまで謝ることはないだろうに。

……ん？ 違う、野良じゃないな。首輪をしているし、飼い猫が脱走したのかも。

彼もそれに気付いたらしく、しげしげと猫を観察した後、ズボンのポケットから何か、
畳まれた紙切れを取り出す。

「それは？」

「迷い猫のチラシ、です」

チラシには、今、目の前にいるのと同じ猫の写真が載っていた。

赤い首輪。薄茶色の毛並み。両耳と手足、尻尾の先などが黒く、瞳は青。十中八九、この猫だ。

試しに、先輩がチラシに書かれていた名前——「八つ橋」と猫を呼ぶと、ぶにゃー。返事があつた。

飼い主のネーミングセンスは疑わしいけれど、こんなチラシまで配っているんだから、きつと心配している事だろう。家に帰してやらねば。

先輩も同じ気持ちらしく、おもむろに立ち上がり、そろり、そろりと歩み寄るが……。

「あ」

あと一歩で手が届くという瞬間、八つ橋は逃げ出した。

先輩も諦めずに追うものの、捕まえられない。見失うのを恐れてか、全力を出せないようだ。

それを分かっているのか、八つ橋も本気で逃げはせず、ちよつと離れては立ち止まり、近付かれたらまた逃げて、を繰り返している。

……このままだと完全に日が暮れるな。仕方ない、手助けするか。

「先輩。私に任せて欲しい」

「冷泉さん……?」

逃げられまくって寂しそうな背中をポンと叩き、前に進み出る。

そして、八つ橋が逃げ出そうとするギリギリの距離で座り込み、手を差し出す。

「おいで。家に帰ろう」

呼び掛けると、ふてぶてしい顔がこちらを見つめ返した。

沈黙。

ややあつて、八つ橋はノソノソと歩み寄り、ぶにゃんと私の前で腹を見せる。よし、成功だ。

私は妙にネコ科の動物に好かれるので、この位ならお手の物。ちなみに沙織も動物に好かれるが、何故か寄ってくるのはメスのみだったりする。

というかコイツ、前に四号の上で昼寝してた奴だな。西住隊長がえらく可愛がついてたような。

「……凄いですね。冷泉さん」

「この位で感心されても。それに、敬語じゃなくても良いです。先輩なんだし」
「え？ ……でも、失礼ですから」

逃げないように八つ橋を抱きかかえる私へと、先輩が尊敬の眼差しを向けている。心なしか、表情も輝いていた。

そんなに羨ましがれる事だろうか。小さい頃からこういう体質だったし、活かそうと思ったのも今回が初めてだ。まあ、誰かの役に立てるのなら、悪い気はしないが。

先輩は、腕の中で喉を鳴らす八つ橋に、恐々と手を伸ばす。気紛れで逃げていただけなのか、大人しく撫でられていた。

ぬぼーつとした先輩の顔は変わらないが、彼も喜んでいるみたいだった。雰囲気で分かる。

「あの……。冷泉さん、頼みが……」

「ん。問題ないです。行こう、先輩」

「……ありがとう」

言わんとする事を予測できた私は、彼が言い終える前に頷き返した。
ホツとしたように目尻を下げる先輩。

風呂敷とタツパーを回収してからその隣へと並び、二人と一匹で、くれなずむ学園艦を歩き出す。

さて。変なネーミングセンスの飼い主に、迷い猫を届けるとしよう。



数十分後。

チラシの案内図に従い、無事に迷い猫を飼い主へ送り届けた私たちは、来た時と同じように、二人並んで歩いていった。

ただし。

「なんでこんなに荷物が増えてるんだ……？」

「……申し訳ない」

暑中見舞いのゼリー詰め合わせに、ビニール袋に入った大きなスイカ二玉とゴーヤ十本、スルメや魚の干物、栄養ドリンクなどなどなど。

両手と背中に溢れる、「お礼の品々」を抱えてだが。

まず、八つ橋を送り届けた礼として、飼い主の親子（先輩並にデカイ父親と小学生の娘さん）からゼリーを貰った。

娘さん、本当に嬉しそうで良かった。ちよつと泣いていたし、よほど心配だったのだろう。ネーミングセンスは逆にこっちが心配になるけども。

その次に、道端で農業科っぽい男子生徒から話しかけられ、農作業の手伝いのお礼にと、スイカやゴーヤを貰った。

食べ切れないから後で分けてくれるそうだ。沙織に頼んでゴーヤチャンプルを作って貰おう。沙織のは苦くなくて美味しい。

余談だが、大洗女子にある農業科や水産科などは、船舶科ほどではないが学費を控除されている。

その度合いは出来高制——売り上げに直結するとの事。中には完全に学費を賄う猛者も居るそう。この学園艦、トンでもない人材の宝庫なのかも知れない。

話を戻そう。

男子生徒と別れてすぐ、今度は年配のオバサン達が寄つて来た。

その人達の言う所によると、先輩は週末によくボランテニアの清掃活動などをしていて、おかげで色々とお助かっているのだとか。で、乾物と栄養ドリンクを押し付けられた。オバサン達は、何やら私と先輩を見比べ、含み笑いをしていたが……。どうせ二度も会う事は無いだろうから、放つておいた。沙織と同じ匂いがして面倒だったんだ。

そして最後。

先輩が家まで送つてくれると言い、断るのも悪いし、二人で寮へと向かつていた所を若い男性に話しかけられ、土下座せん勢いで先輩が感謝されて。

なんでも、坂道の階段で乳母車ごと転んでしまった母娘を、体を張つて受け止めたらしい。

幸い、誰も怪我を負わずに済んだのだが、先輩は「待ち合わせがあるので」と、そそくさ立ち去つてしまったのだという。

その後、仕事から帰つて話を聞いた旦那さんは、デカイ男子生徒という情報を頼りに周辺を探し回り、ようやく見つけた先輩へと、これでもかと感謝したのである。

後日学校の方へ正式にお礼に行く、とも言つていた。先輩は「お気になさらず……」と恐縮していたが、あの旦那さんの興奮ぶりは治まりそうもない。大事になりそうだ。

「人が良いにも程があるんじゃないのか、先輩」

「……すみません」

「まあ、悪い事じゃないと思うが。お婆も褒めてた。先輩みたいなのは珍しいって」

「……よく、言われます」

両手に提げたビニール袋を持ち直しつつ、私は隣を見上げる。

やたらと高い位置にある先輩の顔が、申し訳なさそうに俯いた。

制服がズタボロだった理由が分かり、スッキリした部分はあるけれど、こども手荷物が増えてしまうと重くて困る。

しかし、本当に善人なんだな、この人は。

迷い猫を送り届けたり、農作業を手伝っていたり、ボランティアで街を掃除したり、身を投げ出して親子を助けたり。

辻助け先輩なんて呼ばれ方も、今となつては納得だ。頼み込めば借金の保証人にすらなりそうで、ちよつと不安にもなるが。

「……お婆さんは、どこか悪いんですか」

「心臓が少し。手術すれば治る可能性はあるけど、歳が歳だから危険性も高くて、踏み切れない」

「あ……。すみません、立ち入った事を」

「いや、気にしないで欲しい。あれでも最近はずいぶん調子が良いんだ。だから、無茶をしないか心配なんだけど」

「家族想い、ですね」

「まあ……。唯一の肉親だから」

「……………あ、の……………」

お婆の名前を出したからか、話はそっち方面へと変わるのが、うっかり口を滑らすと、先輩の顔がますます色を失う。

しまった。まだ二度しか会った事のない人に話す内容じゃない。私もどうかしている。

……………話してしまったんだから仕方ない。勢いで誤魔化すか。

「いちいち謝ろうとするな。ガタイはデカイ癖に、気が小さいぞ！」

「め、面目ない」

「……と、お婆なら言うだろうな。だがまあ、気にしないで欲しい。私は平気だ」

少し強めに叱りつけた後、私は先輩へ笑いかける。

すると彼も、面食らうように眼を瞬いてから、かすかに笑ってくれた。

らしくない事をしてしまったが、変に気を遣われるよりは良い。

お婆を助けてもらった礼は言えやし、煮物も食べてくれた。

奇妙な縁で知り合った私達だが、これ以上するべき事もない。

後は実家に電話して、キッチンと挨拶を済ませたと報告すれば良いだけ。

でも……。

（今回は先輩がたまたま助けてくれたから良かったもの、次また、同じことが起きたら）

考え過ぎと言われればそうだけれど、実際に事は起きたんだ。どうにも不安が頭をよぎる。

どうにかして、あの偏屈なお婆を大人しくさせられたら、私としても安心なんだが。

「…………冷泉さん。どうかしましたか」

「ん？ いや…………」

考え込んでいるのに気付いた先輩が、こちらを心配そうに見下ろしていた。

いつそ、先輩みたいな人がお婆の側に居てくれれば助かるが、無理難題だ。

ヘルパーを頼むにもお金が掛かるし、とりあえず、私が向こうにいる間だけでも、家
事やら何やらを任せて貰えればいいのに…………。

と、そこまで考えて、私はようやく思い出した。

「…………そうだ。そうだった。その手があるじゃないか」

「え…………？ あの…………？」

立ち止まり、私は何度も頷く。

お婆が病院に運び込まれた日、お婆自身が言った言葉。

本人が口にしたことなんだから強く出られるし、自分で言ったことを曲げるなんて、
お婆は絶対にしないだろう。

先輩だったら、頼む側としても信頼できそうだ。お婆に無茶させないためには、これ

しかない。

そう決心した私は、オロオロと様子を伺う先輩へ向き直り、黒い瞳を見つめる。

「なあ、先輩。一つ頼まれてくれないか」

「自分で、力になれる事なら」

私を見つめ返し、先輩はなんのてらいも無く返事をしてくれた。

まだ内容の説明すらしていないのに、躊躇もしないとは。

いや、だからこそ信じたくないのに、この人ならきつと、私の期待に伝えてくれると。

気恥ずかしさを紛らわすため、軽く深呼吸をし。

屈託のない瞳をもう一度見つめて、私は願いを口にする。

「私の、恋人になってくれ」

「……はい？」

図体に似合わず、小動物的な動作で首を傾げる先輩。

それがなんだかおかしくて、小さく吹き出しながらも、私は決意を改めた。

全ては、お婆の体への負担を軽くするため。
ニセ恋人作戦、開始だ。

第二話 「こんなの良くないです」

夕暮れのグラウンドを、無限軌道の摩擦音とエンジン音が轟く。

普通の人なら騒々しく思うだけだろうが、私にとって軽快に聞こえるそれは、独特なシルエット——アヒルにも見える軽戦車、八九式軽戦車の放つものだ。

赤いプラスチックのコーンの間を、掠めるようにスラロームする車体。

設定されたコースを走り終えた八九式は、ストップウォッチを持つ私の前で止まる。カウンタを止めて間もなく、車体前方のハッチからポニーテールの後輩——アヒルさんチームの操縦手である河西 忍が顔を出した。

「冷泉先輩、どうでしたかっ？」

「……ん。良い感じだ。前より確実にタイムが短くなっている」

「やったな河西！ 冷泉さんに褒められるなんて、成長した証だー！」

「はい、キャプテン！」

キユーポラから顔を出した車長、磯辺 典子さんに褒められ、河西は喜色満面に頷く。私は今、放課後をアヒルさんチームの自主練に費やしている。

決勝戦でも見事な囲を務めた彼女たちだが、根がスポーツウーマンであるからか、ほぼ毎日のように自主練を繰り返しているのだ。

流石に動かし過ぎると燃料費が馬鹿にならないため、監督役として私が居るのだが。別に頼まれた訳ではないのだけれど、これからも戦車道を続けるなら、こういう事だつて必要だしな。

「今日はここまでにしよう。戦車、片付けておけ」

「あれ？ もー帰っちゃうんですか？」

「いつもだったら、むしろこれから元気になるのにな？」

時計を確かめ、練習の終了を告げると、河西の横から赤ハチマキ少女の近藤 妙子が。磯辺さんの背後から、ヘアバンド少女の佐々木あけびが出てきた。通信手と砲手だ。

確かに夜は私の時間。日が落ちるに連れ、眼と頭が冴え渡り、体のキレも段違いになる。そんな私が早めに上がるのを不思議がっているのだろう。

戦車道の試合が全部夜間だったなら、素晴らしいポテンシャルを發揮できるという自

負があつた。まあ、一人が絶好調でも、チームワークを乱したら意味無いのだが。

「約束がある。悪いな」

「約束……。冷泉さん、もしかしてデート!？」

磯辺さんの声に、立ち去ろうとした脚がもつれる。

バレエに生きバレエに死す、とまで言いそうな彼女の口から、色恋の話題が出たのも驚きだが、当たらずとも遠からずだったからだ。

けれど、それをこの場で肯定するわけにはいかず、私は平静を装って振り向く。

「ただ早く帰ろうとしただけで、どうしてそうなるんだ」

「だってえ、最近のあんこうチームの先輩方、ビックリするほどリア充じゃないですか」
「武部先輩にはライカさん。五十鈴先輩には若さん。それに西住隊長も、最近はよく男子と一緒に居ますよね」

「こーなつたら、冷泉先輩もそーなんじゃないか、つて思っちゃいますよ! やっぱり!」

代わりに返事をしたのは、佐々木、河西、近藤の三人。

……反論できん。どうしたものか。

沙織と華はさて置き、西住隊長は来年の戦車道履修者を増やすため、無理やりポスターモデルをやらされているだけなのだが、描き手が男子生徒だから、興味津津なのだろう。

秋山さんは名前が挙がっていないので問題無いけれど、私は……。

「黙秘する。さらば」

「あつ、冷泉さんが逃げた！」

「怪しい、やつぱり怪しいですよお、キャプテン！」

「どうしましょう。八九式で追いますか？」

「たぶん先輩たちに怒られるだろうし、止めといた方がいいーと思うなー」

言い訳するのも面倒で、私は脱兎の如くその場から逃げ出す。

河西とかが危うい発言をしていたようだが、近藤がストッパーになってくれているなら大丈夫だと思われる。

グラウンドの隅に、バレー部のと纏めて置いておいた鞆などを回収し、急ぎ足で向か

うのは、ついこの間も待ち合わせに使った公園。

見慣れたオレンジ色の景色の中、まだ見慣れない大きな背中が、ベンチに腰掛けているのが見えた。

「待ったか、先輩」

「……少し」

回り込むようにして声をかけると、その人——辻助け先輩は、不承不承といった表情で返す。

「一応彼氏なんだ。こういう時は、嘘でも『今来た所』とか言うべきじゃないか？」

「抵抗のつもり、なんだけど」

「諦めが悪いな」

「おかげさまで」

立ち上がった先輩と並び歩きつつ、喧嘩のようにも聞こえるだろう、遠慮の無いやり取りをする私達。

先輩にお婆を助けてもらってから、一週間と少し。私達は世間で言う所の、恋人関係になつていた。

と言つても、本気で付き合っている訳ではなく、ある目的のために恋人関係を装っているだけなのだが。

そう。全ては一昨日の日曜日。連絡船で大洗へと舞い戻った日に始まったのだ。



晴れ渡る空。

燦々と、陽光が一直線に降り注ぎ、人々が昼食を摂り始める頃合い。

水色のワンピースと麦わら帽子姿の私は、欠伸を噛み殺しつつ、実家へと向かつていた。

歩き慣れた道のりは、しかし先輩という同伴者の存在で、妙に新鮮さを感じる。

が、洒落てはいても似合わない日傘を差す彼は、どこか不安そうな表情を浮かべていて。

「……冷泉さん。本当に行くんですか」

「麻子と呼べ、先輩。お婆は疑り深いからな、少しでもボロが出たらバレる」

「むしろバレた方が、自分は助かるんですが」

「男なら覚悟を決めろ。あの時“はい”と言っただろうに」

「あれは、正気ですかという意味合いを込めた“はい？”で……」

「正気の本気でマジだ。敬語も駄目だからな。頼んだぞ」

「……はあ」

溜め息とも、嫌々ながらの了承とも取れる返事をし、先輩は私の半歩後ろを歩く。

少しだけ近い距離感は、私の体を日傘の下へ収めようとしているからだろう。

帽子を被ってるんだから、そこまでしてくれなくても良いのだが、正直に言う助かる。海辺の町だから少しはマシだが、本当に今年は暑いからな……。

そうこうしている内に、目的地である実家が見えてきた。

背の低い生け垣の向こう。木造一階建ての平屋は、風が上手く通り抜けるように設計されていて、クーラー無しでも涼むことが出来るのが自慢だ。

いよいよ、か。

先輩へはああ言ったが、私もお婆に嘘をつくのは初めてに近い。ちよつと緊張する。

「やっぱり、やめませんか。こんなの良くないです」

斜め後ろを見上げれば、ぬぼーつとしていながら、わずかに強張った先輩の顔。

気が引けて当然かも知れない。

お婆に信頼してもらう為に、恋人が出来たと嘘をつく。そんな、バカみたいな事の片棒を担がされるのだから。

だがもう、後戻りは出来ないのだ。

……いやいや。戻ろうと思えば幾らでも戻れるけれど、それでは何時になったらお婆の世話を任せて貰えるか。

将来的な介護を考えれば、早めに慣れておくに越した事はないのである。

「私は覚悟を決めてある。どうしても無理なら、先輩はここまでで良いぞ。後で口裏さえ合わせて貰えれば大丈夫だ」

「……………」

私は、あえて前を向いたまま言った。

帰られたって、別に恨んだりしない。もともと無茶な頼みだったし、諦めもつく。が、後ろに立ち続ける大きな気配は、着かず離れず、変わらない距離を保っている。どうやら、先輩の方が先に説得を諦めたらしい。

その気配を頼もしく感じながら、二人、連れ立って玄関へ向かい、昔ながらの引き戸を開ける。

ただいま、と声を掛ければ、待っていてくれたのだろう、お婆がすぐに顔を出した。

「ん、お帰り。……うん？ そっちの子は……」

「お久しぶりです」

いつも通りに出迎えてくれるお婆だったが、先輩の姿を確認し、首をかしげる。そして、段々と眉毛の角度を上げ……。

「麻子！ 連れてくるなら連れてくるって、どうして先に連絡よこさないんだい？ これじゃあ持て成しも何も出来ないじゃないか！」

「ごめん、悪かったから、玄関で怒鳴らないで。血圧上がる」

「誰のせいだと思ってるんだい！ ……とにかく入りなつ。麦茶でも淹れるからっ」

これまたいつも通りに、元気の良い怒鳴り声を上げた。

驚かせて判断力を鈍らせる作戦とはいえ、やっぱりお婆の声は頭に響く。

先輩もちよつと……かなりビックリしたようで、目を大きく見開いている。

とりあえず、奥の台所へ引つ込んでしまったお婆の代わりに、先輩を先導して居間に。ちやぶ台の定位置へ座ると、先輩は挙動不審となりつつ、微妙な距離を置いて私の隣へ。

そのタイミングでお婆が舞い戻り、麦茶の入ったコップが三人分、ちやぶ台に置かれる。

意外にも、会話の口火を切ったのは先輩だった。

「煮物、ありがとうございました。美味しかったです」

「そうかい？ 最近の若い子は、ああいうの嫌いなんじゃないのかい？」

「いえ。自分は好きです」

「……物好きだねえ」

冷えた麦茶を一口含み、お婆がそっぽを向いてしまう。照れているのだ。先輩も分かっているらしく、穏やかな笑みを浮かべていた。

爽やかな風が居間を通り抜け、風鈴の音が更なる涼をもたらす。

うん。実家はいい。落ち着くな……。

「あんた、今日は時間あるのかい。あるなら夕飯食べて行きな。一応は礼をしとかないと、据わりが悪いしね」

「お婆……。もう少し言い方って物が」

「自分は気にしてない、から。ご馳走になります」

「ん。そうしな」

先輩の返事を聞くと、お婆は目に見えて上機嫌となり、「冷蔵庫に何があつたかねえ」なんて呟く。さっそく献立を考え始めたようだ。

困っているようで、しかし楽しそうに見えるのも、間違いではないだろう。

ところが、そんな表情を引き出した張本人である先輩は、喉に魚の骨でも刺さつたような顔をして。

(麻子、さん。やっぱり心苦しいんだけど)

(さん付けも禁止だ。仕方ないだろう、お婆に安心して貰う為だ。本人が言った事だからな。私に恋人が出来たら、信頼してくれると)

(信頼は、嘘で勝ち取るものではない、と思う)

(うぐ。……正論だが、世の中は正論だけでは成り立たないんだ。時には邪道が正道になる場合もある)

(それは単なる論点のすり替えじゃ……?)

(男の癖に細かいな)

(男女平等。ただし性差は考慮すべき……というのが、持論です)

ススス、と距離を詰めた先輩が、お婆には聞こえない程度の声で苦情を申し立ててくる。

分かっていた事だけれど、先輩もかなり頭が回るな。沙織くらいならこれで誤魔化せるのに、厄介だ。

「あんた達、さつきから何やってんだい。なんか言いたい事でもあるのかい?」

「え、ええ。まあ……」

内緒話していた私達を、お婆が訝しんでいる。

しまった。いつの間にか集中してしまっていた。ここで怪しまれるのはマズいな。
……こうなったら、さっさと本題に入ろう。

「お婆。私は先輩と付き合う事にした」

「は……？」

ぼかん、とお婆の口が開かれた。

先輩は「なんて事をつ」的な眼で私を見るが、お婆の視線がそちらへ滑ると、慌てて表情を整える。

そして、深く深く呼吸した彼は、ちやぶ台から少し離れ……。

「……今日は、ご挨拶に伺いました。どうか、麻子……ちゃんと、正式にお付き合い、させて下さい」

畳に手をつき、深々と頭を下げたのだった。

お婆の口が、顎が外れるんじゃないかと思うほどに、開かれた。



いやはや。あの時のお婆の顔は見物だったな。写真に撮っておきたかつたくらいだ……と、過去を振り返りつつ、私は先輩を先導して歩き続けている。

まあ、本当に大変だったのは、その後だったのだが。

何を血迷ったのか、父と母の仏壇に手を合わせに行ったり、追加の買い物に行こうと財布を持ち出した。

引きとめようとしても、お婆は「赤飯を、赤飯を炊かないと！」なんて暴走しつ放しで。

結局、三人で買い物に行く事になって、帰って来てからも三人で夕飯を作り。

久々に忙しいというか、騒がしい帰省になった。赤飯を取りやめて作った散らし寿司は絶品だったので、それは良かったが。

と言いながら、新たな問題も発生してしまったし、悩ましい。

「全く、お婆は本当に疑り深い……。OKする代わりに、恋人っぽい事してる写メを要求されるとは」

「あの時点で、謝っておけば良かったのに」

「そんなこと出来るわけないだろう！ 嘘だつてバレたらお尻叩かれる……」

付き合いを認めてくれはしたお婆だが、私がキチンと恋人らしく振る舞えるか不安なようで、デートなりなんなりをしている時に、写メを送るよう義務付けられてしまったのである。

もしかしたら、私の考えなんて全部お見通しで、さっさと根を上げるように仕向けられた可能性も……。万に一つであり得る、か？

なににせよ、この関係が偽物であるとバレた場合、尻を二十〜三十回くらい叩かれるだろう。百叩きじゃない所が現実的だ。

子供の頃、両親が居ない事を馬鹿にしてきた男子へと、口では言えないあんな事やそんな事をして、トラウマを植え付けた時に仕置きとしてやられたきりだが、あれは、痛い。そして恥ずかしい。二度とゴメンだ。

「とにかく、もう先輩も共犯者だ。付き合って貰わないと困る」

「……はあ」

微妙に疼くお尻を庇いつつ先輩を見上げれば、ボンヤリとした顔が曖昧に頷き返す。納得なんてしてないけれど、尻叩きは可哀想だから付き合います——といった所だろう。

先に言った通り、私達は共犯者。場合によっては先輩にだって累が及ぶ可能性だってあるんだから、もうちよつと危機感を覚えて欲しいものだが、協力してくれるなら良いか。

「で、何をすれば……?」

「具体的な事は、沙織を参考にしようと思う」

「……ああ。ライカの」

「ん」

先輩からの問いに、私は自信満々で頷く。彼も納得したようだ。いまや、校内でも知らぬ者は居ないバカップルであるあの二人。

聞きたくもないのに沙織の方から、今日はどうする、明日は何をしよう、昨日はこうだった……と話してくるので、カップルの行いそうな事は把握できている。

というか、本当に男子分校内部にまで浸透しているんだな、ライカという呼び方。そのうち、蛇道のコールサインとかにも使われそうだ。

それはさて置き。目下の行動方針が定まったと同時に、繁華街へと足を進めた私達だったが、しかし、納得顔だった先輩は、眉を不安そうに歪めた。

「……難易度、高くない？」

「私もそう思ったが、何も完全再現する必要はない。私達でも可能な、低難度の行動をクリアしている」

「具体的には……？」

「あれだ」

訝しげな先輩に、私は行きつけの店——74アイスクリームを指差した。

偽カップルが、他所でやれと言いたくなるバカップルの行動を真似る。

確かに難易度が高いし、トレースしようとしたら、全身を掻き毟りたくなること請け合いだ。

けれども、この世に同じ人間が二人と居ないように、恋人関係にだって個人差は出て当然。

ほどほどに恋人っぽい行動を取り、ほどほどに仲良くしている写真を撮りさえすれば良いのだ。ハードルはむしろ低い。

「私は無類のスイーツ好きなんだが、先輩は甘い物、苦手か？」

「好きです。大好きです」

「二度言うほどか……。なら丁度良い。行こう」

念のために確認してみたのだが、返事は食い気味だった。

心無しか、瞳の奥がキラキラと輝いているようにも……？

まあ、好きだというなら問題無し。私達は早速、ほんのり甘いフレーバーの漂う店内へと踏み入る。

相変わらず、女子高生やカップルで賑わっているな。

「先輩は何にする？」

「……初めてなので、お勧めがあれば」

「甘い物好きなのに、初めてなのか？」

「入り辛くて……」

いつものようにメニューを品定めする私と違い、先輩は妙に縮こまっているというか、肩身が狭そうだった。

……それもそうか。女子高生やカップルが常時たむろしている店に、男一人で入るのは、ある意味、銃弾に身を晒すよりも勇気が必要だろう。

ライカなら平然と入りそうだが、先輩はどう見てもそういうタイプじゃないし。仕方ないか。

とりあえず、無難かつオーソドックスなバナナ、ストロベリー、チョコチップのトリプルを先輩に勧め、私はメープル、ラムレーズン、スイートポテトのトリプルをカップで注文した。

そして、二人並んで窓際の席に陣取る。

「まずは普通に食べよう」

「……頂きます」

「頂きます」

せせこましく先輩が手を合わせ、私も同じように。

やけに小さく見えるスプーンでアイスをつくった彼は、なんとも幸せそうにそれを頬張った。といつても、傍目にはそう見えないが。

なにせ、2 m近い身長の方が、窮屈そうに背中を丸めつつ、無言で目を細めているのだ。多少なりとも付き合えないと、すこぶる不機嫌そうに見えてしまうだろう。

良い人なのだけれど、少し外見で損をしているな。

さて。人物観察はこの位にしよう。

本当なら何も考えず、一心不乱にアイスを堪能したいが、そうもいかないのだから。

「で、恋人っぽい行動だが。沙織いわく、買い食いでシェアするのは基本だそうだ」

「シェア……。半分こ？」

「ん」

えー、沙織曰く。

好きな人と違う物を注文してシェアするのって、すつごく楽しいよ？

相手の好きな物が分かるし、自分の好きな物も分かって貰えるし、何より、さり気な

く……か、間接キツスとか出来ちやうし！

きやー麻子ったら何言わせるのよーやだもー！

……だ、そうな。

お前が勝手に喋り始めたんだろう、と言いたかったが、言ったところで何も変わらなさそうだったので、止めておいた。

以前の妄想系残念少女だった頃なら疑わしかったが、ライカという恋人をゲットした今ならば、一応は信用に足る情報であろう。

そうでなければ、私の苦勞が水の泡という事になる。

「という訳で、一口貰うぞ。私のも食べて良いから」

「……はあ」

合点がいったようできて、どこか腑に落ちていなさそうな先輩だったが、私はあえてそれを無視。やや強引にアイスを買った。間接キスとか気にしないな。

うむ。やはり定番だけあって安定した美味しさだ。

というか、こうすることを見越して、私の食べたいフレーバーをお勧めしたのだ。流石に六つも食べるとお腹が冷えるけれど、半分ずつなら平気だろう。騙して悪いが、こ

のくらしいの役得はあっていいと思う。

もちろん、貰いつ放しではない。先輩のトリプルを堪能した後は、私も自分のカップを差し出す。

いくらか戸惑っている様子だったけれど、甘い物好きなのは本当らしく、やがてメープルにスプーンが突き立てられた。

「うん、こっちも美味しい」

「だろう？ 他にも期間限定のとかがあるから、気後れせずに来るといい」

「……頑張つて、みるよ」

続いてラムレーズン、スイートポテトのフレーバーを頬張りながら、先輩は再びの来店を決意したようだ。

それからは、ごく普通に感想を話しながらアイスを食べ、あつという間に時間が過ぎた。やはり、幸せな時間は短く感じるな。

もつと味わいたい所だが、追加注文するには財布が厳しい。自分で稼いだお金じゃないんだから、無駄遣いは厳禁である。

バイトするにも夜間じゃないと失敗するだろうし、そもそも高校生に夜間の仕事は無

理。ままならないものだ。

と、名残惜しく最後の一口を頬張った私へ、先輩が話を振ってきた。

「所で、麻子ちゃん」

「なんだ、先輩」

「……写メは？ うっかり、食べ終えてしまったんだけど」

「あ」

言われて、空っぽになったカップを見つめる。見れば、先輩のカップも同様で。

なんという事だ。美味しくて普通に完食してしまったぞ……。

おのれ74アイスクリーム！ いや、普通に私が悪いんだけども。

こうなったら追加注文を……と思ったが、先ほど言ったように財布が厳しいし、甘い物に関係すると私の思考はちよつとばかり緩む。

ひよつとすると二の轍を踏むかも知れないから、場所を変えた方が良さそうだ。

「仕方がない……。どこか、ゲーセンでプリクラでも撮るか」

「げ、ゲーセン……!？」

空きカップ片手に、私は重い腰を上げたのだが、何故だか先輩は、驚愕の眼差しでこちらを見上げ——て、ないな。見下ろしていた。

立ってるのに座った人よりも背が低いとか、少し悲しくなってくる。

けれど、問題点はそこじゃない。ゲームセンターへ行くだけだというのに、先輩が躊躇している事だ。

色んな意味で豪胆な彼が、たかがゲーセンごときに及び腰になるとは。

ここと違って、男子学生が居てもおかしくない場所だろうし。予想外の反応だな。

「どうかしたか。何か不都合でも？」

「ゲーセンって、不良の行く場所じゃ……」

「いつの時代の話だ。今はそんな事ない。誰でも普通に行く場所だぞ。まあ、厳しい学校なら校則で禁止しているだろうが、うちは違うしな」

「……そう、なんだ」

何か重大な理由でもあるのかと思えば、なんの事はない。ただ単に、変な固定観念があるだけだった。

つくづく、変わった人だ。

見知らぬ他人のため、いとも容易く身を投げ出し、甘い物が好物で、ゲーセンに苦手意識を持つ。

古風、というのとは違う気がする。お婆は硬派と評したけれど、実際にはスイーツ男子だし。掴み所がない。

勢いで偽の恋人役を頼んだだけだったが、少しだけ、興味深く思えてきた。

74アイスクリームから出て、今度はゲームセンターへと足を向ける私達。

確かこの前、新しい筐体が入ったとクラスメイトが話していた。

携帯にもテザリング機能で直接画像を保存できるみたいだから、お婆への証明写真として使えるだろう。

未だに先輩は及び腰……というより、気が引けているっぽいけど、一応付き合ってくれららしい。

と、そんな時、不意に携帯の着信音が聞こえてきた。

デフォルトから変更していないのだろうそれは、先輩の方から発せられた物だ。

「電話か？」

「……メール。妹から」

なんの気無しに尋ね、先輩も当たり障りのない返答を。

ふむ。妹さんが居たのか。どんな人だろう。

年子なら私と同じ年。もつと下の可能性もあるが、ひよつとすると、私の知り合いの中に居たりしてな。

……いや。先輩の家系ならきつと背が高いだろうし、知り合いの身長は平均値が殆どだ。流石に無いか。

即返信派ではないようで、内容を確認した先輩は携帯をしまい込む。それでこの話題は終了かと思われたが……。

「麻子ちゃん。君は……モテるのか」

「つ、ど、どうした先輩、いきなり」

藪から棒に、先輩が変な質問を投げかけてきた。驚きで息が詰まる。

「さっきのメール。妹が、戦車道をやったら本当にモテるのかと、気にしているみたいで」

「なんだ、そういう事か」

質問の意図を聞き、私は胸を撫で下ろす。はあ、焦った……。

ん……？　なんで私は焦っているんだ？

仮初めとはいえ恋人同士なんだから、そういう話をしたって不思議じゃないのに。

……とりあえず、後にしよう。質問されてるんだから、それに答える方が先だ。

「近場に戦車道で男を作った例は二つあるが、戦車道はあくまで切っ掛け。

そこから先は二人が行動した結果だ。一概には言えない。

先輩はどうなんだ。戦車に乗っている女は、嫌いなのか」

「……………」

言わずもがな、例というのは沙織&華の事である。

二人とも、戦車道を切っ掛けとして異性と知り合い、色んな事が積み重なって、恋人を得た。

しかし、戦車道が切っ掛けであるのは間違いないけれど、戦車道をしていだから結ばれた訳ではない……と、思う。

彼らが、たまたま戦車道をしている女の子を好きになっただけであり、仮に戦車道をしていなくても、出会う事さえ叶ったならば、恋人同士になっていたかも知れない。

要するに、“たとえ”は“たとえ”でしかない、という事だ。

先ほどのメール。おそらく、妹さんが戦車道を始めようとしているのだろうと考えられる。

が、男目当てに戦車道をやっても長続きしないだろうし、モテると確約なんて出来はずもない。

そういった意味を含め、逆に先輩へ問いかけてみると、彼はピタツと立ち止まり、顎に手を当てて熟考し始めた。

思っていた以上に真剣に受け止められてしまい、ちよつとばかり困ってしまう私だったが。

「乗っているから好きとか、嫌いとかは、思わないかな。

ちゃんとお互いを知った上で、好きになるものだと、思う。

……少なくとも。自分は、そうしたい」

こちらへと視線を向けた先輩は、とても真剣な表情を浮かべている。

真つ直ぐに、私を見つめている。

不意に、脈が乱れた。

なんだろう。単なる不整脈？ ……そういう事にしておこう。

思考の奥底で、「そんな訳ないだろう」と言っている自分が居るけれど、今はまだ、確証が持てないから。

私は無言で再び歩き始め、先輩も同じように続く。

目的地のゲームセンターが見えてくる頃には、いつもの私に戻っていた。

「さ、着いたぞ。行こう、先輩」

「うん」

振り向かず、背後の大きな気配へと呼び掛ける。

聞き慣れてきた低音を確かめ、私は——私達は、自動ドアをくぐるのだった。

第三話「ご馳走になりまあす！」

息を潜め、気配を殺し、体を縮こませながら。

私こと冷泉 麻子は、人でごった返すとあるファストフード店にて、諜報活動を行っていた。

いわゆる尾行というヤツだ。

ごく普通の、赤と白を基調とした上着に水色のスカート。

頭は目深に被ったバイザー付きの帽子。髪も後ろで縛り、即席ではあるが変装もしている。

が、しかし。この尾行は当初の予定から外れまくった行動であるため、どうしても溜め息が出てしまう。

(私は一体、何をしているんだ……?)

それとなく、背後の仕切りの向こう——窓際の席に並ぶ“三人”の背中へと、非難が

ましい視線をぶつける。

やたらとデカイ男と、その両隣に座る女子高生達には、見覚えがあつた。あつて当然だ。

なぜならば、真ん中の両手に花な男は、私の恋人（仮）である辻助け先輩で。

無闇に楽しげな笑顔を浮かべる女子高生達は、学校の後輩である佐々木 あけびと、

近藤 妙子なのだから。

（こんな事して、なんになると言うんだ）

そう自分へ問いかけてみても、何故だか無性に、気になつて仕方なかつた。

先輩は洒落つ気のないポロシャツと紺のズボン姿。

上品な半袖のブラウスを着て、水色の膝丈スカートを履いているのが佐々木。

赤と白のボーダー柄のシャツに青い上着を合わせ、白いパンツルックなのが近藤である。

傍目から見ても、親しい間柄なのが伝わってきた。ダブルデートでもしてるみたいだ。

仲の良い女子が居るなんて、先輩から聞いた事なかつたのに。

しかもそれが、私と同じく戦車道をしている仲間だなんて、全く予想すらしていなかった。

(……っ！ 動くか)

やおら席を立つ三人に、私は思考を中断。

沙織 a t r a イカ直伝の隠密術で、気配を殺しつつ後を追う。

どこに行くのか知らないが、とにかく今は、このモヤモヤを解消したい。

それには絶対、先輩達の真意を確かめる必要があるから。だからこれは、正当な行為なのだ。

自動ドアをくぐりながら、私は決意を新たにす。

「出迎えたのは、むせ返るような夏の熱気だった。」



にやーん、にやーん、にやーん。

聞き慣れた着信音が、寝ぼけた頭に木霊する。

電話……。私の、携帯。

出来ることなら無視してしまいたいけれど、生徒会の連中だったりすると後が怖いので、とりあえず発信者の名前だけ、確認しておかねば。

そう考えた私は、頭まで被った布団代わりのタオルケットから腕だけを出し、枕元にあるはずの携帯を探す。

沙織とかライカだったら、悪いが放っておこう。きつと許してくれる。

「ん、ん……？」

五秒くらい掛けてようやく見つけ、タオルケットの中へと引つ張り込み、光る画面を確かめると、そこにあった二文字は、お婆。

思わず「うええ……」と唸ってしまった。

無視したら後で必ず怒られる。というか出ても怒られそう。

……諦めるしかない、か。

私は気力を振り絞り、タオルケットから頭を出しつつ、通話ボタンを押した。

「なに、おぼあ……。こんな、はやく……」

『早くって、もうお昼じゃないか！ あんた、まさか今の今まで寝てたのかい!』

「おおごえ、ださないで……。ねむい……」

『つたく、だらしなねえ。こんな子のどこが良いんだか……』

開口一番、予想通りの大声を放ったお婆は、呆れたように言う。

確かに、目覚まし時計の長針と短針は重なっている。お昼丁度だ。

だがしかし、今日は日曜日。

学校は休みで、練習も休みで、久しぶりに惰眠を貪れる日だったのだ。むしろ寝ていて当然だと思う。

世間一般の事なんか知らん。

『あんた、ちゃんとあの子と逢い引きとかしてるんだろ？ いや、せつかくの日曜に

寝てるんだ。してないに決まってるか』

「ん、……」

お婆の嫌味に、ぐうーっと、猫みたいにお尻を上げる伸びをしつつ、曖昧な声で返事をする。

逢引する相手なんて……いや、居るのか。先輩が。

例の約束もあるし、まあ、デートくらいした方が良いでしょうけども、眠いしな……。それに、先輩は人が良過ぎる。

デートしようと誘えば、たとえば先約があつても来てくれそうで、申し訳ない気もするのだ。

そんな訳で、先輩と恋人関係を偽装するのは、もっぱら放課後になっている。

もしかしたら、お婆に送る証拠メールがワンパターン過ぎたのかも……？

『何を思つて、あの子と付き合いだしたのかは知らないけどね。……相手の善意に頼つたままじゃ、いつか他の子に取られちゃうよ』

「お婆……っ？」

携帯から聞こえてくるお婆の声質が、微妙に変化する。

睡魔に挫けそうな頭でも分かるそれは、お婆が私の事を、本気で心配している時の声だ。

取られる……。先輩が？

善意に頼ったまま、というのにはぐうの音も出ないが、そもそも、本当の恋人同士ではない。

本気で先輩の事を好きな子が現れたなら、キチンと対応するまで、だし。

……んん。なんだろう。頭がボンヤリする。

やはりまだ眠いのか、私は。

『とにかく！ いつまでも寝てないでさっさと起きな！ 寝てる間に留年しちゃうよ！』

「分かった……。起きるから……。それだけならもう切るよ……。う？」

まだ寝ぼけているのを察知したか、お婆は最後にもう一度、大きな声で私を叱った。

逃げるように通話を終えると、私もどうにか起床モードへと移行し、けれどタオルケツトにくるまったまま畳を這う。

そのまま部屋の端に行き、沙織が用意しておいてくれる着替え一式を引きずり込んでモゾモゾ。

部屋着のシャツと短パンに着替えてから、顔を洗いに洗面所へ。サツパリして戻って

来ると、ちょうど腹が鳴った。

腹が減ってはなんとやら。まずは腹枵えをするか。冷蔵庫に何か……。

「……食料が無い」

中身は見事に空っぽだった。

かろうじて存在を確認できるのは、マヨネーズとケチャップ、麺つゆ位である。

いや、正確に言うならば、食材はある。野菜とか肉とか、そういった材料は入っているのだ。

が、今の私に必要な、調理せずとも、そのまま食べられる品はなかった。

そうだ！ 沙織が作り置きしてくれる常備菜……うっかり昨日食べ切ってしまったじゃないか。

冷凍食品とかもないし、万事休す。日頃の不摂生が祟ったか……。

沙織に助けを求めようにも、確か今日はライカとデートだとか言っていた。

邪魔したら今後一週間、食卓に私の不得意な、苦い食べ物ばかりが並ぶ事だろう。この時期だと苦味抜きしてないゴーヤー一辺倒になる。

うむう。昼間から外出なんて私らしくないが、致し方ない。

「買い出しに行くか……。ついでに、駄菓子屋で買い食いでもしよう」

面倒臭さを気合いで押さえ込み、私は再び着替え始める。

業務スーパーパーなら出費を抑えられるし、駄菓子屋なら二百円でお腹一杯食べられるだろう。

沙織やお婆に知られたら、凄い勢いで「栄養が偏っちゃうでしょ!？」とか怒られるに違いないが、今日なら大丈夫……。なはず。

若干の不安は拭えないけれど、もう決めた事だ。

よそ行きのスカート姿になった私は、財布と携帯をポシエットに入れ、熱射病対策の帽子も被り、寮を出る。

とりあえず、鳴きつ放しの腹の虫をなんとかしないと。まずは駄菓子屋だな。

「ん？ あれは……」

颯爽と、勝手知ったる街並みを歩く私だったが、見知った後ろ姿を見かけて、思わず足を止めてしまった。

サスペンダーで釣ったハーフパンツと、ピンクいシャツを着る癖っ毛な女子。
あんこうチームの装填手である、秋山さんだ。

別に、彼女と街中で出くわすのは珍しくもないのだが、問題はその隣に、同じ年頃と
思しき、パーカーとジーンズ姿の男子が居たこと。

最初は見知らぬ人だと思ったのだけれど、秋山さんと笑顔で話す横顔を見て、ふと記
憶が蘇る。

あれは確か、私の遠縁の親戚だ。

両親の葬儀の時に会ったきりで、思い出すのに時間が掛かってしまった。

(そうか……。あいつも大洗に居たのか……)

懐かしいような、物悲しいような気持ちに、私は空を見上げる。

名前は……残念ながら思い出せないが、一度会っただけだし、きつと向こうも覚えて
いないだろう。それは別に良い。

むしろ気になるのは、秋山さんとうとう知り合いなのか、だ。

これまで男の影など全く感じられなかった彼女が、ああも楽しそうに男子と出歩くと
は。もしや、彼氏？

……いや、可能性としては低いだろう。

失礼に聞こえるかも知れないが、秋山さんは戦車一筋で、男に微塵も興味なさそうだし。

まあ、あいつの方は満更でもなさそうだから、片想いという可能性は捨て切れないか。親戚のよしみだ。陰ながら応援しておこう。

遠ざかっていく背中を見つめ、私は心の中でエールを送る。

そして、再び自己主張し始めた腹の虫に従い、歩き出そうとするのだが。しばらく進むと、またしても知り合いの姿を見つけてしまった。

「ん？ 今度はライカと沙織か。……相変わらずラブいな」

半袖のワイシャツの上に、シンプルなベストを羽織る、ダメージジーンズのライカ。ガリーリーなノースリーブのブラウスと、赤と黒のチェック柄スカートを合わせる沙織。

誰がどう見てもカップルとしか思えない、独り身には目の毒なイチャイチャっぷりだ。

ライイカ♪ 沙織さん♪ と無意味に呼びあつたり、ライカが沙織の髪に触れたり、

沙織がライカの腕に頬を寄せたり。

あんなピツタリと腕を組んで、夏なのに暑くないのだろうか。

挨拶……すると邪魔になるな。とりあえず物陰に隠れて見送ろう。

そう思い、建物の間の路地へと入って通り過ぎるのを待っていたのだが、正直見てい腹が立ちそうなバカツプルに、なんと声を掛ける人物が居た。

沙織たちと同じく、男女ペアの彼らは。

(華と若さんまで……。今日はなんなんだ?)

学園艦の上では絶対に見かけないと思っていた、大人なカップルたちだった。

お婆の見舞いに来てくれた時に着ていた、落ち着いた風合いのワンピースの華。その隣に、シックなスーツを少しだけ着崩した若さんが立っている。

二組のカップルは親しげに立ち話しているけれど、どうして今日に限って、知り合いのカップルに行くわすんだ? いや、秋山さんはまだ未確定だが。

にしても、限りなく有頂天な沙織&ライカ組と比べて、華&若さん組の風格と言ったら。

隣にいるのが当たり前の雰囲気まで醸し出す様は、もう若夫婦と表現して良いかも

知れない。落ち着き過ぎだろう。結婚秒読みか？

ま、それはそれとして。

偽の恋人が居るとはいえ、本来の私は独り身。あまりラブい空気に触れるとカブレてしまう。さっさと退散するか。

(しかし、何で腹拵えするか。ミニヨーグルト、棒ゼリー、かりんとう、ミルクせんべい、あんこ玉。どれもこれも捨て難……ん？ あの後ろ姿は、先輩？)

駄菓子屋のラインナップを思い出しつつ、大通りを回り込んで目的地へ急いでいると、二度ある事は三度だけならず四度も。

少し先を、見覚えのあるデカイ背中が歩いていた。

スポーツマンらしい白いポロシャツに、折り目のピシツとした紺のズボン。シンプルだ。

……うん。お婆にもああ言われたし、一応、声を掛けておくか。

しばしの間、腹の虫を無視する事にした私は、小走りに先輩へと駆け寄り。

「先ば——っ!?!」

その途中で、また電柱の物影に隠れていた。

何故ならば、先輩の向かう先に、予想だにしない人物が居たからだ。

大きく手を振り、笑顔で先輩を迎える「彼女たち」は、もはや当然の如く、見知った少女。

「あ、来た来た。こつちですよお」

「おにーさん、こんにちはでーす！」

「……………お待たせ」

ブラウスとスカートという、お嬢様ルックな佐々木あけび。

ボーダーのシャツと青い上着の、白いパンツ姿な近藤 妙子。

戦車道ではアヒルさんチームに所属する、一年バレー部女子である。

(さ、佐々木と近藤……………？　なんであの二人が、先輩と)

二人と待ち合わせでもしていたのか、合流した先輩は柔らかに微笑み、両手に花状態

で、どこかへ向かって歩き出す。

待て。待て。待て待て待て。

笑った？ 今、先輩が笑ったか？ 私の前では滅多に笑ったりしないのに？

それ以前に、私というものがありませんが、他の女と日曜に出歩くとはどういう事だつ。

いや、偽の恋人なんだし、本当の私生活に口出しする資格なんてないが、何が切っ掛けでお婆にバレるか分からない。

それは困るんだ。

……それだけ、なのに。

(なんだ、このモヤモヤ)

仲睦まじげに歩く、三人の後ろ姿を見ると、胸の中にシコリのような物が生まれるのを自覚した。

腹の虫がすっかり鳴りを潜めるほどの、異様な感覚。

初めての、感覚。

その正体を理解せぬまま、私の脚は動き始める。先輩たちの後を追って。

私の気持ちはともかく、先輩とバレエ部一年女子との関係だけでも、確認しておかな

くては。

偽恋人作戦をつつがなく遂行するためにも、これは必要な行動だ。

……その、はずだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

沙織&ライカに仕込まれた隠密術を駆使し、私は三人を追い続ける。

まさか役に立つとは思ってなかったが、なんでも学んでおくものだな。

どうやら、私が目指していた駄菓子屋とは逆方向の、繁華街エリアへ向かっているようだ。

(やけに親しげだな、あの三人)

人混みの喧騒に掻き消され、何を話しているのかまでは聞こえてこない。

けれど、昨日今日出会ったばかりではない、見知った間柄の雰囲気を感じた。

(デート……。いや、三人で？　ぬう……)

男女が休日に出掛けるのだから、デートだと考えるのが当然だが……。

男一人、女二人ではバランスが取れないだろう。

万が一の可能性で、一対二のダブルデートという可能性も捨てきれないものの、先輩の性格を考慮するとあり得ない。

先輩だったら間違いない、無理にでも時間を作り、一対一でデートするだろうし。ハーレムとか許されても、絶対に拒否するのが先輩だ。

それがどうして、こんな風に……？

とか考えている内に、周囲の景色は更に街中へ。飲食店が立ち並ぶ界限に差し掛かる。

ふむ。どこか店に入るみたいだな。

(ファストフードか。色気が無い……。ついでだ、私も入ろう)

先輩たちが選んだのは、世界のどこにでも展開している、カーネルが目印のファスト

フード店だった。

駄菓子屋よりも高くつくが、昼食も済ませておくべきだし、丁度良いと言えば丁度良いか。

ひとまず、先輩たちに気付かれぬよう、距離を取って注文。

手頃なセットメニューのトレイを手に、窓際に並んで座る彼らを観察可能な、ちよつとだけ離れたテーブル席へ腰を下ろす。

ここでもなら、会話の内容も把握できそうだ。

「ほんとーに良かったんですか？ 奢って貰っちゃつても……？」

「気にしないで。頑張ってる先輩は、応援しないと」

「わあ、流石はお兄さん。太っ腹ですねえ！ ご馳走になりませす！」

かたや恐縮しつつ、かたや朗らかに。

先輩の両脇へ座る近藤と佐々木が、ハンバーガーの包みを開ける。右側が近藤で、左側が佐々木である。

後輩に昼食を奢る、か。うん、いつもの先輩らしい行動だな。

私も奢って欲しい所だが、無理なものは仕方ない。とにかく食べよう。

「はー、ポテト美味しー。でも、食べ過ぎるとすぐお肉になっちゃうしなー」

「うっ。妙子お、嫌なこと言わないでよ……」

「……気にし過ぎじゃ？」

三人も食べ始めたらしく、チラリと様子を伺ってみれば、一年女子たちがセットのポテトをつまみ、物憂気に溜め息を。

先輩は不思議そうに首を傾げていて、私としても同感だ。

日頃からバレー部だけでなく、戦車道の練習にも精を出す彼女たちは、程よく引き締まった体つきである。

更に言えば、つい半年前まで中学生だったとは思えないほどの、巨乳だった。DとかEとかでは済まないんじゃないだろうか。

まあ、先輩は多分そんなこと考えてない。純粹に、太って見えないから不思議なのだろう。

疑問の声を受け、ポテトを「はむ」と啜えた佐々木は、しかし、やはり憂鬱な顔。

「それがそうでもないんですよう。」

わたし、また胸が大きくなっちゃったみたいで……。
ブロックする時、タツチネットしそりで困るんです」

「っ!?! (っ)ほっ、(っ)ほっ……」

「あ、だいじょーぶですか。もー、ダメだよあけび。おにーさんは純情なんだから
ゆさり。」

重たそうに胸を持ち上げる佐々木の姿を、間近で見ってしまったのだろう。

先輩が思いっきり噎せた。近藤がその背中を、慣れた手付きでさすっている。
後ろ姿の動きから想像しただけの私でも、あまりの重量感に慄く。

これって逆セクハラではなからうか。

(……胸、か)

なんとなく、食べかけのハンバーガーを胸に当ててみる。

カサ増ししても、Cにギリギリ届くかどうか、だった。

(虚しい……。何をしてるんだ私は)

唐突に馬鹿らしくなり、大口でハンバーガーへと食らいつく。

胸の大きさがなんだと言うのだ。それだけで女の価値が定まる訳じゃない。

貧乳はステータスだと、どこかの誰かも言っている……気がするし。

「そう言えば、典子は？」

「キャプテンですかあ？ 忍の足止めです」

「ないとは思いますが、うっかり鉢合わせとかしちやったら、いろいろ台無しになっちゃいますからねー」

勝手に落ち込み、勝手に立ち直った私だったが、時を同じくして先輩も復活したようで、一年女子に話を振った。

二人はハンバーガーを齧りつつ、笑顔でそれに答えている。

内容から推察できる事もあったが、けれど、もっと気になる発言があった。

(典子……。アヒルさんチームの磯辺さん？ 私にはちゃんを付けるのに、呼び捨て？)

それは、先輩の磯辺さんへの呼び方。

気心の知れた男友達なら、あだ名か呼び捨て。普通の友人知人なら「さん」付けが基本だ。

私は強要したので「ちゃん」付けだが、少なくとも、知る限りで呼び捨てにされている女の知り合いは居ないはず。

もしや、磯辺さんと先輩は――

「ごちそー様でしたー」

「お兄さん、ありがとうございます！」

「うん」

……っ！ 動くか。

考え込んでいる間に、三人が席を立とうとしていた。

まだ先輩たちの目的を明らかにしていないし、尾行を続けるためには、早く食べ終えねば。

味わって食べたかったが、致し方ない。私は大急ぎでハンバーガーとポテトを咀嚼し、コーラで流し込みつつ、彼らの動向を見守る。

すると、出口へ歩き出そうとした先輩を、不意に近藤が引き留め。

「あ、おにーさん、動かないで下さい」

「……………」

「口元にケチャップが……………はい、取れました！ あむ」

「……………?!? ちよ……………それは……………」

「あああ！ 妙子ズルいつ、わたしもお兄さんと恋人っぽい事してみたいい！」

「へへーん、早い者勝ちだもんねー！」

口元に着いていたらしいケチャップを指で拭い、そのままパクツと自分の口へ。

顔を真っ赤にする先輩を差し置いて、二人は姦しくキヤイキヤイ騒ぎながら歩いていく。

取り残された先輩は、フラフラと壁に手をつき、心を落ち着かせているようだった。

「最近の子は、このくらい普通、なのか……………」

いや、そんな事はないと思う。

一般常識に照らし合わせても、女子があいつた行動を取る時は、一定以上の好意を抱いている場合に限られる。

すなわち、あの二人は先輩を……。

「おにーさーん、次行きましょー!」

「早く来ないと置いてっちゃいますよお!」

「……今、行くよ」

自動ドアで手を振る近藤と佐々木の元へ、遅れて先輩が向かう。

数多の男性客からの、舌打ち多重奏に見送られて。

ちよっとだけ憐れに思わないでもないが、戦車道仲間の鼻屑目を差し引いても、あの二人は美少女だ。僻まれるのもしょうがないだろう。

さて、私の食事も終わった。少し時間を置いて、彼らの後を追わなければ。

……うん?　なんで私は、ジュースのカップを握り潰しているんだろうか……。



二十分後。

連れ立って歩く三人と、後を追う私の前に現れたのは、落ち着いた外装の洋菓子店だった。

(○イズ大洗店……。確か、北海道の方で有名なチョコの店だな)

いつだったか、沙織がテレビ番組の北海道特集を見て、「彼氏とあんなお店行って、買ったチョコで、はいアーンとかしてみたいな」とか言っていたのを覚えている。きつと本人は覚えてないだろうが。

まあ、それはそれとして、だ。

押し開くタイプのドアをくぐる三人の後に、私はしばらく時間を置いて続く。

それというのも、店のドアにはベルが着いており、何も考えずに入ったらモロバレになるからである。

幸い、すぐに他客が来店してくれたので、その後ろに着くようにして入店に成功したが、そこで思わぬ出来事が発生する。

「……………」

「あれ。おにーさん、どうかしました?」

「いや……。覚えのある気配を、感じたんだけど……」

「気配ですかあ。お知り合いが来てるのか?」

「……………」
「ごめん、気のせいみたい」

不意に先輩が、こちらを振り返ったのである。

慌てて商品棚影に身を隠し、なんとかやり過ぎすものの、心臓に悪い……。野生児並

みの勘だな。警戒を強めなければ。

幸運な事に、三人はすぐ店の奥へと進んでくれた。

店員さんの不審な眼をガン無視し、尾行を続行しよう。

「うーん! チョコの甘い匂いー! こういうお店って素敵ー」

「ここが、お兄さんオススメのお店なんですネえ」

「うん。ここのは、美味しい」

近藤と佐々木が、深呼吸したり店内を見渡したりしている。この店に来るのは初めてのようだ。

対する先輩は非常に落ち着いていて、常連である事を裏付けていた。確かに、こういう店なら先輩でも入りやすいだろうからな。

問題なのは、なんの目的があつてこの店へ来たのか、だが……。

「ねえねえ妙子、どれが良いかなあ？ やっぱり、流行の生チョコ？」

「んー。忍はチョコならなんでも良い気がするけど……。誕生日プレゼントだし、ちよつとくらい豪華にしよーよ！」

(……んっ?)

疑いの眼差しを向けていると、唐突に、近藤の口から真相っぽい単語が出た。

誕生日、プレゼント。河西の？

そういうえば、河西はチョコが好きだと聞いた覚えがあるな。

「夏だから、すぐに食べ切れる物が良い……と、思うよ。」

生チョコは冷蔵庫に入れると固まるし、こっちの、ドライフルーツが入ったチョコ

バーとか……」

「おぉー、流石おにーさん。詳しー」

「わたし達、練習後の寄り道とかは基本ガッツリ系だったから、こういうのに疎くて……。本当に助かりましたあ」

「お安い御用」

あれこれと商品を指差す先輩に、二人は揃って頭を下げている。

相変わらず動きの乏しい彼の表情が、そこはかとなく自慢げに見えた。

ここまですれば、もはや間違いようもない。

(なんだ……。つまり、プレゼント選びに付き合ってただけか)

商品を物色するふりをしながら、私は胸を撫で下ろす。

全く、紛らわしい。そうならそうと早く言つて……貰える訳がないじゃないか。尾行してるんだし。

それに、なんでホツとしてるんだ。

いつまで続けられるか分からないが、偽の恋人関係なんて、いつか終わりが来る。い

や、来なければならぬ。

その時の事を考えれば、先輩を好きだという女子が居てくれるのは良い事だろう。

何より近藤と佐々木は、少々頭が足りないものの、私にはない愛嬌がある。ついでに胸も。

彼は良い人だ。どうせなら、幸せになって欲しいと思えるほど。

だから……。

だから、なんなのだろう。幸せになって欲しいのに、そこから先を考えようとすると、モヤモヤする。

先輩達の目的は判明したし、逆にスッキリして然るべきなのに、胸の内のシコリは、むしろ大きくなってしまったようで。

……不可解だった。

「あれ？ おにーさん、忍への以外にもチョコ買うんですか？」

「あつ、分かった！ 彼女さんへのプレゼントだったり？ 当たりですかあ？」

「……うん、まあ」

『え、!?!』

「え？」

ん。なんだ今の声。

どうやら、私が考え込んでいる間に、三人はレジへと向かっていたらしい。

手にあるのはチョコバーだったり、夏でも食べやすいトリュフチョコだったりしたのだが、先輩だけは二種類のチョコを買おうとしているようだ。

「おおお、お兄さん、本当に恋人居たんですかあ!？」

「……つい最近、出来たというか……」

「そ、そーだったんですかー。……そーだったんだー」

珍しく照れ臭そうな先輩を囲み、一年女子が眼に見えて落ち込んでいく。

……途中からしか聞いてなかったが、推測は容易だった。

先輩は、河西へのチョコのついでに、私へのプレゼントも買おうとし、それを見た二人が茶化した所、正鵠を射てしまったのだろう。

憐れとしか言い様がないけれど、しかし、なぜ。

なぜ私のモヤモヤは、今、このタイミングで晴れたんだ？

後輩二人が、落ち込んでいるというのに。

「それじゃあ、自分はこれで」

「あ、はい。お疲れ様でしたあ」

「おにーさん、ありがとうございますー」

気がつくくと、私はまた三人を追い、店から出ていた。

少し前を歩いてきた先輩が、ビニール袋を手に別れ道を行き、佐々木と近藤は笑顔で見送っている。

さらに後方で、街路樹の影からその様子を観察する私。

やがて先輩の後ろ姿も見えなくなり、私もバレないうちに退散しようとしたのだが。

「うわあーん！　まただ、まただよあけびー！　ライカさんに続いておにーさんまでえー！　戦車道やればモテるとか嘘っぱちだー！」

「な、泣かないでよ妙子お……。わたしだって、地味にライカさんとかお兄さんのこと、良いなあって思ってたのに……！」

突然、残された二人は互いをひっしと抱きしめ合い、大声で泣き始めてしまった。

通り掛かる人々の、好奇の視線もなんのその、といった具合いだ。

本気で先輩に好意を寄せていた、のか。

ライカが地味にモテていたのも驚きだが、まあ、なんだ。かける言葉が見当たらない。

(これで、良いのか……?)

彼女達を思うならば、今すぐに先輩の恋人は偽物だと言つてやるべきだろう。

諦める必要なんかないのだと。

だというのに、脚は動かなかつた。

説明するのが面倒臭い? 違う、と思う。

私は、あの二人に真実を伝えたくないと、感じている。拒んでいる。

教えてしまえば、きつと。

《にゃん、にゃん、にゃん》

「ぬああつ」

そんな時である。

いきなり携帯が着信音を発し、私は相手の名前も確認せず、大慌てで通話ボタンを押す。

誰だ、こんな間の悪いっ！ 近藤達に気付かれたらどうするっ!?

「も、もしもし。どちら様……?」

『……あ、麻子ちゃん。自分だけど』

「あ、ああ、先輩か、うん。なんだ。何か用か?」

ガクツと崩れ落ちそうになるのを堪え、どうにか平静を装う。

つ、疲れる。何がどうとは言わないが、疲れる。

隠れて尾行なんかしたから、そのバチが当たってるのか?

だったら甘んじて受けねばならないだろうけど、もうちよつと時間と場所を選んでくれ。

タイミングがクリティカルに過ぎるぞ。

『今日、これから会えないかな……。渡したい物が、あるんだ』

「えっ。今日?」

『都合、悪いかな』

「い、いや。問題ない、けど……」

私の疲労感を知る由もない先輩は、いつもの落ち着いた調子で続けた。

今日これから、渡したい物がある。

何を？ そんなの、さつき先輩が買った物に決まっている。

これで分らない奴が居たら、そいつは間違ひなく間抜けだろう。

不意打ちの動悸が収まり始めた胸に、不思議な感覚を覚えた。

つかえが取れたような、わだかまりが解けたような。

待ち合わせしていた三人を見かけた時の、あのモヤモヤやシコリは、完全に払拭されていた。

(私は、喜んでいる……のか。私の事を、あの二人よりも優先して貰えた、から?)

ほんの少しだけ後ろめたくて、確かに自尊心を満たしてくれるこれは——優越感、だろうか。

朝。お婆の声。買い出し。モヤモヤ。シコリ。尾行。ファストフード。買い物。優

越感。

今日一日の、私自身の行動を振り返り、自己分析を……馬鹿か。そんな事しなくても、分かり切つてゐるじゃないか。

私は喜んでゐる。

私は安心してゐる。

私は、先輩との関係を、好ましいと感じてゐる。

だからこそ、胸に去来する感情があつた。

どうしようもなく心が痛くなる、これは。

「あつ、冷泉センパイ！ ちよーど良い所に！」

「わたし達、これからヤケ食いに行くんです。付き合つて下さい！ 奢りますから！」

「ぬお!? な、なんだお前達!? は、離せ、腕を掴むなつ。……すまん、後で掛け直す！」

『え……? 麻子ちゃ——《プツツ》』

唐突な浮遊感に、思考が中断させられた。

いつの間にか近付いてゐた近藤と佐々木が、私の両腕を掴み、何処かへと歩き始めたのだ。

もがいて抵抗するも、バレー部で鍛えられた腕力に敵うはずがなく、スーツの男に攫われる宇宙人よろしく引き摺られてしまう。

なんとか誤魔化して携帯の電源を切ったけれど、あえて一つだけ、心の中で叫ばせて貰いたい。

どうしてこうなるんだー!?



「つ、疲れた……。あの二人、体力あり過ぎだろう……。うつぶ」

西日が街を照らす頃になって、私はようやく、食べ歩きから解放された。

あいつらの食欲はどうなってるんだ……。

クレープ。ケバブ。たこ焼き。串団子やコンビニアイスなどなど。もう食べまくりだった。胃が重い……。

あれだけ食べられるなら、バレー部と戦車道を両立するだけの体力も納得だが、つき

合わされる方はシンドいだけである。夕飯代が浮いたのは怪我の功名か。

ちなみに近藤達だが、スポーツウーマンだけあつて立ち直りも早く、「クリスマスまでに彼氏見つけよう！」「おおう！」と宣言しながら帰って行つた。

実際の所、あの体を使って誑かせば、大抵の男は落とせると思うのだけれど、体だけで繋ぎ止める関係なんて良くない。素直に頑張つて欲しいものだ。

と、こんな事を考えつつ、妊娠初期みたいに若干膨れた腹を抱え、私は帰路に着いている。

もう寮のすぐ近くまで来ているはずだが、ふと前方を確かめると、寮を囲うブロック塀の入り口の所に寄りかかる、見知つた人影を見つけた。

塀とあまり変わらない身長で、ビニール袋を提げた彼は、数時間前まで私が追いかけていた人物。

「先輩？」

「お帰り」

「ただい、ま」

声を掛けると、先輩は簡潔な出迎えを。

近くにつれ、彼の額に、うっすら汗が滲んでいるのが分かった。

「まさか、待つてたのか？ あの電話からずっと」

「立て込んで、みたいだったし。……あ、ずっと立っていた訳じゃ、ないから」
「そうか。良かった……」

炎天下の中で待ちぼうけを食わせていたとしたら、流石に心苦しかったのだが、服に汗染みは無いし、嘘ではなさそうだ。

コンビニとかファミレスとか、暑さを凌げる場所も近くにあるしな。

まあ、ジツとしてると汗くらいは出るだろうけど、夕方になれば、海風のおかげでも学園艦は涼しいし、それを見越して待つていてくれたのだろう。

しかし、待たせていたのは事実。麦茶の一杯でも出さなければと、私は先輩に――

「これ。甘い物、好きだと思つて」

――家へ上がつてくれと言おうとした瞬間、先んじてビニール袋が差し出される。

中身は当然、箱詰めされたチョコだ。

しかも、高校生が買うにはちよつとお高く感じる値段の。溶けたりしないよう、キチンとドライアイスも入っていて。

きつとこうなるだろうと、そう予測できているも、問わずには居られなかった。

「……ありがとう。でも、どうして？ 別に、誕生日でもなんでも……」

「一応は、彼氏だし。……喜んで欲しかった」

そっぽを向き、先輩は頭をかいている。

夕日と重なって、表情が見えない。

でも、ほんの少し。少しだけ、微笑んでいるように感じた。

「帰るよ。じゃ、また」

「あ。ま、待っ……」

ぼうつと眺めていると、先輩は素早く踵を返し、返事をする前に早足で歩き出した。引き止める声も届かない。

小さくなっていく背中を見送り、思わず伸ばした右手の落とし所に困った私は、彫像

のように固まってしまう。

(私は、何がしたかったんだろう)

胸を締め付けていたのは、近藤達に攫われる直前に自覚した、あの気持ち。

この人に……。

こんな良い人に嘘をつかせているという、大きな罪悪感だった。

最終話 「指示通りに動いて貰えます?」

「麻子、ねえ麻子! 聞いているの?」

「……………んあ?」

ちやぶ台で寝落ちしていた意識に、聞き慣れた声が木霊する。

卓袱台から上半身を起こすと、制服の上からエプロンを着け、両手に皿を持った沙織が、私を見下ろしていた。

困っているような、怒っているような。そんな顔だ。

「なんだ、沙織か……………」

「なんだじゃないでしょ、もー! さつきからずっと呼んでたのに!」

「……………すまん。寝不足で……………」

大あくびをする私に、沙織はプンスカ怒りながら、手際よく皿を配膳してくれる。

ふむ。今日の夕食は、豚の角煮、ワカメと油揚げにネギの味噌汁、ミョウガなどの薬味をたっぷり乗せた冷奴に、特製の糠漬けか。美味そうだ。

私が飢え死にしないよう、こうしてワザワザ寮に来て、手料理まで作って。本当に良い嫁になるな、沙織は。

口に出すと調子に乗られそうなので言えないが、せめて心の中で感謝しよう。

この恩はそのうち返すぞ。誕生日プレゼントとかで。

と、そんな事を考えつつ、あくびで出た涙を拭っていたら、今度は心配そうな眼がこちらに向いていた。

「……ねえ、麻子。何かあった？」

「何もないが」

「即答するって事はあったんだあ……」

「なんでそうなる」

「小学四年生からの付き合いを舐めないでよねー」

茶碗に御飯をよそう沙織は、なんとも得意げだ。妙に悔しい。

まあ、確かに言われた通り、寝不足になってしまいうような出来事が、現在進行形で起きている。

あの日。近藤たちと買い物する先輩を尾行した日から、私の中には奇妙な感覚が居座り続けているのだ。

胸が疼くようできて、同時に痛くすらも感じるそれは、きつと。

先輩を信じられず、先輩の好意に胡坐をかき、後輩二人の想いを踏みにじってしまった事への、罪悪感だと思われた。

謝って済む問題ではない。

いや、本当は謝るべきなのだろうが、先輩に嘘の関係を強いていると知ったら、あの二人は私を軽蔑するかも知れない。

他人の眼など、それぞれ沙織や華、お婆以外は無視して生きてきた私だが、戦車道を通じて得た仲間に見損なわれるのは、想像するだけで割と辛かった。

毒されたものだと、自分で思う。

こんなに弱い部分が隠されていたとは、気付きもしなかった。

だからこそ、私は身動きが取れず、ジレンマに悩まされている訳だ。

ままならない現実に、私は知らず溜め息をつく。

情けない姿を見てしまったはずの沙織は、けれどいつも通り、柔らかな雰囲気のまままで。

「ねえ、麻子」

「……なんだ」

「話したくなったら、いつでも電話して良いからね」

「だから、私は別に……」

「いいからいいから！ それだけ覚えておいて？ さ、ご飯食べよつ。頂きまーす！」

反射的に誤魔化そうとするが、沙織は一方的に言い切り、手を合わせる。

私としても、芳しい味噌汁の香りは辛抱堪らず、腑に落ちないながら夕食を食べ始めた。

ホロつと口の中で解けていく角煮のように、この罪悪感も消えて無くなってくれたら。

などと思つてしまつた私だつた。

……しかしまあ、御飯が進む味だ。

将来的に、私もこのくらい作れるようにならねばな。



「はあ……。しかし、どうするか……」

放課後の、誰も居なくなった教室にて。

黄昏る窓辺に寄り掛かりながら、私はまた溜め息をつく。

結局、なんの進展もないまま、数日が経過した。

……いや。むしろ、事態は悪化の一途を辿っていると行って良い。

胸に抱えた罪悪感成長するばかりで、一向に晴れる気配がないのだ。

万事が万事、上手く行くわけもなく、こうなったのは自分の責任だと分かっているのだが、どう動いて良いか分からないし、こんな状態では動く気力も持てない。

泥沼の悪循環だった。

《にゃーん、にゃーん、にゃーん》

「……………」

ポケットに入れていた携帯が着信を伝える。

ノソノソと取り出し、発信者の名前を確認するけれど、表示された「辻助け先輩」という文字列に、胸がきゆうつと苦しくなった。

息切れすら覚えるほどだったが、出ない訳にもいかないので、深呼吸をしつつ、通話ボタンを押す。

「……………もしもし」

『あ……………。麻子ちゃん、自分だけど』

耳を打つのは、いつも通りの低音。

それが妙に心地良くて。比例するように後ろめたくて。

『今日は、どうしようか』

「……………すまん、今日も戦車道関連の用事があるから」

『そっか。……………分かった。じゃあ、また』

「ん……………」

酷く簡潔に通話は終わる。

嘘をついてしまった。また。

ここ数日、先輩は毎日連絡をくれるが、それを私は、ありもしない用事があると断っているのだ。

理由は……。会いたくないから？ 少し違う気がするな。

会った時、どんな顔をすれば良いのか、分からないから。うん、こっちの方が近い気がする。

だからなんだ、という話だが。

(逃げてばっかりだな、私は)

ボウっと、茜色の空を眺める。

本当にどうしたというのだろう、私は。

こんな風に悩むだなんて、まるで普通の女子高生ではないか。

いや、普通の女子高生なんだが、なんというか、私らしくないような。

(……四号に乗りた)

なぜだか、無性に戦車を走らせたくなかった。

野山を縦横無尽に走破したくて仕方なかった。

まあ、燃料が勿体無いからやらないけれど、どうにも気分が落ち込み、また溜め息が出してしまう。

もう癖になってしまっているようだ。

「あのお、冷泉さん……あ、居た居た。良かったあ」

「ん？ 磯辺さんか。どうした」

不意に、背後から呼び掛けられる。

教室の出入り口に立っていたのは、体操着にスパッツ姿のバレエ部部长、磯辺典子さんだった。

私の姿を確認し、彼女はホツとした表情を浮かべ、教室の中へ。

「ちよつと、個人的に知恵を貸して欲しいというか、相談したい事があって……」

「珍しいな。私に相談とは」

「うん。冷泉さんなら、経験からの確にアドバイスくれそうだったから」
「ふむ……」

いつも無駄に「根性根性」言っている磯辺さんだが、今日は珍しく神妙な顔つきだ。これが見知らぬ他人だったら「他を当たってくれ」で済ませるけども、特に忙しい訳じゃないし、何より、鬱々としていた頭を切り替える、良い切っ掛けになってくれるだろう。

そう考えた私は、少々もったいぶってから頷き返す。

「まあ、聞くだけは聞いてみよう。戦車道のよしみだしな」
「あ、ありがとう！ 本当に困ってたんだ、助かるよー！」

色良い返事に、磯辺さんは大感激といった様子。

こんなに喜ばれると、なんだか悪い気もしてくるな……。
とはいえ、それはこっちの事情。今は彼女の悩みを聞くことに専念だ。

「実は……。最近、好きな相手に冷たくされちゃってる人を、どう元気付ければ良いか、

教えて欲しくて」

「……またピンポイントな悩みだな」

「そりゃあ、アタシだって似合わない悩みだとは思っただけど。落ち込んだじゃってるのが、アタシの兄貴でさ」

「兄が居たのか」

「うん、まあ。ちなみに、近藤には五歳の弟、河西には姉さんが居て、佐々木は一人っ子なんだ」

同じく窓辺に寄り掛かった磯辺さんと、雑談混じりに話をしていく私。

磯辺さんの兄、か……。どんな人物だろう。

やはり磯辺さんと似て背が低いとか、あるいは逆に背が高いとか。

ちよつとだけ興味が湧く。

「しかし、なんでまた私に？」

「冷泉さんって、武部さんと幼馴染みでしょ？ だったら、色んな意味で武部さんを慰め

慣れてるかと思って」

「……否定はしないが、腑に落ちないな」

なんの気なしに聞いてみたら、納得できるような、出来ないような返答がなされた。選出理由は沙織か……。

確かに、数ヶ月前まで口だけ恋愛番長だった沙織と幼馴染みならば、そういった経験が豊富と判断されてもおかしくはない。

が、こと沙織に関して、彼女の推測は間違っていた。

「残念だが、あまり役に立てそうもない。沙織はあれで不屈の精神の持ち主だからな。一時的に砕けてもすぐ復活する」

「あー、そっかあ……。なんか納得……」

腕組みしながらそう言うと、若干肩を落とす磯辺さんも、なんとなく察してくれたようだった。

恋に恋して空騒ぎするのが特徴の沙織は、一人相撲な失恋回数もかなり多く、逆説的に立ち直りが早いという事にもなる。事実、失恋した沙織を慰めた経験はない。

それが今では、結婚前提の彼氏とラブラブいちやいちやしているので、違う側面からも絶対無敵になってしまったが。

世の中、分からないものだな……。

「なんかさあ、最近すれ違いが多いんだって。

話しかけても上の空で、電話をかけてもすぐ切られちゃって。

兄貴がなんかしたんじゃないの？ って聞いても、心当たりが無いみたいなんだ」

「……難儀だな」

「全くだよー。バレーなら根性でどうにかなるのに」

「そうだろうか……?」

助言できなかつた代わり、と言うとアレだが、私は磯辺さんの愚痴に付き合う。

根性論はさて置き、なんだか身につまされる話だ。まるで私の先輩への対応じゃないか。

「……ん？　　そういえば、あの一件……。」

「その……。磯辺さんのお兄さんは、落ち込んでいるのか」

「うん、すつごく。こここの所、目に見えてはしゃいでたから、その反動かもね」

「はしゃいでいた……?」

「我が目を疑ったよー。家でも凄いニヤニヤして、メチャクチャ上機嫌で。あのデレデレした顔で表歩いてたと思うと、妹として恥ずかしいくらい」

「……よつぽど嬉しかったんだな」

「もしや、と思いを振ってみるが、返ってきた内容からして、私の思い過ごしだったようだ。」

「なんの話か? 例のファストフード店での、先輩の「典子」呼びの件である。」

「あれだけ礼儀正しい先輩が呼び捨てにするなど、もはや身内しか考えられない。」

「磯辺さんに兄が居ると聞いて、辻助け先輩は磯辺さんの兄ではないかと、ほぼ確信していたのだが、先輩は私と居る時もほぼ無表情だったし、はしゃぐどころか最初は迷惑そうにしていた。別人だな。」

「親戚という可能性も捨てきれないけれど、今すぐ確かめたい事でもない。後にしよう。」

「一人で結論づけていると、会話が途切れている事に気付いた。」

「特段、不愉快な沈黙でもなかったが、磯辺さんは「んーっ」と背伸びをして、雲を見上げる。」

「こういうと妹バカだけどき。兄貴、いい奴なんだよ。

ノミの心臓だし、普段は全つ然男らしくないけど、人助けには全力を尽くす性質で。だから、出来れば笑つてて欲しいんだよね」

微笑みの横顔が、茜色に染められる。

失礼な感想だと自覚しつつ、乙女らしい一面もあるんだな、と驚いてしまった。

この年頃の兄妹は仲が悪いとよく聞くけれど、磯辺家に限ってはそんな事ないよう
だ。

「磯辺さんは、兄思いなんだな」

「えっ?! ん、んなこと無いって! 普段と違うと調子狂うから、いつも通りに戻って欲しいだけだし……」

照れ臭いのか、今度はワタワタと手を振り、明後日の方向を向く磯辺さん。

その頬が茜色以上に赤く見えるのは、きつと気のせいではないと思う。

普段の彼女を知る男が、今の姿を見たとしたら、それこそ一発KO。ライン際ストレスのサーブイエース、と言ったところか。

それは良い事だと思うけども、しかし一方で、私の心はどうしても曇ってしまう。
また、溜め息が出た。

「人を好きになるって、どんな気持ちなんだろう」

「へ? どうしたの、いきなり。なんだったら、話聞かよ! 恋愛したこと無いから本当に聞かただけだ!」

「……頼もしいのに頼りないな。まあ、ありがとう」

好きだった人に素っ気無くされる磯辺さんの兄と、私が素っ気無く扱ってしまったっていう先輩。

この二人がどうにも重なって、思わず口を滑らしてしまった私だが、磯辺さんは実に彼女らしい爽やかさで、相談に乗ってくれようと。

正直、こういう話を誰かとするのは苦手なんだが、現状を打破するためには、やはり他人からの視点が必要か。

とにかく、先輩と近藤・佐々木のお出かけを目撃してからの事を、適当にボカして話してみよう。

「と、いう訳なんだ」

「……………」

「磯辺さん？」

「流石はあんこうチーム……。いつの間にか、全員彼氏持ちになってそうな勢いだ……」

かくかくしかじか。

といった風に掻い摘んで、私と先輩の関係や、近藤たちの名前を伏せて話したのだが、磯辺さんは戦慄したような表情で呟く。

なんだろう、この反応。

確かに今まで男つ気など微塵もなかったが、そこまで驚かなくてもいいじゃないか。

「つていうかき、それって普通に嫉妬してるんじゃないの？ 冷泉さん、その人のこと好き

きなんですよ？」

「え。いや、それは……」

「冷泉さんの事情はよく分かんないけど、その人が異性と話してるのを見てモヤモヤするのなんて、その人が気に掛かってるって証拠だと思えないけどなあ」

「……………恋愛したこと無い割に、ちゃんとした意見を言ってくれるんだな」

「いやあー、優勝祝賀会で武部さんのモノマネするのに、ちょこっとだけ研究したから。多分それで?」

ニカツと笑い、磯辺さんが胸を張る。

意外にもズバツと踏み込んでくるアドバイスに、私は感嘆とされていた。

根っからのスポ根少女だと思っていたが、案外要領の良い女子なのかも知れない。悔れん。

「まずはさ、相手の気持ちを確かめてみたら? バレーだって、チーム内の意思疎通が出来てないと連携に支障をきたすし。腹を割って話すのって、結構大事だよ」

「腹を割って、話す……か」

それが難しいから悩んでいるのだが、言われてみると、やはり実際に会って話すのが一番の方策だと思われた。

このまま先輩を避け続けていては、ますます会い辛くなる。

傷が深くなる前に先輩と会って、先輩の気持ちを——いや、私自身の気持ちを確かめるべきだろう。

「ありがとう、磯辺さん。少し、試してみる」

「役に立てたなら良かった。頑張れ、冷泉さん！ 何はともあれ根性だ！」

私は磯辺さんに向き直り、キチンと頭を下げて礼を言う。

そして、彼女からのエールを背中に受け、鞆を回収してから教室を後にする。

案ずるより産むが易し。いざ決心してしまえば、心も体も軽かった。

今はとにかく行動あるのみ、だ！



冷泉さんをガッツポーズで見送って、しばらく。

そろそろアタシも帰るかー、と背伸びをしていたら、背後に人の気配を感じた。

「あ、キャプテン！ 探しましたよお！」

「どうして違うクラスに? 誰かと話してたんですか?」
「お、佐々木か。それに近藤と河西も。冷泉さんと少しな」

2—Aの教室内を覗いていたのは、我らがバレー部の主要メンバーだった。

まあ、アタシを合わせても四人しかいないメンバーだけ。正式には部でもないし。そろそろ新入部員が欲しいなあ……。っていうか、今日は自主練はずなんだけど?

「キャプテン。誕生日プレゼントのチョコ、ありがとうございます。すつごく美味しかったです!」

「おー、そーかそーか! そこまで喜んで貰えたなら、困を引き受けた甲斐があるってもんだ!」

ああ、なるほど。礼を言いに来てくれたのか。

頭を下げる河西に、納得したアタシはまた胸を張る。

つい先日、可愛い後輩である河西 忍は誕生日を迎えたのだが、その誕生日プレゼントをみんなが選ぶ時、商店街とかで鉢合わせしないよう、アタシは忍を足留めする役割

を引き受けたのだ。バレーで言う所のフェイントアタックだな。

実際にはかなり広い学園艦だけど、居住区とかに限ると結構狭いし。

アタシがよく行っている煎餅屋さんを巡って時間を潰したんだ。

さらに付け加えると、アタシからのプレゼントはチョコ煎餅。意外と美味しいんだよね、あれ。

「あ、あの。それで、ですね。お兄さん……キャプテンのお兄さんが、お店を選んでくれたんですよね？ よ、良かったら、お礼したいなって思ってるんですけど……」

チョコ煎餅の味を思い出していると、なにやら河西は、頬を赤らめつつモジモジし始める。

誕生日プレゼントへのお礼とか、相変わらず律儀だなあ。

プレゼントにプレゼントを返してたら意味無い気もするけど、兄貴もきつと喜ぶし、アタシとしては歓迎だ。

……つたのに、なんでか河西の肩を、近藤と佐々木は悲しげな顔で叩いて。

「忍。残念だけど、おにーさんの事は諦めた方がいーよ……」

「は? ちょ、何を言いだすのよ」

「お兄さんねえ……。彼女、居るんだってえ……」

「……ええええええええええ!!? き、キャプテン、本当なんですかっ!!?」

「あれ。言ってなかったっけ。つい最近できたんだってき。早速すれ違ってるみたいだけど」

「……え? あの、どういう事ですか?」

「すれ違い……? とゆう事は……?」

「妙子っ、わたし達にも運が回ってきたよ、運がっ!」

「なんか元気だなあ、お前達」

驚いたり困惑したり喜んだり、やたら騒がしい後輩たちを、アタシは微笑ましく眺める。

仲が良くて何よりだ。普段から仲良くしていれば、それがチームワークに生きるし。

バレーボールでも戦車道でも、息が合っていないとすぐ負けちゃうしな。うんうん。

と、一人で感心していたら、気を取り直したらしい河西が、改めて質問してきた。

「キャプテン。お兄さんの恋人って、どんな方なんですか」

「どんなって、アタシも詳しくは知らないぞ？　話に聞いた限りでは、背が低くて頭が良くて、夜行性っぽい二年生……らしいけど」

「ふむ。背が低くて……」

「頭が良くてえ……？」

「やこー性っぽい……？」

河西、佐々木、近藤が続けて首を傾げ、凄く難しい顔で、「まさか……」とか「いやいやあ……」とか「そんなはずは……」とか言い合う。

やっぱ分かんないかー、そんな抽象的なヒントじゃ。アタシも分かんないし。

いやー、ホント誰なんだろう？　兄貴の恋人って。

仲良くできる人なら良いんだけどなあ。

◇
◇
◇
◇

学校を離れ、通学路の途中にある商店街へと足を向けた私は、意気込み虚しく頭を抱

えていた。

「さて、どうしたものか……。今日は用事があると言ってしまったしな……」

そう。先輩と会おうにも、さっきの電話で嘘をついてしまったからだ。

きつと家に帰ってしまっただろうし、今から呼び出して会うのも、物凄く気が引ける。ただ、万が一の可能性で先輩が寄り道をしていて、そこに運良く鉢合わせ出来たなら……と、淡い期待を抱いて歩いているが、まあ無理だろう。

今はまだ暇だから良いけれど、来週になれば対グロリアーナ&プラウダ連合との、エキシビジョンマッチに向けた練習が始まる。今度は本当にだ。

ううむ……。やはり、嘘をついてしまった私が悪いんだから、恥を忍んでこちらから電話するべきか。

早めに終わったとか適当に理由をつけて、それで……。

「……あ。先輩?」

「あ……」

——と、考えていた最中。不意打ち気味に、探し求めていた巨体が視界に入ってきた。男子分校の夏服である、白い半袖のシャツに紺のズボンと肩掛け鞆。場所はコンビニの前。先輩の手には、買ったばかりであろう、ガリガリとした食感が特徴のアイスキャンデー。

なんとも都合の良い巡り合わせ。しかし好都合に変わりはなく、私は先輩へと駆け寄ろうとするのだが……。

「…………ごめんっ」

「ま、待ってくれ先輩。…………先輩っ」

私を見た彼は、アイスをバクツと丸呑みにし、一目散に走りだす。

か、体がデカいとはいえ、よくアレを一気に食べられるな……。

いや感心してる場合か!? 追いかけないと!

「ちよつと待て! なんて逃げるんだ!」

幸い、病院の時のように見失う事はなく、どうにかこうにか追い縋るものの、距離は

一向に縮まらなかった。

く……っ、やたらと足が速いなっ！ 陸上選手かっ!?

(だが、夜の私を舐めるなよ……!)

街中から出て、脱兎の如く機銃座跡公園方面へと向かう先輩。

けれど、日が落ちるにつれて私の調子はアップする。

徐々に距離も詰まっているから、このままなら追いつけるはず——だったのに。

「なっ、まだ速くなるのかっ!?!」

先輩はさらに加速し、またグングンと距離が広がってしまう。

くそ、こっちは本気で走っているのに、まだ全速力ではなかったのかっ。

こうなったら、物理的な手段で止めるしかない。

私は肩に掛けていた鞆を取り、先輩と直線に並ぶタイミングを見計らって、その足元に狙いをつける。

上手くいけば足に絡んで止められる。転んで怪我してしまったら、誠心誠意謝って手

当もしよう。行くぞ……！」

ベルトの中程を握って、投げ縄の要領で振り回し……投擲。

真つ白な鞆は、狙い通りに先輩の足元へ向かい――

「避けた!？」

すり抜けてしまった。

命中する直前、先輩がピヨンと跳ねたのだ。

……なんなんだ！ その変態的な回避能力は！ 背中に眼がついてるのかっ!?
しかも、驚いている間に姿が見えなく……。

「……ふ。ふふふ……。そうか……。そうまでして逃げるか、先輩い……」

話も聞いてもらえずに逃げられると、無性に取っ捕まえたくなるのは、なぜなんだろう。
う。

アレか。人間の狩猟本能だろうか？ まあ、なんでもいい。

私にだって意地がある。何がなんでも捕まえてやるからな……!!

地面を滑って汚れた鞆を、走りながらひとまず拾い上げる。

そして、先輩が消えた方向に向かいつつ携帯を操作し、とある番号へ連絡を。ちやうど暇だったのか、2コール目まで出てくれた。

『はい、なんですか麻子さ——』

「ライカツ、緊急事態だ、力を貸して欲しい！ フォックスハンティングだ！」

『っ?! りよ、了解！ 対象は?』

「例の辻助け先輩だ！ GPSを拾えるかつ」

『多分。一旦切ります!』

唐突過ぎるだろう要求にも、電話の相手——ライカは即応してくれる。

普段はちよつとウザいが、こういう時はすこぶる頼りになるな、本当に。

余談だが、フォックスハンティングとは直訳のキツネ狩りだけを指すのではなく、ルールに沿って設置された無線送信機を、電波受信機を使って追跡する、一種のトレーサー競技の事も含む。

ARDF——アマチュア無線方向探知と呼ばれ、蛇道においては必須技能とされている、らしい。

もちろん、一般人の携帯電波を追うなんて違法行為なのだが、サンダース戦でやられた時みたいにバレなければいいんだ。という事にする。

閑話休題。

体力温存のため、公園の入り口辺りで立ち止まり、私は息を整える。

すると、程なく握ったままの携帯が震えた。

知らない番号だったが、このタイミングで間違い電話という可能性は低いだろう。すぐさま通話を始める。

『もしもし、オレ……つっても分かんないか。ダンチョーっす。今から誘導するんで、指示通りに動いて貰えます?』

「分かった。頼む」

『艦内に潜り込まれたらアウトだし、最短距離で行きましょう』
「ん」

声の主は、私の遠縁であるあの男子だった。

そういえば男子自動車部で、機械が得意っぽかったな。頼りにさせて貰おう。

私はダンチョーの指示に従い、再び走り出す。

こちらの現在位置も把握しているようで、その言葉はとても的確だ。ライカが助っ人を頼む訳だな。

『この反応……。だいぶ近いですけど、おそらく先輩は、一段下の甲板へ移動しようとしています。潜られたら今の機材じゃ追えない、急いで!』
「んっ」

発破をかけられ、更に加速する私。

公園の中を駆け抜け、立ち入り禁止と看板の掛かった鉄柵を乗り越え、辿り着いたのは上甲板の舷側、端っこだ。下層に向かう階段がある。

学園艦は300m四方の正方形を組み合わせた、少し特殊なブロック工法で建造されていて、それぞれを行き来するには特定の出入り口を使わなければならない。

だが、街などが置かれる最上部は異なっており、上下水道や地下電線の整備を円滑に進めるため、数十m間隔でいくつかの中甲板が設けられていた。先輩はそこへ潜り込もうとしているのだろう。

にしても、ダンチョーは一体どうやってGPSを追っているんだろうか。

艦橋にある電波中継塔をクラッキングでもしてるのか?

頼んでおいてアレだが、犯罪行為を強いてはマズい。あとで確認しておこう。

と、そんな事を考えながら螺旋階段を降りていたら、遙かな眼下——第一中甲板の落下防止柵の向こう側に、チラツと動く影を見つけた。

あの制服姿。まだ上下に二十mは離れているはずなのに、あんまり小さく見えない図体。

間違いない、先輩だ。

(やっと見つけた……っ！)

すっかり私を撒いたと思っているのか、ノンビリと艦内の方へ歩いている。

なんとか追いついた……けれど、まだ油断できん。

気付かれる前に接近し、可及的速やかに彼の足を止めねば、またイタチごっこに戻ってしまう。

どうしたら逃げないでもらえるか。どうしたら先輩と話ができるのか。

こんな時こそダンチョーの助けを、とも思ったが、電波状態が悪くなっていたらしく、通話は切れてしまっていた。

ええい、肝心な時にこのオンボロ携帯は！ ……なんて、心の中で毒づいた瞬間、私

はとんでもない事に気付く。

「あ、しまった。ここ、高い……!?!」

憎らしく見つめた携帯の、その先。

螺旋階段の隙間から見える、数百m下の海面に、頭がクラツと来た。

なんて事だ……つ。先輩を追いかけるのに夢中で、高い所が苦手なのを忘れてた……

!

思わずその場にしゃがみ込み、私は手すりにしがみつく。

マズい。マズい。マズい。

なんでこんな中途半端な場所で思い出してしまうんだ? どうせなら先輩を捕まえ

るまで忘れていたかった!

(どうする。どうなる? 早く動かなければ……つ)

ガタガタと震えながら、私は視界の中に先輩を探す。

先程までとそう変わらず、しかし確実に遠い場所に、彼は居た。

大きいはずの背中も、また、遠くなっていた。
何故だろう。

途端、耐えがたい焦燥感を覚える。

(このままじゃ、何も言えない。 “あの時” みたいに)

伝えたい事があるのに。

言わなければならない事があるのに。

後でそうしようとして、両親には二度と会えなくなってしまった。

未来を予知する事は出来ない。

何事もなく明日が来る保証はない。

あの時こうしていれば、なんて後悔は、もう沢山だ。

今を逃したら、駄目なんだ！

カアツと腹の底から湧き上がる、熱い “何か” に任せ、私は――

「フンッ!!」

——階段の手すりに、全力の頭突きをかます。

ゴワン。

強烈な衝撃と音。鋭い痛みが、額を切ってしまった事を教えてくれる。血も出ているかも知れない。

だが、そんな事はどうでも良い。

衝撃でクラクラする視界に、先輩が見えた。こちらを振り向いている。流石に、あれだけ派手な音を立てれば気付かれるだろう。

それで良いのだ。

「先輩っ!!!!!!」

彼がアクションを起こす前に、私は叫ぶ。

手すりへと、脚を掛けながら。

2. 0の視力が、驚きに目を剥く先輩の顔を捉えた。

期待通りの反応を確かめた後、渾身の力を脚に込めて。

「私を——受け止めろっ!」

跳ぶ。

中甲板の、落下防止柵の向こうへ。

この高さなら、悠々と柵も越えられるだろう。

けれど、受身はまともに取れない。いや、取っても骨折必死だろうが、取らないつもりだった。

不思議な事に、手すりを蹴ったその刹那、時間の流れはスローモーションのようになっっていた。

私が居た階段の途中から中甲板まで、およそ二十m。到着までのたった数秒を、十倍近い長さで感じている。

先輩は、私が跳んだ直後に走り始めていた。

到着予想地点まで、約十〜十五m。

初めて見る、必死の形相。死ぬ気で走っているようだ。

間に合わないかとも思ったが、このペースなら、もしかして。

甲板が近づく。

「麻子っ!!」

スライディングで飛び込む先輩。

大怪我をするコンマ数秒前といった所で、それは間に合った。

私の体は、クツション代わりとなってくれた先輩の上に落ちる。

落下エネルギーが横向きの運動エネルギーでベクトルを変え、それでもなお、甲板へと強烈に体を打ち据えて、ゴロゴロと転がりつつ防止柵に突っ込んでしまう。

だが、私は先輩の腕に抱えられており、痛みは感じない。せいぜい、衝撃で息が詰まったくらいだ。

「はあ、はあ、はあ……っ」

「……………」

横向きに傾いた視界の中、先輩の荒い息遣いを間近に感じつつ、ただ呆然と。

時間の流れは通常再生に戻っていた。

というか、初めて呼び捨てにされたような？

なんだろう。奇妙な達成感があつた。

「……何を考えてるんだ君は!? 死にたいのか!」

そんな事を考える私に、身を起こした先輩が大声で怒鳴る。

険しい顔。本気で、怒られている。

……当たり前か。

私だって、お婆や沙織が同じ事をしでかしたら、泣きながらタコ殴りにしていると思
う。

けれど、これだけは言える。

「何も……」

「え?」

「何も、考えてなかった。私自身の事も、お婆の事も。……ただ、先輩なら受け止めてく
れると、確信してただけだ」

そう。あの一瞬で、私が確かだと感じた事はただ一つ。先輩への、信頼だった。

私がどんな馬鹿をやっても、先輩なら助けてくれると。

そんな、他力本願にも程がある事を思いながら、私はビルの四く五階に相当する高さ

から飛び降りたのだ。

……本当によく無事だったな私!? 今になって怖くなってきたぞ……っ。

あああ、お婆にバレたら怒られ……いや、泣かれる。多分。

無我夢中だったとはいえ、祖母不幸な事をしてしまった。反省しなければ、それは後でだ。

今すべき事は、呆れたような顔でポカンとしている先輩と、話す事だ。

「なんで逃げたんだ。そもそも、先輩が逃げたりしなければ、こんな所まで追いかけてりはしなかったんだが?」

先輩の腕の中から抜け出した私は、へたり込む彼の前に仁王立ちする。

ちよつとばかり責任転嫁している気がしないでも……本当はバリバリにしているが、それを言つては話が進まないの、これも後で謝ろう。

腕組みする私の視線を受けた先輩は、しばらく黙り込んでから、口を開く。

「嫌われたと、思った。

思い当たる節は、なかったけど。でも、そうとしか思えなかったから。

だから、今以上に嫌われる前に、距離を取ろうと……」
「……はあ。結局、全ては私の自業自得か……」

知らず、額に手を当てて溜め息を零していた。先輩が首を傾げているが、もう説明する気力もない。

詰まるところ、私の思わせぶりな態度が先輩に不信を抱かせ、勘違いを加速させ、拳げ句の果てに飛び降り自殺未遂の救助を強制した、という事か。

我ながら、間の悪さに頭痛がしてくる。あれ。頭痛は頭突きのせいかな？

……とにかく、違うな。間が悪かったんじゃない。そんなもののせいにしちゃ駄目だ。

今日の一件は全部、私が招いてしまった事なんだ。愚かな私との約束が。

一步間違えば、私は酷い怪我をしていたし、先輩にその責任を負わせていたかも知れない。本当に、私は馬鹿をした。最低だ。

だからこそ。

この場で、ハッキリさせなくてはいけない。

己自身への腹立たしさを深呼吸で飲み込み、私は今一度、先輩と向き直った。

「先輩は、私の事を、どう思ってる?」

短い問い掛けだったが、それに込めた真剣さを感じたのだろう。

先輩は即答せず、黙りこくる。

私達の間を、冷たい海風が通り抜けていく。

どれ程そうしていただろうか。

おもむろに、彼は語り出した。

「……君が階段から飛び降りた時、心臓が止まるかと思った。

銃口を向けられても、ナイフを突きつけられても、怖くなんてなかったのに。

麻子ちゃんが居なくなると思った瞬間。死んでしまうかと思うほど……怖くなった」

己の手を見つめ、そして握りしめる先輩。

拳は震えているように見えた。

お婆が病院に運ばれたという連絡を受けた時の、私と同じ気持ちなんだと思う。

そう考えると、どう謝ればいいのかすら分からないレベルだったが、けれど、彼は不意に膝立ちとなり、ポケットから取り出したハンカチを、私の額へ優しく押し当てる。

「お願いだから、もうあんな事はしないで。君の事が、好きだ。大切なんだ。だから……」

いつもと違う、より近い距離にある先輩の顔は、とても悲しげに見えた。

彼をよく知らない人物からすると、相変わらずの仏頂面に見えるだろうが、私にはそう見える。

胸が苦しい。心臓を縛り上げられたようだ。

その原因はやはり罪悪感と、どうしようもない喜び。

ああ。間違いなく私は喜んでいて。彼に好きだと、大切だと言って貰えて。

だが同時に、苦しい。こんなに心配を掛けさせて、こんな顔をさせてしまった。

始まりは、他愛ない嘘からだった。

恋人のふりをして欲しいと頼んで、断れない状況を作った。

お婆に言い訳するため、恋人っぽい行動を一緒にした。

他の女の子より私を優先して貰えて、喜んでしまった。

でも、それらは全部、嘘の上に積み重ねた行為なのだ。

砂で作った城のように、波にさらわれて崩れてしまう、脆い関係。

だから、私は。

「先輩。今まで、ありがとう。」

本当の恋人でもないのに、こんなに大切にしてくれて。

……でも、もう止めよう。これ以上、こんな関係が続けるのは、不誠実だ」

先輩の眼を見つめて、別れを告げる。

私から始めた事は、私が終わらせるべきだから。

たとえ、どんなに悲しい顔をされたとしても。

一度、終わらせなければならぬ。

「……自分、は……」

「それから、もう一つ」

「え」

返事に窮する先輩へと、また私は呼び掛けた。

人差し指をクイクイツとすれば、なんの疑いもなく顔を寄せてくれる。

それがなんだか、気弱な大型犬みたいで笑ってしまう。
私は笑みを浮かべたまま、彼の両頬に手を添え。

「んっ」

「っ!?! ん、むう?」

ちよつと強引に、キスをする。

触れた瞬間、先輩が硬直するのが分かった。しかし、唇そのものは意外なほど柔らかい。

やってしまった。ついに、決定的な行為を。

でも、これほどの多幸感が湧き上がるとは予想外だった。

ただ唇が触れ合っているだけなのに、その感触と体温が、心を溶かしてしまうようで。

これは、気持ちいい。沙織が夢中になる訳だ。

だが、いつまでもキスしては、肝心な事を言えない。

名残惜しい気持ちを抑え、私は唇を離す。

それから、呆然としたままの先輩へ、新しく始めるための言葉を伝える。

「私も、先輩が好きだ。だから、私の恋人になって欲しい。今度は、本当の恋人に」

虫のいい話だと思う。けど、これが私の本心だった。

全ては嘘から始まったが、しかし、嘘から出た誠という言葉だってある。

私は、この想いを嘘のままにしたくない。

体がデカくて、仏頂面で、お人好しで、甘いもの好きで。

どうしようもなく優しい先輩と、これからも一緒に居たいのだ。

もちろん、彼がそれを許してくれるなら、という大前提が必要なのだが。

結構……かなり……だ、大分? 無茶な事をしてしまったし、愛想を尽かされても仕

方ない。

その時はその時で、諦めよう。諦めきれるか自信はないけど、覚悟だけはしておこう。

私は粛々と、先輩の返事を待つ。

「……………」

「先輩?」

「……………」

「…………お、おーい。もしもーし?」

「……………」

……待っているのに、一向に返事がない。

キスした時のまま、まるで石化でもしたように、身じろぎ一つしていなかった。

もしかや、呼吸するのも忘れているのでは？　と思いたくなる有様だ。

心配になって、私は先輩の顔を下から覗き込み――

「ブホア!!」

「だああっ!?　は、鼻血っ!?!」

――突如として噴出した鮮血を、間一髪で回避した。

あ、危なかった……。あんな至近距離で鼻血を食らったら、制服が駄目になるところだ。

つて、そんなこと気にしてる場合じゃない!　もんどり打って倒れた先輩を助けなければ!

「おい先輩っ、しっかりし……ろ……?」

慌てて駆け寄り、先輩の頭を抱え上げるのだが、その顔は、かつてない程に緩んでいた。

鼻血を垂れ流しつつ、誰がどう見ても幸せそうな表情を浮かべながら、気持ち良さそうに気絶している。

「そんなに、嬉しかったのか」

とりあえず膝枕の体勢に移行し、丸めたティッシュを先輩の鼻に詰め込み、私は呟く。返事は聞けなかったが、これは了承と受け取って良い……んだろうか。

ファーストキスだったし、出来ればOKだと考えたいけれど、独り善がりに結論を出しては駄目だ。気がつくまで持ち越しだな。

もしOKだったなら、今度こそお婆に正式な挨拶をして、嘘をついていた事も正直に謝ろう。沙織達に紹介する必要があるな。

まあとにかく、この私を本気にさせたんだ。先輩にも覚悟して貰わねば。

「しかし、どうしたものか……。私一人で運ぶには、重過ぎるしな……」

誤解を解く事が出来たのは良いとして、これからの事を考え、私は途方に暮れてしま
う。

防止柵の向こうに見える海は、沈みかける夕陽を抱いていた。

学園艦は常に節電を余儀なくされているから、まだ西陽が差し込むこの中甲板も、じ
き真つ暗になる。

携帯の電波も相変わらず入らないし、助けを呼びに行こうには、先輩を放り出さなけ
ればならない。それはちよつと可哀想だ。

「早く起きてくれ、先輩。……風邪をひくぞ」

指通りの良い、先輩の髪を梳きながら、反対の手で血塗れの口元を拭く。乾いてから
じやティッシュで取れなくなるし。

でも、自分の膝の上で、好いた男が眠っているという状況は、思いのほか心地良くて。
もう少しだけ、こうしていたい。矛盾した気持ちも湧いてくる。

沙織を馬鹿に出来ないな。私も意外と“女”だったらしい。

朱に染まる世界は、私と先輩の二人きり。

潮騒を近くに感じつつ、心の中で私は願う。

彼が目覚めた時。

二人の関係が、嘘から始まった、本当の気持ちで結ばれている事を。

将来的に、子供はサッカーチームが作れるくらい欲しいな。

早いところ孫の顔も見せてやりたいし、頑張ってくれ。未来の旦那さん?

西住みほ編

第一話 「絶対に変な顔しちやいます！」

「えええっ?! わ、私がポスターモデル、ですかっ?」

あまりの驚きに、私、西住みほは大声を上げてしまった。

それは、広々とした大洗女子学園、生徒会長室に響き渡り、その反響が消えないうちに、大きな革張りの椅子でふんぞり返る小さな会長——角谷 杏さんは、会長の机の少し前で立つ私へ、鷹揚にうなずき返して。

「そ。これからの大洗女子で、戦車道を盛り上げる為にねー」

「当然だが拒否権はない。ありがたく拜命するように」

「ごめんね西住さん……。色々と考えた結果、貴方が適任だという事になったの……」

会長の言葉に、向かって左隣の広報、河嶋 桃さんが片眼鏡を光らせつつ。

向かって右隣の副会長、小山 柚子は申し訳なさそうに追隨して。

なんだか、もうすでに断れない雰囲気は漂っているような……。

「そ、そんなこと言われても、いきなり過ぎて何がなんだか」

「難しい話じゃないよ。戦車道大会で優勝したからって、戦車道をやめる訳にはいかな
いしね。」

大洗女子の今後を考えると、絶対に戦車道は継続して履修してもらわなきゃならない
んだ。

幸い、アタシら優勝できちゃったし、その立役者は二年生だし。来年は増えるんじや
ないかなー?」

おずおず私が問いかけると、会長は手元のビニール袋から干し芋をパクリ。モツシャ
モツシャと噛み締めながら説明する。

確かにこの学園艦——大洗女子学園は、廃校の危機を免れるために戦車道を復活さ
せ、戦車道全国高校生大会へと出場。見事に優勝を勝ち取った。

だけど、廃校を免れたという事は、学校を存続させなければならぬ、という事でも

あるから。

学園艦の統廃合が検討される昨今、優勝したからといって戦車道を止めるのは、大問題に繋がってしまう。

「ついでに、優勝の記念ともなるポスターを作成し、学園中に、そして陸の方にも張りだそう……という、会長の妙案だ」

「……理由は分かりましたけど、私なんかモデルじゃ……。他にもっと、綺麗で可愛い子が居ますしっ」

「そうは言っても、西住さんほどの知名度は無いから、やっぱり西住さんに頼むのが一番良いの。それに、西住さん可愛いじゃない！ きつと大丈夫っ」

「あ、ありがとうございます……」

ポスターを作る理由には納得できましたが、私がモデルじゃ人なんて集まらない。

そう思つて他のみんなを推薦しようとしたのに、小山さんは的確な理由を添えて励ましてくれる。

どうしよう、嬉しいんだけど嬉しくないです……。

「義援金やら補助金やらがドカンと入ったし、バイト料も弾むからさ。ぶっちゃけ来年度までに作ればいいから、時間的な拘束だって緩いし。頼まれてよー、西住ちゃん」
「はあ……。練習の妨げにならない程度、でしたら……」

ここまで来たら、流石に断り切れない。会長のお気楽な頼みを、私は仕方なく受け入れる。

本当は嫌だけど、バイト料にも、ちよつとだけ惹かれるし。

ボコのお蔵入り映像収録したDVD、買えるかもしれない……。
プレミアがついちゃって、凄く高くなっちゃってるんだよね……。頑張ろ。

あ、そう言えば。

私がモデルという事は、私を描く人が居るといふ事で。ちよつと気になる、かな？

「ところで、そのポスターは誰が描くんですか？ プロの人を雇ったりとか……」
「まさか。そんな事したら凄いいお金が掛かっちゃうわ。なので……。桃ちゃん？」
「桃ちゃんと呼ぶな！ ……オッホン。よし、入って来い！」

試しに尋ねてみると、小山さんが首を振り、河嶋さんへバトンタッチ。

いつものように吠えた後、生徒会室の入り口に声を掛けた。

ややあつて、《コンコンコン》とドアがノックされ、「失礼します」という挨拶と一緒に、見知らぬ人物が……え？　今の声、男の人じゃ……？

「んじや、紹介すんねー。農業科二年の……名前なんだっけ？」

「エリヤです！　何回目ですか!!　……初めまして、西住さん。エリヤと呼んで下さい」
「あ、はい。初めまして」

机のすぐ側まで進み出たその人……。ライカ君やダンチョー君と同じ、男子分校の生徒であるらしい彼は、会長へとツツコミを入れてから礼儀正しく挨拶してくれる。

エリヤ。恵里谷、それとも襟野？

色白で背が高く、でもガツチリとした印象を与える、茶色味掛かった短髪の男子だった。

反射的に私も挨拶を返すけれど、なんだか緊張するなあ……。

ライカ君は沙織さん一筋だから安心だったし、ダンチョー君とはお仕事として話せるから平気なのに。

「こう見えて結構スゴいんだよ? 何回も絵のコンクールに入選してるし、農業科での成績もトップだし。ほら、これ見なよ。アタシの自画像」

「え? こ、これ、エリヤ君が描いたんですか?」

「はい。会長室に飾る新しい絵が欲しい、って頼まれたので……」

机の後ろに隠してあったらしい、額縁に入った大きな絵を、会長は重そうに掲げる。描かれていたのは、不敵な笑みでこちらを見つめる会長の肖像画。

写真かと疑いたくなる細密画で、けれど色使いが全体的な柔らかさを感じさせる、凄く綺麗な絵だった。

……とつても凄い、んだけど。

(とある部分が増量してあるのは、言わない方が良いんだよね……?)

それこそ、本人と瓜二つな額縁の中の会長は、何故だか、その。……ポリユミーになつてた。

本物の会長は鼻高々といった感じで、対するエリヤ君は頬を引きつらせて苦笑い。

強要されたか、河嶋さん辺りにプレッシャー掛けられたのかも。大変だったんだね

……。

「あれ？ ……という事は私、男の人に絵を描いてもらうんですか!？」

「当たり前だろう。何を言っているんだ、西住?」

「む、むむむ無理です! 私、絶対に変な顔しちゃいます!」

ふと、絵の描き手が男子であることを思い出し、私は顔の前で両手を振る。

絵のモデルっていうだけで緊張しちゃうのに、お、男の人にガッツリ見つめられるだなんて、絶対に無理!

歌舞伎役者さんが睨みを効かせるみたいなきもちやうだろうし、そんな姿を描かれるのは女の子として嫌です!

と、全力でお断りしたい私でしたが、エリヤ君はまた苦笑いを浮かべ、混乱する私を宥めようと話しかけてくれて。

「そんなに気負わないで下さい。ごく自然に、椅子にでも腰掛けている所を、パパッと描かせて貰うだけですから」

「で、でも……。それって、二人だけで、なんですよね。私、よく知らない男の人と、二

人つきりって言うのは……」

「いえいえ。別に二人だけじゃなくても、僕は問題ないですよ。」

見知らぬ男を警戒するのは当然ですし、お友達の方に同席して貰ったりとか。

時間も、西住さんの都合が良い時で構いませんし」

「あ。そう、なんですか」

てつきり、密室に二人きりで絵を描くのかと思っていたら、私が勘違いしていただけみたい。

ちよつと拍子抜けだけど、でも、沙織さんとか華さんが居てくれるなら、安心してモデルになれる……かなあ……?」

「まあとにかく、いっぺん描いて貰いなよ。今度の休みにでも。これ、会長命令だから。よろしくー」

「美術部の人達に協力をお願いしてるし、部室を使ってもらっても大丈夫だから。お願いね、西住さん」

「えええ……」

会長に押し切られ、小山さんにも後押しされて、断れないまま話が進んでいく。相変わらずの横暴にゲンナリしつつ、なんとなくエリヤ君を見ると、につこり、朗らかな笑みが返されて。

……良い人そう、なのは不幸中の幸い、かな。

上手くモデルになれると良いなあ……。



そんなこんながあつて、次の日曜日。

戦車道推進ポスターのモデルを依頼された私は、あんこうチームのみんなに同席をお願いし、学校の美術室で絵を描いてもらっている訳なのですが。

「……に、西住さん？ お腹でも痛いんですか？」

「えっ。ちちち、違います！ わわ、私、どこも痛くないですよっ!!」

イーゼルに乗せたスケッチブックの前に、エリヤ君はそんな事を尋ねてくる。

椅子に座っている私としては健康そのもの。お腹も痛くないので否定するんだけど、彼の周囲に立つ四人——沙織さん、華さん、麻子さん、優花里さんにも、笑顔には見えていないらしく。

「でもみぽりん、そう言われてもしようがない顔してるよ?」

「まるで、身内を鉄砲玉として送り出す直前の、極道の妻のようすわ」

「華の表現が的確かどうかはともかく、力み過ぎなのは間違いないな」

「いえいえ! あれはきつと、試合中に苦境を乗り越えるための、強い意志を見てもらうための表情なんですよ!」
ね、西住殿?」

「ごめん、優花里さん。それはちよつと違うかも……」

「あ、そうなんですか……」

フォローしてくれる優花里さんには申し訳ないけど、一応、笑顔を浮かべているつもりだった私は、彼女と同じように肩を落とす。

日曜日の午前中という貴重な時間を割いて貰ってるのに、私、なにしてるんだろう。

ちなみにですが、私もみんなも、エリヤ君も制服姿。

学校に来る時は休日でも制服……みたいな校則は、黒森峰と違ってないみたいだけど、パンツァージャケットを着れば、戦車道での格好と同じにもなるので。

「ほらほら、せつかくのモデルさんだから、スマイルスマイル！ エリヤ君を虜にしちゃう感じで！」

「だから、無理だよお……。私、作り笑いとか凄い苦手なのに」

「うーん、困ったな。笑顔じゃなくて、凛々しい表情とかでも良いと思うんですが、今の西住さんだと、ちよつと……」

「あう。ごめんなさい」

鉛筆が動いていないのを見計らって、沙織さんがこちらへ。肩に両手を置いて、いつもの調子で笑いかけてくれる。

でも、私は笑顔を浮かべるところか、情けない顔でしよげるだけ。

エリヤ君も困った様子で、鉛筆のお尻で頭を搔いている。

そうだよね……。こんな所をポスターにされても、誰も着いて来てくれないもんね……。

「みほさん、試合中はとても凛々しいですし、わたくし達と一緒に居る時は、ごく普通に笑顔を浮かべてらっしゃいますよね?」

「それは……。試合中はやるべき事が分かっているし、やっぱりみんなは、お友達だし……」

「まあ、つい先日知り合ったばかりの男子の前で、ポスターモデルとして完璧に笑えと言われても、出来るのは沙織くらいだ。仕方ない」

「ちよつと麻子っ、誤解を招きそうな言い方はやめてよ!?! もう誰にでも笑顔を振りまいてる訳じゃないんだからあ!」

「最高の笑顔はライカ殿専用、なんですよね。もう何度も聞いて覚えてしまったであります」

華さんが褒めてくれたり、麻子さんが慰めてくれたり、沙織さんが大慌てしたり、優花里さんが苦笑いしたり。

普段と変わらないやり取りにホッとされるけれど、そんな私を見つめる一対の瞳に気付いて、また表情が強張るのを自覚する。

ううう、どうしても緊張しちゃう……。いつそ、戦車に乗ってればマシなのに……。

「ごめんなさい。私がかんなじゃ、エリヤ君も迷惑ですよね……?」
「……………」

「エリヤ君?」

「…………あ、ああ、すみません! 少し集中してたもので」

二度の呼び掛けに、彼はハツとした顔で謝った。

忙しく右手が動いていたのを考えると、何か描いていたのかな。

もしかなくても、私を……だよ。ちよつと気になる。

みんなも同じ気持ちなのか、ワラワラと彼のそばへ集まりだす。

「ほほう、どれどれ。…………えっ!? 何コレ、凄く上手い!」

「まあ」

「写実系か」

「西住殿も御覧になって下さい! 西住殿表情集ですよ!」

「え? でも…………」

「どうぞ。簡単にスケッチしただけですけど」

「…………じゃあ、失礼します…………」

みんなから勧められて、私も椅子から腰を上げる。
そして、おずおず彼の横から覗き込んでみると。

「うわあ……!　これ、私だ……!」

スケッチブックの中には、顔の前で手を振る慌てた私や、落ち込んだり、困ったり、ホツとしたりしている私が、見事に描き出されていた。

本当に凄い!　まるで写真みたいにソツクリ!

会長の絵もそうだったけど、自分自身をこうして見ると、凄く感慨深いなあ。

……隅っこの方に、固く唇を結んで、お腹痛いのを我慢してるような私も居るんだけど、気付かなかった事にしよう。うん。

「凄いやねえー。私もイラストとかなら得意だけど、こんな風には描けないよー」

「素晴らしい技術ですわ。御見逸れ致しました」

「会長に頼まれる訳だな」

「あはは。どうも。絵は趣味の一環で始めただけなんです、思いの外、のめり込ん

じやつて」

「エリヤ殿の趣味ですか。それは一体？」

「野菜作りです。僕は農業科なので、実益も兼ねてますね。」

成長の度合いとかを記録するのに、文字だけじゃ分からない事も多いですから、簡単なイラストを添え始めて、そこから。

商店街のスーパーとか、学食にも卸してますし、僕が作った野菜、皆さんも口にしたい事があるかも知れませんよ」

ちよつと得意げな表情で、エリヤ君は語る。

学園艦は船だから、港に寄った時に食料とかを補給し、必要な限り自給自足するのが鉄則。もできるけど、とつてもお金が掛かってしまうので、可能な限り自給自足するのが鉄則。

中でも大きなウエイトを占めるのが、水産科の魚の養殖と、農業科の野菜作り。

どちらも艦内で行われていて、特に農業科は、太陽の当たらない地下で栽培しなくちゃならないから、かなり大変だつて聞いた。

そんな中で絵を描いたり、成績トップを維持したり。エリヤ君って凄いなあ。

「そう言えば、会長が言っていましたね。」

野菜とか、作物を上手に育てられるって、凄いと思います。

美味しい野菜を作ってくれて、ありがとうございます。エリヤ君」

「西住さん……。そう言ってもらえると、嬉しいです。凄く」

思った事を素直に伝えてみると、エリヤ君は得意げな表情から一転。照れ臭そうに俯いて、鼻の頭を掻く。

うん。やつぱり、エリヤ君って良い人みたい。

彼にだったら、ちよつとは安心して描いて貰えるかな……。と思う私でしたが、こちらを見る沙織さんは、なぜだか難しい顔をしていて。

……。どうしたんだろう？

「エリヤ君。みぼりん。二人とも硬い」

「……は？」

「え。な、何、沙織さん？」

「喋り方が硬いの！ 異性だけど同い年なんだから、普通に敬語なしで喋ろう？ そんなじゃ、いつまで経っても自然な笑顔なんて出てこないよ！」

ズビシッ!

指を突きつけ、沙織さんが断言した。

な、なんとというか、凄いや意気込みを感じる……。

思わずエリヤ君を見れば、彼も私の方を見ていたようで、視線が重なってしまふ。

私と同じように、戸惑っているような様子が見て取れた。

「そう言われましても、僕、これが素ですし」

「私も……。同性のお友達なら大丈夫だけど、慣れてない男の人相手だと、どうしても……」

エリヤ君に便乗して、私も無理そうだと沙織さんへ訴える。

まあ、ライカ君とかダンチョー君とかなら、もうすっかり慣れちゃったから平気なんだけど。

麻子さんが言った通り、まだ出会ったばかりのエリヤ君じゃ、そうは行かない。せめて、もう少し互いを知る時間が欲しいです。

……なんだろ。告白を断る時みたいな感じになつてるような？

ともあれ、私たち二人が揃って同じ意見を言うと、沙織さんは「むむう」と唸って腕

を組む。

「これは、荒唐治療が必要みたいね……」

「おい沙織。何を考えてる」

「きつと沙織さんらしい事ですわ」

「五十鈴殿、褒めているように聞こえないのは何故でありますか?」

その背後では、ジト目の麻子さん、大らかに微笑む華さん、不思議そうな優花里さんが、思い思いに発言している。

しかし、沙織さんは全く意に介さず、エリヤ君に思わせぶりな笑顔を向け……。

「ねえエリヤ君。来週の日曜って予定ある?」

「来週の? ……いえ。午後からは暇ですが」

「ふむふむ。みぼりんは?」

「わ、私は、家でボコのお蔵入りDVDを見る予定が……」

「うん、無いも同然だね!」

「沙織さん酷い!?!」

嫌な予感がしたので、まだ買ってもいないDVDを予定に組み込んでみたのに、あっさり無視された。

嘘ついちゃった私も悪いけど、ボコを全否定されてるみたいで悲しいよ！ それはそれでボコらしく感じちゃうのがさらに！

「いい？ 二人とも。貴方達、来週の日曜日にデートしなさい」

「…………え。ええええええええええつ!？」

「僕と、西住さんが…………？」

涙目になっていた私に、まだ沙織さんは追撃を加える。

思わず叫んじゃった…………。

でも、いきなりデートとか、驚いて当然だと思います。エリヤ君も目を丸くしてるし。沙織さんらしいといえそうですけど、男の子の友達なんて小学校以来、出来た試しが…………。

あ、ライカ君は沙織さんの恋人だから知り合い枠、ダンチョー君は部活仲間枠でお願いします。

といった風の中に言い訳しつつ、現実の体の方でも、ちよつと無理めな事をアピールしようとするんだけれど。

「で、デート、デートだなんて、私、そんなこと……!」

「無理とか出来ないとか言ったら、エリヤ君が傷ついちゃうよ?」

「あ」

ボソツと沙織さんが呟いた言葉に、ハツとさせられた。

それもそう、だよな。

私だって、目の前で「君とデートは無理!」とか言われたら、物凄く落ち込むと思う。危うく失礼な事をする所だった……。

「重く考え過ぎだよ、みぼりん。デートなんて、ただ単に男子と遊びに行くってだけなんだからさ?」

これを切つ掛けに仲良くなれば、喋り方の硬さも取れて、みぼりんも自然に笑えるようになるはず!」

「確かにそうかもしれませんが……」

「一理あるな」

「私の時と似たような感じですね！ 私も、西住殿に話しかけて貰えたから、こうしてお話できる間柄になった訳ですし！」

沙織さんに続いて、華さん、麻子さん、優花里さんが賛同する。

なんていうか、沙織さん凄いなあ……。

二、三ヶ月前は説得力皆無だったのに、ライカ君と付き合いだしてからというもの、自信に満ち溢れてる。思わず私まで頷きそうになっちゃう。

……いやいやいや！ 頷いちやダメだよ私！ 雰囲気の流れされちやダメ！

エリヤ君には申し訳ないけど、ここはキツパリ断らなきや……。

「やつぱり、みぼりんは笑顔が一番素敵だもんっ。

エリヤ君にみぼりんの笑顔を描いてもらうため！

ひいては、大洗女子の未来のために！ 頑張つてね、みぼりん！」

「え、え、え!? も、もう決まっちゃったの!? 決定事項なの!?」

「みほさん。陰ながら応援いたしますわ」

「西住殿ならば、きつとやり遂げられます！ 信じているでありますよ！」

「骨は拾おう」

「失敗前提!」

——と、考えているうちに話は進んでしまい、既にみんなの中では、私とエリヤ君のデートは確定してしまったみたい。

あああ、けつきよく流されちゃった……。

同い年の男子との、生まれて初めてのデート。一体、何をどうしたら良いのか。

私の胸は、不安で高鳴ってしまうのでした。

うう、本当にどうしよう……!?

「あの……。僕の意見は、聞いてもらえないのかな……。? いや、拒否する気なんて微塵もないけど、でも一応は聞いてみたり……。しないのか……。そうですか……。」

《突発的掌編 エリヤ少年の謎》

「そう言えば、会長。エリヤ君に頼んだ絵、どうして増量してあるんですか？」

「お、おい柚子！ そんなこと聞いたら会長が激怒して——」

「ああ、あれ？ やっぱリデツカい方が見栄え良いじゃん。アタシとしては自分のサイズも気に入ってるんだけど、ま、ちょっとしたお遊びってやつ」

「……そ、そうだったのですか。では、エリヤには悪い事をしましたね。かなりキツク言い含めてしまいましたし」

「桃ちゃん、気をつけた方が良いと思うよ？ だつてほら、エリヤ君つて……」

「その呼び方はやめろと言っている！ ……なんだ、奴がどうかしたのか？」

「あれ。河嶋は知らないんだっけ。じゃあ知らないまままで良いっしょ。その方が面白そうだ」

「会長、それは少し可哀想じゃ……」

「おい柚子、なんの話なんだ！ 会長、説明して下さいっ！ ……会長？ 聞いてますか、かいちよー!?!」

第二話 「プランAでお願いします」

絵のモデルを引き受け、勝手にデートをセッティングされてから、一週間。

白いワンピースの上から水色のブラウスを着る私は、胃がひっくり返りそうな緊張を抱えたまま、待ち合わせ場所である機銃座公園のベンチに座っていた。

「人、人……。っん。……あああ、やっぱり駄目。全然緊張が解れないよお……」

定番のおまじないを試してみる私ですが、効果を感じられずに頭を抱える。

沙織さん達とイメージトレーニングしたり、着ていく服を選んだり、あつという間に時間は過ぎ去ってしまい、正直に言うとうと、全く覚悟が決まっていません。

過去に遡って約束をなかった事にできないかなあ……。なんて考えたりもしていますが、そんなの起こり得るはずもなく、無情にも時間が過ぎていく。

時刻は十二時四十五分。

私は十二時半から待っているけど、約束の午後一時より十五分も前だし、エリヤ君が

来るまでの間に緊張をほぐして——

「えっ。あれ？ 西住さん!？」

「あ、エリヤ君」

——と思つていたら、遠くの方から驚いたような声が掛けられた。

紺色のズボンに白いワイシャツ。その上に薄緑のチョッキを合わせる彼は、私を見て目を丸くしている。

「どうかしたんですか、西住さん？ まだ待ち合わせの十五分前なのに……」

「そ、それを言うなら、エリヤ君こそ」

「いや、あの、待たせたらいけないと思つて早めに出たんですけど……。何分前から？」

「あ、大丈夫、大丈夫ですっ。来たばかりなので！」

「……本当に？ なら、良いんですが……」

駆け寄ってくるエリヤ君へ咄嗟に嘘をつくど、彼はちよつとだけ乱れた息を整えつつ、申し訳なさそうな苦笑いを浮かべた。

あはは、嘘っぽいですよね……。自分でもそう感じます。

でもそれより、緊張が全く解れてない事の方が重要！ ううう、どうしよう!?

「じゃあ、早めに待ち合わせられた事ですし、少し早いですけど行きましようか」

「は、はい！ 本日は、どどどどうぞ、よろしくお願いしましゅ……！ あっ」

反射的に頭を下げ、思いつきり噛んでしまった事に顔が赤く。

うああ……。案の定だよ……。私、どうして戦車に乗ってないと、こんな駄目なんだろう……。

きっとエリヤ君にも呆れられている。

そう思つて、恐る恐る顔を上げてみると。

「こちらこそ。至らない事も多いと思いますが、よろしくお願いします」

「はい……」

彼は特に気にした様子も見せず、私と同じく頭を下げしてくれる。

良かった、触れないでくれた。エリヤ君が心配りのできる人で助かつちやった……。

まだ全然緊張したままだけど、とにかく私たちは並んで歩き始める。

……なんでだろ。男の人と歩いてるっていうだけで、妙に照れ臭いというか、恥ずかしいというか。

沙織さんも華さんも、よく平気だなあ。いつかは慣れる、のかな。

「えっと、西住さん。いきなり、なんですけど」

「ひゃい!?! なんででしょう!?!」

唐突に声を掛けられ、ビクツツとしてしまう私。

よく考えたら唐突でもなんでもない、普通の雑談として話しかけられただけなんだけど、まだ私の心は落ち着いていなくて。

それを悟ったのか、エリヤ君はまた小さく微笑み、ある提案をしてくれた。

「改めて、互いに自己紹介しません?」

「自己紹介、ですか」

「ええ。一緒に居るのに緊張する大きな理由は、やっぱり互いを知らないからだと思うんです。」

こういう人なんだ、って認識が少しでも頭に入っていれば、ちよつとは話しやすく
なつて貰えるかな、と」

「なるほど……」

言われてみれば、実に納得。

私も、お父さんどだったら一緒に並んで歩くの平気だし、やっぱり相手をよく知つて
いるかどうかが重要なのかも。

しきりに頷いていると、早速エリヤ君の方から自己紹介が始まる。

「じゃ、言い出しつぺの法則で僕から。

農業科二年A組、エリヤです。一月八日生まれ、山羊座のO型。

本籍は神奈川にあるんですが、実はとある学園艦の上で産まれて、色んな理由があつ
てずつと艦の上で生活してきました」

「艦の上で……」

「はっ」

へえ〜。凄く珍しい……。

街を丸ごと内包する学園艦には、学生以外の住人もたくさん住んでいて、中には新しく家庭を築く人も。

街なんだから医療施設や商業施設も充実してるんですが、万が一の事を考え、妊婦さんなどは一時的に陸の病院へ入院したり、実家に帰ったりというのがほとんど。

でも、やむを得ない事情があり、学園艦で赤ちゃんを産んだする場合もあつたりするって聞いたことがある。

そんな時は、容体が安定するまで学園艦で生活。その後、一家全員で陸に移住……つていうのが定番らしいけど、そもそも陸に家がないっていう家庭も一定数あるようで、社会問題にもなったはず。ニュースで見たのを覚えてる。

根掘り葉掘り聞くのは失礼だけど、どんな事情があつたのか、少しでも気になるなあ……。

とか思っているうちに、自己紹介は次の内容へ。

「好きな物は、やっぱり野菜全般ですね。食べるのも、育てるのも好きです。

得意科目は科学と美術。苦手なのは世界史と地理です。

農業に関わる事ならすぐ覚えられるんですが、それ以外の暗記は、どうも苦手で……」

「あ、ちよつとだけ分かります。暗記って、興味が無い事だと全然できないですよね」

「そうなんですよ……。おかげで毎回、赤点ギリギリで……。まあ、農業科は農業が本業ですから、テストの点数はあまり関係ないですけど」

「え？ そうなんですか？」

「僕の場合、テストの点数を野菜作りで補ってる感じですね。ほぼ黒字なので、生活費も捻出できますし」

「ええっ!? そ、そんなに凄いですか……」

事も無げにエリヤ君は言うけれど、これって、とつても凄い事なんじゃ……？

船舶科が学費免除なのは有名だけど、加えて水産科、農業科も、その生産物で学園艦が潤うから、学費は控除されている。

それを踏まえた上でも、生活費を捻出できるほどの売り上げを出す生徒なんて、聞いた事がない。

人は見掛けによらないって、実感します。

「あとは、そうだな……。趣味、は野菜作りだから被るな……。ん〜……」

「……好きな言葉とか、座右の銘とかは、どうですか？」

「ああ、良いですね。好きな言葉は……うん、晴耕雨読です！ そういう生活に憧れます

！」

「あはは。本当に野菜が好きなんですネ」

「もちろん！」

齒を輝かせるような、爽やかな笑顔。

なんとというか、凄く無邪気なその表情に、自然と私も笑っていた。

前言撤回。こんな風に笑えるエリヤ君なら、野菜の売り上げで生活費を賄ってもおかしくない、かも？

「それじゃあ、私も自己紹介、行きますっ」

「はい。どうぞ」

自然な笑顔の勢いを借りて、今度は私が自己紹介を。

まだ緊張はしてるけど、試合前のような良い緊張に感じられるのが、我ながら不思議だった。

とりあえず、エリヤ君のを真似てみようつと。

「西住みほ、十六歳。普通科二年A組。十月二十三日生まれ、天秤座のA型です」
「という事は、少しだけお姉さんですか」

「お、お姉さんだなんて、そんな」

「確か、ご実家は熊本なんですよね？」

「あ、はい。でも、どうして……」

「今の大洗で、西住さんの来歴を知らない方が珍しいですって。まあ、戦車道での格好良いいイメージが先行してて、細かいプロフィールまでは僕も知りませんでしたけど」

「そ、そうなんだ……。恥ずかしい……」

私の事を、私が知らない人達に知られている。

黒森峰に居た頃はそんな余裕なかったけど、改めて考えてみると、なんだか照れ臭いような、くすぐったいような。

……ひとまず置いておこうつ。続き続きつ。

「え、ええつと、好きな食べ物はマカロンです。甘くて、カラフルで小さくて。得意科目は国語なんですけど、エリヤ君と違って、美術は苦手です……」

「へえ、意外だなあ。女子って基本的にイラストとか、絵的な物が好きそうなイメージが

あるんですけど」

「わ、私も、描くこと自体は嫌いじゃないんですけど。沙織さん曰く、悪い意味での画伯らしくて……」

「……逆に興味が湧きますね」

「あ、あはは……」

顎に手を当て、真剣な眼差しを空に向けるエリヤ君。

私は苦笑いを浮かべながら、背中に冷や汗をかいていた。

絵を描くのは、本当に嫌いじゃない。

嫌いじゃないんですけども、なぜだか指は思った通りに動かなくて。

むしろ、思っていた事の斜め上に行っちゃって、意図した物を描き上げられた事の方が少なかったり……。

ボコを描いたつもりがクマのゾンビになっちゃった時は、とつても悲しくなりました。

……泣きたくなるから、もう自虐はやめよ……。

後は趣味、かな？

「趣味はぬいぐるみ集めです。ボコられグマっていうシリーズが大好きで……。エリヤ君は知ってますか？」

「ボコ……。ああ、知ってます知ってます。前に一回、コンビニのペットボトルのおマケに付いてきた事ありましたよね。まだ持ってます」

「えっ!!? ほ、ホントですかっ!!?」

「うおっ」

「あ、ごめんなさい……」

予想外の返答に思わず詰め寄ってしまった、エリヤ君がビクツと後ずさり。

その反応で少し冷静になれたけど、やっぱり頭の中は、ボコのおマケの事で一杯。

う、ううう、羨ましい……。っ。

「そのおマケ、熊本の方じゃあまり出回らなかつたみたいで、私、一個も買えなかつたんです。おマケに付いたのもそれつきりだし、ネットでは凄くプレミアが……」

「はあ……。なら、西住さんにあげますよ、お近付きの印に」

「良いんですかっ!!? 本当ですかっ!!? 嘘じゃないですよねっ!!?」

「う、うん。本当、本当にです。あの、近い……」

またしても思い掛けない申し出をされて、さつき以上に食いつく私。

エリヤ君が妙に顔を逸らしてる事は気になったものの、超絶レアなボコを貰えるかも知れない喜びに、私は打ち震えていた。

ああ……。ボコのファンの間では幻とまで言われた、あのオマケを貰えるだなんて。

この喜び、何に例えたら良いんだろう。

沙織さんと華さんに、生徒会から庇ってもらった時と同じくらい？

お家に初めてみんなを呼んで、ご飯を食べた時くらい？

それとも、戦車道大会で優勝した時？

……最後のは、流星にアレだね。うん。

とにかく、お礼を言わなくちゃ！

「ありがとう。エリヤ君、優しいんですね」

「い、いや……。西住さんが持っていた方が、ボコも喜ぶ、だろうから……」

「そう、かな？ えへへ……」

天にも昇る心地で、クルッと一回転しながら前に。

後ろ向きで歩きつつお礼を言うと、俯き加減でそう言ってくれる。

ボコが喜んでくれるとか、もしそうだったら本当に嬉しいなあ。

でも、どうしてエリヤ君、さつきから顔を背けてるんだろ？

それに、もう一つ気になる事が……。

「あの……。少し、思ったんですけど」

「なんですか、西住さん」

「エリヤ君って、女の子と話すのに慣れてるような、そんな気がして。それなのに、デ……女の子と遊びに行くのが初めてなのは、不思議だなって」

デート、と言うのが恥ずかしくて言い換えちゃったけど、疑問に思ったのは本当。

事務的な話なら辛うじて、な私と違い、エリヤ君は自然に、ごく普通に私と話しているように感じた。

敬語は崩さないけど、特に緊張はしていない……みたいなの？ 男子分校に通ってるんだから、日常的に話している訳でもないはずだし。なんでだろう。

と、私的には素朴な疑問だったのに、何故か彼は徐々に肩を落としていく。

「……僕、そんなに遊んでる風に見えますか？」

「えっ。あ、違う、違うんです、ごめんなさい！ 思っていた以上に話しやすかったから、何か理由があるんじゃないかと思っただけで、その……！」

落ち込んでしまうエリヤ君に対し、私は大慌てでフォローを入れる。

ああ、そんなつもりじゃなかったのにつ！

でもあんな言い方したら、「遊びまくってるんじゃないか？」って捉えられても仕方ないよ、私のバカ！

心の中でも猛省。心配になって彼の顔を覗き込んでみると、それほど深刻に受け取ってはいなかったのか、微笑みが返された。

「だとしたら、姉のおかげだと思います。僕、姉さんが居るんですよ」

「お姉さんが？ じゃあ、私と同じなんですわね」

「はい。顔立ちはあるまり似てないんですが、僕が中学に上がって家を出るまでは、四六時中一緒に居ました。風呂まで一緒に入ろうとするのには困りましたけどね……」

「へえ。お姉さんはエリヤ君の事、凄く好きだったんですね」

「……うん。そうなんでしょうけど、ね。うん……」

お姉ちゃんが学園艦へ行く前までは、私も一緒にお風呂に入ってたから、思い出して微笑ましくなつちやうんだけれど、エリヤ君は複雑そうな顔。

小学生くらいまでなら、普通……だよな？ あ、でも、男女の兄妹だと大変なのかな。深く突っ込まない方が良さそう。

彼自身、早く話題を変えたかつたみたいで、今度は私のお姉ちゃんの話に。

「あ、西住さんも姉妹が居ますよね。確か、まほさんっていう」

「はい。お姉ちゃんは、私なんかより何倍も凄い人で、格好良くて……」

それを切つ掛けとして、私はお姉ちゃんとの色々な思い出話を始める。

小さい頃、お姉ちゃんが操縦する二号戦車に乗せてもらったこと。

一緒にクジ付きアイスを食べ、せっかくお姉ちゃんが当たりの棒をくれたのに、直後に泥だらけになって、どつちがどつちか分からなくなつちやつたこと。

家を出て学園艦に向かおうとするお姉ちゃんから、泣いて離れようとしなかったこと。

同じ黒森峰に通い始めてからは、周囲の目があるから素直に甘えられなくて、ちよつ

と寂しかったこと。

たわいない、私以外にもどうでも良いような話だったと思うけど、でも、エリヤ君は凄く楽しそうに聞いてくれて。

私ばかり話しているのに気付いたのは、結構な時間が経ってからだった。

「あ、ごめんなさいっ。つまらないですよ、こんな話……」

「いえいえ、そんな事ないです。西住さん、お姉さんのこと大好きなんですね」

「あ……。そうかも、しれません……。ううん、大好き、です」

認めるのは、少しだけ気恥ずかしい。

だけど、何があっても嫌いになんてなれない、大切なお姉ちゃんだから。

恥ずかしくても、私はハッキリと断言する。

それを聞くと、エリヤ君はますます大きく、優しく微笑んで。

……ダメ、やっぱり恥ずかし過ぎるよっ！ 話題、話題変えなきゃ！

「と、ところであつ、これからはどうするんですか？ お散歩するだけでも、けっこう楽し

いですけど……」

「ああ、はい。一応、プランは考えてあります。ちょっとお待ちを」

お姉ちゃん自慢を中断。話を今後の予定にすり替えると、彼はズボンのポケットから何やらメモ帳を取り出し、「おっほん」と咳払い。

「えー。西住さん、お昼は？」

「まだです」

「良かった。僕の野菜を卸しているレストランがあるんですけど、そこでランチはどうでしょう？ 味と値段は保証します。」

で、その後は、実際に僕が任されている栽培ブロックを見て貰おうかな……なんて、考えているんですが」

「栽培ブロック……。え、もしかして学園艦のワンブロックを、丸ごと任されてるの!？」

「そうですよ?」

「ふへえ……。凄い……」

またしても何気なく、とんでもない事を言つてのけるエリヤ君。

学園艦のワンブロックを丸ごとって、普通に借りるとしたら一日数十万円、下手した

ら数百万円とかいう世界だったと思うんですが……？

なんだろう、住んでる世界が違う気がしてきました……。

「……それで、どうでしょうか。お気に召さないでしたら、他にもプランBとかプランCとか、プランDとかっ」

「あ、だ、大丈夫です。プランAでお願いします」

感心による沈黙を誤解されたらしく、エリヤ君がメモ帳をめくりつつ捲し立てる。

私はそれを手で制しながら、奇妙なギャップを感じさせる彼のデートプランに、少しだけドキドキしてしまうのだった。

変な反応とかしないよう、注意しなきゃ……！



「ありがとうございますー！ エリヤ君、また彼女連れて来なさいよー！」

「ですから、彼女じゃないんですってば！」

お店から出た私達を見送ってくれる、コック姿の女性。

店長 兼 料理長だというその人に、エリヤ君は顔を赤くしながら言い返す。

当然というか、私も赤くなっているのを自覚しているんですが……。

エリヤ君が連れて来てくれたのは、創作イタリアンを出すお店だった。

野菜をメインに使う、女性向けのヘルシーなお料理はとても美味しくて、店内も凄くオシャレ。

思わず財布の中身が気になってしまいうレベルでしたが、彼の言った通り、学生にも優しい値段設定で助かった。

お会計をまとめて払おうとするエリヤ君と、割り勘にしようとする私で揉めたりもしたけれど、まあ、それは割愛。

いまでも手を振ってくれる店長さんを背に、エリヤ君は酷く申し訳なさそうな顔で頭を下げる。

「すみません。店長がああいう人だっていうの、すっかり忘れちゃって……」

「あ、あは……でも、お料理は凄く美味しかったですよ？」

「はい。腕は一流なんです、腕は。やたらと色恋沙汰が好きなのが玉に瑕ですけど」

苦笑いするエリヤ君。

でも、本気で迷惑だと感じているように見えないのは、きつと店長さんと仲がいいからだと思う。

勘違いされたのは困るけど、お料理の説明をする時とか凄く楽しそうで。あんな風にお仕事できたら素敵だなあ……。

「気を取り直して、次に行きましょう。艦内の深い所まで行きますけど、時間とか大丈夫ですか?」

「はい。夕方くらいまでだったら」

「気に留めておきます。じゃ、着いて来て下さい」

店長さんの事はさて置き。再びエリヤ君に先導され、私は艦内へと赴く。

幾つか階段を降り、次にエレベーターを使い、どんどん下へ。

前に、沙織さんと一年生の子達を探しに行った時より、もっともつと。

だけど、普段から人が行き交う区画だからか、普通に明かりが点いていて、ぜんぜん

雰囲気が違う。

そして、移動し続けること約二十分。

大きな隔壁——艦体ブロック同士を繋ぐ扉が見えてくると、エリヤ君は足を止めた。

「ここが？」

「はい。申し訳ないんですが、中に入ったら靴だけ履き替えて貰えますか」

「あ、はい。分かりました」

注意事項に領いたのを確認して、彼は隔壁の丸いハンドルを回す。

重々しい金属音と共にそれが開くと、電車の連結部にあるような通路の先に、物が雑多に置かれる、割と広々としたスペースが広がっていた。

一瞬、ここが栽培する場所？ とか思ってしまったけど、普通にそんな事はなく。壁際にロッカーが沢山置かれているから、いわゆるロッカールームっぽい。

「私物とかは、このロッカーに預けておいて下さい。

中にサイズの書かれた長靴が入りますから、合うのに履き替えて頂いて、準備完了になります。

あ、帽子も使つて下さい。室内ですけど、紫外線が多いので」

「分かりました。けっこう嚴重なんですね」

「露地栽培とは勝手が違いますからね。病原菌の持ち込みを警戒して……なんです。」

本当はそこまで神経質にならなくても育てられるんですが、何せ商品ですから、そうも言つてられません」

「……大変、ですね」

「いえいえ。苦勞するのも楽しみの内、ですよ」

その一角。来客用らしいロッカーの前に案内され、バッグを預けたり、靴を履き替えたりしながらお喋り。

エリヤ君も、自分用らしいロッカーから長靴と、たくさんさんのポケットが付いたベスト、紫外線避けのつば広帽子、新品の軍手など、一気に農家さんっぽく見える格好に。

本当に、何も知らない部外者が入つても良いのかな……？

不安を感じ始める私だったけれど、にこやかな笑顔に後押しされて、ロッカールームの奥にあるもう一つのドアをくぐる。

すると――

「わあ……！　ここだけ別の世界みたい……」

緑、緑、緑。

視界一杯に、様々な種類の緑の葉が広がっていた。

正確に言うと、私達は工事現場にあるような、でもしつかりとした足場に立っている。艦体ブロックの内周に沿うその内側に、更に複数の階層が設けられていて、各階は階段で移動するようになっていた。

なんていうか、近未来的な科学ラボ？　そんな雰囲気なのに、深呼吸したくなるほど空気は凄く澄んでいるのが、とても不思議。

船の中とは思えないや……。

「艦内には複数の栽培ブロックがありますが、僕のブロックでは特殊な栽培法を使っている、一つのブロックで大量生産が可能なのが特徴です」

「特殊な栽培法？」

「はい。土の代わりに、特殊なフィルムに根を張らせるんですけど……。見てもらった方が早いですね」

階段を下りつつ、エリヤ君が栽培方法について説明してくれる。

とある階層——多分、トマトを専門に育てている階へ降り立つと、彼は手近な、まだ青い株の根元の、白いビニールを捲った。

普通だったら土が見えるはずなんだけど、そこには何もなくて、ピツシリと根っこが広がっているだけ。

……あ、違う。半透明で、ちよつと分厚い“何か”がある。これが特殊なフィルムっていう物なのかな。

不思議そうに見ていたら、今度はそのフィルムを持ち上げるエリヤ君。

すると、その下には湿り気のある布が敷いてあるだけで、他には特に何も見当たらなかった。

「へえ〜。本当に土を使っていないんだあ」

「管理は難しいんですが、その分、重量を軽減できます。」

普通に土を使うと、面積が多いほど床に重みが掛かりますから。

これなら土の重さをほぼ考えずに済むので、一つのブロックに普通より多くの階層を作って栽培できる、という訳です」

「なるほどお……」

感心しきりな私の横で、エリヤ君の農業解説が続く。

なんでも、閉鎖空間での農業は、とにかく場所と電気代との戦いなんだとか。

太陽光に近い光を出す照明にはお金が掛かるし、それなりに広いスペースを確保できる艦体ブロックだけど、学園艦に住む全員を賄うには到底及ばない。

これを解消するために、ちよつとした裏技を使つて、特殊フィルムの特許を持つている会社と交渉。

特定閉鎖空間における栽培実験という形で、格安で設備を調達。栽培に必要な機械とかもレンタルしているみたい。

……エリヤ君、何者なんだろ。

一企業と交渉しちゃう高校生なんて、本気で聞いた事がない。

でも、うちの会長も偉いお役人に直談判とかしてたから、割と普通？ いや、絶対に普通じゃないよね。

とりあえず、悪い事をしてる訳じゃないんだし、深くは聞かないでおこうつと。

「西住さん。高糖度トマト、つて知ってます？」

「あ、はい。すつごく甘いトマト、ですよ。果物みたいだつてテレビでよく」

「実は、これがそうなんです。デザート代わりに、もぎたてを食べてみませんか？」

「え、良いの？」

「責任者ですから」

「……じゃあ、ちよつとだけ」

少し考え込んでみると、フィルムやビニールを元通りにし終えたエリヤ君が、もつと奥の方を指差しながら言う。

高糖度トマトかあ……。ちよつとだけ、ううん、かなり興味あるかも。

胸を張る彼に着いて行けば、すぐに赤く熟したプチトマトが見え始める。

何度か足を止め、株を厳選し。

ようやく摘み取られた数粒は、まるで宝石みたいに艶やかに光っていた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます。頂きます。……んっ、甘い！ 本当に甘い！」

「でしようっ？」

さつそく口に運ぶと、弾けるプチトマトの薄皮の中から、甘い果汁が溢れ出す。

凄い！ 私の知ってるプチトマトとは全然違う！ 思わず、エリヤ君の手からもう一粒貰っちゃった。

彼自身も味を確かめ、「良い出来だ」と小さく微笑んで。

こうして見ると、本物の農家さんに思えてくる。

地に足がついてるって、エリヤ君みたいな人を言うんだろなあ。素直に尊敬できる。

「良ければ、他にも何か食べてみますか？ イチゴとか、キュウリとか、パプリカとか」

「あはは。そんなに一杯は食べられな……パプリカ？」

「はい。パプリカも」

すっかり和やかな空気に慣れ、普通に笑い合っていたのだけれど、その中で不意に気付く。

パプリカ……？ パプリカって、あれだよね。色が赤とか黄色とかのピーマン……。

知らず、小首を傾げる私をどう勘違いしたのか、エリヤ君は。

「パプリカ、好きなんですか？ じゃあ、取って置きのをもう来ます」

「えっ。あ、あの、待って！ わ、悪いから！ そんなに気を遣わないで……！」
「遠慮しないで下さい、西住さん。絶対に気に入って貰えますから！」

引き止める私の声も聞かないで、どこかへ走って行ってしまおう。

ど、どうしよう……。私、ピーマン苦手……。というか、ハツキリ言う嫌い、なのに……。

あの独特な青臭さとか、苦味とかエグみとか、無理なのに。かなり頑張らないと食べられないのに……!?

それと言うのも子供の頃、お姉ちゃんを真似して戦車道を始めようとした私に、お母さんは急に厳しくなって。

戦車道に関わる事だけじゃなく、今まで残しても「しようがない子ね」で許してくれた。ピーマンも、全部食べきるまで許して貰えず、毎日毎日、出されたものを泣きながら食べていた。

おかげで見るのも食べるのも、名前を聞くのも大嫌いになってしまったのです。ついでに、見た目がそっくりなパプリカまで、食べた事がないまま嫌いになり。

食卓に出なかつたのか？ 徹底してピーマンでした。泣かずに食べられるようになるまで続きました。

うああ、思い出しただけで口の中がニガニガするう……。と、暗黒の子供時代に絶望している間に、エリヤ君は帰って来てしまった。その手に、とても大きなオレンジ色のパプリカを持って。

「はい、これです！」

「……わ、わあ。凄く大きいですねえ……」

「大きいですけど、大味ではないですよ？ さあ」

ニッコリ。自信ありげな笑顔で差し出されるそれを、私は両手で受け取る。

(うわあん……。ズツシリ重いい……。善意が心苦しいよう……)

流石に顔が引きつり、そのせいか、エリヤ君にも本音が伝わってしまい。

「西住さん？ ……あ。もしかして苦手、だった……？」

「う、ううん！ そんな事ないよ!？」

楽しげだった笑顔が曇り、みるみる悲しそうな顔に。

なんとも言えない罪悪感と後ろめたさ。

加えて、少しばかりの自尊心が、私にしようもない嘘を吐かせていた。

高校生にもなつてピーマン類が嫌いだなんて、恥ずかしいし……。

……もう！ こうなつたら、勢いに任せて食べちゃうしかない！

「い、頂きまひゅー！ ……はぐー！」

舌に感じるだろう苦味と、鼻に抜けるだろう青臭さを覚悟しつつ、大きなパプリカを

ひとかじり。

あああ。

やっぱり苦くて青臭……………く、ない？

「あれ？ 苦くない。というか、これも甘い？」

「……やっぱり、苦手だったんだ。ごめん、勘違いしちゃって」

「ううん。いいよ、そんなの。私も嘘ついちゃったし」

野菜つぼさはあるんだけど、ピーマンとは似ても似つかない甘み。そのギャップに驚きながら、私は尋ねてみる。

「でも、全然青臭くないんだね。私、パプリカってピーマンの色違いだと思ってたのに。こういう品種なの？」

「いいや、違うよ。でも、その認識も間違っではないかな。」

元々、ピーマンは唐辛子の変種で、パプリカはピーマンを完熟させてから収穫する物なんだ。

だから、ピーマン特有の青臭さと苦味はなくて、甘みが強いんだよ」

「そうなんだ……。私、食わず嫌いだったんだね。もったいない事しちゃってた」

思ったより小さな菌型の残るパプリカを眺め、私は呟く。

嫌いな食べ物だからって、可能な限り情報を聞き流してたのが馬鹿みたい。ううん、馬鹿だった。

こんなに美味しいんだったら、今まで避けてきたパプリカを使う料理、チャレンジしても良いかも。

ピーマンは……今後の課題、という事で。

「本当に無理してない？ 僕に気を遣ってるんじゃない？」

「ううん、違ふよ！ 本当に、エリヤ君の作った野菜は美味しいよ。ありがとう、食わず嫌いに気付けてくれて」

「……はは」

黙り込んだ私に不安を感じたのか、エリヤ君はまた表情を曇らせるけれど、嘘でない事を証明したくて、パプリカをもうひとつかじり。

すると、ようやく安心してくれたみたいで、小さく笑いながら、彼は頬をかく。

たくさん野菜に囲まれ、こうして、穏やかに午後は過ぎて行くのでした。



「これでよし、と」

水の入ったヤカンをコンロにセット。カチリと、ガス台のスイッチをひねった。沸くには少し時間が掛かるし、ただ立っているのもなんなので、私はソファベッドへ戻る。

現在時刻は夜の九時。エリヤ君との……デートを無事に切り抜け(？)、お土産に貰ってしまった野菜を使った夕ご飯も済ませて、食後のティータイムを楽しもうとしています。

やっぱり新鮮だからか、それとも固定観念を打ち崩されたからか、改めて家で食べるパプリカのサラダは、本当に美味しかった。

この調子で、ピーマンもいつかは克服できると良いんだけどなあ……。

そんな事を考えつつ、私は携帯電話を手に取り、とある人に電話をかける。

プルルル、と数回の呼び出し音。

程なく、慣れ親しんだ声が鼓膜を揺らした。

『みほか。どうした』

「あ、お姉ちゃん。今、お話ししても大丈夫？」

『ああ。問題ない』

そう。電話の相手は、私のお姉ちゃん。西住まほ。

黒森峰を逃げ出してからは一切の連絡を取ってなかったんですが、戦車道大会を終えてからは、結構な頻度でお話ししていたりします。

他にも小梅ちゃんとか、黒森峰時代のお友達とも、電話でのみだけど付き合いが復活していたり。

……逸見さんには、まだ一回も掛けられてないんだけど。なんとなく怒られそうで。

「ごめんね、いきなり電話しちゃって。なんだか急に話したくなっちゃって」

『……そうか。いや、謝る事はない。嬉しいよ』

「うん」

戦車道では、正しく未来の西住流を担うに相応しい、厳しい面を見せるお姉ちゃん。

でも、こうしてお話する時は、子供の頃からずっと変わらない、優しいお姉ちゃんです。居てくれる。

だから、そんなお姉ちゃんに甘えてしまっただけで、今はそれも良いかな？　なんて。

『近々、エキシビジョンマッチが組まれるらしいな』

「もう知ってたんだ。うん、聖グロリアーナとプラウダを相手にするの。私達と組む相手は決まってるだけだ……」

『ふむ……。強襲浸透戦術の聖グロリアーナに、重装甲・大火力のプラウダか。

上手く側面を突けるだけの機動力と、装甲を抜く大口径砲が欲しい所だが……。

いや、止めておこう。こんな時まで、戦術の話をする事はない』

「そうだね」

とはいえ、ついつい話が戦車道の方に寄ってしまう辺り、やっぱり私達、戦車道が好きみたい。

苦笑いしつつ寝転び、壁にかけてある二つの写真を見比べる。

戦車道大会で優勝した時の、みんな撮った記念写真と、黒森峰時代に撮った集合写真。

「エリカさん達は、頑張ってる?」

『ああ。みほが見学に来てからというもの、目に見えてな。みんな、次は絶対に、と意気込んでる』

「ふふ、そっかあ。でも、私達だって負けないよ?」

『勿論だ。全力でぶつかってやってくれ。そうでなくては意味がない。……所で、夏休みには帰ってくるんだらう?』

「うん。そのつもり、なんだけど……。お母さん、怒ってないかな……」

『怒る? ……ないな。お母様は、良くも悪くも結果で判断する。何も言わないかもしれないが、黒森峰を破った大洗の実力は認めているさ。もちろん、みほの事も』

「本当……?」

『うん。保証する』

「……ありがとう。お姉ちゃん」

流れでお母さんの話になり、思わず不安を声に乗せる私。

けれど、お姉ちゃんは私の不安をあっさり晴らしてくれて。

私達は姉妹だけど、私がお姉ちゃんみたいになるには、凄く時間かかっちゃいそう。

「今日は日曜だったけど、どこか出掛けたりとかしたの?」

『私か? ……ま、まあ、少し。……カラオケに』

「えっ!? お姉ちゃんがカラオケ!?!」

『なんだ。そんなに驚く事はないだろう。私だってカラオケくらい行くぞ』

「う、うん。ごめん。ただ、意外だったから。じゃあ、エリカさん達と？」
『え。……………いい、いや。ひ……………ひ、一人で』

「……………お姉ちゃん、勇気あるんだね。私だったら、お店の入り口で立ち往生しちやいそう」

『ち、違う。違うんだ。赤星にな、ストレス発散に良いと勧められてな？ 試しに行つてみたら、思いの外、居心地が良くて……………』

「あはは。どうして言い訳してるの？」

沙織さん——あ、私のチームの通信手さんなだけ。前にへりに乗せてもらった。

時々、一人でもカラオケ行つてた事あるつて話してたから、普通だと思ふよ？」

『……………そ、そうか。なら、良いんだ』

電話の向こうで、ホツと胸を撫で下ろすお姉ちゃんの姿が見える。

お姉ちゃん、戦車道では本当に凄いんだけど、女子高生としてはちよつと……………お堅いというか、遊びがない感じだったから、かなり意外。

私も一緒に行つてみたいなあ。お姉ちゃん何を歌うんだろ。

『みほの方はどうなんだ。そう言うからには、せつかくの休日を部屋で過ごした訳では

ないんだらう?』

「え? う、うん。お……お友達と。農業科のお友達と、一緒にランチしたり、栽培ブロックを見学させて貰ったりした、かな」

『農業科か。交友関係が広いな。どうやって知り合っただ?』

「へっ!!? あの、ええつと……」

『みほ?』

お姉ちゃんの方からも話が振られて、なんとなくマズい気がしたので、エリヤ君の素性を微妙に伏せて答えたんだけど、何故だかしっかり食いついてくる。

ど、どうしよう……。お姉ちゃん、ああみえて過保護な方だし、男子と二人っきりで遊びに行ったなんて知られたら、変な心配を掛けちゃうかも。

……うん。エリヤ君の性別は秘密にしておいて、絵のモデルをしてる事だけ話しておこう。

嘘はついていないし、問題ない、よね?

「じ、実は私、絵のモデルをやつて……。今日一緒に遊びに行った人、絵が凄く上手な人でね? 今はラフの——あつ」

『な、に……?』

ピーー! という部屋に鳴り響き、私は話を中断。急いでコンロの火を止めに行く。いけないいけない。すっかり話に夢中になっちゃった。

「ごめんね、お姉ちゃん。お湯を沸かしてたの忘れてた……。で、今はまだラフの段階なんだけど、凄いなだよ?」

『……………』

「お姉ちゃん?」

『あ、ああ。すまない。みほは、色々と、やっているんだ、な。はは、は……』

「……………? うん……」

とりあえず返事はしたけれど、急にお姉ちゃんの歯切れが悪くなった。もしかして、もうエリヤ君の事を勘付かれた?

うん。流石にそれはなさそうだけど……。どうしたんだろ?



妹との電話を終えた私——西住まほは、質素な寮の自室でしばらく立ち尽くした後、ベッドへ倒れこむようにして、パジャマに包まれた体を投げ出す。

ギシリ、と大きく軋んだ。

「……はぁ……」

仰向けに寝返りを打ち、天井を見上げながら溜め息を。

間違ひなく楽しかったはずのひと時を台無しにしたのは、当の妹本人が口にした言葉のせいだ。

(絵のモデル……？ しかも、寄りにも寄って、裸婦だと……!?)

みほが絵のモデルになる。そこまでは良い。みほは私と違って可愛らしいからな。

だが、だが、幾らなんでも裸婦は駄目だろう!?

あまりに衝撃で、その後の会話をほとんど覚えていない有様だ。
あの、みほが。

小さい頃から私の後を着いて回って、無邪気に慕ってくれた可愛い妹が。
時々、変なイタズラをしてお母様に怒られ、私に泣きついてきたりもした、あの子が。
誰とも知れない人物の前で、一糸纏わぬ姿を……？
にわかには信じ難い事だった。

(いや、みほが簡単に肌を晒す訳が……。しかし、みほは純朴な子だ。心ない人物に騙されて
いる可能性も捨てきれない)

姉の鼻肩目もあるだろうが、みほは本当に愛らしく育った。

これから女性としても成熟期を迎える彼女は、魅力溢れる少女だと私は思っている。
だからこそ、邪な目的で近づくと人物が現れるのも、不思議ではないだろう。

たとえば、女同士であろうと。

友人も多いようだし、怪しい人物なら周りが止めてくれるだろうが、みほの事だ。

もしかしたら、黒森峰を出た“あの時”のように思い詰め、誰にも相談せず決めてしま
った可能性もある。

モデルをしているという事を、少し言い淀んだのも気にかかる。

その人物に、誰にも言わないようお願いされている場合、守ってやれるのは私だけ。遠く熊本に居る、唯一の姉だけ。

「……探りを入れるべきか。うむ。となれば、善は急げだな」

勘違いならばそれで良し。

取り返しがつかない事態となる前に、正確な情報を集めなければならない。

思い立ったが吉日と、私は次期黒森峰戦車道チームの隊長、逸見エリカに電話をかける。

『はい！ なんの御用でしょうか、西住隊長！』

「夜分に済まない。緊急事態だ、エリカ。大洗に斥候を送り込む。信の置ける人物を集めてくれ」

『……へっ？ 大洗に？ 今更？』

即座に電話を取ってくれるエリカを頼もしく思いながら、私は頭の中で計画を立て始

めていた。

待っている、みほ。

お姉ちゃんが、絶対に守ってやるから……！

第三話 「その言い方は酷いと思います」

私こと、黒森峰女学院に在籍する高校二年生、赤星 小梅は、今日ほど自分の不幸を呪った事はありませんでした。

「はあ……。大洗まで来て、何やってるんだらう……。？」

取って置ききの白いワンピースと、日差し対策の通気性が良いカーデイガン。

合わせて白い帽子まで被り、気分はまさしく避暑地へのお出掛け……。なんです。

今現在、私の居る場所は海の上。正確に言うと、茨城県の大洗に帰港した学園艦、県立大洗女子学園の上。

しかも、ちよつと疲れた風を装い、道路脇のガードレールへと腰掛けている状態です。

（本当に来るのかなあ。むしろ、来てくれない方が嬉しいけど……）

もちろん、こんな事をしている理由はありません。……ある人物の、待ち伏せです。

「彼」がこの道を通った際、道に迷ったふりをしつつ、声をかける。

というのが、今の私に課せられた極秘任務。

でもでも、彼氏いない歴〓年齢な私には荷が重いですよお……。

「あの……。大丈夫ですか？」

「へっ!？」

重責にうな垂れていると、いきなり声をかけられた。

驚いて顔を上げれば、そこには任務の標的である男の人——肩掛けバッグを持つエリヤさんが居た。

う、嘘っ。なんで私の方が声かけられてるのっ!？」

「突然すみません。先程からずっとそうしているので、体調が優れないんじゃないかと

……」

「あ、いえいえ、大丈夫です！ えっと、少し、自分の運のなさを嘆いていたというか、

なんと言いますか……」

心配そうなエリヤさんに、私はあたふたながら答える。

運が悪い？ ううん。こつちから声をかける勇気を考えたら、むしろ運は良いんだと思うけど、ここからどう話を続けられ……。

うわあ〜ん！ モヤシつ子にコミュ力なんてないですつてばあああつ！

「……よく分かりませんが、問題ないなら良かった。では、僕はこれで。失礼します」

心の中で泣き言を叫んでいると、その間に彼は歩き去ろうと背を向けてしまう。ううううう、こうなったら覚悟を決めるしか……！

「あああ、あのつ！」

「はい？」

意を決して、私はエリヤさんに話しかける。

彼は人の良さそうな笑みを浮かべ、こちらを振り返って。

……罪悪感が凄いけど、やるしかない！

「ぐ、ぐめんなさいっ!!」

「は？　なんで謝——る？」

ガチャリ。

首をかしげるエリヤさんの手元から、重々しい音が発せられた。

それは何故かと言うと、私が彼に手錠をかけたからです。

「え、ちよ、何を——」

「よし確保お！」

「——ぶおっ!」

驚いているエリヤさんの頭に、今度は背後から、パンツアージジャケット姿のエリカさん——逸見副隊長が布袋を被せる。

何がなんだか分からない。

そんな風に慌てふためく彼を、私と副隊長は連携してロープで拘束。いわゆる簀巻き

にっしとく。

「ふう……。なんとかなったわね。急いで運び出すわよ。ほら直下、なわした脚持ちなさい」

「了解で……。わつと、あ、暴れないで下さいよおー！」

「むお、ちよ、何これ、誰か助けてえー!？」

「あああ、本当にごめんなさい、ごめんなさいいいい……」

更には、同じくパンツアージュジャケットを着る、黒森峰のヤークトパンターの車長、直下 おもい 想ちゃんまで呼び、三人がかりでエリヤさんをグロースーメルセデスへと積み込む。

これにて、西住隊長から言いつけられたエリヤさん拉致——もとい、ご招待作戦は完了です。

あとは隊長の待つファミレスへ向かうだけ……。なんですが。

「な、なあ、あれって……」

「どう見ても拉致、だよなあ……。？ 通報しとく……。？」

「いや、そつちじゃなくてあの車！ メルセデス・パンツの770グロースーメルセデス！ ヤ

ベエ超カッケー！」

「そつちかよオイ!? 確かにカッコイイけど!」

私達の姿は、思いつきり通行人の注目を浴びているのでした。

人目についてちゃいけないはずなのに、なんでこんな目立つ車を選んだんですか隊長ー!?



犯罪の片棒を担がされてから、約十数分後。

私と副隊長、想ちちゃん、エリヤさんを乗せた車は、一時的に学園艦を下船。大洗の街にあるファミレスの駐車場に停まっていました。

最初はモガモガと抵抗していたエリヤさんでしたが、陸に上がる頃にはめつきり大人しくなっていました、罪悪感を煽られます。

ロープと手錠、頭に被せた袋を外すと、顔も真っ青。本当に怖がっているみたい。そ

りやそうだよね……。

「西住隊長！ 例の男を拉致——いえ、連行しました！」

「ああ、ご苦勞」

車から降りると、仁王立ちしていた西住隊長に副隊長が駆け寄ります。

まるで飼い主さんを見つけたワンちゃんみたい……。というか、やっぱり拉致したという自覚はあるんですね……。

ちなみにですけど、あの場は「自主制作映画の撮影中でーす！」と言って乗り切りました。

乗り切れちゃったのが不思議というか怖いです。

「さて。唐突な無礼を許して貰いたい。どうしても直接話したかったものでな」

「……………」

副隊長を労ってから、西住隊長は彼の前に進み出ます。

鋭い視線に晒されたせいなのか、隊長よりもずっと大きな体は、微かに震えているよ

うにも。

気の弱い人なのかな？ 怖がらせて本当にごめんなさい……。

「もう気づいていると思うが、自己紹介をしよう。私の名は西住まほ。西住みほの、姉だ」

凛々しく静かに、西住隊長が名乗ります。

といつても、隊長とみほさんはかなり似てるし、みほさんと一緒に居る時間の長いエリヤさんになら、すぐ分かったはず……なんですけど。

未だに青い顔のエリヤさんは、隊長を見て微動だにしませんでした。どうしたんだろう？

「ちよつと、なんとか言いなさいよ！ 西住隊長に失礼でしょ!」

「……もう、無理……」

「はあ？ なに言ってるのか聞こえな——きや!」

隊長を敬愛してやまない副隊長は、それが気に食わなかったようでもエリヤさんに詰め

寄ります。

が、頬をリスのように膨らませたエリヤさんは、小さく何かを呟き、副隊長の肩を掴み……。

直後、副隊長を悲劇が襲うのでした。

「すみません、もう、限界……。うっ」

「えっ。ちよ、待って、離しなさい、離して、止め——」

「オロロオロオロオロオロ」

「——ぎゃあああああっ!! いやあああああっ!!」

(ただいま、ゲロルシユタイナー中です。少々お待ち下さい)

「つく、うつ、ひつく……」

「ほ、ホントにすみません……。僕は、重度の下船病でして……」

「ウルサイわね！ 話しかけるんじゃないわよっ!? うううっ……っ」

副隊長の涙目ながらの怒声に、少しだけ顔色の良くなったエリヤさんは、ひたすら謝りまっています。

私達は諸事情によって再び車の中に戻り、現在、西住隊長の運転で大洗の街をドライブしています。

流石に、公道は戦車の免許じゃ走れませんので。十八歳なのも隊長だけですし。

「あく……。なんだ、こちらこそ、本当に済まなかった」

「いえ……。僕自身、普段は気にせず生活してますし、治療もしてませんから……。うつぶ」

「ひっ!?!」

助手席でえずくエリヤさんに、ゲロルシユタイナーを思い出した副隊長が身を竦ませます。

当然ですが、まともに「アレ」を浴びてしまったパンツアージャケットは使い物にならず、副隊長は念のために持ってきていたジャージを着てます。ファミレスのトイレを借りました。

下船病とは、いわゆる船酔いの地上バージョン。

長く船上生活をしていた人が発症してしまうようで、かなり辛いみたい……。

さっきの諸事情というのは、とりあえず乗り物に乗っていれば気持ち悪くなくなる、との発言を受けて、という訳です。

「改めて自己紹介する。西住まほだ。みほが世話になっっているようだな」

「いえ。西住さ——みほ、さんには、僕の方が助けられていて……」

「そうか。時に、みほは絵のモデルを引き受けているようだが？」

「あ、はい。本人からお聞きになったんですね。戦車道のポスターの件」

「……ん？ ポスター？」

「はい。……え？」

運転席と助手席の二人は、後部座席の私達を置いて世間話をしてはいますが、なんだかすれ違いがあつたみたい？

でも、そうなんだ。みほさん、ポスターのモデルやつてたんだあ。

なんにも知らされないまま、命令通りに拉致——じゃない、連れて来ちやつたけど、そういう繋がりがあつたんですね。

完成したら一枚欲しいな。

「す、すまない。みほからは裸婦と聞いたんだが……」

「……？ はい、ラフの段階ですが、もう何枚か描き上げていますよ。ご覧になりますか？」

「段階……。み、見せてもらおう」

エリヤさんは、肩掛けバッグから一冊のスケッチブックを取り出し、赤信号で止まった時に開いてみせる。

「これは……。なるほど、確かに」

「うわっ、スツゴイ上手だー」

「本当……。色んな表情が描いてある」

ついでに想ちちゃんと私も覗き込んでみると、白い紙の上で、様々な角度から描かれたみほさんが居た。

遠くを見つめている横顔や、楽しそうにお喋りでもしていそうな顔。輝くような笑顔でボコられクマのキーホルダーを眺めている顔などなど、まるで写真みたい。

思わずスケッチブックを受け取って、しげしげと鑑賞してしまいます。

「凝り性なもので、まだ満足のいく物が描けていないんですが、みほさんが根気よく付き合ってくくださるので、助かっています」

「そうだったのか……。うん、素晴らしい腕前だ。素直に感服したよ」

エリヤさんの腕前を褒めつつ、西住隊長の目もチラチラ後ろに。

じっくり見たい気持ちは分かりますが、運転中ですよ隊長。

後でまた見せてもらいましょう？

「……あ、あの。ところで、なんとお呼びすれば？」

「ん？ まほ、で構わない。君の事は……」

「エリヤでお願いします。もう、こっちの呼ばれ方の方に慣れてしまつて」

「そうか。では、エリヤ君と」

「はい。まほさん」

穏やかに微笑み合う、エリヤさんと西住隊長。

戦車道を離れている時は、隊長も普通に笑ってくれるんですよ。

それが綺麗で優しくて、みんな、このギャップにやられちゃうんです。

かく言う私や、副隊長もそうなんですけど。やっぱり綺麗だなあ……。

と、私が羨望の眼差しを向けていたら、想ちゃんがツンツン肘でつついてきて。

（ねえねえ小梅っ、これつてさあ、もしかすると、もしかするんじゃない？）

（え？ それつて、彼と西住隊長が？ まさかあ）

（いやいや、あり得くはないでしょ！ 隊長が男子にあんな顔するの、見た事ないもん！）

（それは……。まあ、確かに……）

耳打ちされて振り返ってみると、確かに隊長が男の人と笑い合う所って、初めて見たかも。

だけど、そもそも黒森峰は女子高で、男子との関わる機会自体が少ないし、どっちかっていうと愛想を良くしているだけじゃ……？

あ。でも隊長、異性に媚びを売るタイプとは正反対の性格か。うくん、どうなんだろう。とにかく、初対面にしては互いの印象は良いみたい。

「それで……。こんな風に拉——つ、連れ出されたのは、まほさんから見て、僕に問題があったから、なんでしょうか……？」
「うっ」

……と思っていたのは、私だけのようでした。

笑顔から一転。エリヤさんは不安そうな表情を浮かべ、何故か隊長は焦ったように言葉に詰まり……。ルームミラー越しにも、目が泳いでいるのが分かります。

もしかして、狼狽えてる？

嘘……。まほさんのだったら何度も見た事あるけど、隊長が狼狽える姿なんて初めて

見た……。

「あ、あのお……う？」

「問題があった、というのは少し違う。君のひととなりを、私の眼で確かめたかったんだ。方法が手荒になってしまったのは……。とにかく、謝る。申し訳ない」

様子を伺うエリヤさんに、隊長はひたすら謝ります。

声や表情からも、その真摯な姿勢が伝わってくる……んですが、そこはかたなく誤魔化そうとしてるように感じるのは、なんででしょうか。

……なんだか、真相を知ったら私の中の隊長像が崩れそうな気がするし、深く突っ込まないで……。

「僕は、そのっ！ やましい気持ちで、みほさんを描いている訳じゃなくて。会長に依頼されたというのもありますが、純粹に彼女を……」

「……それはつまり、みほに女性としての魅力を一切感じていないと？」

「んなっ、めっ、滅相もないっ！ とと、とても……。か、可愛らしい、女の子だと、思います……」

「はっ。下心丸出しじゃない。やだやだ、これだから男は」
「う……」

必死に言葉を重ねるエリヤさんですが、隊長の指摘に顔を赤くして、副隊長はそれを見て不機嫌そうに鼻を鳴らしました。

久しぶりに喋ったと思ったら、副隊長つてば……。

「副隊長。ゲロルシユタイナーされて怒ってるのは分かりますけど、その言い方は酷いと思います」

「そうですねー。つていうか、思春期の男子からの下心が100%無しなんて、逆に傷つくんじゃない?」

「し、知らないわよそんなこと! つていうかどつちの味方なのよアンタ達は!」

「強いて言うなら……。みほさん?」

「だよねー」

「こ、この……っ! いいい、いつもいつもそうやってええええ……っ!」

ちよつと可哀想になり、私と想ちやんでエリヤさんをフォローすると、副隊長はます

ます不機嫌に。

別に副隊長を信頼してないって訳じゃありませんが、もしも黒森峰にみほさんが残っていたら、絶対、みほさんにリーダーシップを取って欲しいと考える私です。つていうか、そんなに暴れるとジャージのチャックが降りちやいますよ？

ゲロルシユタイナーのせいで今ノーブラなんですから、大人しくしましょうよ……。

「みほは、優しい子だ。優し過ぎるくらいに。姉としては心配になってしまふ所なんだ」
「……少し、分かる気がします。誰かに嫌な思いをさせるくらいなら、自分が嫌でも我慢しちゃうような……。そんな人ですよね」

「ああ、そうなんだ。分かってくれるか」

騒ぐ私達を他所に、隊長とエリヤさんは、みほさん談議に花を咲かせています。

うんうん。そうなんですよお。みほさん優しくて、基本、自分よりも他の人を優先しちゃうから……。エリヤさん、よく分かってる！

「だから……と言つても、失礼なのに変わりはないが。愚かな姉が安心するために、みほの側にいる君の事を聞かせて欲しい。良いだろうか……？」

「……………」

「もちろん、答えにくい事は答えなくて構わない。みほと君の関係をどうこうするつもりも、権利も私にはないからな」

どうせなら私も参加したいとこですけど、不意に隊長の声は真剣味を帯び、間に入る事を躊躇わせました。

エリヤさんからしてみれば、急にそんなこと言われても……というのが正直な反応だと思います。ただポスターを描いてと頼まれてるだけですもんね。

だけど、隊長がみほさんを心配する気持ちは本物で、私達も同意したからこそ、ここに居るんです。お願いだから、誠実な答えを返して欲しい。

いつの間にか静かになった後部座席から、そんな気持ちを込めてエリヤさんの横顔を見つめていると……。

「分かりました。可能な限り、お話しさせて頂きます」

「……ありがとう」

表情を引き締めて、エリヤさんは頷いてくれました。

やっぱり良い人なんだなあ……。まあ、拉致されても怒らない時点で分かってましたけど。

普通だったら即通報、即逮捕ですもん。前科つかなくて良かったです。

「君は、実家である『あの学園艦』を離れ、仕送りも受けずに、農業科の成果だけで生計を立てているそうだな」

「えっ!? の、農業科のだけでって……。ホントですかっ?」

「はい。そうですよ。色々と設備を投資してもらってるんですが、その賃貸料も含めて」
「うっそお……。そんな人見た事ないよ……」

「とんだNOUMINね」

隊長からの情報に驚き、思わず本人に確認してしまう私。対するエリヤさんは、然も当然と頷いて。

ええっと、寮の家賃とか学費とか、あとは生活費に雑費、その他必要経費……。うう、考えただけで頭が痛くなりそう。

それを全部、授業の成果だけで補うなんて、全国大会初出場のチームが優勝しちゃうくらいにトンでもない。

「想ちゃんも驚いてるし、副隊長は呆れてる。大洗の人材って規格外揃いなのか？ 魔窟？」

「御実家は、かなり裕福だと聞く。その庇護から離れて生活しているのは、何か理由があるんだろうか」

「めんたいパークを横目に通り過ぎながら、隊長の質問は続く。」

「チラッと聞いた話では、エリヤさんの実家は某学園艦。かなり裕福なものも領けるけど、よほどの理由がない限り、より良い環境から離れる人も居ないでしょう。」

「予想に違わず、彼は少し思い詰めたように問い返す。」

「……そこまで知っているのなら、僕が実家に居た頃、何をやってたかも……？」
「すまない。調べさせてもらった」

「構いませんよ。いくらでも調べようはあったでしょうから」

「どうやら、隊長はすでにエリヤさんの“何か”を知っているみたい。」

「あの学園艦を出て、わざわざ大洗女子まで来なければならなかった理由……。」

かなり気になったけど、二人の邪魔になるのは嫌だし、大人しくしよう。

と、私は考えたんですが、想ちゃんは違ったようで、右手を上げつつ話に首をつっこむ。

「あのお……。ちなみに何をやってたのか、私達にも教えてもらって良いですか？」

「ちよつと、やめなよ想ちゃん。野次馬じゃないんだから……」

「気にしないで下さい、赤星さん。大した事じゃありませんし」

「あ、すみませ……ん？ あれ？ 私、まだ名前……？」

好奇心旺盛な想ちゃんを止める私に、エリヤさんが微笑みかける。

でも変だ。私、まだ名前を名乗っていないのに。

不思議に思っていると、彼の方からネタバラしをしてくれました。

「さつき、呼ばれているのが微かに聞こえたので。赤星 小梅さん、ですよね？ みほさ

んから話を聞いた事があります」

「え？ み、みほさんから？」

「はい。去年の準決勝での事や、今年の決勝戦前の事も。」

あの時、赤星さんが声をかけてくれたから。

“ありがとう” って言ってくれたから、戦車道を続けて良かったって思えた。とても嬉しそうに、そう言っていましたよ」

「……みほさん……」

じいーん、と。胸にこみ上げるものがあり、言葉に詰まってしまいます。

第六十三回戦車道全国高校生大会、決勝戦開始前の挨拶が終わった直後。

大洗の仲間の元へ戻ろうとするみほさんを、私は呼び止めました。

本当は、去年の事を謝るつもりだったんですが、テンパった私は何故かお礼を言ってしまうって……。

だけど、みほさんがそんな風に思ってくれたなら、結果オーライ？

あの時、勇気を振り絞って良かった……。

「……ちよつと！ さつきから話が逸れてるんだけど？ 小梅の話じゃなくてアンタ

の話だったでしょうに！」

「あ、すみません。つい……」

「副隊長……。せっかく感動的な雰囲気になってたんだから、空気読みましょうよ」

「な、なによつ、そつちが本題でしょ!? 私は隊長の求めているものを察して……」
「すまない、エリカ。少し待ってくれ……。つすん」

「隊長お!!」

何が面白くないのか、いつも以上につっけんどんな副隊長でしたが、顔を背け、静かに鼻をすする隊長の姿に愕然としています。

多分、みほさんのエピソードが涙腺に來たんだと思います。隊長、みほさんが関わつてたりする話や、動物系の感動物語に超絶弱いので。

ポーカーフェイスも得意だから、本当に親しい付き合いのある人しか知りませんけど。

あれ? そう考えると、もしかして隊長、エリヤさんにも気を許してたり? うくん、どうなんだろ……? 」

「……ふう。さて。話を戻そう」

「は、はあ」

（あ。無かった事にする気だ）

（無かった事にする気だねー）

(茶々入れるんじゃないわよっ)

とか考えている内に、隊長は涙腺へのダメージから復活したようで。キリツと前方の道路を見つめ、話の軌道修正に努めます。

私と想ちやんが思わず小声でツツコミ。副隊長に叱られました。

これもいつもの事だったりするんですけど、もちろんエリヤさんは知らないのです。ちよつと戸惑っているようです。

しかし、とりあえず話を続けようと思ったらしく、後部座席を振り返ります。

「ええと……直下、さん？ 騎士道、って御存知ですか」

「あー、はいはい。あれですよ、精神的なアレじゃなくて、男子の選択科目にある」

「ええ。その騎士道です」

「でも確か、日本での競技人口はかなり少なかったような……。あ、ごめんなさいっ」

「いいえ、本当の事ですから。日本ではやつぱり、蛇道や侍道、忍道の方に人気がありますし」

うつかり口をついた失言に、頭を下げる想ちやん。エリヤさんは苦笑いで手を振りま

す。

性別や学校によって違いが出る必修選択科目ですが、男子に多く採用される科目は、刀を振りまわせる侍道、手裏剣を投げられる忍道、銃を撃てる蛇道が多いらしいです。ちなみに、侍道でも物凄く古い銃を使ったり、現代風忍と称してハッカーを育成したり、蛇道では高周波ブレードも使ったりするみたいです。

ですが騎士道においては、古式ゆかしい甲冑や武器、とりわけ馬が重要視されるようで、どうしても競技人数は少なくなってしまうそう。

以上、「高校、必修選択、男子、人気」のワードでザッと調べた情報でした。ふむふむ。という事は、エリヤさんってやつぱりお金持ちなんだあ……。

「彼は、日本騎士道界の未来を背負うと言われるほどの、一騎打ち——ジヨストの名手だったらしい」

「ジヨスト？」

「甲冑を身につけて馬に乗り、すれ違い様にランスなどを打ち込む競技ですよ。

装備や馬を揃えるのにお金が掛かりますし、怪我也多くて。持て囃されたのは、単にやる人が少なかっただけです」

「ランスって槍ですよな？ 馬に乗って、槍を……。か、格好良いかも……」

隊長が更なる情報を追加すると、また想ちやんが首を傾げます。そして、エリヤさんが詳しく解説。今度は目を輝かせる想ちやんです。

私もまたまた携帯で調べてみましたが、色んな情報が目白押しでした。

例えば、近代騎士道の甲冑はセラミックス製が多く、中にはキチン質を使った物もあること。

馬上槍であるランスには柔らかめの形状記憶合金が使われて、怪我を未然に防ぐのと同時に、衝撃で曲がっても再利用できるようになっていること。

あとは……。あれ、この記事って……？

「だが、君はある時期を境にして、騎士道競技から離れてしまった。

かなり話題にもなったようだな。顔写真こそないが、ネットに記事が残っていた」

丁度、隊長の話が佳境に入った所で、私も件の記事を発見しました。

日本騎士道の期待の星、謎の引退！

気になる見出しをタイトルに、様々な推測を書き連ね、合わせて経歴を紹介した上で、今後を惜しむ声が寄せられています。

小学生関東大会優勝、全国大会中学生の部でも優勝、十三歳にしてオリンピック馬術競技の選手選考会までをもトップで飾り……。

だというのに、数年前から表舞台への露出が一切なくなってしまう、あらゆる騎士道競技からその名を消してしまった。

なんて言うか、人生を快進撃してる人だったんですね。エリヤさんって。

でも、文字として踊る順風満帆さが、尚のこと疑問を深めます。

どうして騎士道を捨ててまで、大洗女子で農耕に精を出していたのか。

エリヤさんは、流れていく車外の景色を眺めながら、吐き捨てるように呟きます。

「僕は、逃げたんです。

自分の馬鹿さ加減が嫌になって。

……みほさんとは、大違いですね。情けない」

憤り。自蔑。あと……後悔？

今までのエリヤさんからは想像もつかない、冷たい表情。

けど、みほさんの名前を出す時には、今まで通りの、柔らかい微笑みを浮かべていて。

そのコントラストが、心に落ちる影の濃さを物語っているようでした。

車内に重い沈黙が広がります。

流石の副隊長や想ちゃんも、この空気では口を挟めずにいましたが、しかし、隊長だけは。

「先程も言ったが、話したくないのなら無理に話さなくていい。

ただ、一つだけ言わせて貰おう。

そんな風に引き合いに出されても、みほは喜ばないぞ」

あくまで冷静に、ただ事実だけを言っただけを窘めます。

うん。確かにそう。

自分自身を辱めるような言い方、みほさんは絶対に好きじゃない。「そんな言い方は良くないです！」って、怒ってくれそうです。

エリヤさんもそれを思い出してくれたのか、今度は恥ずかしそうに笑って。

「そう、ですね。すみません、卑屈になっていました」

「いや。分かってくれたなら十分だ」

隊長とエリヤさん。

交わす言葉は少なめですが、妙な安定感があります。

まだ出会って間もないのに、信頼関係を築いているような。

なんだか不思議……。

「今はまだ、全てを話すだけの勇氣を持ってません。

でも、いつか自分の中でけじめをつけられたら……。

その時は、みほさんや、まほさんにも聞いてもらうかも知れませんが」

「そうか。……ちなみにだが、みほも一度は逃げ出した。

様々な出来事が重なり、新しい友人達に支えられて、ようやく乗り越えられたんだ。

あまり一人で気負わない方が良い」

「……はい。ありがとうございます」

エリヤさんは素直に頷き、重い雰囲気霧散していききました。

詳しい事は分からないけど、彼にも色々抱えているものがあって、隊長は優しく見守ってあげて。

大人の余裕、なのかな？　いつか私も、隊長みたいな先輩になれば……。とか、夢

のまた夢だよね……。

でもでも、隊長が素敵な先輩である事に変わりではなくて、静かに見守っていた想ちやんが、嬉しそうに耳打ちしてきます。

(やっぱり、西住隊長って良い先輩だよね)

(うん、本当に。西住隊長だから、私も戦車道を辞めずに済んだようなものだし)

あの試合の後、私はみほさんに、みんなに迷惑をかけてしまった事が辛くて、戦車道をやめようとも考えました。

だけど、西住隊長がそれを止めてくれたんです。

指揮を放り出したみほも悪いし、みほが居なくなっただけで動けなくなっただけのメンバーも悪かった。

気が咎めるといふなら、試合の中で挽回しろ。でないと、一生後悔し続けるかも知れないぞ。

本当は、みほさんを慰めたり、褒めたりしたかったはずなのに、こんな風に言ってくれて。

だからこそ、私は戦車道を続けたいと思いました。

隊長に恩返しするために。そして、今度はみほさんを助けられるように、と。

まあ、そんな機会もないまま、みほさんは大洗へ行っちゃって、あの決勝戦でも特に活躍できず負けちゃった訳ですが……。

来年には隊長だつて卒業してしまうし、直接に恩を返せないのは残念ですが、代わりに、今後の黒森峰を盛り上げていく事で返そうと、私は心に誓っています。

……なのに……。

(何よあの男……っ！ 私の隊長とあつという間に打ち解けてええええ……っ！)

(……来年から大丈夫かなあ、小梅え)

(私達が頑張ろう……)

次期隊長のポジションに居るはずの副隊長は、微笑み合うエリヤさんと隊長を見て、「キイイイ！」と爪を噛んでいました。

ううう、先が思いやられる……。



「今日は、ここまでにしようか」

不意に声を掛けられて、ボウッと窓の外を見ていた私の思考は、現実へと引き戻される。

声のした方に視線を向けると、イーゼルの前……。こちらから見れば奥側で、エリヤ君が鉛筆を置くところでした。

「どう?..」

「こんな感じ、かな」

椅子から立ち上がり、エリヤ君の肩越しにスケッチブックを覗き込むと、もはや見慣れてしまった、モノトーンの私が居ます。

難しい顔をしているのは、間近に迫ったエキシビジョンマッチでの戦略を考えているから。

最初の頃は色々と指定を受けていたけれど、今では特に何も決めず、適当な世間話を

したり、考え事をしている私を、エリヤ君が自由に描く……という感じですよ。

「あとは、どんなポスターにしたいのか、イメージを擦り合わせて、また描いて……」

「その繰り返し？」

「うん。西住さんには、何かこうしたいっていう希望はある？」

「え、私？ うーん、特に……」

ポスターのイメージ、かあ。

あまり具体的に考えた事がなくて、私は悩み始める。

構図とかポーズとか、色んな要素があるのは知っているけど、ご存知の通り、悪い意味の画伯なので……。

いつそのこと、エリヤ君に丸投げしてしまいたい部分もありますが、流石にそれは無責任だし。

「エリヤ君の方は、どう？ どんな風にすれば良いポスターになるか、アイディアとか」
「……正直、僕もイメージが固まってないんだ。これじゃまだ、西住さんの一部分しか描けてない気がする」

困ったあげく、同じ質問で返してしまう私に、彼も困ったような表情を浮かべた。けっこう意外、かも。

エリヤ君ってなんでも出来ちゃうみたいだし、あんまり悩んだりしない、天才肌な人だと思ってたけど、そんな事ないんだね。

ちよつと親近感。でも、悩みのレベルは違うかな？ 天才ゆえの悩みというか。

「ごめん、まだまだ完成には時間が掛かりそうだよ……」

「ううん。気にしないで？ 私ならいくらでも付き合うから！」

「……ありがとう」

珍しく弱気なエリヤ君を元気付けたくて、私は大きく笑ってみせる。

すると、彼も嬉しそうに微笑んで、美術室は和やかな雰囲気になりました。

最初は緊張するばかりだったけど、今ではもう、落ち着いて色んな事を考えられる、貴重な時間。

許されるなら、もう少しだけこの時間が続いて欲しいと、私はそんな事を思ってしまったのでした。

大洗女子に、かつてない危機が迫っているだなんて、考えもしないまま。

最終話 「独断と偏見で公平に決めさせて貰います」

「ふう……」

重たいダンボール箱をフロアリングに置き、私は一息つく。

中に入っているのは、色々な生活用品。学園艦から引越しをするためにまとめた荷物。

といつても、私が今いるここも学園艦だったりします。

大学選抜チームとの試合を終え、無事に県立大洗女子学園の廃艦を撤回させた私達は、勝手知ったる学生寮へと戻って来たのでした。

「まさか半年もしない内に、二回も大洗に引越しするなんて、想像してなかったなあ」

黒森峰から大洗女子へ引越して、大洗女子から一時的に旧上岡小学校へ引越させられて、また大洗女子へ戻って来て。

物凄く目まぐるしい日々だったけど、大洗女子を襲ったかかってない危機すら、振り返ってみれば、いい思い出。

新しくお友達もできたし、本当に万々歳かも。

「帰ってこられて良かった……」

ダンボールだらけの部屋を見回し、ソファベットの腰掛けて、心からそう思う。

この大洗女子で、仲間と一緒に、まだ戦車道を続けたかったから。

つい半年前の私は、戦車道なんてしたくないって考えてたのに。

少しおかしくて、一人で笑っちゃう。

「あ、そうだ」

そんな時、ふとある事を思い出した。

廃校になるかも知れない危機の中、仕方なく放置する事になってしまった、戦車道ポスターの事を。

……というよりは、エリヤ君の事を、かな。

あまりにも唐突で、話をする間もなく学園艦を降りちゃったから、長い間お話ししてないや……。

携帯の電話番号は知ってるけど、どうしよう？

今はちようど、お昼前。

廃校は撤回したし、慌ただしい状況からは解放されたけど、掛けたら迷惑にならないかな。でも、キチンと報告だっつてほしいし……。

「……ええい、掛けちゃえー！」

少し悩んだけど、私は思い切って掛けてみる事にした。

登録してあるエリヤ君の名前を選択して、そのまましばらく。発信音が続くにつれ、ちよつとドキドキしてしまう私でした。

……出て、くれるかな。



「大学選抜との試合、本当に勝って良かったですよ。ダーズリン様」

現在時刻、午前十一時。空調の効いた談話室にて。

英国式に則り、新しいモーニングテイーを淹れながら、私——聖グロリアーナ女学院の生徒であるオレンジペコは、テーブルでそれを待つ人達に話しかけます。

優雅な佇まいで頷いてくれるのは、美しい金髪を持つ二人でした。

「そうね。ただ負けるつもりはなかったけれど、厳しい戦いだったのは確か。いい結果を残せて、良かったわ」

「とても良い経験になりました。彼女達と一緒に居ると、退屈しません」

後ろでシニヨンに編み込んでいるのが、我がチームの隊長であり、チャールズ歩兵戦車M.K. VIIの車長を務めるダーズリン様。

ウェービーなロングストレートにしているのが、同じくチャールズに乗り、砲手を務めるアツサムさん。

ちなみに、私は装填手を担当させて頂いています。

「今後、大洗はどうなるでしょうか？」

「そうねえ……。少なくとも、大人の事情で学生生活に横槍を入れられる事は、なくなるんじゃないかしら。あのお役人も懲りたでしょう」

「来年には倍率が凄い事になっていそうですね」

大洗女子学園は、戦車道大会を初出場で優勝する快挙で、もともと日本全国に名を馳せていました。

それに加えて、大学選抜チームを撃破。今度こそ廃校の危機を脱した彼女達の名声は、確固たるものとして轟いています。

同じチームの一員として戦った身としては、誇らしいばかりです。

戦いを終えた今、住民の皆さんも戻って来ていて、学園艦はかつての賑わいを取り戻し始めているとか。

これからは大洗での戦車道も盛んになるでしょうし、今後が楽しみです。

「ところで、ルクリリ？」

「……………」

お茶を配り終わると、ダーズリン様は、私と同じように側で控えていたもう一人——ルクリリさんへ声を掛けます。

茶色の長い髪を、一本の三つ編みに纏めているのが特徴ですね。

でも、普段ならすぐに返事をする彼女は、なぜかボウつと天井を見上げるだけ。

アッサムさんが眉をひそめ、更に呼び掛けました。

「ルクリリ、ルクリリ！ 呼んでいるわよー！」

「……はっ!? あ、はい、なんでしようっ?」

よほど驚いたのか、ルクリリさんは慌てて背筋を正します。

どうしたんでしょう? 先ほど、私がお渡しした一杯目のモーニングティーにも、口をつけていないみたいですよ。

ダーズリン様の蘊蓄にうんざりする事はよくありましたけど、こんな反応は珍しいです。

「随分と上の空だったわね」

「紅茶が冷めてしまいましたね……。淹れ直しますか？」

「ええと、あの……。すみません！ 私、今日はこの辺りで失礼してよろしいでしょうか！？」

本当に、どうしたんでしょう。

アツサムさんにも、私の申し出にも答えず、ルクリリさんは酷く焦っている様子でした。

少し心配になりましたが、それを見たダーズリン様は、何か心当たりがあったらしく……。

「そういえば、今日だったわね。彼が帰ってくるのは」

「はい、そうなんです！ 私、どうしても行かなくては……！」

ダーズリン様の言葉に、それはもう凄い勢いで頷くルクリリさん。

二人の間では話が進んでいるようですが、その発言内容に、私とアツサムさんは驚愕してしまいました。

「か、彼って、ルクリリさん、恋人が居たんですかあ!？」

「ははは初耳です事よっ!？」

「ペコ、落ち着いて。アッサム、言葉遣いが微妙におかしいわ」

「あの、恋人ではないんですけど……。とても、大切な人なので……」

「分かってるわよ。行っておあげなさいな。彼もきつと喜ぶでしょう」

「……はい！ では、失礼致します！」

色めき立つ私達を他所に、ダージリン様は快くルクリリさんを送り出し、満面の笑みが談話室を出て行きました。

なんとというか、ルンルン？ 今にもスキップしそうな。

本当に恋人とかじゃないんでしょうか？

どうにも不思議で、思わずアッサムさんと顔を見合わせていたのですが、ルクリリさんが退出してしばらくすると、ダージリン様もやおら立ち上がり。

「さて。私達も行くわよ。二人共、準備なさい」

「えっ？ の、覗きに行くって事ですか、ダージリン様!？」

「それは流石に不謹慎では……」

「なに言ってるの、興味津々な癖に。ローズヒップ」

「お呼びでございますかあ！ ダージリン様っ!!」

「出掛けるわよ。貴方も来る？」

「もつちろんでございますわ！ ダージリン様の行く所なら、どこへなりともお供する所存でございます！」

好奇心と後ろめたさ。

その両方で戸惑う私達をまた置いて、ダージリン様はズンズン先に。

どこからともなく第五の人物——赤毛のセミロング少女、ローズヒップさんまで現れ、収集がつかないまま話は進んでしまいます。

これって、私も行くこと確定ですよね……。

っていうか、行かないとダージリン様が何をしてくすやら……。

またアツサムさんと顔を見合わせ、私達は仕方なく、ダージリン様の後を追うのでした。



「とういわけで、私達は港にやって来たのだけれど」

「ダーズリン様。誰に向けて喋ってるんですか……う？」

「あらあら、無粋な事は言いつこなしよオホホホ」

口元に手を添え、上品ぶって笑うダーズリン様。

一応はツツコミましたが、割といつもの事なので、本気でどうこうしようとは思っていません。

それがダーズリン様のチャームポイントでもありますし。

私達の現在地は、聖グロリアーナ女学院の上甲板から艦内を下り、学園艦の舷側中層部に設けられたタラップから、少し艦内へ入った所……の、物陰です。

一般の人々が乗り降りをしているので、周囲はとても賑わっており、私達の姿も紛れています。

そんな中、追跡目標であるルクリリさんは、学園艦へと乗り込む方々を出迎える人混みに立っていて、誰かを待ち焦がれているみたいですね。

「でも、ダーズリン様？ お出かけは大変嬉しいんですが、わたくし、なんで呼ばれたんでしょう？ あれつてルクリリさんですよね？」

「いい質問ね、ローズヒップ。答えは簡単、大勢の方が楽しいからよ」

「なるほどっ！ 確かに皆さんとのお出掛けは、とつてもウキウキしますわ！ 流石ですダーズリン様っ!!」

煙に巻くようなダーズリン様の返答を、素直すぎるローズヒップさんはそのまま受け取ります。

純粹というか、純朴といいいますか、とにかく正直な人なんです。

だからこそ、ダーズリン様に弄ばれ……もとい、玩具にされ……でもなく、からかわれてしまうんですけど。

「それはともかく、遅いですね。ルクリリさんの大切な人」

「このタイミングでの帰郷、というのも珍しいような。学生ではないんでしょうか？」

「いいえ。学生よ、アッサム。私達の一つ下、ペコにとつては一つ上ね」

「という事は、ルクリリさんと同い年なんですかねっ！ ……つて大切な人お!？」

ルクリリさんに恋人——もがっ!？」

『しーっ!』

唐突に叫ぶローズヒップさんの口を、私とアツサムさんが左右両方から塞ぎました。驚くのは無理もないんですけど、ここでバレたら気まずいので。

エネルギーシユなローズヒップさんには難しいかも知れませんが、大人しくして下さいねー。

と、そんな事をしている間に待ち人が来たのか、ルクリリさんが走り出す所を見つけ、私はその後ろ姿を皆さんに示します。

「あ、ルクリリさんが走って行きますよっ」

「どうやら来たみたいですよわね」

「マジでございますかっ。これは目が離せませんですよあ!!」

「……にしても、意外ね。ローズヒップが恋愛沙汰に興味を示すなんて」

「そうですね? ダージン様。わたくし、普通に結婚願望ありますですよ? 早く姉

達みたいに幸せな家庭を築いて、最低でも三人は子供が欲しいですよ!」

「最低でも三人……」

「やけに具体的ですよ……」

「あら、いい事じゃない。将来設計がしっかりしているのは」

物陰に隠れたまま、アツサムさん、ダーズリン様、ローズヒップさん、私の順に、だんご四姉妹となつて様子を伺います。

結婚ですかあ……。私はまだ十六歳ですし、まだまだ先の話でしょうけど、法的には結婚できる年齢なんですよ。

そういう事を考える相手がいれば、もうちよつと現実感を覚えるんでしょうか？

まあ、今はそんな事より、ルクリリさんの大切な人の方が気になります。見逃さないようにしましょう！

……あ！ それらしい男の人がルクリリさんに手を振つて……。

「ただい——」

「エリヤ、お帰りなさいっ!!」

「ま、っ!？」

そのまま押し倒されました!?

えっと、ルクリリさんが男の人の——エリヤさん？ の胸に、勢いよく飛び込んだせ

いなんです、あれ、絶対に後頭部を床に打ちつけてますよね。
痛そう……。

「ああ、エリヤ。本当に久しぶり！ 元気だった？ 風邪とかひかなかった？ どうして連絡してくれなかったの？ メールすらほとんど返してくれなかったし！」

「ご、ごめ……でも、まずはどいて……そして離れて……」

「嫌っ。せつかく会えたんだから、エリヤ分を補給するの！」

ルクリリさんはうっとり、涙目になったエリヤさん（仮）の胸に頬ずりをしていきます。

仲睦まじい様子に、周囲の人達も微笑ましく見守っていました。

時々、舌打ちしながら恨めしそうに通り過ぎる人も居ましたが、その人達の事は忘れましょう。うん。

「だ、ダーズリンさん！ どうせココソコソと面白おかしく覗いてるんでしよう!? 助けて下さいよー！」

「あら。呼ばれてしまったわ。仕方ないし、行きましようか」

『えっ?』

ルクリリさんからの求愛行動に耐えかねたのか、エリヤさん（仮）は何故かダージリン様の名前を呼びました。

どうして彼がダージリン様を？

疑問に思ったのも束の間、ダージリン様は素知らぬ顔で物陰から出て行きます。

「お久しぶりですわね、エリヤさん」

「どうも、ダージリンさん……」

「ルクリリ。弟さんが困ってるわよ？ そろそろ起きなさい」

「えええ……。ダージリン様のお言いつけでも、それは……」

「ルクリリ?」

「はあい……」

ダージリン様に窘められ、ルクリリさんはようやくエリヤさん（仮）の上から移動します。

そして、エリヤさん（仮）は差し出されたダージリン様の手を取り、立ち上がりまし

た。

「どう？ 実家に戻られた気分は」

「……あまり、いい気分じゃありません。強制されたようなものですし」

「そう……。でも、ルクリリは喜んでいるわ。それだけでは駄目なのかしら」

「いえ、そういう訳では、ないですけど」

ダージリン様が続いて、私達もゾロゾロと出ていくのですが、話を聞いた限りでは、どうやらお知り合い？ みたいですね。

……あ。もしかして、彼の名前って？

「あのお、エリヤってもしかして、紅茶のヌワラエリヤですか？」

「ええ。流石はオレンジペコ、鋭いわね」

「ですが、ダージリン？ 彼は我が校の生徒では……」

「問題ないでしょう。聖グロリアーナの出身なのは確かだし、それに、この名前を使おうとするメンバーも居ないでしょうしね。響きの」

ヌワラエリヤというのは、紅茶の銘柄の一つ。

主にスリランカで生産される高級品で、爽やかな味と香りが素晴らしい茶葉なんです。

でも、確かにソウルネームとしては使い辛いかも……。

ヌワラ、という前半部分が、乙女的にちよつと。

「改めて紹介するわ。彼の名前はエリヤ。コバンザメみたいに引っ付いているルクリリの、双子の弟さんよ」

「どうも……。姉さん、腕離して……。重い……」

「女の子に対して重いなんて言っちゃダメでしょ！ 姉さん怒るからね！」

「なるほど、そういう御関係だったんですね。初めまして、オレンジペコです」

「アツサムですわ」

「ローズヒップと申します！ お目にかかれて光栄ですわ！」

「初めまして。姉がお世話になっています」

ダーズリン様が場を仕切り直し、ちゃんとした挨拶を交わしてみれば、エリヤさんはその名に相応しい、爽やかな笑顔で微笑みます。

男女の双子という事は、二卵性双生児ですか。

確かに髪の色合いとか、眼とかはソックリさんですね。整った顔立ちをされているように思います。

「ねえ、エリヤ？ どうして大洗の廃校が決まった時、すぐにグロリアーナへ帰って来なかったの？

というか、なんで今まで一度も帰って来なかったのっ!? 練習試合の時だって、忙し

いからの一言だけで全然会ってくれなかったしっ!!」

「ほ、本当に忙しかつたんだよ……。学費とかを捻出するには、常に成果を出していきやいけなかったし……」

「そもそも、それがおかしいの！ どうしてお父様を頼らないの？ 貴方の学費くらい、お父様なら」

「……………」

あ、あれ？

さつきまでは和やかだった雰囲気、あつという間に重苦しく……。

何か事情があるんでしょうか。エリヤさんは御両親から直接の援助を受けていない

ようです。

初対面の私達が口を挟むのも憚られ、沈黙を保っていると、ダーズリン様が二人の間へ進み出ました。

「ルクリリ。立ち話もなんだし、一度、校舎へ戻らない？ 色々と準備していたんでしよう？」

「あ、そうでした！ あのね、パイを焼いてあるのよ。エリヤの好きなミートパイ。いい茶葉も用意してあるし、だから……」

お二人も、空気が重いのを自覚していたんでしよう。

ダーズリン様が話題を変えると、ルクリリさんもそれに追従し、弟さんを問いたただすのではなく、歓迎したいのだと伝えます。

すると、エリヤさんの沈痛な面持ちは、嬉しそうな笑顔に変わりました。

「うん。行くよ。姉さんのミートパイ、楽しみだ」

「……本当？」

「嘘ついてどうするのさ。本当だよ」

「良かった……。あとね、一緒に映画見たり、ヴァイオリン弾いたり……。あ、一緒にお風呂も入りましょう?」

「うん。うん。映画もヴァイオリンも良いけど、最後のだけは断固拒否します」

「ええっ、なんでっ!?!」

「なんでじゃないよっ! 高校生にもなって男女の姉弟が一緒にお風呂とか、おかしいでしょう!」

「でも、だって、中学生になるまでは一緒に入ってたのに!」

「姉さんが 無理 矢 理 入って来たからね! 僕からは一度も入ろうって言っていないけどねっ!」

きっかけさえ掴めば、お二人は仲良く掛け合いを始めます。

それ自体は良い事だと思っんですけど、なんと言いますか……。

目の前に居るルクリリさんと、私の知るルクリリさんとのギャップが激しくて、困惑してしまいます。

「あの……。ルクリリさんって、あんなキャラでしたっけ……?」

「……。彼女はね、普段は大人しくて、ちよつと抜けた所がチャームポイントな淑女だけ

ど、弟さんへの愛情表現が少し過剰なのよ……」

「少しってレベルじゃない気がしますわが」

「え、駄目なんで御座いますかっ!? わたくし、年の離れた弟をよくお風呂に入れてるのですけれど!？」

「いえ、その場合はまあ、許容範囲といえますか……」

「年の近い男兄弟と、という意味ですわ。ローズヒップ」

「あ。なるほど。確かにそれは……」

遠い目をするダージリン様。

ツツコミを入れるアツサムさんに、動揺するローズヒップさん。

まだまだ困惑し続けている私。

どうにも奇妙な展開ですが、そんな私達の間には、唐突な携帯の着信音が水を差します。

「ごめん。電話。姉さん離れて」

「ええ。別に良いじゃない、それとも聞かれると困るの?」

「うん困るからさっさと離れてお願い」

「ぶ〜」

ルクリリさんを邪険に追い払い、エリヤさんが遠ざかりました。

立聞きするなんて失礼なので、私達はそのまま彼と距離を取ります。

……ルクリリさんを尾け回すのは失礼じゃないのか？

それは、あれです。ダーズリン様の発案なので、ノーカウントという事で。

そもそも、ダーズリン様は英国淑女然とした佇まいは完璧なのに、お茶目が過ぎると
いうか、イタズラ好きなのが玉に瑕なんです。

もう少し、試合中の冷静沈着さが日常でも見えれば、心の底から尊敬できるんですけど。
ど。

でも、完璧なダーズリン様というのもダーズリン様らしくないというか……。ブツブ
ツブツ……。

携帯電話を片手に少女達から離れ、少年は通話ボタンを押す。

発信者の確認を忘れたが、姉から離れる良いタイミングだったので、感謝しつつ話し始める。

「はい、もしもし」

『あ、エリヤ君？ えと、みほです。こ、こんにちは』

「……あつ！ ああ、えつと、こんにちは」

『ごめんなさい。もしかして忙しかった、ですか？』

「いやいや、違うんだよ！ ちよつと、確認もせずにとつちやつたから。……久しぶり、だね」

『……うん。久しぶり』

耳に聞こえ始めたのは、予想外に心地よい声。

西住みほ。

少年にとつても貴重な異性の友人であり、連絡したいと思っていた相手だった。

「そつちはもう落ち着いた？ ごめんね。試合、見に行けなくて。かなり遅れちゃったけど、おめでどう」

『ありがとう。これでもう学園艦、なくならないよ』

「うん。本当に凄いや。自分がやった訳でもないのに、なんだか誇らしいくらいだ」

『そう言つて貰えると、私も嬉しい。みんな、本気で頑張つてくれたから』

みほの活躍は、少年の耳にも届いていた。

セミプロの域にある大学選抜チームを、戦車道を始めて一年足らずの高校生が破つたのだから、それも当然だ。

友人として祝福したかったのは勿論のこと、こうして言葉をかわしていると、意外なほどに心が安らぐのを感じた。

「……なんでだろう。電話で話してるだけなのに、ホッとする」

『え？』

「大洗を出なくちゃならなくなった時も、仮の住まいを探してる時も、ずっと慌ただしくて。話もしないまま、ここまで来ちゃったからさ。」

僕が何も出来ないうちに全部が終わつてしまつて、少し……その……。悔しかったというか、寂しかった……ああいや、何を言ってるんだか」

『……………』

少年は、まとまらない気持ちをもそのまま語り、みほが黙ってそれを聞く。

ホツとすると言っておきながら、言葉を重ねていくうち、どこか気恥ずかしい気持ちも生まれ、照れくささに頭を掻きむしる。

沈黙がしばらく続き、今度はみほが、誤魔化すようにして問いかけた。

『エリヤ君、今はどこに?』

「……実家。ギリギリまで逃げ回ってたから、本当についてき来たばかりなんだけど」

『そっか……。大洗には、いつ帰ってくる予定なの?』

「……あ……」

『エリヤ君?』

何気ない……。大した事のない質問だったはずなのに、少年は口をつぐんでしまう。

先程とは違う、息苦しい沈黙。

不安を煽るような、呼吸音。

「僕は……帰れないかも、知れない」

『……え』

やがて、少年はみほにとって意外な、否定的な答えを返す。
帰れない。

大洗へ。

何故？

そう問いたげな、沈黙。

「エリヤく。まだく？」

「っ!? ご、ごめん、切るね。今度はこつちから掛けるから！」

『あつ、え、エリヤく——』

シヨックから立ち直り、みほがまた問いかけようとした瞬間、横合いから別の女性の声が入り、少年は反射的に通話を終えてしまう。

やってしまったと、少年は切ってから後悔し、苛立ち紛れに声の主——自らの姉を注意する。

「姉さんっ！ 電話中に背後から忍び寄るとか、マナー違反！」

「だってえ、エリヤつたら凄く楽しそうにお話してるんだもの。それに……女の匂いがしたし」

「ととと、友達だってば！ ほら、もう済んだから、行こう？」

思っていた以上に嫉妬深くなっていた姉に戦慄しながら、少年はその手を取って、ダーズリン達の所へ戻っていく。

みほさんには悪い事をしちゃったけど、今日の夜にでも、また電話して謝ろう。

そう思い、後回しにしてみました。

この選択が、後の騒動の原因になるとは、全く予想だにできなかったのだ。



「みっぽりーん！ おっはよーってどうしたの、その顔っ!?!」

「……はえ？」

久しぶりに投稿した学校。

自分の机に着いていたら、背後から聞き慣れた声が聞こえてきた。振り返ると、どうしてだか驚いた顔をする沙織さんと華さんが立っていました。

「あ、沙織さん。華さんも、おはよう。学校で会うのは久しぶりだね」

「う、うん。そうだね。そうなんだけど、それよりも！ 本当にどうしちゃったの、目から光が消えてるよ!?!」

「……私、どこか変?」

「変だよお！ まるで、生徒会に戦車道を強制された時みたいな顔してるもん！ ね、華っ」

「はい。何か、お辛い事でもあったんですか？ よければ話して下さい。わたくし達が力になりますから」

二人はこちらへ駆け寄り、心配そうに手を取ってくれて。

そんな顔をさせてしまったのが心苦しくて、私は笑顔を作って答えます。

「ありがとう。でも、特に何も無いよ。朝ご飯もしっかり食べたし。ただ、最近少し眠れなくて……」

「寝不足？ 気になる事でも……あ！ もしかして、大学選抜との試合を見た誰かから、ラブレター貰っちゃったとかっ！」

「まあ、そうなんですか？」

「ううん、全然違う……。というか、ラブレターなんて一度も貰った事ない……」

「あれ？ そうなんだ。私は何通も貰った事あるよ？ 全部ライカからだけど！」

「わたくしも、若さんから一度くらいは貰ってみたいですね」

沙織さんが自慢気に、華さんは羨ましそうに、ラブレターへの思いを語る。

ラブレターかあ。私もちよつとだけ羨ましいかも。

いつかは貰えたりするのかな。

私を好きだつて言ってくれる人、現れるのかな……。

「つて、ごめん。話が逸れちゃった。それで、何か悩み事なの？ 私達で力になれる？」

「……別に、悩んでいる訳じゃ、ないんだけど。少し、気になるっていうか」

惚気っぷりは相変わらずだけど、キッチンと心配もしてくれる沙織さん。その気遣いが嬉しくて、私はつい、気掛かりな事を思い出してしまう。

「少し前、部屋に荷物を戻し終えて一息ついた時、ふと思い立って、エリヤ君に電話してみたの」

「まあ！ あの奥手なみほさんが！」

「きゃー！ こういうのを待ってたのよー！ で？ で？ どんな話したのっ？」

「えっと、実家に帰ってるみたいだね。普通に大学選抜との試合の事とか、おめでどうって言ってくれたり、とか。……でも……」

途中まで、私は自然に笑顔を浮かべて、エリヤ君との電話の事を話します。

けど、やっぱり途中で胸がモヤモヤするとうるか、嫌な気持ちが出てしまつて。

どうしてこんな気持ちになるんだろう。

どうしてこんなに、心がザワザワするんだろうと、不思議に思いながら言葉を続ける。

「途中で、エリヤ君を呼ぶ女の人の声が後ろから聞こえてきて、そのまま誤魔化すみたい
に切られちゃつて……」

「え。何それ!？」

「それに、エリヤ君の方からまたかけるって言ったのに、二三日経っても、全然かけ来てくれなくて……」

「そんな……。エリヤさん、酷いです!」

あの時は大丈夫だって言ってくれたけど、本当は忙しかったのかも知れない。久しぶりの里帰りなんだし、他を後回しにするのは普通のこと。

そう考える私が居る。

でも同時に、こう考える私も居るんです。

どうして連絡をくれないの？

あの時間こえてきた女の人は？

どこかで聞いた声のような気がするのになぜ？

こんなの、子供じみたワガママだって、自分でも分かるのに。

どうして胸が苦しくなるのか、全く分かりませんでした。

黒森峰を去った時とは少し違う、不安な気持ち。

こんなのは、初めてでした。

「みぼりん。乗り込もう！」

「……へっ」

一人で落ち込んでみると、唐突に、沙織さんが宣言しました。

え？ え？ 乗り込む？

乗り込むってまさか……エリヤ君の、実家に!?

「エリヤ君の態度は褒められたもんじゃないけど、まだ事実関係は確認してないんでしょ？ だったらなし崩しみたいにしないで、ハッキリさせるべきだよ！」

「で、でも私達、まだ別にそういう関係じゃないし……」

「“まだ”って着けたって事は、いつかはそういう関係になりたいと無意識に思ってる証拠！ 任せといて、ライカに聞いてみるから！」

「ええええ!? あ、あのっ、沙織さんっ!？」

「安心して下さい、みほさん。こういう時の沙織さんは頼りになりますから」

「華さんも止めてよお!？」

あれよあれよという間に、やる気になった沙織さんと華さんが話を進めていく。

き、気持ちにはありがたいんだけど、もうちよつと私のことも考えて欲しいかなあ!?
心の準備をさせて欲しいっていうか、あの、それ以前に私、エリヤ君と恋人になりた
い、訳じゃ……。

えつと……。ないような、ない訳じゃないような……?。

「あ、ライカ? ……うん。うん、ありがと。私も愛してる。でね? ちよつと聞きたい
事があつて……。

分校にさ、エリヤ君って呼ばれてる男子居るでしょ? うん、実家つてどこだか知っ
てる? ……ええつ!」

モゴモゴしている私を無視するかのよう、沙織さんはまた軽く惚気つつ、ライカ君
と話す。

あれかな。「いつも素敵な声ですね。愛してます!」とか言ってもらったのかな。簡
単に予想できちゃう。

でも、どうしてそんなに驚いてるんだろう? 会話の流れからすると、エリヤ君の実
家は聞き出せたみたいだけ……?。

「みぼりん、どうしよう……?」

「ど、どうかしたの? 沙織さん……」

「何か問題でも?」

「エリヤ君の実家……。聖グロなんだって」

「え。せ、聖グロリアーナっ!」

「まあ」

微妙に冷や汗をかく沙織さんが告げたのは、吃驚するのも頷ける、意外な名称でした。大洗女子が、戦車道の試合でまだ勝てたことのない強豪校、聖グロリアーナ女学院。まさか、聖グロリアーナがエリヤ君の実家だったなんて……。

ほ、本当にどうしよう……?」



「という訳で、遠路はるばる聖グロリアーナに乗り込んできた、我等あんこうチーム！」

果たして、これから先にどのような困難が待ち受けているのでありましょうか!?
こ
うご期待であります!」

「優花里さん、撮影するのは構わないんだけど、声は控えめに……」

「あつ、申し訳ありません、西住殿……!」

カメラで自撮り&実況をする優花里さんに、私は思わずツツコミました。

時は過ぎ去り、エリヤ君の実家が判明してから数日後。

優花里さんの言った通り、私達は週末を利用し、大洗女子の何倍も大きな学園艦、聖
グロリアーナ女学院に居ます。しかも、なぜだかあんこうチーム全員で。

無理やり連れて来られたらしい麻子さんなんか、まぶたを擦って眠そうな顔してま
す。

「なぜ私まで連れて来られたんだ……? せつかくの休みなのに。まだ昼過ぎだとい
うのに」

「みぽりんの問題はチームの問題でしょ! それにどうせ昼まで寝てるだけなんだか
ら、別にいいじゃない、麻子」

「失礼だな沙織。最近の私は忙しいんだ」

「何かお約束があつたんですか？　だったら申し訳ない事をしてしまいました……」

「いや、約束はしてないが、先輩の家に行つてイチャイチャする予定だった」

「あ、あらあら」

「最近の麻子さんつて、色んな意味で沙織さんに似てきたよね……」

「みほりん。それつて褒めてる？　褒めてるんだよね？　傷つきたくないから褒められ

てると思つちやうよ私」

「女の子らしくなつたという意味でなら、褒め言葉なのではないでしょうか……？」

みんな、思い思いの私服に身を包んで、お喋りをしつつ、聖グロリアーナ街並みを歩きます。

英国の支援を受けているだけあつて、レンガ造りの建物が整然と並び、本当に違う国に来たみたい。

だけど、住人の人達は普通に日本人だし、お婆さんがもんぺを着て手押車を押してたりもするので、微妙に違和感が……。

そんな中、めい一杯にお洒落した沙織さんが、先頭に立つてこちらを振り向く。

「で、これからどうする？　来たは良いけど、土地勘なんてこれっぽっちもないし。ダー

「ジリンさんとかに案内をお願いしてみよっか？」

「だ、ダメだよ沙織さん！ 私達が勝手に来ただけなんだし、迷惑は掛けられないよ……」

別に、他校の生徒が他の学園艦に来たって、特に問題にはならない……あ、戦車道とかの大会期間中は別だけど。最悪、捕まっちゃうし。

とにかく、今回のお出かけは理由が理由なので、あまり人に知られたくない。だから、出来るだけ隠密行動に徹したいというか、許されるなら今すぐ帰りたいたいです。

「お任せ下さい、西住殿！ こんな事もあろうかと、ダンチョー殿に秘密兵器を御用意して頂きました！ なんとお……GPS信号追跡装置であります！」

「ゆかりん。法的に大丈夫なの、それ」

「大丈夫じゃないと思いますわ……」

「乙女の純情のピンチなんです！ お巡りさんも分かってくれますよ！ 多分！

それに、悪用できないようにエリヤ殿の携帯の信号しか拾えないようになってますし、いざ詳しく調べられてもオモチャにしか見えない隠密仕様です！」

「無駄に凝ってるな」

「才能の無駄遣いだよ……」

帰りたいたいだけだなあ、という私の気持ちを別方向から察したようで、優花里さんは得意げに謎の端末を取り出しました。

ダンチョー君は本当に器用だよ……。その器用さが今だけは恨めしいよ……。

そんなこんなで、エリヤ君の反応をキャッチするため、グロリアーナの街を巡る私達。途中、銘菓グロリアーナ煎餅とか、グロリアばななとか、鳩サブリアーナを買って食べたり。

これだけなら小旅行しているみたいで、気分転換にぴったりかも。妙なネーミングのお菓子は気になるけど。いいのかな、版権的に。

「つていうかき、ゆかりんはどうなのよ、最近」

「はい？ 沙織殿、どうとは？」

「んもう、トボけちゃって。ダンチョー君との関係はどうなのつてハ・ナ・シ♪でしょー。」

「フゴツプ!?!」

「あらあら、大丈夫ですか？」

「また奇妙な鳴き声を……」

食べ歩いてしばらく。

ふと、沙織さんが優花里さんへ話題を振り、優花里さんはジュースを吹き出した。うわあ、見事なカルピスの霧が。

自分の恋愛事情に突っ込まれるとは予想だにしていなかったみたいで、優花里さん、汚れた口元も拭わずに誤魔化し始めました。

「ぶべべべ、別に、何もありませんよっ!? ええ、報告すべき事は、特段……」

「えー。ゆかりん嘘ついてないー? さおりんリーダーが「何かあった」って反応してるんだけどなー?」

「ううう……っ。……ほ、他の誰にも言わないって、約束して貰えますか……?」
「モチのロンだよ! で? で?」

恋愛に関しての嗅覚は異様に鋭い沙織さん。

したり顔で優花里さんの周囲をグルグル回り、指でつんつん攻撃を。

やがて、耐えきれなくなった優花里さんは、顔を真っ赤にして俯きます。

「……ました……」

「え？ なに、ゆかりん。聞こえない」

「で、ですからっ。……正式に、お付き合いする事に、なりました……」

「まあまあまあ！」

「キヤー！ やったじゃない、ゆかりん！」

「ほう。ついにか」

「お、おめでとう。優花里さん」

優花里さんとダンチョー君が、正式な恋人同士に。

場の空気は一転して祝賀ムードになり、私も戸惑いつつ祝福します。

い、いつの間にそんな事に……。

おめでたいのは確かだけど、なんだろう、この置いてけぼり感……。

「いやー、そつかそつかー。ゆかりんとダンチョー君も、とうとうゴールインかあー。ん

ふふふ、ゞ感想は？」

「も、黙秘権を行使したいでありますう！」

「却下します。私のファーストキスを晒しものにした罪、忘れたとは言わせないわ！」
「うぐつ。そ、それを言われると……」

「あの、沙織さん？ その罪を問われるべきなのは、麻子さんなのでは……？」

「細かい事は言いつこなし！ 洗いざらい話してもらっちゃうんだから！」

「細かいと思うんだが、興味はある。聞かせてもらおう」

一躍、主役の座に躍り出た優花里さんを、私を除くみんなが弄り回しています。

可哀想な気もするけど、私もちよつとだけ気になるし、ここは様子を見ようつと。

……わくわく。

「本当に、報告するような事はなにもないんですよ……。特に恋人らしい事とかしてませんし。ただ……」

『ただ？』

「なんで皆さんハモるんですかっ？」

……ただ、戦車の事を考えているときに、ふとダンチョー殿の顔が浮かんだり。

戦車の蘊蓄をどんな風に話そうかとか、どんな話なら楽しんでもらえるかとか、考える……ように……

あああ！ 私は何を言ってるんですかあああつ!？」

「やだもー、ゆかりんつたら照れない照れない♪」

「初々しいですわあ」

「うん。少し前の私だったら、全く理解できなかったんだろうな……」

癖つ毛をモシヤモシヤかき回しながら、その場に座り込んでしまう優花里さん。

その姿は、華さんが言う通り、とつても初々しくて、同性の私から見ても可愛く思えました。

好きな人が出来ると、女の子って可愛くなるのかな？

沙織さんも、華さんも、麻子さんも、優花里さんも。

みんな元から可愛かったのに、恋人が出来てから、もつともつと魅力的になった気がする。

……なんだか、寂しいな。私だけ、あんまり変わってない。

「わ、私のことなんかよりも皆さん、反応ありましたよ！ こっちです！」

「あ。逃げた。まあいつか、後で根掘り葉掘りすればいいんだもんね。」

今はみほりんとエリヤ君の問題が優先！ みんな、パンツアーフオー！」

「沙織。誰も戦車には乗ってないぞ」

「えへへ、一回言ってみたかったんだも〜ん」

一人、馬鹿みたいな疎外感に気落ちしていると、優花里さんが急に立ち上がり、とある方向を指差して歩き出した。

これ以上の追求は可哀想かな、と。無言のまま意見を一致させた私達は、本来の目的であるエリヤ君探しに戻ります。

ダンチョー君お手製の追跡装置は精度が高かったみたいで、程なく、見知った後ろ姿を、噴水のある公園で見つけるのですが……。

「対象を発見。ですが、これは……」

木陰にあるベンチに腰掛けるエリヤ君の隣には、彼と同一年くらいの女の子が、居ました。

茶色の長い髪を一本のお下げ髪にして、まだ日差しに夏を感じる時期なのに、ベツタリとエリヤ君にもたれ掛かる、ワンピース姿の、見覚えのある女の子が。

あの人は確か、聖グロリアーナでマチルダⅡの車長をしていた、ルクリリさんとかい

う……。

あ、そっか。あの聞き覚えのある声は、ルクリリさんの声だったんだ。

そっか。そっか。

そうなんだ。

そっか。

「あああつ、西住殿の目からハイライトが消えてますう!？」

「なんなのよアレ!? 完つ壁に浮気じゃない! 文句言つてやるんだからっ!!」

「待つて下さい、沙織さん。こういう場合は、まず証拠固めをしてからでないと。言い逃れられては面倒です」

「私はその冷静さが怖いぞ……」

小さな藪に隠れながら、優花里さんと麻子さんが怯えたり、今にも飛び出して行きそうな沙織さんを、華さんが抑えたり。

周囲で色んな反応が起きているけれど、なんだか頭が働かないや……。

足元がフワフワしているような、グラグラしているような、不思議な感覚のせい？

どうしよう。気分、悪いかも……。

ところが、次の瞬間。スカートのポケットに入れていた私の携帯が、着信音を鳴らした。

ハツとなつて、とりあえず誰からの電話かを確認すると、なんとエリヤ君の名前が！慌てて遠くのベンチを確認すると、エリヤ君は一人で、携帯電話を耳に当てています。ルクリリさんは、何かをしに行つた？

よく分からないけど、今確かなのは、この電話には出た方が良くも知れない、ということ。

みんなに秘密にするのも悪いと思つたので、私は音をスピーカーにしてから、通話ボタンを押しました。

「……も、もしもし……？」

『あ、みほさん。ごめん！ 連絡するのが遅くなつて！』

開口一番、エリヤ君は謝ってくれた。

ベンチに居る本人も頭を下げていて、本気で謝っているように聞こえました。

まだ暗い気持ちは晴れないけど、謝ってはくれたし、必要以上に怒つたら変に思われるから。

だから私は、本当の気持ちを隠して、その場を取り繕う。

「う、ううん。気にしてないから。忙しかったんだよね?」

『そうなんだけど、放置しちゃったのは事実だから……。本当にごめん。久しぶりに帰ったからか、姉さんが張り切っちゃって、家の中じゃベツタリで……』

「え? お姉さん?」

『うん。本当に四六時中張り付かれちゃったから、離れた時に電話を掛けようにも、深夜だったから、充電が切れてたりで、どうにも間が……』

……取り繕う、のですが。

申し訳なさそうなエリヤ君の発言に、思わずオウム返ししてしまいました。

お姉、さん? そ、そういうえば前に、そんな話を聞いたような?

え? エリヤ君って、ルクリリさんの弟さんだったの!?

(ちよつとみぽりん! お姉さんって本当なの?)

(本当だと、思う。前に双子のお姉さんが居るって聞いた事あるから)

(つまり、また早合点していた訳だな)

(なら一安心、でしようか?)

(良かったですね、西住殿!)

携帯に声を拾われないよう、手で口を覆って話し合う私達。

確かに、早合点しちやつてたのかも。ううん、しちやつてたんだ。

久しぶりに会えた弟さん相手なら、あのくつつき具合も……………な、納得はちよつとしづらいけど、気持ちは分かるような、分からないような……………?

ううう、なんだかスツキリしないよおー!

『みほさん? もしかして、忙しかったかな。かけ直そうか?』

「えっ!? ううんっ、大丈夫っ。まだお話できるから!」

『そ、そっか。なら良かった』

「うん…………。あ、あの、それじゃあ、あの時、帰れないって言ったのは…………?」

『それは…………まあ、姉さんの事もあるんだけど。他にも、理由が…………あるような、ないような…………』

もどかしい気持ちを抱えたまま、ふと思い出した疑問をぶつけてみると、今度はエリ

ヤ君が、齒切れの悪い返事を。

どうしたんだろう。そう思つて次の言葉を待っていると、とても、とても真剣な声が返されました。

『このままじゃ、ダメだと思つたんだ。僕が大洗に居たのは……逃げるためだったから』
「逃げる?」

エリヤ君らしくない、ネガティブな言葉。

その真意を測ることができず、私は問いかけてみようとするけれど。

『みほさんの絵を満足に描ききれないのは、きっと僕が過去を直視できていないから。

だから、今まで向き合つてこなかったものと向き合えば、何かが変わると思つて……』
「描ききれないつて、そんな。今でも凄く上手に描けてるのに」

『ありがとう。でも、上手なだけじゃダメなんだ。僕自身が嫌なんだよ。

だつてあの絵じゃ、僕が見てるみほさんの半分も描けてない。

僕が見てるみほさんは、もっと、ずっと魅力的なのに!』

「えっ」

『え？ ……あ、!? ち、違——くはないんですけど、あの、いや、あのっ』

いきなり過ぎる褒め言葉に、タイミングを失ってしまいました。

エリヤ君が見ている、私。

今まで描いて貰った絵だけでも、十分以上に可愛く描いてくれてる気がするのに。

彼の眼に映る私は、どんな顔をしてるのかな……。

といいますか、沙織さん達がすぐ側で、物凄く良い顔でこつちを見てるのが、とっても恥ずかしいっ！

『と、とにかくそういう訳でして！ 今はまだ帰るわけにはいかなと言いますか！』

「そ、そうなんだ。えと、が、頑張つてね！ 私、応援してる、から……」

『うん……』

意外な展開に頭がついて行かず、私とエリヤ君は口ごもってしまふ。

色々と話したことがあったのに、全部忘れちゃった。

ううん、忘れちゃったというより、どうでも良くなっちゃった、のかも。

エリヤ君への誤解は解けたし、理由はよく分からないけど、帰れない事情があるのも

話してもらえたし。

これなら、わざわざ聖グロリアーナまで来なくても――

「ちよつと貴方達つ、そんな所に隠れて何してるの!」

「ひゃあつ!」

『ん? みほさんつ? つていうか今の声(ピツ)』

背後からの厳しい声に、私は、私達は飛び上がる。

ビツクリして思わず電話切っちゃった……。

でも、それは正解だったかも知れません。

何故なら、背後から声を掛けてきたのは、両手にゼラートを持つ、エリヤ君の双子のお姉さん――ルクリリさんだったのです。

「……あら。不審者かと思つたら、あんこうチームの。本当に何をしているの? 観光?」

「あああああの、そそそそうなんですつ」

「は、廃校も完全撤回されたし、い、いい機会かなあーつて。ね、華つ?」

「そ、そうなんです。いわゆる、その、御礼参りですわっ」

「ある意味では間違ってるないが、やはり少し不適切だと思——むぐうつ」

「冷泉殿っ」

「……んん？　なんだか怪しい……」

「い、いえ、本当なんで——あっ」

慌てふためき、私に続いて適当な言い訳を繰り返すみんな。

しかし、やっぱり怪しかったのか、ルクリリさんの目付きは段々と険しくなり、次の瞬間、また私の携帯が着信音を鳴らしました。

確認すると、発信者はエリヤ君。心配して掛け直してくれてるんだ。その優しさが今は困ります。

だって、携帯に気を取られた隙に、ルクリリさんがずっと私へ顔を寄せて、画面に映る名前を見られてしまったから。

「……ふうん。そう。そうだったんだ」

「な、なんですか……？」

「まさか貴方が、〃私のエリヤ〃のストーカーだったなんてねえ。西住さん？」

「……!?　ち、違いますっ、私はっ」

「あらそう?　なら、この状況をどう説明するつもりかしら」

「あ……う……それは……」

ストーリーカー呼ばわりされて、流石に怒ろうと思ったけど、ぐうの音も出ません。

エリヤ君に黙って、私が知らないはずの実家に乗り込んでるんだから、そう勘違いされても仕方がないし……。

でも、誤解されたままなのは困るっ。どうにかして弁明しなきゃ……!

「とにかく、これ以上エリヤに付きまとうのは止めてもらえる?　どこの馬の骨とも分からない人に、大切なエリヤを任せられませんから」

「ぐぬぬう……。みぼりんの気持ちも知らないでえ……。つ。麻子、なんか言い返して!」
「人任せか。まあ、ツツコミを入れるとしたら、顔も名前も家柄も分かっているのに、馬の骨はないだろうな」

「あ。確かにそうですわ」

「おおお、冷静なツツコミ。流石です冷泉殿っ」

「ちよつと!　外野は黙っててちよつと!」

あああ、言い訳を考えているうちに、みんなとルクリリさんが険悪なムードに。本当にどうにかしなきゃ、このままじゃマズいよお……！

どうして試合中みたいに機転が利かないの私い!?

「姉さん、何を怒鳴って………みほさん?」

「ふえ!? えええ、エリヤ君!」

更には横合いから、携帯片手にエリヤ君まで登場しました。

まずルクリリさんを見て、それから私の方を見て、眼をパチクリ。

「どうしてみほさんがここに? それに、あんこうチームの皆さんまで……。っていうか、なんで姉さんはみほさん達を睨んでるのさ」

「私じゃなくて、西住さんに聞いてみたらどう? どうして睨まれてるのかって」

「えっ。えっと、えっと、あの、ううう、ええとお……」

どうしよう、どうしよう、どうしようっ。

どう答えれば良いの？ この状況で、これ以上の誤解を避けるためには……。とりあえず、当たり障りがないように謝っておいて、それから話をしなきゃ！

「え……エリヤ君を、返して下さいっ!!」

……あれ。私、頭を下げながら何を言ってるの？

え、違う、こんなこと言うつもりじゃなかったのに！

「みぼりん言ったー!」

「この状況下で宣戦布告とは、凄いです西住殿!」

「女の戦いの予感がいたしますわあ〜」

「眼が輝いてるぞ、華」

やめて、囃し立てないで、できればフォローしてみんな!?

試合中みたいに助けてくれると嬉しいんだけどな私っ!

「そう……。そこまで言われたら、エリヤの姉として黙ってられないわね……。決闘よ

！」

ああもうっ、ルクリリさんまでやる気になってるしい！

こちらに指を突きつけるルクリリさんと、セコンド状態のみんなが、慌てふためく私を挟んで睨み合っています。

まさに一触即発。もはや衝突は避けられない。

そう思った、次の瞬間。

「話は聞かせて貰ったわ。その決闘、聖グロリアーナ女学院、ダージリンが預からせて頂きますー！」

「ええっ、だ、ダージリンさん!? なんで藪の中から!?!」

「お、お久しぶりです。あんこうチームの皆さん」

「御機嫌よう……」

「御機嫌ようでございますわ!!」

ちよつと遠くの藪の中から、葉っぱ塗れのダージリンさんが現れました。

しかも、やけに疲れた顔のオレンジペコさんとアツサムさん、元気一杯な……ローズ

ヒップさんだったかな。三人を引き連れて。

場所的には、エリヤ君が座っていたベンチを中心にして、ちょうど私達と反対側かな。あれ？ という事は、ダーズリンさん達も覗いてた、の？

ルクリリさんも疑問に思ったのか、驚いた様子でダーズリンさんに問いかけます。

「ダーズリン様、どうして？」

「たまたま通りすがっただけなのだけど、何やら面白——こほん、重要そうな話をしていくじゃない。ここは一肌脱だごうかしら、と思っただけだよ」

「本当はルクリリさん達を尾け回してただけですけどね」

「ダメよオレンジペコ！ そんな事が知られたら、我が校の品格に傷がつきますわ！」

「あれ。ダメだったんでございますか？ わたくし、スパイ大作戦みたいで楽しかったのですが……」

ルクリリさんとダーズリンさん。

二人が真剣な表情で向かい合う横で、オレンジペコは疲労感満載で眩くらき、アツサムさんが必死に声を潜めて、ローズヒップだけは妙にウキウキと。

……なんて言えば良いんだろう。そちらも大変なんですわね。

私も、頑張らなきゃ。せめて、必要のない戦いだけは避けなきゃ！

「あ、あの、ルクリリさん？　いきなり決闘だなんて言われても……。ダージリンさんも止めてくださいっ」

「こうなった以上、言葉は無用よ。西住さん。

……どのみち、避けては通れないのだから。ね？

決闘の内容は、立会人であるわたくしが、独断と偏見で公平に決めさせて貰います」

「それは本当に公平なのか……？」

「そうよそうよー！　勝手に決められたら、そっちが有利になるに決まってるじゃない

！」

「沙織さん？　こちらは挑んだ側なのですし、贅沢は言えませんわ」

「決闘の様式に則る、という事でしょうか。厳しい戦いになりそうです……っ」

「あの、ちよつと待ってみな。なんでもう戦うって決まってる……」

「安心して頂戴。このメンバーを揃えてする勝負事の内容なんて、一つに決まっているわ」

「ダージリンさん、お願いだから話を聞いて下さいい!？」

「みほさん。無駄だよ。この人達、基本的に人の話聞かないから……」

「エリヤ君まで諦めモードっ!」

……頑張ろうとしたんですが、なんだか無理っぽい。

そう言えば途中から無視されたエリヤ君は、ルクリリさんから受け取ったジェラトを食べつつ、遠くを見つめていました。

自分の事なんだし、もうちょっと抵抗した方が良いんじゃないかなっ。

オレンジペコさん達もなんとか言って……あ、駄目だ。いつの間にかローズヒップさんが買ってきたらしい、追加のジェラト食べて和んでる。

聖グロリアーナって、こんなに自由な校風だったっけ? もう訳が分からないよう!

「勝敗を決する方法は、ズバリ……戦車による一騎打ちよ!」

混乱する私を無視し、ダーズリンさんはみんなの顔を見渡して、高らかに宣言します。
戦車による、一騎打ち? でも、四号は持ってきてないのに。

一体、どうなっちゃうんだろう……。

ちゅどーん

ばかっ がしやん

『マチルダⅡ・ルクリリ指揮車、走行不能！ よって、マチルダⅡ・西住みほ指揮車の勝利！』

「うわあああんっ!! どうして勝てないのおっ!! ちくしょっ!!」
「なんとか、負けずにすんだ……」

マイクを通じたダーズリンさんによって、一騎打ちの結果が示されました。

聖グロリアーナ女学院の訓練用フィールドには、ペイント弾で汚れた二台のマチルダ

Ⅱ歩兵戦車が停まっています。

私達あんこうチームが乗る、ピンクのあんこうステッカー付きのマチルダと、判定装置が起動して動けなくなった、ルクリリさんチームが乗るもう一台が。

一騎打ちの内容としては、マチルダの主砲だと、同じマチルダの装甲を抜くのはかなり難しいので、ペイント弾を使った模擬戦になりました。

制限時間内を自由に戦い、お互いの総被弾数を競うという形で、最初はルクリリさんの指揮に翻弄されちゃった。

でも、麻子さんはあつという間にマチルダの操縦に慣れてくれて、華さんもすぐ2ポンド砲の挙動を掴み、優花里さんがいつも以上のテンションで高速装填してくれたおかげで、どうにか……。

『あんこうチームの皆さん、凄いです！ まさか、今日初めて乗るマチルダで、同じマチルダに勝つなんて！』

『最初こそ、動きにぎこちなさが目立ちましたが、すぐに乗りこなしましたね。操縦手の冷泉さん、だったかしら。凄い才能だわ』

『ルクリリさあーん！ ドンマイでございませわあー！！ あと、言葉遣いが少々お下品でございませうー！！』

自分でもビックリの結果だったんだけど、観戦していたオレンジペコさん達は、チームメイトに勝ってしまった私達を祝福してくれて。

完全に安全が確認されると、同じく観戦していた沙織さんが、こちらへ手を振りつつ駆け寄ってきた。

「やったねみぽりくん！ 乗員四人だからあぶれちゃったけど、見ててハラハラしたよー！ 勝ってて良かった」

「ありがとう、沙織さん」

「なかなか速度が出なくて難しかったが、なんとかなったな」

「その分、行進間射撃でも比較的安定していましたね。四号とは勝手が違いましたが、素晴らしい戦車ですわ」

「はあく……。初めて乗るイギリス戦車……。最高でしたあく……。ダンチョー殿への土産話ができましたあく……」

マチルダの側ではしやぐ沙織さんに、私はキューポラから上半身を出して手を振り返す。

麻子さんは車体前面上部の操縦手ハッチから。華さんはキューポラのサブハッチから顔を出していて、先に降りた優花里さんは、まだ乾いていないペイントで汚れるのも構わず、マチルダに頬ずりしています。

ちなみに、華さんが顔を出しているのは、本来なら優花里さんが居るはずの場所だったり。場所が空いたから、外を見るために移動したんだね。

完全に非公式な試合なので、観客は他に居ません。後はエリヤ君くらいなんだけど……。

「あの、沙織さん。エリヤ君は……？」

「エリヤ君？ エリヤ君だったら、みぼりん達の試合を食い入るようになってたよ。」

「すぐにこつちへ来るかと思ってたんだけど……来ないね。どうしたんだろう？」

気になって尋ねてみると、沙織さんも不思議そうに後ろを振り返る。

試合は監視塔から見ていたはず。

私が勝ったということは、ルクリリさんが、エリヤ君のお姉さんが負けてしまったということ。

気分を害して帰っちゃったのかな……。それとも急用が出来たとか……？

「西住さん……」

「っ!? る、ルクリリさん!? なな、なんでですかっ!?」

背後からの恨めしい声。

飛び上がりながら後ろを確認すると、そこには暗い表情をしたルクリリさんが。

「ちよつと、顔貸してくれない……?」

あまりの迫力に、私は言葉もなくブンブン頷きました。

な、なんだか物凄く怖い雰囲気だけど、酷いことされない、よね?

一応は勝ったんだし、大丈夫だよね!?

◇
◇
◇
◇
◇

かこくん。

「はあく。やつぱりお風呂は落ち着くわね」

「そ、そうですね……」

広々とした大浴場に、二人分の声が反響する。

試合を終えて私達が来たのは、スパリゾート・グレートグロリアーナ。いわゆるスパリ銭湯です。

あ、最初の「かこくん」は手桶を置いた時の音で、八九式の砲弾が重戦車に弾かれた音でも、中戦車に弾かれた音でも、軽戦車に弾かれた音でもありません。

……なんだか、バレー部のみんなが「はつきゆんを馬鹿にするなー！」とか「ラングの背面装甲ならギリギリ抜けるんだぞー！」とか「100m以内でならですけどねー！」とか「今度は当てるやりますよー！」とか言ってるような。

後でそれとなく謝ろう……。

「悪かったわね、無理やり付き合わせたみたいで」

「いえいえ、そんな事は。試合の後は汗をかいてますし、気持ちいいです」

もちろん、銭湯にはみんなと一緒に来たんですが、沙織さんと華さんは美肌の湯に。ダーズリンさんとオレンジペコさんはジャグジー、アッサムさんはワイン風呂。

麻子さんとローズビツプさんはサウナに行ってしまったので、普通の湯船に浸かっているのは私と、タオルで髪を纏めるルクリリさんだけ。

気まずい……のとは、違うかな。少しだけ緊張させられるような、なんとも言えない雰囲気は漂っています。

黙っているのはそれこそ気まづくなってしまうし、コミュニケーションを図ろうとするんだけど、どうやって話しかけようか悩んでしまつて。

でも、悩んでいるうちに、幸いにもルクリリさんの方から話しかけてきてくれた。

「私、戦車道を始めたのは、エリヤがきつかけだったのよ」

「え？ そうなんですか」

内容は、やっぱりエリヤ君のこと。

湯船のふちに寄りかかり、ルクリリさんは天井を見上げる。

「エリヤが昔、騎士道をやっていたのは知ってる？ 精神的な心構えじゃなくって、スポーツの方の」

「あ、分かります。実際に見た事はないですけど」

騎士道。

男子の選択科目にも存在する、古式ゆかしい武術。

確か、大洗の男子分校にはなかったはず。

もしも科目が存在したら、エリヤ君も農業科じゃなくて、普通科で騎士道をやったのかも。

「私ね。昔はエリヤの事、苦手だったの」

「えっ!?!」

「才能があつて、力も強くて、それを隠しもしない子だったから。大変だったのよ、小学生の頃は」

「……ちよつと、信じられないです」

「うん。私もそう思う。今では大好きだけど」

意外にも程がある告白と、意外過ぎるエリヤ君の過去を聞き、私は湯船の中で膝を抱えた。

礼儀正しくて、落ち着いていて、しつかり者なエリヤ君が、昔は自信満々のヤンチャさんだった？

子供の頃は、仲が悪かったのかな……。

「私とエリヤは双子だったけど、いつもエリヤが前を歩いて、私が後ろに隠れながら着いて行ってた。

そんな関係が変わったのは、中学に上がる直前の冬休みに起きた、事故が原因」

「事故……」

重く響く単語に、自然と息を飲む。

連想してしまうのは、去年の戦車道大会での、あの出来事。

どんなスポーツでもそうだけど、どんなに細心の注意を払っても、事故の可能性を無くすことは不可能なんだって、あの時に思い知ったから。

「その日。私はエリヤに無理やり連れ出されて、馬で遠出したの。」

といつても学園艦の上だから、今思えば大した事ない距離だったんだけど、それは置いていて。

エリヤの背中に抱きついて、海を横目に草原を走って、丘を越えて、人工林へ。ここまでは、いつも通りだったのよ」

しかし、ルクリリさんはどこか、気楽そうにも感じられる語り口で。

幼い姉弟が、馬に乗って草原を走る姿を想像すると、まるでおとぎ話の世界みたい。ちよつと、羨ましいかも。

……あつ。だ、抱きついてって所がじゃなくって、馬に乗ってっていう所が、ですけど。

「エリヤは、普段なら楽に飛び越せるような木の根っこを、馬に飛びこえさせようとして。

でも、その日に限って、エリヤの馬は途中で暴れて、私達は落馬しちやつたの」

「落馬つ？ だ、大丈夫だったんですか!？」

「大丈夫に決まつてるじゃない。そうじゃなきや私、ここに居ないわ」

「あ。そ、それもそうです、よね。あはは」

「はい」

誤魔化すように私が苦笑いすると、ルクリリさんも小さく笑ってくれた。

「そうだよ。もしも重大な事故だったら、こうしてルクリリさんとお話する事も出来なかった訳だし。」

慌て過ぎだよ、私ってば……。

「でもまあ、怪我をしなかった訳じゃなくなってるね。」

特に私は、エリヤを守るみたいの下敷きになっちゃったから、背中をちよつと。

運悪く、下に尖った石が埋まっていたのよ。ほら、薄っすらとだけど、傷が残ってるでしょ?」

「……本当ですね。目を凝らさないと分からないくらいですけど」

ルクリリさんが背中を向けたので、悪いかもと思いつつ確認させてもらうと、確かに綺麗な背中の中心、背骨に沿って数cmほど、古傷みたいになっている所が。

「……っていうか、ルクリリさんは事も無げに言ってるけど、これって結構な重傷だったんじゃない?」

でも、やっぱり彼女は、あつけらかんと話を続けて。

「エリヤが変わったのはそれから。

僕のせいだ。僕がお姉ちゃんを傷つけた。

そう言つて凄く落ち込んだ後、とても過保護になったの」

「もしかして、それが今のエリヤ君の……？」

「たぶん、そう。あの事故がなかったら今頃、傍若無人な乱暴者になつてたかも」

当時のエリヤ君の落ち込む姿を思い出したのか、少し伏し目がちになるルクリリさん。

自分のせいでお姉さんが怪我をしたら、落ち込まない訳がないよね。

私だって、自分のせいでお姉ちゃんが怪我なんてしたら、その傷が治るまで……ううん、治つてもずっと気にしちゃうと思う。

けれども、それが切つ掛けでエリヤ君は変わった？

それくらい、当時のエリヤ君にとつても、ルクリリさんは大切な存在だったんだ……。

「だけど、私のリハビリの手伝いとかが、世話をするために、エリヤは騎士道の全てを捨て

た。それが私には……辛かった。

凄く優しくなつて、私のためになんでもしてくれるようになって、自分を殺しているようにしか見えなくて。

だから私、戦車道を始めたのよ。私はこんなに元気になった。もう私に縛られる必要はないって、教えたかったから。

ここまで本気になるとは思ってなかったし、エリヤと離れている時間が逆に辛くなっちゃつて、スキンシップ多めになっちゃつたけど。

あ、エリヤって名前は、戦車道を始めてから私がつけてあげたの。紅茶の銘柄なのよ？」

「へ、へえー。そうだったんですかあ」

それは元の木阿弥つて言うんじゃない……。

というツツコミを、私は必死に飲み込みます。

せつかく上機嫌に話してくれてるんだし、また変なこと言つて怒らせたくないし。だつて。

「しばらく、そんな楽しい日々が続いて。でも突然、エリヤが聖グロ以外の学園艦へ進学

する事を決めて、終わりを告げたの」

「……エリヤ君は、どうして聖グロリアーナを出たんでしょうか」

「分からない。もしかしたら、エリヤも私と同じ風に思ったのかも。」

自分のせいで、私が変わってしまった。無理をしてる。だから、離れる事で元に戻そうとした……とか。

顔とかぜんぜん似てないのに、こんな所ばかり似てるのは、やっぱり双子だからかなあ」

そう言って苦笑するルクリリさんは、困っているようでいて、とても楽しそうだったから。

多分、小さい頃は本当にエリヤ君の事が苦手で、でも、事故がきっかけで仲良くなり、本当に大好きになって。

そんな今が、幸せだからだと思う。

だから、リハビリが必要なほどの大怪我も、そのために必要なプロセスだったんだって、笑って話せるんだと思う。

ルクリリさん、凄いな。

ちよっと——かなり想定外な関わり方をしちゃったけど、こんなに強い人だと知る事

が出来て、本当に良かった。聖グロリアーナに来て、良かった。

「ねえ。大洗にはいつ帰る予定なの？」

「あく……。日帰りのつもりだったので、本当は、もう帰ってる時間だったり……。帰りの船のチケット、無駄になっちゃいました」

「そう。だったらみんな、今日は私の家に泊まっていきなさいよ。大洗へのチケットも用意してもらおうから」

「えっ？ でも、そこまでして貰う訳には……」

「いいわ、そのくらい。私達が引き留めたようなものなんだし。ゆっくりして行って」

「……ありがとう。ルクリリさん」

「あら。お義姉さんって呼んでもいいのよ？ 妹になるかも知れないんだし。ね、みほちゃん？」

「へっ!？」

唐突なみほちゃん呼びにビックリしていると、ルクリリさんは「冗談よ」と、また笑います。

それに釣られて私も笑ってしまい、少しの間、私達は楽しく笑い合っていました。

こんなに素敵なお姉さんが居るエリヤ君が、羨ましいや。
もちろん、私のお姉ちゃんだって素敵なお女の人ですけど、ね？



エリヤ君を巡る決闘騒ぎから一夜明け、青空の広がる日曜の朝。

聖グロリアーナ女学院から下船するためのデッキに立つ私は、しかし、空のように晴れ渡った気持ちではありませんでした。

「エリヤ君、来ませんね……」

「本当に、どうしたのかしら」

不安を紛らわせるために、隣のルクリリさんへと話しかけるけれど、私と同じように、不安を隠せない様子。

試合のせいで滞在時間が長引き、帰りの足を失った私達あんこうチームは、急遽、ル

クリリさんの家……。つまり、エリヤ君の家でもある邸宅に宿泊させて貰う事になりました。

そうじゃないかと、うすうす勘付いてはいたけど、やっぱりエリヤ君の実家はかなり裕福で、本当にお城みたいな豪邸でした。

案内された客室も、お姫様の部屋みたいに煌びやかで、沙織さんと一緒に目を輝かせちゃったほど。

しかし、御両親と挨拶した時も、英国料理のフルコースをご馳走してもらった時も、エリヤ君本人は姿を見せてくれなかつたんです。

「二応、十時の船で帰るって事だけは伝わってるはずなんですけど、母様のアトリエから出てこなくて。こういうの初めてだし、困ったわ……」

ルクリリさんは何度かエリヤ君の元に赴き、声を掛けたらしいのですが、返事はなく、とりあえず、私達を港へ送り届けてはくれたけれど、このまま帰っては駄目だと、出港ギリギリまで待っていた訳です。

でも……。

「みぼりん、もうすぐ出港の時間だつて」

「これ以上は無理そうだな」

「うん……」

乗務員さんと話していたはずの沙織さん、麻子さんが上甲板へ戻つて来て、タイムリミットが近い事を教えてくれた。

その後ろには優花里さんと華さんが続き、残念そうにしています。

せっかくルクリリさんとも仲良くなれたのに。もう、会えないのかな。

寂しい、な………な？ あれ？ 何あれ？

「ん？ ……西住殿つ、車が猛スピードでこっちに來ますよ！」

「特徴的な外見……。イギリス車でしょうか？」

遠く、凄おーく遠くから、凄い勢いでこっちへ向かつてくる、一台の車が見えました。あれは……ロールス・ロイスのファントムII？ しかも、コンティネンタルモデル!? 物凄いプレミアカーは、その静肅性に似合わないドリフトを駆使し、私達の眼の前で止まる。

運転してるのは……あ、ルクリリさんの家の執事さんだ。名前はセバスチャンさん。ちなみに、私達を送ってくれた車の運転手は、妹さんのクリスティンさんです。そして、コンティネンタルから大慌てで降りてくるのは。

「みほさん！ 間に合って良かった……！」

……エリヤ君。

片手にスケッチブックを抱え、目の下には薄くくまが。やっと現れた彼へと、まずルクリリさんが駆け寄ります。

「もうっ、今まで何してたのよー！」

「ごめん姉さん、どうしても描きたいものがあったから」
「描きたいもの……？」

弁明を短く切り上げ、そのままエリヤ君は私の方へ。

なんだか緊張する……。また変なこと言っちゃわらないようにしないと。とか思っていたら、彼はすぐに頭を下げて。

「みほさん。試合の後、何も言わずに姿を消して、ごめんなさい。」

でも、どうしても我慢できなかつたんだ。

あの気持ちが消える前に、全部を紙にぶつけたくて」

「あ……。気にしないで？　ちゃんと来てくれたし、私は平気だから」

「……ありがとう」

私が笑いかけると、エリヤ君もホツとしたように息をつき、次に真剣な表情で、スケッチブックを渡してきます。

「あの時、電話で言ったよね。みほさんを描ききれてないって。」

色々な理由をつけてたけど、ようやく原因が分かった。簡単な事だつたんだ」

「……………」

「ただ単に、みほさんが一番輝ける瞬間を、まだ見られていなかっただけ」

言いながら、彼は開けてくれる？　というような仕草を。

素直に従って、スケッチブックをパラパラとめくってみる。

いつか見た、困ったような顔をした私や、お腹が痛そうな私など、何人もの私がその中に居て。

でも、最も新しく描かれたらしいページには、私の知らない自分が居ました。

「これって、試合後の私達？」

「仲間と一緒に、力を合わせて、戦って、笑い合って。」

そんな風になっている姿が、一番自然で、輝いて見えた。

今なら確信を持って言えるよ。これが僕に描ける、みほさんの最高の笑顔だ」

マチルダⅡの砲塔から上半身を出し、沙織さんに向けて手を振る、私の姿。

すぐ近くには、操縦手ハッチから顔を出す麻子さんに、サブハッチで微笑む華さん。

そして、駆け寄る沙織さんの横顔と、恍惚とマチルダに頬ずりする優花里さんまで。

キャンバスに描かれていたのは、私達、あんこうチームの細密画でした。

凄い……。写真みたいなんだけど、ただ描き写しただけとは違うような。

今にも動き出しそうなほど生き生きして、これまでのエリヤ君の絵とは、違って見える。

「あ！ ねえねえ、私達も描いてある！ 麻子も見なよ！」

「おおお、確かに」

「これを一晩で描かれたんですか？ エリヤさん、素晴らしいですわ！」

「本当ですよね！ でも、皆さんはそつくりですけど、私だけ妙に美化されてません？」

「こんな美少女じゃないと思うんですが……」

後ろから覗き込むみんなも、新しい絵に眼を奪われていました。

私だけじゃなく、みんなと一緒に描かれた一枚。

それがなんだか、とても嬉しくて。溢れ出る気持ちを笑みに乗せます。

「ありがとう、エリヤ君っ。こんなに素敵な絵を描いてもらえて、私、凄く嬉しい！」

「こちらこそ。こんな気持ちで絵を描いたのは、生まれて初めてだったよ。いい経験になった。ありがとう、みほさん」

笑顔でお礼を言い合う私とエリヤ君は、しばらくの間は笑顔を浮かべていられたけれど、それもやがて、沈黙に取って代わられてしまう。

だって、この絵は。

戦車道をする私達を描いたものとしては、最高の作品だと思えるから。

……エリヤ君が頼まれた、仕事の成果としても。

「これをポスターの下絵にすれば、会長から頼まれた仕事は、終わりになると思う」
「……うん」

そもそも、私がエリヤ君と知り合ったのは、会長がポスターの原画を頼んだから。
私がエリヤ君と一緒に居たのは、その仕事を進めるため。

つまり、この絵を描き終えた今、エリヤ君が私と一緒に居る理由は、無くなった。
スケッチブックを抱きしめる胸が、苦しい。

鼻の奥がツンとして、眼はシヨボシヨボする。

このままじゃ、涙まで出てきそう。

……でも。

「けどさ、この絵を描いているうちに、気がついた。

僕がこんな風に絵を描けなかったのは、みほさんの一番の瞬間を、この眼で見られて
なかったからだけじゃない。

もつと、ずっと。……君を見ていたかったから。

だから、無意識に先延ばしにしようとしたのかも知れない」

「エリヤ君……？ それ、つて……」

こちらを見つめるエリヤ君は、熱の宿った言葉で、私を驚かせます。

見ていたかったって、私を？

こんな事を言ってくれる、想ってくれる理由は、きつと。

ううん、自惚れかも知れない。

私がそう思いたいだけ、かも知れない。

だって、そうじゃなかったら私、とても傷ついてしまうから。

そんな風に、自分の気持ちを誤魔化す私の手へと、彼は躊躇いがちに手を重ね……。

「僕はこれからも、君を見ていたい。君の側に居たい。

……西住みほさん。好きです。

至らない所ばかりの僕だけど、君の、恋人にして貰えませんか」

真つ直ぐに、気持ち伝えてくれた。

手の震えから、彼の緊張も伝わってくる。

触れた肌を伝う温度は、不思議と私の心を落ち着かせて。

答えなんて、決まってる。

さつきよりも胸が苦しくて、鼻がツンとして、涙が溢れて。

でも、こんなにも嬉しく感じる理由なんて、一つしか思い浮かばないから。

「はい。喜んで」

最初は、ただ前に立ち、話すだけで緊張していたけど。

絵のモデルをしている内に、エリヤ君を真っ直ぐに見て、話すことにも慣れて。

一緒に過ごす時間が長くなるにつれ、彼のことを深く知るにつれ、どんどん気になつていった。

今ではもう、側に居てくれないと落ち着かない。私のことを見ていて欲しい。

……私も。貴方のことが、好きになってしまったから。

触れた手を握り返すと、エリヤ君は一瞬、驚いたように眼を見開き。

そして、強く握り返してくれた。

「み、ぼり、ん、く。よ、がっだね、く」

「沙織さん!? な、なんで沙織さんも泣いてるの!？」

「だつてえ。すんつ、こんなロマンチックな告白見せられたら、胸キュンが止まらないよう。なんかもう、ライカに今すぐ会いたい」

「安心して下さい、西住殿! 録画はバッチリであります!」

「むしろ不安だよ優花里さん!」

そ、そういえば、ここ人前だった! みんなの見てる前でした!?

沙織さんはハンカチを握りしめて号泣、優花里さんはカメラ片手にサムズアップ。

うわああああ、恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい……。

「す、すみません。僕、人前なのをすっかり忘れてて……」

「いえいえ。胸に響く、とても良い告白でしたよ? エリヤさん」

「男を見せたな。まあ、私の先輩もいい男だが」

「それは、とても素晴らしい事で……」

同じく衆人環視の中だったのを思い出したエリヤ君は、真つ赤な顔で華さんや麻子さ

んとお喋りを。

さりげなく彼氏自慢するようにまでなって、本当に沙織さん化してるね、麻子さん……。若干エリヤ君も冷静になっちやってるよ……。

「あーあ。取られちゃったかあ〜」

「ルクリリさん……」

「……西住さん。弟の事、よろしくね？ こう見えて、色々と面倒な子だから」

「はい！ でも、きつと大丈夫です。エリヤ君が私を見てくれるように、私もエリヤ君を見えますから」

「そっか」

最後に声を掛けてくれるのは、ルクリリさん。

寂しそうなのに、どこか嬉しそうにも見える表情で、私へ微笑みかけてくれて。

色々あったけど、私のこと……私とエリヤ君のこと、認めてくれてるんだよね？
だとしたら、本当に嬉しい。

これを切っ掛けに、もっと仲良くなれたら、嬉しいな。

……とか、思っていたんですが。

「でも！ エリヤの最愛の姉というポジションだけは譲りませんからね！ あと、学生のうちは清い交際しか許さないんだから！ 分かった!？」

「は、はいっ」

「ちよつと姉さん、今そんな事まで言わなくても……」

「私にはエリヤを心配する権利があるのっ。なんたつてお姉さんなんだから！」

「……あはは」

「つたくも……」

ルクリリさんはエリヤ君と強引に腕を組み、私達に指を突きつけながら厳命します。

そんな彼女を見て、私とエリヤ君は苦笑いを浮かべて。

ちよつと、前途は多難かも知れないけど。

でも、みんなと一緒に居る私なら。

彼が見てくれているなら、きつと何があつても大丈夫。

西住みほ。

戦車道も、恋も、頑張ります！